

魔法使いもど
きの冒険



雨澤 春



目次

第一章 転校生と魔法使い	1
第二章 魔女修行はじまる	44
第三章 ふたりの世界旅行	83
第四章 決戦、アトランティス！	145
あとがき	198

第一章 転校生と魔法使い

魔法使いもどきの冒険

雨澤 はる・著

ひとつの石をともに超えると友となり
ふたつの石をともに超えると真の友となり
みっつの石をともに超えたなら ころろが永遠につながる
魔女とはそうした生き物なんですよ

作者不明の古い詩

第一章 転校生と魔法使い

散歩は気持ちがいいもので、それは魔法使いとて同じことだ。

ここは近畿地方の雲海市^{うんかいし}の住宅街だ。空は気持ちよく晴れ渡っている。五月晴れだ。この住宅街には、古い家、新しい家、ペンキを塗り替えている最中の家など、さまざまな住宅が並んでいる。

暖かい太陽が照らす中、あたらしい家の玄関がひらいて、母親と小さな男の子が出てきた。玄関を閉めた母親は、男の子に、何やら真剣に話しかけている。

その話^{その話}に少し耳を傾けてみよう。

「ナオト、わかったわね。コンビニに行って、ポテトチップを買ってくるのよ。はい、200円よ。ちゃんとお釣りとレシートを貰うの。買ったらまっすぐウチに帰ってくるの。知ってる人に会っても、どこにも寄っちゃだめよ。あと、知らないひとと喋っちゃダメ。これは絶対にダメ。わかった？ ひとりでできるかな？」

「ママ、わかった。がんばるよ」

男の子の名前は、『ナオト』らしい。ナオトくんは表面上は強気を見せているが、内心は不安なのか表情が固い。彼は、貰った100円玉2枚を、首から提げた財布にしまった。母親はニッコリと笑顔になった。

「よし、行っておいで」

母親は、ナオトくんの背中を押した。

どこかぎこちなく、ナオトくんは歩き始めた。だが、不安げに何度も家のほうを振り返る。その度に、母親は親指を立ててエールを送る。

母親は、とつぜんあらぬ方向を見た。その方角に、サファリハットをかぶり、サングラスをかけて、首にはマフラーを巻いたとても怪しい男性がいて、なんとナオトくんの追跡を始めたではないか。5月にマフラーとは、とんでもなく怪しいぞ。この人物はいったい誰だろう？

ナオトくんは、まっすぐ50メートルほど進んだあと、十字路を右へ曲がった。しばらくして、道の右側にコンビニが見えてきた。怪しい男性も、少し遅れてついて行く。

ナオトくんはコンビニに入った。怪しい男性はコンビニには入らず、近くの電柱の影から目をこらして見つめている。

怪しい男性に声をかけたひとがいた。警察官さんだ。

「ちょっと、あなた何をやってるんですか」

警察官さんは至極当然の質問をした。

「えっ、あっ。これには訳がありまして」

怪しい男性は小声で答えた。

「こっち来て」

警察官さんは、コンビニの駐車場に止めてあるパトカーに、怪しい男性を誘導した。

パトカーの運転席に警察官さんが座り、後部座席に怪しい男性が座って、尋問が始まった。だが、最初に口を開いたのは怪しい男性だった。

「お巡りさんも買い物ですか」

「いいえ、パトロールの途中で寄っただけです。で、なんでそんな怪しい格好してるんですか？」

警察官さんは手帳を取り出した。

「息子がはじめてのおつかいなんです。それで——」

「ああ、息子さんにバレないように、こっそり見守ってたんですか」

「そうです！　そうです！」

怪しい男性は強く訴えた。

なるほど、ナオトくんは、はじめてのお使いだったんだね。怪しい男性は、ナオトくんのお父さんだったんだね。これには、お天道様もニッコリだ。

「でも、あなたが変質者だと困るから、身分証明になるものを見せてください」

怪しい男性をただで解放するわけにはいかないから、警察官さんは、その職務をまっとうしたのだ。

怪しい男性、いや、ナオトくんのお父さんは、コートやズボンのポケットを片っ端から叩いている。そして首をひねっている。

「あのう、お巡りさん、それがその……」

「身分を証明するものがなければ、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を教えてください」

こういう事態に慣れている様子の警察官さんは、ときばきと言い、ナオトくんのお父さんはポケットを叩くのをやめた。

「私の住所は、雲海市雲海町の——」

だが、こうしているあいだに事件は起きていた！

レジ袋を持ったナオトくんが、コンビニから出てきて、もと来た道を帰り始めた。だが、店を出て左に曲がらないといけないところを、間違っ^て右へ曲がってしまったのだ。どうやら、レジ袋に入っているポテトチップのコンソメ味に夢中のようで、家とは反対方向に曲がってしまったことに、まったく気づいていない。駐車場のパトカーの中にいるお父さんも、それに気づいていない。

ナオトくんは、そのまま進んで左に曲がり、とうとう見たことがない景色に出くわした。ナオトくんはうろうろしている。そして、たいへん動揺しているようだ。ナオトくんは迷子になってしまったのだ！

不幸中の幸いだろう、ナオトくんを見守っている青年がいた。それも地上ではなく、空中で！ その青年は、竹箒に乗って、上空5メートルの高さにいる。ナオトくんの頭上だ。空を飛んでいるということは……、どうやら青年は魔法使いのようだ。

不思議なことに、通行人のだけれも、空飛ぶ青年を見ていない。まるで透明人間のよう^に、普通の人には見えていないのだ。

魔法使いが魔法を使うと、たいていは普通の人から見えなくなる。もちろん、見えたままの魔法もある。この本は魔術書^{まじゅつしょ}ではないので、それらについて詳しく触れるつもりはない。興味のある方は自分で調べてみて欲しい。

青年は下降し、ナオトくんの後ろに降り立った。竹箒を手早く分解して——柄竹^{えたけ}が4つに分割できるのだ——背負っていたバッグにしまった。魔法を使うのをやめたので、彼は普通の人にも見える状態になった。

中腰になって、ナオトくんに声をかける。

「キミ、どうしたの」

振り向いたナオトくんは、もじもじしている。

「ママがしらないひととしゃべっちゃダメだって」

「なるほど。それはとっても大事なことだね。キミは、ひょっとして迷子じゃないのかい？」

「うん……、じつはそうなの」

「もときた道を戻ればいいんじゃないかな」

「わかんない。どこからきたのか、わかんなくなっちゃった」

ナオトくんはもう泣きそうだ。ああ、気持ちはよくわかるよ。迷子の経験をせずに大人になったひとは、そう多くないだろう。迷子になった時の、この世が終わってしまったかのような絶望感を、ナオトくんもいま感じているんだね。

「ふ～ん、そうなの。お兄ちゃんはね、これから近くのコンビニに行くところなんだ」

青年はさりげなく話題を変えた。

「コンビニ！ ぼく、コンビニからかえるところだよ！」

ナオトくんの表情がパッと明るくなった。コンビニまでもどって、まがるみちをまちがえなければおうちにかえられる……とナオトくんは考えているのだろう。

青年はゆっくり背を伸ばした。

「ぼくはこれから近くのコンビニに行くよ。じゃあね」

バッグを持った青年は、ゆっくり歩き始めた。少し後から、ナオトくんが必死な表情でついてくる。青年が立ち止まって振り向くと、ナオトくんも立ち止まる。青年がまた歩き始めると、あわててナオトくんがついてくる。

ナオトくんが歩いていると、視界にコンビニが飛び込んで来た。先を歩いていた青年は、そのままコンビニに入った。ナオトくんは、コンビニの入り口で足踏みをする、今度は正しい帰り道についた。

警察官さんから解放されたお父さんは、パトカーを降りると、ナオトくんを発見し後を追いつめた。

こうして、ナオトくんは無事、家に帰ることができたのだ。

みなさん、街並みがいいのにあまり住み心地が良くない地域や、一見地味だけれどなぜか心安まる場所があるのを不思議に思ったことはないだろうか。その理由がこれだ。魔法使いが住んでいる街は、治安がたいへんよいのだ。魔法は、正しく使えば街が元気になるのだ。

ここ近畿地方の雲海市には、魔法使いが住んでいる。だから、この街はとても安全なのだ。

ナオトくんが家に着いたことを空から確認した青年は、気持ちいい空中の散歩を切り上げて、自分も家に帰ることにした。魔法の箒を自宅に向けて加速する。

青年の名前は、^{わたなべまこと}渡辺 真、18歳になったばかりの高校3年生で、魔法使いもどきだ。魔法使いもどき、って何だろう？ その疑問はごもつともだ。詳しい説明は、のちに、彼の母親の口から聞くことになるだろう。

真は、背の高さは平均で、顔はまあまあよい（あのガブリエル・ガルチェリには負けるが）。肌は明るめで、髪は黒く少々のかせ毛だ。彼は、まだ女性にモテたいとは思っていないので、おしゃれにはほとんど縁がない。きょうもダサダサの私服だ。

彼が、この物語の主人公だ。

この本は、渡辺真の、あの名高い大冒険旅行の顛末^{てんまつ}を^{しる}記したものである。

それから2日後の、大型連休明けの月曜日。

雲海市は、きょうもよく晴れていて、適度にひんやりとしたさわやかな朝方だ。

山々に囲まれているが、それほど険しくない平野部に、ゼブラマートというスーパーがある。駅から少し歩いた距離だ。二階建ての大きめのスーパーで、駐車場もなかなか広いが、外観はやや古めかしい。

ゼブラマートは閉まっている。まだ朝の8時だからね。

そこへ、謎の少女と中年女性が連れだってやってきた。

少女は制服姿でカバン持ち。高校生に見えるが、このあたりの学校の制服ではない。一

緒にいる中年女性は、どうやら少女の母親のようだ。

謎の少女の目は大きく、ひとみはこげ茶で、顔立ちは整っており、いかにも利発そう
だ。髪型はロブで（肩まである）、右耳の上をヘアピンで止めており、爽やかな印象を与
えている。身体は健康そのもので、柔らかいバネのような^{たいく}体軀はリズムカルに動く。こ
の土地に慣れていないのだろうか、いくらか緊張しているのが表情から見て取れる。

少女は、ゼブラマートの駐車場の入り口にくと、警備員がいないのを確かめてから、
チェーンを跨いで駐車場への侵入を試みた。いま駐車場はガラガラだ。右足はすんなり
チェーンを超えたが、左足がちょっと引っかかって体勢を崩した。母親はたいそう驚い
ているようすで、心配そうに娘に注意している。少女は慌てず騒がず、足に引っかかっ
たチェーンを慎重にほどいて、そのまま駐車場に入った。

少女は散策を始めたが、それはすぐに本格的な探索になった。中腰になったり立っ
たりと、なにやら忙しそうだ。駐車場の外にいる母親は何度か止めたが、少女は無視して
いる。母親はいらだちを見せている。何かを探すようにうろうろすること数分、少女は
駐車場の一角にやって来た。

「間違いない、ここだ。いろいろ景色は変わってるけど、12年前わたしはここで死にか
けた。……でも、まだ生きてる。キャンディちゃんに会えるかな」

少女はそう言うと、少し緊張が解けたようで、優しい笑みを見せた。

彼女は駐車場から脱出すると、母親と合流して、ゼブラマートを後にした。

謎の少女の名前は、^{くらたえみ}倉田恵美、17歳で、高校3年生だ。そして転校生でもある。

この物語のヒロインといったほうが正確かもしれない。

そのゼブラマートの近く、街の外れに古びた洋館がある。

古びたといっても定期的に手入れがされているようで、モダンな^あ外観も相まり、それ
ほど古くは感じられない。

門に沿って生け垣があり、ユリの花が咲き誇っている。建物は2階建てで、^あ紅い屋根
が特徴の、こじゃれた洋館だ。ヨーロッパをすみずみまで旅した人なら（あるいは海外
の紀行番組が大好きの人なら）、おとぎの国として知られる、チェコ共和国を想起する
ことだろう。紅いかわらにはちょっとした秘密があるのだが、それはまた後で。

この洋館の持ち主が、^{わたなべりりあん}渡辺璃々杏、48歳だ。おっと、^{しゅくじょ}淑女の年齢を書くのは失礼かな。
では皆さん、彼女の年齢は忘れてくれたまえ。

この洋館からは、ピアノやヴァイオリンやフルートなどの^{ねいろ}音色が聞こえてくること
がある。ティンパニが鳴り響いて、近所の人や往来の人を驚かせることもある。音楽が途
中で止まったり、間違えたりすることがあるので、生演奏であることは明らかだ。

璃々杏は、クラシック音楽の評論とライターをしながら暮らしている。音楽評論家の
家から楽器の演奏が聞こえてくるのは、とても自然なことだろう。彼女は、音楽大学に
在学中に、ピアノと作曲を専攻していたのだ。

ここで重大な秘密を明かしてしまおう。渡辺璃々杏は魔女である。それもかなりの大
魔女で、その界限では有名人なのだ。

璃々杏が魔女であることを知っている者は、ほとんどいない。はっきり言ってしまう
ば、その秘密を知っているのは、魔法使いの仲間だけだ。これを読んでいるあなたも、た

ぶんそのひとりだろう。

世界に魔女はそう多くいない。その総数は2万人程度だろうか。日本にも、400人くらいしか魔女はいない。渡辺璃々杏は、その数少ない魔女のひとりなのだ。

魔女たちは、デジタルが支配する現代社会で、その正体を知られないように、ひっそりと生きている。だが安心して欲しい。魔女だと暴露^{ばくろ}されるケースはほとんどなく、あっても、その悪い噂のさざ波を巧みに覆い隠^{おお}すすべを、魔女たちはよく心得ている。

魔女は、かくもしたたかな存在なのだ。

璃々杏には四人の子供がいる。長女みらい24歳、次女あすか23歳、三女かれん20歳、長男^{まこと}真18歳である。血筋だろうか、みらい、あすか、かれんの三姉妹は全員魔女だ。

末っ子の真のことは、もう知っているね。先日ナオトくんを助けた青年だ。彼は魔法使いもどきなのだが……もどきの説明はもう少し待ってね。

真は、姉たちと同様に、様々な魔法を覚えながら育っていった。

面白くないのは、三女のかれんだ。彼女は弟の真を憎んでいる。母親を取られたと思っているのだ。璃々杏は、初めての男の子である真をかまって、姉のかれんを何度か放置したことがあった。かれんはそれが、どうにもこうにも気に食わないようなのだ。真とかれんは3つはなれているが、その年数は、かれんに聡明な思考をもたらすには充分ではなかった。

真が高校生になった時、かれんは大学に進学し、洋館から巣立っていった。

長女のみらいと次女のあすかは、とっくに独り立ちしている。

前置きはここまでにして、話を進めよう。

ここは朝の渡辺邸前だ。黒のワンピースを着た璃々杏が玄関から出てきて、家の右脇の車庫にある軽自動車に搭乗し、シートベルトをつけてエンジンをかけた。

続いて、私服の真が玄関から出てきて鍵をかけると、同じ車の後部座席に座ってシートベルトをつけた。

璃々杏は、バックミラー越しに真を見た。

「キャンディ、マスクをしなさい」

真は、コートのポケットからマスクを出してつけた。キャンディとはどういう意味だろう。

その様子を見ていた、近所のおばさんが、何事かと近づいてきた。

璃々杏は車を出て、おばさんと立ち話をはじめた。

「おはようございます」

「おはようございます、渡辺さん。真くん学校は？ マスクしてどうかしたの」

おばさんは心配そうに、真を見ている。

「それがですね、うちの真が熱を出しまして。インフルエンザだとまずいんで、病院へ見せに行くところなんです」

「おや、そうかい。たいへんだねえ」

「インフルじゃないとは思いますが」

しばらく会話をすると、璃々杏はまた車に乗り込んだ。

近所のおばさんは、車から離れて真を見ている。

「なるほど、真くんが風邪か。インフルエンザじゃないといいんだけど。でも渡辺さん、黒のワンピースをいったい何着持っているんだろう。7つまで数えて、それからやめてしまったんだっわ」

近所のおばさんは、ひとりごとを言いながら去っていった。

車のエンジンが暖まるまでの時間潰しに、璃々杏と真が会話を始めた。

「インフルエンザじゃないのは、魔法でわかってるんだけどね。でも、病院に連れて行かないと不審がられるからね。しかし、まあ、4時間以上もゲームを……」

璃々杏はあきれた様子だ。

「日曜の夜に、深夜までゲームをしてたぼくが悪いよ」

「あら殊勝ね。わかってるならいいわ。迷子の子供を助けたくらいで調子に乗ってるからこうなるのよ」

璃々杏は容赦ない。

「ねえ母さん、魔法で熱を下げようよ」

「だめ。なんでもかんでも魔法に頼っていたら、免疫力が弱るって、^{まじゅつきょうほん}魔術教本にも書いてあるでしょう」

璃々杏は、車のダッシュボードをリズムカルに叩き始めた。どうやら曲はバッハのようだ。それは、音楽を学んだ者の単なる退屈しのぎか、ゲームは1日1時間、休日2時間の約束を破った息子への苛立ちか。

「さあ病院へいくよ。キャンディ」

「そのあだ名で呼ばないで」

真は不満を漏らした。璃々杏の運転する軽自動車^{軽自動車}が公道に出た。

どうやら、^{キャンディ}は、璃々杏が息子を呼ぶときの愛称のようだ。倉田恵美が言った『キャンディちゃん』と、何か関係があるのだろうか。

ここは、雲海市にある雲海高校の、3年2組の教室だ。

雲海高校の校舎塔は3階建てで、3年2組の教室は3階にある。生徒の数は31人で、窓際からは校庭が一望できる。その先に広がるのは、雲海市の街並みだ。大量の一軒家が並んでいるのが見えるし、高層マンションが点在しているのが見えるし、ところどころに田畑も見える。

「みなさんお静かに、お静かに」

教壇に立った担任の、^{おおたあゆみ}太田亜優美先生は、生徒たちが静まるのを辛抱強く待った。

きょうは、特別なイベントのあることを察知してか、生徒たちは普段とは違う興奮状態にあった。太田先生が、身振り手振りで生徒をなだめ続けたので、教室は徐々に落ち着きを取り戻しつつあった。

生徒たちが静まったのを見て、先生が朝の挨拶を始めた。

「ニュースがあります。渡辺真さんは、きょうは熱を出してお休みです。どうやら風邪のようです。インフルエンザじゃないといいんですが。お母様の話によると、日曜の夜、ゲームで夜更かしをしたのが原因のようですね」

教室が少しざわついた。

「お静かに、お静かに。受験生の皆さんは真似をしてはいけませんよ。もちろん、受験生でない皆さんも真似をしてはいけません。ゲームで夜更かしをしたかったら、社会人になってからですよ。わかりましたか」

生徒たちが返事をしたのを見ると、太田先生は話を続けた。

「さて、もうひとつニュースがあります。こっちはビッグニュースです。皆さんすでに、噂が耳に入っているかも知れませんね。このクラスに転入生です。では、倉田恵美さん、入ってきてください」

太田先生が廊下を見ると、カバンを持った倉田恵美が教室に入って来て、先生の隣に立った。

新しいクラスメイトたちから暖かい拍手が起きた。

先生は拍手がやむまで待った。

「倉田さん、自己紹介をしてもらえるかしら？」

「はい、わかりました」

倉田恵美は、チョークで黒板に自分の名前を書き始めたが、途中でチョークを落としてしまった。慌ててチョークを拾って自分の名前を書ききり、自己紹介を始めた。

「はじめまして、倉田恵美といます。めぐみの字は旧字体のほうです。7月11日生まれて蟹座です。父の仕事の都合で、東京の高校から転校してきました。趣味は読書です。とくにミステリー小説が大好きです。これから1年間よろしくお願いします」

恵美は頭を下げた。緊張しているのが教室に伝わったが、転校生ともなれば当然だろう。

ふたたび、新しいクラスメイトたちから拍手が起きた。

すかさず恵美はこう付け加えた。

「5月の転入生は珍しいと思いますが、こういう事情があります。父の仕事の前任者が、4月にこの土地に転勤になったのですが、その人が突然、辞めてしまったんです。なんでも家業を継ぐことになったとか。それで急遽、父が代理として転勤になり、家族ともどもこの雲海市に引っ越して来ました」

教室に、「なるほどー」「水が合わなかったかー」「ホームシックじゃねえの」などと声上がる。

「それから倉田さん。職員室でも話しましたが、うちの高校はいじめ防止の一環で、あだ名呼び禁止ですからね。これは守ってくださいね。制服が東京の高校のものなのは、3年なので仕方ないですが」

太田先生が念を押した。

「わかりました」

恵美の返事はしっかりとしたものだ。しかし、まだ緊張しているようで表情が固い。

「みなさん、倉田さんに自己紹介をしてください。出席番号順に芥田くんから」

太田先生がそう言うと、生徒たちは転校生に自己紹介を始めた。

ここは、雲海総合病院の内科の診察室だ。

中年の医師がパソコンの置いてある机の椅子に座り、マスクをした真が患者用の椅子

に座り、璃々杏はその隣に立っている。

「うれしいニュースですよ。渡辺真くんはただの風邪です。インフルエンザじゃありませんよ。よかったですね」

中年の医師が、電子カルテを見ながら喜ばしげに言った。

医師の言葉に、真と璃々杏は無反応だった。

「あれ、インフルエンザじゃないって聞くと、たいていの患者さんは喜ぶんだけどな」

「ええ、まあ」

熱のある真はだるそうだ。

「息子を観察していて、インフルエンザじゃないと思ったものですから」

中年の医師は、少しカチンときたようだ。

「渡辺さん、素人が勝手に判断しちゃいけませんよ。そりゃ素人の勘は鋭いものがある。われわれ医師が驚かされることも少なくありません。でも、やっぱり素人判断はダメです。背後に大きな病気が隠れていたときには、最悪の場合、手遅れになってしまいますからね」

「分かりました」

「わかりました」

璃々杏と真が渋々うなずいた。

「お薬を出しておきます。養生^{ようじょう}してくださいね」

医師はつまらなそうに言った。

雲海高校の3年2組の教室に戻る。

休み時間、恵美はクラスの女子たちに囲まれていて、質問攻めにあっている。転校生ならばあたりまえの風景だが、その転校生が東京出身と聞けば、ひとときわ関心をひくのは当然の成り行きだったのだ。男子たちは遠慮しているようで、遠巻きに眺めている。ときどき口を挟む男子もいる（こういう男子が結局モテるんだよね。成功率はアタックした回数に比例するのだ）。

恵美は、かずかずの質問に丁寧に答えていった。意地悪な質問は器用に避けることができたようだ。

そして昼休み。

恵美は、クラスメイトのアオイとホノカのコンビと、昼食をとることになった。恵美が、アオイとホノカに接近し、彼女たちもそれを受け入れたようだ。

3人が窓際の席に集合している。

アオイは自分の席をぐるっと回して後ろ向きにして、ホノカが後ろの席に座り、恵美はホノカの右隣の席に座っている。

3人は机をくっつけて、お弁当を出した。

「ここ、いいんですか」

おずおずと恵美が訊ねた。

「いいのいいの。飯田くんはいつも学食だから。たまにお弁当だけど、その時だけ席を返せばいいの。彼、おおらかな人だから滅多なことでは怒らないよ。もともと飯田くんだって、学校から席を買ったわけじゃなくて、借りてるだけだからね。泥棒から盗んでも問

題にならないように、借りてる人から又借りしても何も問題ないのよ」

見るからに快活そうなアオイが解説した。その言葉に、理解できたようなそうでないような、複雑な恵美だった。

3人はお弁当を見せ合った。恵美が元東京っ子だけに、アオイとホノカの好奇心は人一倍だった。そのお弁当がごくありきたりのものだったので、ふたりは少々落胆した。が、食欲は待ってはくれない。

いただきます、と言って、3人はお弁当を食べ始めた。

「それより、どう？ この街は気に入った？」

アオイが、^{とり}鶏の唐揚げを食べながら訊く。

「ええ、とつても。東京と違って緑が多くて素敵ですね」

「でしょ～でしょ～。田舎も捨てたもんじゃないよ」

「でも、アオイさあ、あなた東京の大学に受かったら、地元捨てるって言ってたよね」

たおやかそうなホノカが、玉子焼きを^{しょく}食しながら毒舌を放った。

「そうだっけ？ 覚えてないなあ」

アオイはしらばっくれた。

「アラブの石油王を捕まえたら、日本を捨てるって言ってたホノカ嬢^{じょう}には、さすがに勝てないよ」

アオイがやり返すと、3人の女子に屈託のない笑いの輪が起きる。

「ところで、この街に来たのは、はじめてじゃないんです」

傾合いを見計らって、恵美が話題を変えた。

アオイとホノカは嬉しそうな顔を見せた。

「ふ～ん、そうなんだ。いつごろ前に来たの？」

「12年前に来ました。自動車旅行の途中に立ち寄ったんです。実は探してる人がいるんです。この街にきたとき、車に^ひ轆かれそうになったことがあるんです。そのとき助けてくれた女の子に、もう一度会って、ちゃんとお礼が言いたいんです」

「そいつああ事件だね。何があったの、詳しく聞かせてくれる」

アオイが興味を持ったようだ。もちろんホノカも。

「この街のスーパーマーケットに立ち寄ったときのことです。わたしが駐車場でうろうろして、子猫ちゃんを見つけて観察していたときのことです。後方をよく確認しなかった自動車が、駐車しようと、わたしに迫ってきたんです」

「おおコワッ」

「12年前か。たぶん、ゼブラマートだな。スーパーYTが建ったのは7、8年前だからね。それで？」

「その時です。近くにいた女の子が走り寄ってきたかと思うと、なぜかわたしは空がくるくる回転していました。そして気がついたら、わたしは迫ってきた自動車の横に立っていました。傷一つ負いませんでしたよ。その女の子は、『大丈夫？』とだけ訊くと、そのまま去っていきました。わたしは、あまりにもびっくりしてしまって、お礼すら言い忘れるという、たいへん恥ずかしい事態になってしまったのです」

アオイは箸を止めて、頭を巡らせた。

「その話は、初めて聞いたな。その女の子はどんな子？ 名前とか特徴とかわかる？」

「本名じゃないと思うんですけど、その子は、母親から『キャンディ』って呼ばれてました。『キャンディ帰るよ。どこだい?』って」

アオイとホノカがたまらず笑い出した。アオイなんかは、ご飯を吹き出しそうになったくらいだ。どうやら、彼女たちには心当たりがあるようだ。

「どうしたんですか。もしかして、キャンディちゃんを知ってるんですか」

「この街で『キャンディ』って呼ばれてるのはただひとり、じゃーん、渡辺真さんだけです。ほら、きょう風邪で休んでる」

アオイが、真の席を指した。

「クラスメイトだよ」

ホノカが優しく言い添えた。

「ええっ、キャンディちゃんがクラスメイト！ まこと、男の子に多い名前ですよ」

「いや、男だし」

「えっ、男？ でも、キャンディちゃんですよ」

恵美は、きつねにつままれたようになった。

「男だよ。べつに裸を見たわけじゃないけどさ」

アオイとホノカはまた笑い出した。

「本当にキャンディちゃんですか。からかっているんじゃないですよ」

「本当も本当。この街でキャンディちゃんは、あいつ以外にちょっと知らないねえ。なあ、ホノカ」

「わたしもアオイと同意見だね」

「びっくりです、こうも簡単に見つかるなんて。キャンディちゃんと再会できるんだ」

とつぜんのサプライズに、恵美は夢現^{ゆめうつ}の様子だ。

「でも、渡辺さんをキャンディちゃんって呼ぶと、本人怒るよ。なんでも、キャンディって呼んでいいのは、母親だけなんだってさ」

「あと、お姉さんたち、ね」

「そうなんですか。でも、どうしてですか」

「それは誰も知らない。知ってしまうと、宇宙が終わると言われている」

ホノカが真顔で言うので、これには恵美もびっくりした。これは、近畿地方特有の冗談なのだろうかと考えて困り顔の恵美に、アオイが助け船を出した。

「ホノカの話は都市伝説だよ。田舎なのに都市伝説なのは、ちょっとおかしいけどね。だいいち、うちの高校あだ名禁止だしね」

アオイの説明に、とりあえず恵美は納得した。

「渡辺真さんって、どんな人ですか」

好奇心をくすぐられた様子の恵美が質問した。

「う～ん、変わってるねえ」

「うん、変わってる」

「他には？」

「う～ん、とても変わってるな」

「すごく変わってるね」

これにはどう反応していいやら、恵美は苦笑いだ。

「まっ、会えばわかるよ。ところで恵美ちゃん、部活には入るの？」

「入ったほうがいいよ」

「ちなみに、わたしは美術部」

アオイは、箸を動かして絵を描くしぐさをした。

「わたしは茶道部」

ホノカは箸を置いて、手でお茶を立てるしぐさをした。

「この高校、ミステリー研究会みたいな部活、ないんですよね」

「確か……ないね。文芸に関する部活に入りたいの？」

「東京の高校では、ミステリー研究部に入っていました。いちおう、副部長をしていました。あっ、自慢じゃないですよ。押しつけられたというか」

「わかったわかった。ええと、うちの高校は、文芸に関する部は、文芸部とライトノベル研究会の2つだな。漫研は美術系だし」

アオイは自信なげだ。

「やっぱりそうですか」

「アオイ、ひとつ忘れてるよ」

「えっ？ ああ！」

「「幻想小説同好会」」

アオイとホノカが同時に言って笑い合う。

「何がおかしいんですか？」

恵美が不思議そうな顔を浮かべているあいだ、彼女の箸がくわえたタコさんウインナーは、ゆらゆらと空中をたゆたっていた。

その時、校舎が揺れ始めた。地震だ！ 大きい地震ではないようだが。

アオイとホノカは、驚くような早さで机の下に潜った。

こんな小さな地震なのに……と恵美は驚きを隠せないでいる。周りを見回すと、教室にいるクラスメイト全員が、もう机の下にいる。

「倉田さんも机の下に潜って、早く！」

アオイの言葉に促されて、恵美も机の下に潜った。

「あの、地震、小さそうですよ」

「倉田さん、これだけは覚えておいて。この雲海高校の校舎は、まだ耐震補強工事が済んでないから地震に弱いだよ」

「はあ、なるほど」

ようやく事態を理解して、恵美はゾットした。

「校舎の耐震補強工事を先にやる派と、体育館の耐震補強工事を先にやる派で対立しているらしくてね」

「そうそう。両方同時にやればいいんだけど、お金がチョイ足りないらしくてね。それで、どっちを先にするかで揉めてるんだ」

朝に見た雲海高校のいかにもみすばらしい体育館を、恵美は思い出していた。そして、この校舎も同じくらい古そうだ。壁を見ると、いくつかの小さな亀裂が見取れる。

恵美の転校が決まったとき、東京の友だちに口々にこう言われた。「近畿地方ってそろそろ来るっていわれてる南海トラフ地震の中心地でしょ、大丈夫？ 気をつけてね」と。

新しい家に帰ったら、家具がちゃんと固定されているかももう一度確認しないと……と彼女は思った。

翌日、渡辺真が、教室に入って来たのだが、鈍感な彼でも異変にすぐに気づいた。

登校済みの生徒は25名ほどいたが、なにやら周囲の視線が突き刺さるのだ。何度もな

んどもだ。
(あれ、ぼく風邪で休んだだけなのに、どうしてみんな見てくるのかな)

魔法使いもどきである真は、これまでなるべく目立たないように過ごしてきたし、今まではそれが上手くいっていたが、今日は何かありそうだと予感した。

自分の席まできて、カバンを机に置いたとき、「キャンディちゃん」と後方から女性の声がした。

「あのね、ぼくを『キャンディ』って呼んでいいのは、母さんだけだって言ったはずだよね」

不愉快になりながら真が振り向くと、おや、見たことのない制服を着た、知らない女の子が立っているではないか。もちろん倉田恵美だ。彼女の両脇には、ニヤニヤを隠せないアオイとホノカが陣取っている。

真は慎重な態度になった。

「失礼。ええと、どちら様で？」

彼が問いかける。

恵美の目はキラキラと輝きを放っている。

「覚えてませんか、12年前、自動車事故にあいそうになった女の子を。そのとき、キャンディちゃんが助けてくれました。わたしがそのときの女の子です。渡辺真さんが、あのときのキャンディちゃんですか？」

恵美はそのキラキラしたままの目で、真の目の深奥^{しんおう}をのぞき込んだ。

このとき、恵美は期待と不安がないまぜの状態にあった。渡辺真が、自分を助けてくれた「あのキャンディちゃん、」なのか、確信がなかったのだ。だから彼女は、わざと情報の一部をぼかしたのだ。

戸惑いつつもしばし考え込んでから、真は弾けるように喋り出した。

「……ああ、ゼブラマートの駐車場！ 酔っ払いの不注意運転。君があ那时的女の子なの？ 元気だった？ 怪我はない？」

古い記憶をたぐり寄せた真は、春の草木のような優しい笑顔になった。いっぽう、恵美の目のキラキラは勢いを増して、真夏の太陽のような輝きを見せていた。間違いない、あのキャンディちゃんなのだ！

「ぜんぜん平気ですよ。どこにも怪我はありません。あのときは、まるで魔法のようでした」

まあ、魔法を使ったんだけどね……と真は思ったが、もちろんこれは黙っておいた。

「わたしは倉田恵美、17歳です。きのう、この高校に転入してきました。わたしたちクラスメイトなんですよ。なんだか不思議ですね」

「ぼくは渡辺真。真実の『真^{しん}』って書いてまこと。18歳だよ」

「渡辺真さん、12年前は、ほんとうにありがとうございました」

ぺこりと恵美が頭を下げると、さすがに真は照れた。

アオイとホノカがいつそうニヤニヤした。もちろん、ほかのオーディエンスたちも。拍手をしたクラスメイトもいたが、すぐに場違いだと気づいてやめた。

こうして真と恵美は、運命の再会を果たした。恵美にとってはとても喜ばしいもので、真にとってもまんざらでもなかった。この時、恵美は「ああもう、キャンディちゃんが女の子なら手をギュッと握っちゃうところなのに～」と考えてもだえていたのだが、真は「かわいいなあ」としか思っていなかった。

この邂逅が、魔法使いたちの命運を変えることになるのだが、それを知っている者は、まだひとりもない。

「きょうは、タブレット端末を使って授業を行います。みなさん、タブレット端末を出してください。転入生の倉田さんは、まだ持っていませんでしたね。これを倉田さんに渡してください」

英語担当の持田先生は、教壇に近い机に、新しいタブレット端末を置いた。その3人後が恵美の席だ。

ほかの生徒はみな、タブレット端末の準備ができたようだ。もちろん、真も。

今は3時限目で、英語の授業中、感動の再会から2時間経ったところだ。

タブレット端末が順々に回ってくる。恵美の前の女子が、タブレット端末を渡そうとして、振り向いてたいへん驚いた。恵美が非常に緊張しているのだ。先ほどクラスメイトたちから祝福された少女が、今はすっかり目の輝きを失ってしまっている。

前の席の女子は、おずおずとタブレット端末を恵美に渡した。

「はい、倉田さん。あなたのタブレット端末よ。どうしたの？ 東京じゃタブレット端末の授業ないの？」

「東京じゃ、きっとパソコンを習うんだよ」

ほかの女子が口を挟んだ。

「わたし、こういう機械が苦手です」

恵美の声が震えている。

前の席の女子が小声になった。

「汗っかきな？ それなら防水のタブレット端末があるよ。替えてもらったら？」

「いえ。特別、汗っかきというわけではないんです。ですが、わたしがデジタル機器をいじると、不思議なことによく壊れるんです」

いまの言葉に、近くの席の真が一驚すると、次の瞬間には、それとなく恵美の観察を始めた。

少女たちの会話は続いている。

「ああ、なら静電気の体質か。きっと大丈夫だよ。ここは田舎だから、静電気もたいしたことないよ」

「だといいんですが」

ちなみに、都会と田舎では静電気の多寡は変わらないらしい。勉強になったね。私も

今検索したんだけどね。

「ケータイとかはどうしてるの？」

「だいたい半年ごとに、一番安い機種に買い換えています」

「ほんとに？ たいへんだね」

前の席の女子は目をぱちくりさせた。

恵美がタブレット端末を持って、スワイプして起動させる。すると、いじってもいないアプリが、勝手に起動したり終了したりをくり返し始めた。

「あっ、まただ」

恵美の表情が一瞬にして曇り、緊張の色が落胆に変わった。

「あらら、ほんとうに壊れちゃったよ」

前の席の女子がつぶやくと、周囲の生徒がざわつきはじめ、持田先生がなにごとだろうとやってきた。

「どうかしましたか。おや、どうやら端末が壊れているようですね。きょうの日直は佐藤さんですね」

持田先生は佐藤さんを見た。佐藤さんは席を立った。

「はい。予備のタブレット端末を取りに行けばいいんですね」

真がちょこちょと指を動かした。彼は魔法を使ったのだ。

「……いえ、佐藤さんは座ってください。きょうは僕が取りに行きます。予備のタブレット端末を持ってくるので、少し待っていてください。全員、騒がないように。分かりましたね」

は〜い、という生徒たちの生返事を聞いて、持田先生が教室から出て行く。

なんと、倉田恵美さんは、デジタル機器をよく壊す体質なのだそうだ。東京の学校でも、「この悪魔」「魔女」「妖怪カッパ女」などと罵られたことがあったらしい。さぞ辛かったことだろう、その心痛たるや察して余りある。

だが、彼女は運がよかった。今まではそうではなかったかもしれないが、少なくとも今はいい。このクラスには渡辺真がいるのだから。彼は魔法使いもどきだ。大丈夫、魔法使いがいれば大抵の問題は解決する。魔法使いや魔女は、弱き者の味方なのだから。

真は席を立って、恵美の所にやって来た。

「倉田さん、ちょっといいかな。端末を貸してもらえるかな」

すると、「わぁ〜お、王子さまの登場だよ」「違うよ、お姫様だよ。だってキャンディちゃんだもん」と女子たちがはやし立てるので、クラスに笑いの波が起きた。

どうぞ、と言って恵美はタブレット端末を真に渡した。

端末を受け取った真は、暴れるやんちゃなアプリを、ひとつひとつ閉じていく。

「倉田さん、風のない満月の夜を思い浮かべてみて」

真の言葉は奇妙に聞こえた。

「どうしてですか」

「いいから」

「風のない満月の夜ですね。……思い浮かべました」

「もう一度使ってみて」

真は、タブレット端末を恵美に返した。彼女が、ふたたびタブレット端末をいじると、

今度はごく普通の挙動^{きょどう}を見せる。

「えっ、あれ？ 使える、普通に使えるよ。どうして、どうして。渡辺さん、何をしたんですか？ どこをいじったんですか？」

恵美は驚きを隠そうとしなかった。いや、正確に言えば隠している余裕がなかったのだ。風のない満月の夜を思い浮かべるだけで、デジタル機器の故障が防げるだなんて、考えたこともなかった。だから、真がタブレット端末の設定のどこかをいじったに違いない、と思い込んだのだ。

「まあ、それは企業秘密ということで」

「渡辺さん、意地悪しないで教えてください」

「んとな、こういうことはぼくの母さんが詳しい。ぼくの母さんを訪ねるといい。これは母さんの名刺だよ」

真は、制服の胸ポケットから名刺を取り出すと、恵美に渡した。彼女は、名刺を凝視^{ぎょうし}した。

「『クラシック音楽・評論家 渡辺璃々杏』って書いてありますね」

「クラシック音楽の評論とライターをしているよ。田舎住まいだから、いい仕事は回ってこないけどね。それでね、断定はできないんだけど、たぶん、倉田さんは母さんと同じ体質だと思うよ」

「えっ、そうなんですか。渡辺さんのお母様も、よく機械を壊されるのですか」

恵美は心底驚いた様子だ。だが、その表情は、`恐れ、よりも`安心、のほうが強いように見えた。

「まあ、ときどきね。母さんは日中は、たいてい家にいるよ。空いた時間でいいから訪ねるんだよ。いいね」

「考えておきます」

恵美は神妙^{しんみょう}な顔をしている。だが、先刻よりも血の気が戻ってきている。

真は自分の席に戻った。

恵美の後ろの女子が、恵美の肩をぼんと叩いて、

「渡辺真さんのお母さんは、大変人で有名だよ」

とささやいた。

「だいへんじん？」

またしても`変、だ。変わってる少年に、大変人の母親。つくづく自分は変な人と縁があるのだな、と考えずにはいられない恵美であった。

じつのところ、彼女は転校を快く思っていなかったが、ここへきて事態が急変した。人生で初めて、自分と同じ体質の人の情報を得たのだ。病院へ行っても、大学で検査してもお手上げだった、自分の呪われた体質に変化の兆^{きざ}しが訪れているのだ。この兆しがどう転ぶかわからないが、とにかくよい方向に転んで欲しいと、彼女は切に願った。

恵美は、気まぐれにタブレット端末のアプリを起動させてみるが、やはりごく普通に動く。彼女の視線は、タブレット端末と命の恩人の間を何往復かした。

渡された名刺をもう一度見てから、恵美は制服のポケットにしまった。

魔法使いはふつう、5～8歳でその才能が開花し始める。蛇口が勝手に開いて水が流れたり、テレビがひとりでに点いたり、洗濯物が洗濯前に縮んだりして、何かしらの異

変が顕在化するのだ。親や家族は、たいへん動揺することになる。すると、どこからともなく魔法使いが現れて、親御さんを説得し魔法の修行が始まる。そうして、15歳までに一人前の魔法使いになるのが一般的だ。

ごくまれに、魔法使いたちの監視の目から漏れてしまうものが出てくる。監視の目から漏れた魔法使いのたまごは、異変を起こし続けることになる。真はこれを疑ったのだ。「転校生の倉田恵美さんは、訓練を受けていない魔法使いではないか」と。

昼食の時間だ。

きのうと同じように、恵美とアオイとホノカが、窓際で机を突き合わせてお弁当を食べている。

「で、恵美ちゃん。どうようよ」

アオイが探りを入れた。

「どうって？」

恵美は（わざと）とぼけた。

「おっと、しらばっくれちゃって。決まってるじゃん、王子さまとの再会はどうだったのかい」

「そうよ、感想を聞かせてよ」

ホノカも興味津々だ。

「そうだねえ。普通だったねえ。いい人だったねえ」

恵美はしみじみ答えた。

「「いい人かあ」」

アオイとホノカは少々ガッカリしているようだ。

「私もなあ、子供のころに王子さまに助けられてればなあ」

アオイが唐突に語り始めた。

「幼い私が駐車場で子犬を見ていて、後方未確認の車が迫ってきて、そこへ王子さまが現れて——」

「王子さまは、落ちてる10円玉に気づいて」

ホノカが話を脱線させた。

「そう、王子さまは落ちてる10円玉を見つけて、それを拾ってるあいだに、あ～あ、私車に轢かれて死んじゃったよ」

3人が笑う。

「じゃあ、ここ天国？」

恵美が笑いながら聞く。

「いや、地獄だ。アオイが天国に行けるはずがないからね」

と言ってホノカが、アオイを箸で指した。

「ホノカ、お前もだろ」

とアオイが返す。

「アオイちゃん、ホノカちゃん、いったい何をしたのよ」

「友達の恋人を取っちゃったり」

涼しい顔のアオイ。
「妹の誕生日のケーキを先に食べちゃったりね」
したり顔のホノカ。
「それは酷い。酷すぎだよ」
さすがに恵美は呆れた。
「わたしたちはワルだからね」
アオイとホノカはハイタッチした。
「ふ～ん。わたしは天国じゃなくてもいいけどね」
恵美の予想外な言葉に、アオイとホノカはとても驚いた。
「えっ、なんで」
「一度、死にかけてるからね」
「なるほどねえ」
「そういうもんかあ～」
アオイとホノカは感慨にふけた。
「それにしても、渡辺真のヤツ、ときどき不思議なことをするんだよなあ。風のない満月の夜を思い浮かべても、何も起きなかったぞ」
「同じく」
「そうなんだ……」
恵美は不思議がっている。と同時に、ポケットの中の名刺が気になってしかたがないようだ。

ここは、雲海高校の学生食堂だ。
平日の12時過ぎなので、もちろん賑わっている。
ここで、真とフクタロウとタダシの仲良しトリオが、食事をしている。真は冷やしたぬき、フクタロウはカレーライス、タダシはカツ丼を食べている。フクタロウは音楽部に在籍、タダシはサッカー部だ。真は……うん、これは後で書くよ。
「真くん。で、どうよどうよ」
フクタロウが探りを入れた。
「どうって？」
「おっと、とぼけちゃって。決まってるだろ、きんきこうきょうがくだん近畿交響楽団の後任人事だよ。もう決まったんだろ」
フクタロウは音楽部員だから、興味津々のようだ。
「母さんから話は聞いている。でもさ、まだ内定の段階だから、情報が漏れるとまずいんだよ。母さん無職になっちゃうよ」
「きんきょう近響の後任人事の、何がニュースなんだ？」
カツ丼の吸収をいったん止めて、タダシが口を挟んだ。タダシくんは、クラシック音楽を愛するサッカー少年なのだ。ちなみに、近響は近畿交響楽団の略称だ。
「そっか。タダシはサッカー部だから知らんのだな。なんでも、近畿交響楽団は超大物の指揮者と契約したって、もっばらの噂なんだよ」

「あの金なしの近響が？　ありえなくね？　どうせガセだろ」

「真、教えてやんなよ」

フクタロウの指名で、真が解説を始めた。

「去年、近場に住む超大金持ちのじいさんが亡くなったんだが、遺書にこうあったんだってさ。『私の死後、財産の半分を近畿交響楽団に寄付する』って。むろん、遺族は揉めたらしいが、結局、遺書は有効ということで、億単位のお金が、近畿交響楽団に転がり込んだんだそうさ。んで、近畿交響楽団は、そのお金をどう使うか話し合った末、大物指揮者を招致することに決めたんだそうさ」

「ほう。そりゃ芸術に理解のあるいいじいさんだな。きっと、そいつ天国に行ったぞ。近響はあまりうまくないけど、とろけるようなサウンドは唯一無二だからな。地元のプロサッカーチームにも、そういうパトロンが現れないかなあ」

タダシは感心しきりだ。

「その死んだじいさんも、近畿交響楽団の独特のサウンドに惚れ込んでいたらしいよ」

「それで遺産の半分を寄付か。やるなー」

「んでさ、後任は誰なのよ。教えてよ〜」

フクタロウが話を戻した。

「ダメだよ」

「オレも興味を持ったぞ。せめて、ヒントだけでも教えてくれ」

「そうさ、ヒントだよ。ヒント」

「しょうがないなあ。ここだけだよ。ヒント、アラン・ロッキーノ級。あっ、ロッキーノじゃないよ」

「マジかよ。ロッキーノクラスっていったら、世界に10人もいないじゃん。マジでじいさんに感謝だな」

「ロッキーノ級の指揮者の演奏を、これから毎年聴けるのかよ。天国かよ。おれもそういう風なカッコイイ死にかたをしたいなあ」

フクタロウもタダシも、たいそう興奮している。

「ところで真。話は変わるが、なんでも、命を救った少女と再会したんだって？」

「あっ、オレもそれ聞いたよ」

フクタロウは、とうとう今日の話の核心に触れた。

「別にたいしたことじゃないよ。あの場に居合わせれば、誰でも同じことをしたはずだよ」

「さらっとカッコイイことを言ってるが、そういうことを訊いてるんじゃないんだぞ。はっきりとは訊きづらいが、その女の子の第一印象はどうだったのかな」

「うん、きれいだね」

真はあっさり言った。

「またまたこれだから、真くんはねえ。キレイなお姉さんが3人もいる人は、言うことが違いますなあ」

フクタロウはあきれ返った。

「姉なんてそんなにいいもんじゃないよ。妹が欲しかったよ」

このとき真は、姉のかれんに、さんざんいびられたことを思い出していたらしい。

「真くん、キミは妹がいないから知らないんだろうが、妹は姉よりもウザいんだよ。妹

は小さいお母さんなんだよ。とにかくウザい」

「オレひとりっ子だからわかんない」

妹のいるフクタロウはしみじみと言い、兄弟のいないタダシはごねた。

「なぜか、みんなそう言うね」

末っ子の真は、不思議そうな表情を浮かべた。

雲海高校の部室棟に、幻想小説同好会の部室がある。

とても狭く、4畳半分の広さしかない。かつては^{えいが}栄華を極め、大部屋を有していた時代もあった幻想小説同好会も、ファンタジーブームが去ると一気に部員が減って、小部屋送りになってしまったのだ。

その幻想小説同好会の^{きまつ}些末な部室に、渡辺真がやってきている。他に部員は……見当たらない。真は、椅子に座って本を読んでいる。ファンタジー小説を。そう、彼は幻想小説同好会のたったひとりの部員なのだ。

真は、読んでいる本にしおりを挟んで、そばのテーブルに置いた。かわりに、テーブルの上の紙切れを手を取った。紙は借入部届けで、『幻想小説同好会 3年2組 倉田恵美』と書いてある。

そこへノックの音。真が立って「どうぞ」と言うと、^{いけだまりこ}池田真理子先生が入ってきた。池田先生がひとりなのを確認すると、真はあからさまにガッカリした。

池田先生は若い教師で、幻想小説同好会の顧問だ。もっとも、彼女は、いろんな部や同好会の顧問を兼任している、極小部活を一手に引き受けている、何でも屋さんなのだ。

「渡辺さん、いたわね。仮入部した倉田恵美さんなんだけど、事情があっけきょうは同好会に顔を出さないそうよ。彼女は転校してきたばかりだし、あまり悪い刺激を与えないでね。それにしても、倉田さん、どうして文芸部に入らなかったのかしら」

「えっ？ 池田先生、どういうことですか」

真はとても驚いた。

「倉田さん、最初は文芸部に入る予定だって言ってたのよ。それなのに、よりもよって幻想小説同好会なんかに……」

「池田先生、いくらなんでもデリカシーなさ過ぎですよ。これでも幻想小説同好会は、^{おうねん}往年は部員が20人を超していた時期があったんですから」

「ごめんなさい、そうだったわね。ロード・オブ・ザ・リングとハリー・ポッターが同時に映画化されたときは、ここもとても人気があったとか。私が小学校の低学年だった頃ね。あっ、いま年齢を計算してるわね。それは女性に対して失礼よ」

池田先生は、少しばかり自意識過剰なようだ。

「かれん姉さんが部長を務めていた頃も、人気があったそうですよ」

「そうそう、そうね。ところで、かれんさんは元気かしら」

「元気です、とても残念なことに」

「仲の悪さも相変わらずなのね。それにしても、たった3年で、ずいぶん落ちぶれたものね」

池田先生は、狭い部室を見回した。狭いから時間はかからない。

かれんは、真より年齢が3つ上だ。かれんの卒業と入れ違いに、真はこの雲海高校に

入学してきたのだ。かれんが部長だった3年前は、部員が6人はいたらしい。

「済みません。ぼくに人望がないもので」

「べつに責めてるんじゃないわ。誰にでも^{えてふえて}得手不得手があるものですからね。運が左右することもあったでしょう。まあいいわ、渡辺さん暗くなる前に帰るのよ」

池田先生は部室を出ていった。

倉田恵美が、制服姿でカバンを持って、まだ慣れない雲海市の市街地を歩いている。スマホの地図アプリを頼りにして。陽はまだ高い。その時、スマホがフリーズした。

「あっ、まただ。再起動——」

いつものようにスマホを再起動しようとして、恵美は手を止めた。

「風のない満月の夜、風のない満月の夜」

小声でそう唱えると、フリーズが解けて、スマホがまた動き出した。

そうして渡辺家までやってきた恵美は、たいへん驚いている。

渡辺邸は、このあたりでは珍しい洋館だ。恵美は、少し前まで東京に住んでいたから、洋館には慣れっこだ。家の門に沿ってユリの垣根があるが、これも珍しいものではない。紅いかわらは、東京でもあまりないから目をひく。それだけなら、まだ普通だ。

この渡辺家のかわらの秘密に、恵美はすぐに気がついた。東側がオレンジ色で、西側が紅いのだ。彼女は、念入りに観察してしまったほどだ。それどころか「なんでかわらが紅いのかしら、それも二色？　ここは近畿メルヘン街道？」と、ひとりごとを漏らしたほどだ。周囲を見渡して、ほかに二色の紅い屋根の家がないことを確認すると、彼女の疑念はますます深まった。

だが、考えても答えは出ないだろう。きょうは、この紅い屋根の家に用があって来たのだ、と恵美は気を取り直して、インターホンを押そうとして、いったんやめた。生け垣から漂うユリの花の香りを、胸いっぱい吸い込んでから、今度こそインターホンを押した。

しばらくして、インターホンから『押し売りと詐欺はお断りだよ』と中年の女性の声がある。少々威圧的な声だ。

「倉田恵美といいます。渡辺真さんの新しいクラスメイトです」

インターホンから『ちょっと待ってて』と返答があった。声のトーンが変わり、こんどは優しい声だった。

玄関が開いて、渡辺璃々杏が出てきた。また黒のワンピースだ。

「あら早かったわね。私は渡辺璃々杏、真の母親だよ。あなたが倉田恵美さんだね」

「ご存じなんですか」

「息子から電話があったからね。さあ、入ってちょうだい」

こうして恵美は、璃々杏に招き入れられた。

ところが、恵美は当惑していた。初めて近くで見た璃々杏は——12年前は遠くから見ていたのだ——なんと髪を染めておらず、白髪交じりなのだ。化粧は多少しているようだが、それでもすっぴんに近いように見える。髪を染めて化粧をすれば、かなりの美人に見えるだろうことが予想される。なぜそうしないのか、恵美は不思議でならなかった。芸術に携わる者は、個性的な人が多いと聞かすが、璃々杏もそのひとりなのだろうかとか考

えていた。

「靴は脱いでね。洋館だけど、衛生面では日本的なのよ」

「^{わようせっちゅう}和洋折衷ですか」

「そんなところだね」

ふたりを吸い込んだ玄関が閉まった。

渡辺家の洋館の居間は、和洋さまざまな骨董品であふれかえっている。

璃々杏と恵美が入ってきた。恵美はさすがにキョロキョロしている。物珍しい品がいろいろあるからだ。値打ちものに見える古いメトロノーム、妖怪の描いてある^{びょうぶ}屏風、おおきな熊の置物などだ。

「お嬢さん、座って」

璃々杏が、客用の椅子を引いてテーブルから出した。

「失礼します」

恵美がそれに座り、別の椅子に璃々杏も座り、ふたりはテーブル越しに対座した。

「恵美ちゃん……だったわね。相談があるんでしょう？」

璃々杏が促した。

恵美は、これまでのことを手短かに話しはじめた。

「……というわけで、わたし、機械とかすぐ壊しちゃう体質で、いつもいつもなんとかしたいと思っていたんですけど。でも、病院に行ってもダメ、大学で調べて貰ってもダメで……。きょう、真さんから、お母様が同じ体質かどうかだったので、慌てて来ました。お母様は、どうやってコントロールなさっているのでしょうか」

「璃々杏でいいよ。それより先に質問があるんだ。真面目に答えてね」

「はい、璃々杏さん」

璃々杏は様々な質問をした。「水星と火星、どっちが好き？」「バラの香りと桃の香り、どっちが好き？」「海外旅行に行くとしたら、アメリカとイギリス、どっち？」などなどだ。

一通り質問を終えると、璃々杏ははっきりと宣言をした。

「間違いない。恵美ちゃんには魔女の才能があるよ。その魔女の力が暴走して、機械を壊していたんだ」

先刻の、真の見立ては当たっていたようだ。やはり倉田恵美は魔女だったのだ。ところが、当人は^{こうべん}抗弁をはじめたではないか。

「冗談はよしてください。わたしは真面目に悩んでるんです」

「そうかい、私も真面目に話してるんだけど。……ところで、お茶でも飲むかい」

「それでは、紅茶があればいただきます」

璃々杏は、隣のキッチンに行くと、ティーセットとクッキーをトレーに乗せて持ってきた。よく見ると、不思議なことに、茶こしはあるが茶葉がない。

璃々杏は、恵美の前に茶器を用意する。またキッチンに行くと、今度は小さな植木鉢を持ってきて、テーブルの中央に置いた。その植木鉢には、小さな芽が生えている。どうしていいものか、恵美はたいそう困惑した。

璃々杏が得意げに説明をはじめた。

「これから、恵美ちゃんに魔法をかけるよ。これは魔法を見えるようにする呪文だよ。ちょっとびっくりするかも知れない。今までと世界が違って見えるからね。いいかい？」

たいへんだわ、これは噂どおりの大変人だ。でも、手ぶらで帰るわけにもいかない、なんとしてでも有益な情報が欲しいんだ……と恵美は思ったので、この悪い冗談に付き合うことにした。

恵美が頷くと、璃々杏は魔法の杖を取りだして呪文を唱えた。

(一瞬、杖が光った気がするけど、もちろん見間違いに決まってるわ。でなければ、なにか仕掛けがあるんだわ)

マジックの仕掛けを暴こうと、恵美は聡い目になった。

璃々杏は、「始めるよ」と言って、呪文を唱えて、杖に明かりを起こした。その光があまりに強いものだから、とっさに恵美は手で目を覆ったほどだ。

「植木鉢をよく見て」

璃々杏が指示すると、恵美は指のあいだから植木鉢の様子をうかがった。なんと、小さい芽がぐんぐん伸びているのではないか。手品だろうかといぶかったが、こんな手品は見た記憶がない。どうやら、杖の光に影響を受けて、小さい芽が伸びているようだ。小さい芽は、やがて大きな草になり、青々とした葉を茂らせた。

恵美は、左手で目を覆いながら反対の手を伸ばして、その草のいちよう一葉を取った。葉を観察するが、どう見ても本物の植物だ。

「適当だね。茶葉を摘まない」と

璃々杏は、また違う呪文を唱えた。杖は光るのをやめて、植木鉢の草にやや強めの風をおこした。草の葉が落ちてくるが、途中で止まり、空中に浮かんでいる。恵美は、手で目を覆うのをやめた。

「おっと、摘んだ茶葉はもまないとね」

璃々杏が、またまた呪文を唱えると、草の葉が空中に浮いたまま、勝手にねじれ始めた。かなり不気味な光景だ。恵美は呆気にとられている。

「もんだ後は酸化させないとね」

璃々杏が、これまた呪文を唱えると、杖から小さい稲妻が出て、草の葉に当たった。

「酸化させた後は、乾燥させないとね」

璃々杏が、こんどもまた呪文を唱えると、杖からまた強い光が出て、空中の葉を照らしはじめた。恵美は、また手で目を覆ったが、こんどは指のあいだから、注意深く観察している。空中の葉は赤く変色しつつある。

「よし、できあがり」

璃々杏が杖を動かすと光が止み、空中にとどまっていた茶葉が、ティーポットの茶こしにひらひらと落ちていった。

恵美は手で目を覆うのをやめた。言葉も出ない様子だ。

璃々杏はティーポットにお湯を注ぎ込み、茶こしを少しゆすってから、恵美のカップに紅茶を注いだ。

「璃々杏特製、アフタヌーン・ティーのできあがりだよ。角砂糖はいくつにする？」

恵美は、啞然としながら眼前のティーカップを見つめている。

「聞こえてるかい。角砂糖はいくつがいいんだい？」

「じゃあ、2つおねがいします」

恵美は、なんとか言葉をひねり出した。

璃々杏は、小さい陶器から角砂糖を2つ取り出して、ティーカップに入れた。

「どうぞ飲んで」

「いただきます」

スプーンでかき混ぜてから、ぐいぐいと勢いよく、恵美は紅茶を飲み干した。

「どうだい恵美ちゃん、魔女になるかい？」

「なります！」

恵美は力強く速答した。

「すぐに決めなくていいんだよ。『いますぐ決めろ』は詐欺師の常套句だよ。でもあなたの場合は、ほんとうに急いだほうがいいかもしれないね」

「どうしてですか」

「恵美ちゃんは、魔女見習いとしては、少々歳を取り過ぎてるんだ」

それを聞いた恵美が、困った顔を見せた。

「そう気にしないで。一週間くらい悩んだらいいさ。それくらいの時間の余裕はあるよ」

だが、すでに恵美の目の色が変わっていた。茶色い瞳がいつそう深い色になり、大きくなってキラキラと輝いていた。

ほどなくして、部活を切り上げた真が家に帰ってきた。

ズボンのポケットから鍵を出して、玄関を開けて家に入った。

居間から、恵美と璃々杏の会話が聞こえてくる。どうやら談笑のようで、打ち解けて盛り上がっているのが聞き取れた。

足もとを見ると、恵美のものと思われる靴がきれいに並べてあるのが見えた。顔をほころばせながら、真は靴を脱いだ。

「ただいま」

「おかえり、真」

「お邪魔してます。倉田恵美です」

恵美の楽しげな声だ。

真が、居間に闖入してきた。

恵美と璃々杏からは笑顔がこぼれている。恵美はずいぶんとご機嫌なようだ。まるで自宅にいるようにリラックスしている。それを見た真に伝播したのか、彼も上機嫌になったようだ。

「倉田さんいらっしゃい。ずいぶん早かったね。来てもあす以降だと思ってたよ」

私の弟が声をかけた。

「真さん、凄いんですよ。わたし魔女なんですよ」

ウッキウキで満面の笑みを恵美は見せている。

「まだ決まったわけじゃないよ」

璃々杏が念を押した。

「そうなんだ。やっぱり倉田さんには魔女の資質があったんだね。ぼくの見立てどおりだ。おめでとう魔女候補さん」

惠美は得意顔だ。

「ところで、魔女修行を受けるかどうか決めたの？」

「いいえ、まだです。すぐに決めなくていいそうです。でも、もう決まったようなものというか……」

それを聞いた真は、つづいて残酷な言葉をつむいだ。

「そうなんだ。でも、魔法の力を放棄して、普通の人間として生きる道もあるよ。現代では、魔法はあまり役に立つものじゃないからね。治せない病気だってたくさんあるし。よく考えたほうがいいよ」

惠美は真顔になった。

「夢心地の少女に向かってよく言うねえ、うちの息子はねえ」

璃々杏は、さすがにあきれ顔だ。

「ええっ、自分だって魔法使いなのに。12年前、魔法である事故からわたしを守ってくれたんでしょ。あんな離れ業、魔法以外にありえないでしょう」

「母さん、まだ話してないの？」

「時間がなかったからね」

「なんですか。真さんも魔法使いなんでしょう」

話の流れが変わったことに、惠美は気がついた。

「ぼくは魔法使いじゃないよ。多少の魔法は使えるけどね」

「見習いってことですか」

「それも違う。ぼくは、『魔法使いもどき』さ」

「もどき？ どういうことですか」

惠美は真剣な顔を見せながら、（真ではなく）璃々杏に訊ねた。

「息子は、魔法使いもどきとって、魔法が使えるけど、魔法使いではないんだよ。魔法使いと魔法使いもどきの違いは、大きく分けてふたつあるんだ。ひとつは、魔法使いが自分の魔力で魔法を使うのに対して、魔法使いもどきはほかの魔女や大地や水などから魔力を借りて魔法を使う。ふたつ、魔法使いが死ぬまで魔法が使えるのに対して、魔法使いもどきは思春期を過ぎると魔法が使えなくなるんだ。ふたつめの違いが大きいね」

この予想外な情報は、惠美に驚きをもたらすには充分だった。

「えっ、それじゃあ」

「ぼくが魔法が使えるのは、せいぜいあと数年というわけなんだ」

「ごめんなさい」

惠美は、真から目をそらした。

「いや、いいんだよ。慣れてるからね」

というわけで、私の弟、渡辺真は「魔法使いもどき」なのだ。読者の諸君、わかったかな？ 魔法使いもどきの特徴は、魔力を借りて魔法を使うことと、思春期を過ぎると魔法が使えなくなること。このふたつだ。よく覚えていて欲しい。

ほかにも、まだ魔法使いもどきの特徴はある。森や大地からは強い魔力を得られるが、海や川からはあまり魔力を得られないことなどもその一つ。また、もどきをよく知らな

い魔法使いが勘違いしているのが、『魔法使いもどきは魔力を借りてるんだから、無限に魔法が使えるんじゃないか?』ってこと。もちろん、そんなことはない。もどきは体力が尽きると魔法が使えなくなるので、使える魔法の総量は、ふつうの魔法使いと大差ないのだ。

これが原因で、数ヵ月後、真は大事件に巻き込まれることになる。

渡辺家の洋館の裏庭には生け垣があって、外から見えるか見えないかの、ぎりぎりの高さを保っている。その裏庭に、真、恵美、璃々杏の三人がいる。

真が魔法の箒に乗っている。彼は制服のままだ。恵美もそうだが。

「さあ乗って」

璃々杏が促す。

「あっ、でも」

恵美は抵抗の姿勢を示した。

「さあさあ」

「できれば最初は璃々杏さんの箒に乗りたんですけど。いえ、真さんが嫌ってわけじゃないんですよ。ほんとうです、ほんとのほんとうですよ」

真は素知らぬふりだ。

「恵美ちゃんゴメンね。実は今日中に仕上げないといけない原稿があるんだ。だから、きょうは息子で我慢してね」

「……わかりました」

恵美は、しぶしぶ真の箒のうしろに乗った。

「ほんとうに飛ぶんですか」

不安げな恵美は、真に訊ねた。

「大丈夫だよ、飛ぶよ」

真の声は、いつも通り落ち着いていた。

「周囲の人がびっくりしちゃいますね」

「これは魔法の箒だから、乗っている間は、普通の人には見えていないよ」

みんな知っているね。魔法使いが魔法を使っているあいだは、普通の人からは見えなくなる。防犯カメラやスマホのカメラにも写らない。フィルムの写真には、たまに写ることがあるんだけど。

「わかりました。あっ、真さんは、いつか魔法が使えなくなるんですよね。もし飛んでいる最中に使えなくなったら？」

「それは大丈夫だよ。魔法使いもどきが、いよいよ魔法が使えなくなるときには、ぜんちょうしょうじょう前兆症状が出るらしいんだ。ぼくはまだ出てない。だから安心して」

「わかりました。真さんを信じます」

真と恵美を乗せた箒が、上昇を始める。やや早く！

「うわぁ！　ほんとに飛んでる！」

恵美は真にしがみついた。

「じゃあ町内一周旅行を始めるよ」

「始めましょう、町内一周！」

真は、箒をゆっくり飛行させる。
「この下がゼブラマート。12年前に、恵美ちゃんが事故りそうになったところだよ。最近^{はんじょう}は客足も少なく、ストレスなく買い物が出来るよ。昔は繁盛してたんだけどね。夜10時まで営業してる。……こっちはライバル店のスーパーYT。YTグループのチェーン店で、品揃えと安さはピカイチ。いつも混んでるけどね。こっちも夜10時まで営業してる。……ここがお寺。……ここが本屋の残骸。古本屋とインターネット通販と電子書籍に押されて、2年前に潰れたんだ。今はクリーニング店になってる。……ここが中学校。ぼくの母校だよ。……ここの急カーブは注意して。事故がとて多いんだ。ちょっと待った！」

真の声色が変わる。緊張を帯びた声だ。彼はだしぬけに箒を下降させた。突然のことに恵美はよろめいて、強く真に抱きつく。

「真さん、どうしたんですか」

「あの中学生、ワイヤレスイヤホンをつけて自転車に乗ってる」

恵美が下を見ると、真の言ったとおり、ワイヤレスイヤホンをつけて自転車で下校中と思われる少年が見える。少年は、危険な急カーブにさしかかっている。

真は杖を取り出すと、少年に向けて魔法を放った。

少年の右耳のワイヤレスイヤホンが、魔法で吹き飛んだ。そのワイヤレスイヤホンは自転車のカゴの内側に当たり、そのままカバンの上に落ちた。自転車のカゴは網が細かいものだったので、ワイヤレスイヤホンは地面に落ちずに済んだようだ。

少年は慌てて自転車を止める。急カーブの手前だ。少年は何事かと周囲をキョロキョロする。そのとき、大きなトラックがカーブを曲がって現れた。トラックはクラクションを鳴らしながら、少年を横切っていった。青い顔になった少年は、左耳のワイヤレスイヤホンも外した。自転車のカゴからワイヤレスイヤホンとカバンを取り出すと、しばらくして、ワイヤレスイヤホンをカバンにしまった。少年はまだキョロキョロしている。

恵美は息をのんでいる。ワイヤレスイヤホンをつけたまま少年が急カーブに突入していたら……そう思うと背筋が凍ったのだ。

「今のは魔法ですか」

「そうだよ」

真は答えた。

「姉さんたちなら、ワイヤレスイヤホンを路肩^{ろかた}に落としてるところだ。ありがたく思えよ」

少年に向かってつぶやいた。むろん少年には聞こえていないが。

真は箒を上昇させ、元の高さに戻ってきた。

恵美は、真から少し離れた。

「なんでもかんでも魔法で解決するのは良くないと、璃々杏さんに聞きましたが」

「さっきは非常時、手段を選んでいられなかった」

「そうですね。でも、ワイヤレスイヤホンが補聴器の見間違いだったら？　だとしたら、逆にたいへん危険ですよ」

恵美が冷静に問いかける。

いいね、倉田恵美さんは頭がいいようだ。賢い女性は魔女に適している。彼女は魔女に向いているようなのだ。

「それはないよ。さっきの少年がつけてたワイヤレスイヤホンの型番は、TB-117。
間違いなくワイヤレスイヤホンだよ」

「どうして分かるんですか」

「同じの持ってる」

「なるほど」

とても合点がいった恵美であった。

「さっきの急カーブは注意してね。それじゃあ、町内一周旅行の続きをするよ。……ここが、ぼくらが通ってる高校。……ここはゲームセンター。夜はご用心、治安があまりよくない。……ここが、ファッションあまぎ。大抵の服はここで揃うよ。夜8時まで営業してる。あっ、スーパーYTにも多少だけ服は置いてあるよ。……ここが雲海駅。……ここが駅前のコンビニ。24時間営業。だいたい終わった。さて、帰ろうか」

「はい。……ちょっと待ってください」

「なに？」

真は、空中で箒を静止させた。駅の上空だ。

上空からは、駅から出入りする社会人や学生などが大勢見えるが、だれも上空を見ていない。やはり、あちらからは見えていないのだ。

「真さんのお父様ってどんな方なんですか。お父様も魔法使いなんですか」

「母さんは何も話さなかった？」

「なにも。お父様については、なにも話されませんでした」

「では、ぼくが話すべきではないのかも知れないけど」

「どうかしたんですか」

「父さんは魔法使いじゃないよ。ごく普通の人間だ。でも、自分以外の家族全員が魔法を使えるのが嫌になったのか、3年前、とつぜん家を出て行ってしまったんだ。ときどき父さんから絵ハガキが届くよ」

「ごめんなさい。立ち入ったことを訊いてしまって」

渡辺家のごたごたに土足で入り込んでしまった恵美は、とても申し訳なさげにしている。

「いや、いいんだ。いつか話そうと思っていたからね。この際だから言っておくけど、父さんの家出よりも重要なことがあるんだ」

「何ですか」

父親の家出以上の重大事とはいったいなんだろうと考えて、恵美はいくばくかの動揺を見せている。

「よく聞いて。いいかい、世界に男の魔法使いはひとりもないんだ」

「ひとりもない？ 魔法を使えるのは女性だけってことですか」

「いや、男も魔法は使えるよ。だけど、男の魔法使いが生まれると、魔女たちは禁断きんだんの魔法を使って、魔力を取り上げてしまうんだ」

「えっ、どうしてですか」

「簡単な話だよ。とかく、男は悪いことに魔法を使いがち。犯罪、陰謀、戦争、エトセトラ、エトセトラ。……というわけで、何千年も前に、魔女たちの間で盟約めいやくが交わされたんだ。魔力を持った男の子が生まれると、その力を取り消さなければならない、という

盟約がね」

そう、世界に男性の魔法使いはいない、魔法使いもどきを例外にして。魔女たちは恐れているのだ。闘争本能の強い、強力な男性の魔法使いが現れることを。かつて、伝説の大陸に恐ろしい男性の魔法使いがいて、世界を破滅寸前まで追い込んだのだ。魔女たちは、その忌まわしい歴史を決して忘れてたりしない。

「そうですか。でも、真さんは魔法が使えるんですよね」

「ぼくは魔法使いもどきだからね。あと数年で魔法が使えなくなるから、大目に見てもらってるのさ。それに、ぼくはいつも見張られているよ」

「そうなんですか。なんだか大変そうですね」

惠美は目を丸くした。

「キミだって他人事じゃないよ。魔女だって……まだ魔女じゃないけど。とにかく、悪いことに魔法を使えば、魔力を取り上げられてしまうんだよ。ジャンヌ・ダルクのようにね」

「えっ！ ジャンヌ・ダルクはほんとうに魔女だったんですか?!」

「そうだよ。ジャンヌは戦争に魔法を利用したから、魔女たちの裁判にかけられて、最終的に魔法を取り上げられてしまったんだ。自動車事故を起こせば免許が取り上げられてしまうのと一緒さ。違うのは、自動車の免許の場合は再取得が可能だけど、魔法はいったん奪われたら、二度と返ってこないってことだね。はい、ここテストに出るよ」

惠美が笑う。落ち着きを取り戻しつつあるようだ。

「それは聞きました。悪い魔女もいるって。魔法を取り上げられることもあるって」

「とにかく、大昔の魔女たちの盟約で、男の魔法使いはいないんだよ。わかったかい」

「はい。ところで、真さんのほかに、魔法使いもどきは何人いるんですか？」

「先月、アルゼンチンのガブリエルが、21歳で魔法を使えなくなったから、現役の魔法使いもどきは、ぼくひとりということになるね」

「真さんは絶滅危惧種ということですか」

「そんな立派なもんじゃないよ。魔法使いもどきは10年に一度くらいは生まれるし、そのもどきの性格や環境によって、魔力を奪うかどうかが決められる。いまのところ、ぼくはアホなことに魔法を使っていないから、取り上げられていない。それだけのことだよ」

「男の魔法使いがいてもいい気がするけど」

「『男に魔法を与えるな』、それが魔女たちの永年に渡るモットーなんだってさ。彼女たちが言うには、『男の魔法使いがいたら、第三次世界大戦がすでに起きていて、人類は滅んでしまっている』ってことらしい。それが本当かどうか、確かめようがないけどね。ところで、倉田さんは魔女になってなにがしたいんだい」

「考えたこともありません。自分に魔女の資質があると聞かされたのが、ほんの1時間前のことですよ」

「まったくもって、ごもっとも」

「真さんは将来、何になりたいんですか」

「うん、まあ。そのうち話すよ」

真はこの話題から無難に逃げようとした。

「この流れで言わないんですか？」

「ファンタジーの小説家」

真は小声だ。この意気地なし！

「ごめんなさい。聞こえませんでした」

「トールキンみたいなファンタジーの小説家になりたいんだ」

「トールキン。指輪物語ですね！　へえ～」

「君は将来何になりたいの？」

「考え中です」

「ズルいなあ。ところで質問は終わり？　なら帰るけど」

「おねがいします」

真が箒を動かそうとしたとき、突然、女性の声が聞こえた。

「おい、真くん。ここでなにをしているのですか」

真が箒を回転させると、魔法の箒に乗った女性が近づいて来た。ブラウンのワンピースを着て、魔法の箒に乗っているまだ若い魔女だ。その女性は、真から3メートルほど離れたところで止まった。

「うわっ、魔女だ」

惠美は小声で言った。

「こんにちは、うららさん」

真は挨拶をした。

彼女は伊藤うらら。隣町に住んでいる20代の魔女で、真とは顔なじみだ。うららは、璃々杏の弟子だったのだから、真とはもう長い付き合いなのだ。

うららのワンピースのスカートが、ピタッと身体に張り付いていることを、惠美はめざとく見つけていた。自分のスカートを見ると、風にゆらゆら靡なびいているではないか。どうやら、うららは魔法でスカートを張り付かせているようだ。その魔法は、ぜひとも早めに教えて貰わねばなるまい、と強く心に刻んだ惠美であった。

「やあ真くん。後ろの女性は見たことがないですね。真くん、緊急時以外、一般人を魔法の箒に乗せてはいけない、という魔法の法は知っていますね？」

「はい、知っています」

「では、いまどういう状況なのか説明してください」

「彼女は倉田惠美さん。転校生で魔女見習いの候補です」

「なに？　ではグースベリーですか！」

うららが興奮した。

「倉田さん、この方は隣町に住む魔法使いで、中級魔法の伊藤うららさんだよ。挨拶して」

「はじめまして倉田惠美です。先週、東京から引っ越してきました。いま魔法についてのレクチャーを受けている段階です」

「やはりグースベリーですか！　待って、魔法使いもどきの可能性は？」

「母さんが見誤ると思いますか」

「そうですね。となると、やはりグースベリーですね」

「あのう、グースベリーってなんのことでしょうか」

事情を飲み込めない惠美は、目が点になっている。

「グースベリーっていうのはね——」

「真くん、待って。私に説明させて」

真が喋ろうとしたが、うらがぶった切った。うらはとても機嫌がいいようだ。

「……わかりました」

「よし、説明しますよ。ええと、倉田さんでしたね。魔女たちのあいだでは、昔から、大きい魔女見習いを、グースベリーと呼ぶしきたりがあるのです。倉田さんが魔女見習いになったら、ほら、あなたは大きいからグースベリーになるのですよ」

「はあ、なるほど。ずっとグースベリーなんですか？」

「いいえ、魔女に昇進したらグースベリーではなくなります。強いていえば、元グースベリーですね。それからですね、『昔から』といったけれど、大きい魔女見習いをグースベリーと言い習わすようになったのは、比較的最近のことで、その昔はスレインと言われていたのですが——」

「あの、うららさん」

「なんですか、真くん。今いいところなのに」

「早く帰らないと母に叱られるんですが」

それを聞いて、うらが固まった。よほど璃々杏が怖いと見える、さっきまでの上機嫌はどこへやらだ。

「そうですか、そうでしたね。真くん、すまないね。それじゃあ、`東洋の賢き相談者、'によろしく」

うらが挨拶をして去った。

「真さん、東洋の賢き相談者ってなんですか」

「母さんのことだよ。上級魔女は二つ名を持つことがあるんだ。で、母さんは『東洋の賢き相談者』って呼ばれているんだ」

「ひょっとして、璃々杏さんって偉いんですか？」

「うん、上級魔女の中でも、さらに高位なほうだからね。でも、安心して、母さんは優しいから」

真は箒を自宅へ走らせた。

惠美を後ろに乗せた、真の箒がゆっくり降下すると、渡辺邸が見えてきた。空中からは、二色の紅い屋根がはっきり視認^{しにん}できる。

よく見ると、二色の紅い屋根も一様ではなく、ところどころに、色違いのかわらが混じっているのがわかる。これは、修理の時に同じかわらが用意できなかったためだ。

「あっ、二色の紅い屋根。わかりやす〜い。だから、真さんの家の屋根は紅かったんですね」

「魔女の家は、たいていなんらかの目印があるんだ。新月の夜や、嵐の晩にちゃんと帰って来られるようにね。煙突があったり、目立つ木が生えていたり。うちの場合は、チェコの家並みを真似て屋根が紅いだけだね」

「なるほど。ドイツじゃなくてチェコですか。でも、二色は目立ちますね」

「紅い屋根は日本ではさほど珍しくないけど、さすがに二色分けしてある家は滅多にないからね。これで迷うことはほとんどないよ。でも、倉田さんは目がいいね。うちの屋根が紅いことにはたいていの人が気づくけど、東西で色違いだとわかる人は滅多にいないよ」

「いいんですよ、両目とも2.0ですからね。しかし、とてもよく考えられていますね。えっ、迷ったことがあるんですか？」

「うん、小さい頃にね」

「ふ～ん。後で詳しく訊かせて貰っていいですか」

何もかもが新鮮に見えるのだろう、恵美は感心しきりだ。

真は、魔法の箒を渡辺邸の庭に降ろして、恵美を無事に地上に戻した。それは見事な操舵^{そうた}で、さすが飛行歴10年以上だといえた。

庭では、璃々杏が待っていた。

「到着。ふう～」

「どうだった？」

璃々杏が訊いた。

「夢のようでした」

恵美は本当に夢を見ているようだ。

「そうかい、それはよかった。さて、これからよく考えるんだ。魔女になるか、魔法を捨てて普通の人間になるか」

「もう決めてます」

「いや、一生の一大事を、こんなに早くに決めてはいけないよ。家に帰ってよく考えるんだ。占いをしたんだけど、ご家族を説得するには時間がかかるだろうって出たから、すまないがひとりで考えておくれ」

「わかりました」

「これはプレゼントだよ」

璃々杏は、ペンダントに加工してある小石を差し出した。小石の大きさは小豆ほどで、深い藍色^{あいいろ}をした美しい石だ。

「これはなんでしょうか」

石を受け取った恵美は、興味深く眺めている。

「リーカストーンといって、魔法石の一種だよ。別名『魔女の精神安定剤』と呼ばれている石だ。持っているとも魔力の暴走が防げる。まあ、100パーセントじゃないんだけどね」

「ありがとうございます。ほんとうに助かります。でも、風のない満月の夜を思い浮かべるのじゃダメなんですか」

「それでもいいけど、ずっとじゃ疲れるだろう」

「なるほど、それもそうですね。でも、学校の持ち物検査がまずいかなあ」

「大丈夫だよ。寝ている時に身につけていれば、学校に持って行かなくても効果は一日は続くわ。問題は修学旅行なんだけど、それはまた今度、先人の知恵を教えてあげるわ」

「そうなんですか。これは大助かりです」

「母さん、ぼくたちは3年だから修学旅行はないよ」

「あら、そうだったわね。そうそう、これもあげるわ」

璃々杏は、大判の写真を差し出した。写真は、12年前の渡辺家の家族写真だ。恵美は写真を受けとった。

「うわあ～、キャンディちゃんだ」

惠美はキャピキャピしている。

「これが12年前の私、この子が長女のみらい、この子が次女のあすか、この子が三女のかれん。三人とも魔女だよ。みらいとあすかは年子さ。それと真。夫はカメラを持っていたから写ってないわ」

「大事にします」

「ぼくからもプレゼントだよ」

真はいつの間にか、ユリの花を一輪持っていて、惠美に差し出した。

受け取ろうとして、だが、惠美はためらった。

「倉田惠美さん、雲海市へようこそ。キミの引越しがいいものになるといいね」

取って付けたような言い訳をする真であった。

「……ありがとう」

惠美は花を受け取った。

「もう遅いよ。まっすぐ帰るんだよ」

璃々杏が小言を言うと、笑顔が満タンの惠美は、あいさつをして帰途についた。

真と璃々杏は玄関先で、惠美を見送りながら立ち話だ。

「惜しいわ。あの子がもう少し若ければ、いい魔女になれたんだろうけどね」

璃々杏はとても残念そうだ。

「東京の魔女たちは、どうして彼女に気づかなかったんだろう」

「さてねえ。ところで真、さっきの花はどういうつもりかしら？」

「とくに意味はないよ。ただ」

「ただ、どうしたの？」

「倉田さんを乗せて飛んでた時、彼女の魔力が流れ込んできたんだけど、それがすごく爽やかな力でさ、ぼく驚いちゃったんだ。あんな清々しい魔力ははじめてだったから。だって、春の日差しよりも暖かくて、初夏の風よりも心地いいんだよ。それで……何となく」

璃々杏が意味ありげに、真をじーっと見ている。

「母さん、倉田さんは、幻想小説同好会の部員になってくれるかもしれないんだよ」

「ふ〜ん。真、トゥーランドット姫が最後に言ったセリフ、覚えてる？」

「プッチーニのオペラだよ。えっと……、忘れた。何だっけ？」

「調べるといいわ」

微笑みながら璃々杏は家に入った。

真はスマホで検索した。トゥーランドット姫の最後のセリフは、^愛、だった。真は、自分の身体が^{からだ}火照^{ほて}っていることに、^{とつじょ}突如として気がついた。

もう倉田惠美の姿は見えない。

倉田惠美が自宅に戻ると、もう日が暮れていた。

新しい倉田家は、2階建ての借家で、築30年といったところ。特筆すべきところがとくにない。あえていえば、個室が一回り広くなったことに、惠美はいささかの感動を覚えていた。これで、東京の借家よりもずいぶん家賃が低いのだ。東京とは、桁違いに

贅沢な土地なんだと、いましみじみと実感している。

さて、食事の時間だ。

恵美と、弟の純司と、母親の3人が、居間で食事をしている。

「ちょっと、DVDかけていい？」

恵美が食べながら言う。

キッチンのテレビの電源は入っていない。

「いいわよ。ヘンなものじゃなければね。それから恵美、アレが届いたから」

母親が言った。

「ああ、アレね。よかった。ママありがとう」

「アレってなに？」

中2の純司が質問した。

「純司は関係ないの」

そう言いながら、恵美がバッグからDVDを取り出した。純司が受け取ろうと、箸をテーブルに置いて、手を出して待ち構える。だが、彼女は弟を無視して、テレビラックのブルーレイレコーダーの所へ向かった。

驚嘆する純司と母親。

「お姉ちゃんどうしたの……」

「恵美？」

ブルーレイレコーダーのオープン・クローズボタンを恵美が押す。トレイが出てくる。

そこへ、パジャマを着た父親がお風呂から上がってくる。

「ああ、いい湯だった」

とてもリラックスしていた父親だったが、恵美がブルーレイレコーダーを操作しているのに気づいて、やはり驚いた。

「恵美、どうしたんだ！」

「えっ？ お父さん、DVDを入れるところだけ」

「そのブルーレイレコーダーは新品なんだけど……。いいよ、自分で操作しなさい」

叱りたい衝動をなんとか抑えたのだろう、父親は忍耐の顔になった。

「お姉ちゃんがいじったら、またブルーレイレコーダー壊れるだろ！ これ何台目だと思ってるんだよ！」

純司ががなった。

「純司、黙りなさい。恵美、好きにしていなさい」

父親は厳かに言った。

「そっ、そうよね。好きにしていなさい」

母親も忍耐だ。

DVDをセットして、ブルーレイレコーダーのオープン・クローズボタンを恵美が押す。DVDが吸い込まれていく。

「ああ、またボーナスが飛んでいく」

父親が小声で言った。

恵美が、リモコンでテレビの電源を入れると、DVDが再生され始めた。紀行ドキュメンタリーだ。外国の風景映像と、おしゃれな音楽が流れはじめた。

惠美がご飯を再開した。
父親も席につき、夕食を食べ始める。
「これはドイツか？」
テレビを見ながら父親が訊く。
「オランダよ」
「そうか、オランダか。ああ、このチューリップは確かにオランダだな。それより惠美、新しい学校には慣れたのか？」
「今のところ大丈夫だよ。新しい高校で友達もできたし」
「そうか、それは何よりだ。純司はどうだ？」
「オレも問題ないよ。でも、ここらへん、夜8時を過ぎるともう暗くて寂しくて」
「それが普通なんだぞ。東京は少し恵まれすぎてるんだ。それからだな、オレも一度転校の経験があるからわかるが、転校生はラブアンドピースだぞ。いかに早く、地元の人に味方であるかをアピールできるかが勝負だ」
「お父さん、さすがにその話は聞き飽きたよ」
「お姉ちゃん、たまにいいことを言うね」
「たまにとは何だ！」
惠美は、純司を睨んだ。
「惠美、言葉が汚いわよ」
母親がやんわり指摘した。
「たまにとは何よ！」
惠美が言い直した。
「何度でも言うさ。かわいい娘と息子のためだからな。それといいか、何かあったらお父さんかお母さんに相談するんだぞ」
惠美と純司が「は〜い」とだるそうに返事をした。
「……フリーズしないな」
と父親がポツリ。
「フリーズしないわね」
母親もポツリ。
「いつもなら、1分あれば余裕でフリーズするのに」
これは弟の純司だ。
オランダのチューリップを見ながら、倉田家4人の食事が進む。

惠美は、夕食後お風呂を済ませると、二階の自分の部屋に戻りベッドで横になった。
ごろ寝しながらスマホをいじっている。スマホは充電中だ。
「すごい、1時間以上いじってるのに一度もフリーズしない。こんなこと、生まれて初めてだわ。……ああ、もうデジタル機器が壊れる恐怖に怯えなくていいんだあ〜」
惠美から笑みがこぼれる。上半身を起こして、枕を持ち上げる。枕の下には、リーカストーンが置いてある。その光景にたいへん満足すると、枕を元に戻して、また横になった。
こんこんとノックの音だ。

「どうぞ」

と恵美が言うと、母親が扉を開けて入って来た。

「恵美、もう 10 時過ぎよ。早く寝なさいね」

「わかった。ごめんママ」

恵美は、スマホをスリーブにして枕の横に置いた。

「きょう何かあったの？」

「夕方話したでしょ。キャンディちゃんと再会したの」

「ああ、てっきり女の子だと思っていたら、実は男の子だったっていう話ね。今度、ママにも紹介してね」

「そんな関係じゃないよ、もう」

恵美が学習机のほうを見ると、ユリの花が小さな花瓶に活けられて置いてある。母親もつられて視線を動かした。

「あら、命の恩人なんですよ。ママもお礼を言いたいわ」

「そういう意味か。うん、できれば連れてくるよ」

「電気消すわよ」

「お願い」

「恵美、お休み」

「ママ、お休みなさい」

「……スマホ、フリーズしないの？」

「しないよ」

「そう、よかった。土地柄が良かったのかしら」

母親はどうやら一安心した様子で、恵美の部屋の電気を消して出ていった。

くらやみの中、恵美のまぶたが重くなってくる。

「ふふっ、わたしが魔女ですって？ ひょっとして夢の中にいるのかな。お願い、夢なら覚めないで」

彼女は深い眠りについた。

こんな安らかな眠りは、本当に久しぶりのことだった。

このように、倉田恵美にとって、この日は特別な一日になった。

命の恩人との再会、魔女との出会い、そして自分に魔法の才能があると知らされたこと。あまりにもたくさんのが一日のうちに起きて、それらをまだ消化できずにいた。とくに、魔法の存在は彼女の自我を変容させつつあった。よい方向に変わるのか悪い方向に変わるのか、自分でも判断しかねていたが、意外と心地よい変化だったので特段の注意を払わなかった。

そして、命の恩人キャンディちゃんに好意を寄せられているかも知れないという予感、彼女を混乱させるには十分な材料になっていた。

何もかもが、思いがけず突然に始まったのだ。

のちに恵美は、この日のことをこう述懐している。「あたみの中でチャイコフスキーのくるみ割り人形が鳴り続けていたんです。いつまでもいつまでも。もちろん全曲版でした」と。

あんな素敵な曲が響いていたのだ。きっと、彼女にとって幸せに包まれた一日だったに違いない。

同じ日の夜、真は自室のベッドで横になったが、なかなか眠れなかった。

自分でも、その原因はよく分からなかったが、不思議と、2人の女性のことを思い浮かべていた。

ひとりは、母親の璃々杏だった。真が高校生になった頃、璃々杏はこんなことを口にした。

「真は、気になる魔女はいないのかい？」

彼は、「いないよ」と素っ気なく答えたことを覚えている。照れくさくもあったのだろう。

真が、ベッドで思い浮かべたもうひとりの女性が、倉田恵美だ。

魔女には格別かくべつの興味がなかった真だが、ついに例外が現れたのだ。

恵美を魔法の箒に乗せて町内を一周したこと、その小旅行のすべてを、真は頭の中で何度も反芻はんすうしていた。学校で再会したときには感じなかった感情が、いまや強く、彼を支配していた。何度かそれを振り払おうとしたが、やがて無駄な抵抗だと思い知らされた。恋に勝てる人など、この世には存在しないのだ。魔法使いとて、こればかりは例外ではない。

（これは吊り橋効果というやつだ。彼女を魔法の箒に乗せて飛んだから、ドキドキしてるだけなんだ）

真は自分にそう言い聞かせてみた。だが、彼の動揺はいっこうに収まらなかった。

翌日、雲海高校の3年2組の教室では、ちょっとしたサプライズがあった。

きのうまで、東京の高校の制服を着ていた倉田恵美が、転校3日目にして、雲海高校の制服に変わったのだ。

なんでも、真が耳にした話では、担任の太田先生が、雲海高校のOG数人とかけあって、制服を安く譲ってもらったのだそうだ。本来なら、3年の途中で転入してきた生徒が、この高校の制服を購入する義務はない。だが、3年といっても、恵美は連休明けの5月に転校してきたのだ。事実上、年度始めの4月の転入生とほとんど変わらない。そこで、太田先生がなんとか中古の制服を調達した、という話らしい。

教師として、生徒の制服が違うことでいちばん困るのは、いじめだそうだ。制服が違うことがトリガーとなって、いじりや無視が発生することがままあるらしい。そこで太田先生が、先手を打ったのだ。

これが、恵美の母親が言っていた、『アレ』の正体だ。

ひとむかし前は、「制服なんてやめちゃえば」という世論が主流だったようだが、おしゃれな制服が増えると、そうした意見は次第に下火になっていったそうだ。

雲海高校の制服は、都会の高校の制服に負けず劣らず、なかなかチャームングだ。雲海高校のブレザーを身にまとった倉田恵美は、堂々としており、もう、きのうまでの彼女

ではなかった。大きく激しく変化したのだ。変わったことの主因は、魔法の存在を知ったことだが、「転入して3日経ったし、雲海高校の制服にもなったので落ち着いたのだろう」と、ありがたいことに周囲の人たちは勝手に誤解してくれた。

これは、恵美にとって幸運な出来事だった。なぜなら、魔法や魔女修行のことなど、隠さなくてはならないことがたくさんあるからだ。

放課後の雲海高校、ここは幻想小説同好会の部室だ。

真が、椅子に座ってファンタジー小説を読んでいる。きのうと同じように。きょうは、さすがにもじもじとしている。

こんこん、とノックの音。

「どうぞ」

真は元気よく席を立った。

ガラガラと扉を開けて、倉田恵美が入って来た。

「失礼します。幻想小説同好会に仮入部した、倉田恵美です」

「ようこそ。できれば入部してね」

真は、仮入部員を温かく迎え入れた。

「部員がひとりもいないと聞きましたが」

「そうなんだよ。ライトノベル研究会、通称ラノ研と、文芸部に部員を取られちゃってね。それでも、去年までは、もうひとり部員がいたんだけどね」

「ご卒業ですか」

「いや、転校したんだ。滋賀県に引っ越しさ。こればかりは、子供のチカラではどうにもならないからね」

「なるほど。ところで……座ってもいいですか」

「おっと失礼。どうぞどうぞ」

真は、隣の椅子をポンポン叩き、客人のおもてなしに余念がないことを見せつけた。

恵美は椅子に座った。

真は、幻想小説同好会は母、璃々杏が創部^{そうぶ}したこと、母と三人の姉が部長をしていた頃は、部員がけっこう多かったことなどを話した（璃々杏は、音楽部と掛け持ちだったのだが）。3番目の姉、かれんが部長を務めていた頃は、非常に人気があったことも付け加えた。

「つまり、四人きょうだいぜんいん部長を務めているんですか。てゆーか、璃々杏さんを入れると5人連続ですか」

「まあね。でもぼくは、ほかに部員がいないから部長をやってるだけなんだけどね」

「ひょっとして、幻想小説同好会は隠れ蓑で、裏で魔術を研究してるとか？」

「それはないよ。考えすぎだよ。ところで、倉田さんはどんな小説が好きなの？」

「ミステリーです。大好物なんですよ、謎と死体と名探偵」

「一番好きな作家は誰？」

「アガサ・クリスティーです。あの人は、女王さまですよ。もう雲の上の人って感じですね」

「最近、読んだのはどういう作品？」

『アライグマ殺人事件』です。でも、あれは、トリックがイマイチだったなあ。文章はよく書けてただけに、実に惜しい！ ファンタジー小説も少し読みますよ」

真は巧みに、恵美がこれまでに読んだファンタジー小説を聞き出した。

「真さん、いいですか。きのう璃々杏さんから聞きそびれたんですが、どうして璃々杏さんは、真さんのことを『キャンディ』って呼ぶんですか」

「いつもじゃないよ。あのさ、ぼくが魔法使いもどきだって判ったのが、5歳のときのことなんだ。母さんは、ぼくを占いの魔女に見せたんだ。ぼくを見た占いの魔女はこう言ったんだ。『この子は大きくなったら、世界をまたにかけて大冒険に出かけることになるよ』ってね。ぼくはまだ、海外旅行にも行ったことがないんだけどね」

「それから？」

「話は飛ぶけど、1950年代にアメリカで、『キャンディード』というミュージカルが作られたんだ。原作はフランスのヴォルテール。おっと、この小説、かなり過激だから読むときは気をつけてね」

「ふんふん、それで」

「キャンディードのあらすじはこうだよ。キャンディードの主人公キャンディードは、世界をまたにかける大冒険のすえ、本当の幸せを見つける。それがその物語。……キャンディードは、世界をまたにかける冒険をする。ぼくも将来、世界をまたにかける冒険をするらしいね、占いによるとだけど。それで、ぼくのお愛称がキャンディードになったんだ。母さんは略して、キャンディって呼ぶけどね」

「ああ、なるほど。キャンディードは世界旅行をする。真さんも将来、世界旅行をする。それで、お愛称がキャンディードに。さらに、キャンディードを略してキャンディ。真さん、謎はすべて解けました」

恵美が笑う。つられて真も笑った。

「ところで、幻想小説同好会って、そもそも何をやる部活なんですか？」

「海外ファンタジーを読んだり、海外ファンタジーを読んだり……たまに日本のファンタジーを読んだり」

「つまり、ファンタジー小説を読むんですね」

「倉田さん凄いよ、なんて呑み込みの早い子だ」

「ひょっとして、からかってる？」

「ないない」

「おすすめの本、ありますか」

『みかんと不思議な魔法』、これ、ぼくの大好きな本です」

真は本を差し出して、恵美は受け取った。彼女は、しばらく考え込んだ。

「……真さん、決めました。わたし魔女になります」

「あっ、そっちか」

「それから、幻想小説同好会に入部します」

「ほんとうに？」

「ええ」

「ありがとう」

真は、恵美の手を握った。

なれなれしい態度の真に、ジト目を向ける恵美。

実のところ恵美は、きのうは真と手をつなぎたくて仕方なかったのだが、きょうはそんな気分ではなかったのだ。いやぁ、タイミングを外したね、弟よ。

こんこん、とノックの音。真は、恵美から手を離した。真と恵美が揃って「どうぞ」と言う。

扉を開けて、池田真理子先生が入ってきた。

「あら、全員揃ってるわね」

「全員っていてもふたりですけど」

「渡辺さん、細かいことはいいのよ。倉田恵美さん、幻想小説同好会によこそ。あら、倉田さんもう、うちの高校の制服なのね。とっても似合ってるわ」

「ありがとうございます」

「それじゃ、自己紹介するわね。私が、幻想小説同好会の顧問、池田真理子です。年齢は聞かないこと。彼のことは知ってるわね。幻想小説同好会の部長で、唯一の部員、渡辺真さんです。渡辺さん、彼女は転入生で、名前は倉田恵美さん。幻想小説同好会に入ってもいいと言っている奇特な人よ」

池田先生は、ここで一息ついた。

「ちなみに、ウチの高校は3年前から、女子でも男子でも、名字か名前をさん付けで呼ぶことになっていて、あだ名で呼び合うのは基本禁止になってるから。これもいじめ防止の一環らしいんだけど、まあ効果が無かったら廃止になると思うわ。でも、悪法も法なりっていうから、ね。これは守ってね。ところで、倉田さんの前の高校では、その辺はどうなっていたのかしら？」

「東京の学校では、あだ名禁止ではありませんでしたよ。転校してきて、最初は、だからびっくりしました。でも、なんていうかもう慣れました」

「そう、よかった。若い子は順応性が高くていいわね。というわけで、渡辺さんを例のあのあだ名で呼ぶのは禁止よ。分かったわね」

「わかりました。由来もわかったことだし」

「えっ?! 倉田さん、渡辺さんのあのあだ名の由来を知っているの？」

池田先生は思わず声を上げた。

「ええ。ついさっき、本人から聞きましたから」

恵美はきょとんとしている。

「渡辺さん、教えたの？」

「ええ、まあ」

「あの、渡辺さん。先生にもその由来、教えてくれないかしら？」

「ダメです」

真はきっぱり言った。

「えっ、真さんどうして……あっ、そうか。あれは言えないか」

「何よ、なんなのよ。先生にも教えてよ。どうして、渡辺さんのお母様は、あなたを『キャンディ』って呼ぶのよ。もちろん先生は、宇宙が終わるなんてバカげた噂を信じてはいないけど、これは教師として知っておくべきなのよ！」

ちなみに、璃々杏が息子を「キャンディ」と呼ぶ理由を知っているのは、雲海高校では——真を除けば——倉田恵美ただひとりなのだ。

池田先生の愚痴は、5分は続いたらしい。

倉田邸の仕事部屋で、恵美の母親がイラストを描いている。

彼女の仕事はイラストレーターなのだ。自宅でできる仕事だったので、引っ越しに否定的ではなかった。

画風は素朴なタッチのもので、市町村の広報のイラストや、小説や週刊誌の挿絵がメインだ。小説の表紙を描いたこともある。

最近、萌え風の絵に押されて、仕事は減りつつある。また、その少ない仕事も、い〇すとやの急拡大によって奪われつつある。

こんこん、ノックの音だ。

「どうぞ」

母親は、振り向きもせずに描き続けている。

学生服姿の恵美が入ってくる。

「ママ」

「恵美、どうかしたの？」

「またにしようか？」

「いいわよ、話しなさい。この仕事もうすぐ終わるから」

「小説の挿絵？ ミステリー？」

イラストを見ながら、恵美が質問した。

「そうよ。新人OLが、殺人事件に遭遇した現場よ」

「ふ～ん」

恵美があたりを見ると、ゾンビのスケッチもある。

「あれママ、ゾンビもののイラストも引き受けたの？」

母親が恵美を見た。

「それがねえ、誰にも言っちゃだめよ。わかってるわね。守秘義務ってやつ。……このミステリーはね、ゾンビが犯人なのよ」

「えっ、ゾンビが犯人のミステリー？ 斬新というか、やり過ぎというか」

「最近はこうでもしないと、読者の心をつかめないらしいのよ。時代は変わったのね。で、何の用なの？」

母親はイラストの作業に戻った。

「ねえ、ママ。お願いがあるんだけど」

ビクッとして、母親はすぐに手を止めた。

「なに、またスマホが壊れたの？」

「ううん、違うよ。スマホは大丈夫。いまのところ絶好調だよ」

「それはよかったわ。ところでお願いってなんなの」

母親はいったん筆を置いて、恵美に向き直った。

「それがその、少しお金がかかる話なんだけど」

「映画でも観に行きたいの？ それとも遊園地かしら？」

「ママお願い。またピアノを習いたいなの！」

「ピアノ？ あなた13歳でやめたじゃない。どうしてまた、そんな気になったの」

「ほら話したでしょ。キャンディちゃんのお母様に挨拶に行った話。それで、お母様が音楽評論家さんで、いろいろ話してるうちに、『ピアノのレッスンをしてあげてもいいわよ』って話になったの」

ピアノのレッスンは、魔女修行の隠れ蓑だ。

「それは妙な話ね。ところで、^{そそ}粗相はなかったのよね」

「大丈夫、たぶん」

「ならいいわ。音楽評論家の、えっと誰さん？」

惠美は、璃々杏の名刺を母親に見せた。

「渡辺璃々杏さんね。いま検索するわ」

母親はスマホで検索した。

「どうやら名の知られた方のようなね。でも、ピアノを習いたいんなら、ちゃんとしたピアノの先生のほうがいいんじゃないかしら。餅は餅屋って言うでしょ」

「渡辺璃々杏さんは、音楽大学を卒業してるって言ってたわ。それに……」

惠美はスマホをとりだして、電卓アプリを起動し、数字を叩いて母親に見せた。

「月謝はこれでいいって言ってくれてるのよ」

母親は、娘のスマホを^{ぎょうし}凝視した。

「相場の3分の1以下じゃない。なんで、こんなに安いよ。これは何かあるわ」

「だから、評論活動の片手間に教えるから、単なる小遣い稼ぎだから安くいいって言ってくれてるのよ」

「ふ〜ん、音楽評論家さんねえ。こっちはアーティストよ、^{ぼすえ}場末だけど」

「お母さんのイラスト、わたし好きよ」

惠美の言葉に、母親はとても満足した様子だ。

「……わかったわ。私はオーケーのつもりだけど、お父さんが『いい』って言うまで保留よ」

「やった！」

多くの女性がそうであるように、安さには弱い母親であった。

こうして惠美は、璃々杏に魔法を習いに行く、格好の口実を得たのだった。

スキップしながら惠美が部屋を出て行った。

「お母さん、仕事頑張ってるね」

惠美は扉を閉めた。

「惠美がピアノねえ。何か隠してるのかしら。隠し事をするように育てた覚えはないんだけど。まあ、引っ越してきたばかりだし、いじめられてる風でもないし、それに年頃だしね。しばらく泳がせようかしら。……さあさあ、この仕事をかたづけちゃいましょ。い〇すとやに負けてらんないわ」

何か頭に引っかかりながらも、母親はイラストの作業に戻った。

翌日の雲海高校、3年2組の教室の窓際の席で、惠美とアオイとホノカの三人がお弁当を食べている。

「恵美ちゃん、結局、幻想小説同好会に入ったんだって？」

とアオイ。

「無茶するね。普通に文芸部にすればよかったのに。別に昔、助けて貰ったからって、そこまで恩に着る必要ないと思うよ」

とホノカ。

「う～ん、でも」

「ねえ、今からでも文芸部に入っちゃえば？」

アオイが提案する。小悪魔の誘惑だ。

「そうだよ。うちの学校、兼部が認められてるから、文芸部にも入っちゃいなよ」

ホノカも誘惑する。なるほど、これは実に悪いふたりだ。

「さすがに、文化部どうしの兼部はまずいでしょ」

「いやいや、当の渡辺さんだってたしか、幻想小説同好会と音楽部を兼部してるはずだよ」

「わたしもそう記憶してるね」

「えっ、そうなんですか」

恵美は意表を突かれた。

「まあ、渡辺さんの場合、音楽部は完全に幽霊部員らしいんだけど」

「そうなんだ」

恵美は考え込んだ。

「でもさ、恵美ちゃんが元気になってよかったよ」

まるで肩の荷が下りたとでもいうような口ぶりのアオイだ。

「そうそう、転校初日から見違えるように明るくなったね。転校したての頃は、ガチガチに緊張してたのに」

ホノカは的確な分析を試みせた。

「土地柄がよかったんだと思う。あと、みんなと同じ制服になったからかな」

恵美はなんとか誤魔化した。少なくとも嘘はついていない。

同時刻、雲海高校の学生食堂では、またいつものトリオが昼食を食べている。

真とフクタロウとタダシの三人だ。

「なあ真、なんでも謎の転校生が幻想小説同好会に入ったと聞いたが、今度はいったいどんな卑怯な手を使ったのかい」

「あっ、オレもそれ聞いたよ」

音楽部のフクタロウが話題を振ると、サッカー部のタダシが乗ってきた。

「卑怯な手って、酷いなあ。倉田さんは純粋に、幻想小説同好会に興味を持ってくれただけだよ」

そばを食べながら、真は慎重に弁明した。

「本当かなあ」

「疑わしいね。きれいなお姉さんが3人いる時点で、すでに疑わしいね」

タダシはまったく関係のない話を持ち出した。

「タダシは恋人がいるからいいじゃん」

「そうさそうさ。恋人がいるタダシが文句を言うのはおかしいぞ」

真とフクタロウは不満たらたらだ。
「いやあ。かわいいかわいいサトミちゃんの写真、見る？」
照れながらタダシが言った。
「また今度ね」
真はそばつゆを飲み干した。

第一章 転校生と魔法使い おわり

第二章 魔女修行はじまる

第二章 魔女修行はじまる

きょうは土曜日で、ここは渡辺邸の庭、天気はくもりだ。
そして、倉田^{えみ}恵美の魔女修行が始まる日なのだ。
璃々^{りりあん}杏がいて、恵美^{まこと}と真もいる。ついでに、隣町に住んでいる伊藤うららもいる。璃々杏は黒のワンピース、恵美と真は学生服姿で、うららはネイビーブルーのワンピースだ。
恵美は、初めての魔女修行とあってとても緊張している。真もうららも緊張していたが、それは、恵美の緊張^{でんぱ}が伝播したものだ。だが、実のところ、この場にいる魔法使いの中で一番緊張しているのは、間違いなく璃々杏だった。
璃々杏にとって、恵美は初めてのグースベリーであり、何人もの魔女を育ててきた豊富な経験があてにならないので、彼女もまったくの手探り状態なのだ。璃々杏は、グースベリーを育てたことがあるトルコの魔女に、電話でアドバイスを貰っていた。
『いいかい、璃々杏。グースベリーはときどき、飛躍した成長を見せることがある。でも、それに安堵してはいけないよ。成長はおおいにけっこうだが、基礎^{きそ}をないがしろにするとすべてがおじゃんだよ。やっかいなことに、グースベリーは基礎の定着に非常に時間がかかるんだ。小さい魔女見習いとはそこが一番違うんだ。基礎、基礎、基礎。基礎が一番大事なんだよ。師匠の教育が悪いと、グースベリーはダメな魔女になってしまうんだよ。わかったかい』

と、これが忠告の内容だった。

それだけなら、璃々杏は器用にこなす自信があった。彼女はとても偉大な魔女で、師匠としてもたいへん優秀だからだ。だが、恵美は（息子の真と同様に）受験生で、魔女修行と受験勉強を両立させねばならないのだ。

厳しく教えるべきか、本人の自主性に任せるべきか。厳しく教えるのが王道だが、状況が普通ではない。璃々杏は悩んだ末に、行き当たりばったりにすることに決めた。つまり、勘に頼ることにしたのだ。

璃々杏がスマホを出して、恵美に見せる。スマホにはQRコードが表示されている。「これは、魔女並びに魔女見習いに必要なスマホアプリ、『魔女アプリ』のQRコードだよ。インストールしておくれ」

恵美が魔女アプリをインストールし、起動させると、『あなたは魔女ですか？』と質問が表示された。

「えっ、こんな簡単でいいんですか」

「大丈夫です、魔力のない人には、質問文が違って見えるんですよ」

うららがそう言った。

「なるほど。……セットアップが終わりました」

「一度スマホをしまつて」

璃々杏の指示通り、恵美はスマホをスカートのポケットに入れた。

璃々杏が、詩歌を暗唱し始めた。

「天に赤い星が輝くとき

希望と失望が交錯するとき

懐かしい湖が消えたとき

雲が何かを予感したとき

雨が路を塞いだとき

その時、明日は消えるかも知れない

だが忘れないで欲しい

それでも魔女たちの心までは消えないことを

……^{なんじ}汝、倉田恵美よ、お主は今より^{ぬし}魔女見習いである」

璃々杏は無事、言い終えた。

「これでもう、倉田さんは魔女見習いだよ」

真の声には優しさが詰まっていた。

「何も変わっていないように感じます」

「みんなそうだよ。私のときもそんな感じだったねえ。あらあら懐かしいねえ。さあ始めるよ、グースベリーちゃん」

「はい」

恵美が元気よく答えると、璃々杏は不機嫌そうな顔をして息子を睨めつけた。

「ぼくじゃないよ。うららさんが……」

「済みません、璃々杏さん。うっかり口が滑りました」

うららは正直に^{あやま}謝った。

「そうかい、ならしょうがない。それで、あの日は帰りが少し遅かったのね。じゃあ、恵

美ちゃん、これは知ってる？ 魔女たちは自分たちのことを、『スカートの眷属』って呼ぶことがよくあるのよ。知らなかったら覚えておいてね」

「わかりました。スカートの眷属ですね。でも、どうしてスカートなんですか」

「魔女はスカートが大好きだからね」

「つまり、わたしはスカートの眷属見習いってことですね」

「いや、あなたはもうスカートの眷属さ。中世の時代に、魔女見習いをスカートの眷属に含めるかどうか大激論が起こったんだけど、結局、見習いも魔法が使えるんだからスカートの眷属で間違いない、という結論に至ったのさ」

「なるほど」

璃々杏は、恵美に魔法の箒を渡した。黄色いラインが2本入った練習用の箒だ。

「さあ始めるよ」

「えっ、いきなり箒ですか」

さすがに恵美はたじろいだ。

「普通なら正式な手順を踏むんだけど、あなたは見習い魔女としては歳を取りすぎている。いまずぐ箒のレッスンを始めないと、永遠に飛べない魔女になるよ。飛べないのは嫌だろう」

「そうですね」

通常、見習い魔女の初年は5～8歳だ。この頃の女の子はまだ魔力が弱く、「すぐに箒で飛行」という訳にはいかない。まず、基礎の魔力を高めて、それを安定させてから初めて飛行のレッスンに入るのが普通だ。魔力を安定させるのに必要な期間は、短くて1ヵ月といったところ。箒の飛行はほとんど魔力を使わないが、魔力が安定しない状態で箒で飛ぶのは、足に怪我があるのに自転車に乗るようなもので、危険この上ないのだ。

倉田恵美の魔力はすでに高く、あとは安定させればいだけなのだが、璃々杏はその前に飛行訓練を始めるという賭けに出た。満18歳を超えて修行を始めたグースベリーは、総じて飛行が得意ではないというデータが、璃々杏を無謀な賭けに駆り立てていた。倉田恵美の誕生日は7月11日、満18歳までもう2ヵ月を切っている。璃々杏は生来のジャンプラーではないが、「倉田恵美を一人前の魔女にする」という焦りが、彼女に大胆な手を打たせたのだ。

これはのちに、東洋の賢き相談者の定石破り、として広く知られるようになり、今もこの判断の賛否が別れている状態だ。魔女が3人以上集まると高い確率で話題に上がり、長時間の議論に発展する場合もある。

「まずは自分で試してみて」

璃々杏が促すと、恵美は箒にまたがってぴょんぴょん跳ねる。が、まったく浮かない。「飛んで、飛んで」と言ってみるが、やっぱり飛ばない。

「うん、ダメだな。最初はみんなそうだけど」

真顔の真が言う。

「恵美ちゃん、ちょっと違うわ。『飛べ』って思うんじゃなくて、『飛べる』って自分に言い聞かせるのよ。飛べ、じゃなくて、飛べる、よ」

璃々杏が初歩の飛行のコツを教えた。

「分かりました」

恵美は目を瞑った。

「わたしは飛べる、わたしは飛べる」

そうつぶやくと、恵美の乗った箒がゆっくり上昇し始めた。

それを悠然と眺めている、璃々杏と真とうらら。

恵美が目を開けると、渡辺家の2階の高さにいる。

「いきなり飛びすぎだよ！」

恵美はあわてて箒を強く握りしめた。

「なかなか筋がいいねえ。これは教え甲斐がありそうだ」

璃々杏は手応えを感じているようだ。

「璃々杏さん、これ、どうやってコントロールするんですか」

恵美の箒はまだ上昇し続けている。

「大丈夫よ。そのための安全ロープだから」

なだめるように璃々杏が言った。

恵美の乗った箒の先端にはロープが繋がれており、ロープのもう一方は庭の杭に結ばれている。そのロープが伸びきって、ぴんと張って箒の上昇は止まった。渡辺家の屋根の高さだ。恵美はバランスを崩して、前屈みになって箒にしがみつく。右手で箒を握り、左手でスカートを抑えている状態だ。このとき恵美は、スカートを身体に張り付かせる魔法を先に教えて貰うんだと非常に後悔していた。

「そういえば今月は5月でしたね」

うららの視線の先にあるのは、地面から伸びたロープ、そのロープに繋がれて風にそよぐ魔法の箒、恵美は前屈みで箒にしがみついたままだ。その姿は、まるで鯉のぼりのようであった。

「あの、スカートを張り付かせる呪文を教えてくださいませんか」

スカートを押さえながらの恵美の発言だ。

「今はムリね。後でね」

「そうですか。あの、落ちたりしないですよ」

「倉田さん、大丈夫だよ。魔法使いは滅多なことでは箒から落ちないよ」

真が落ち着かせようと抑揚の少ない声で言った。

「『滅多なこと』ってことは、稀にあるんですね」

「まあ、ごく稀にね」

真は微笑んでいる。璃々杏とうららも。

「あの、見えてませんよね」

空中で必死にスカートを抑えながら恵美が言う。

璃々杏は真を見る。

うららも真を見る。

真は顔を逸らした。

恵美はスマホを持ち、魔女アプリを起動させた。

今は夜、恵美は自室の学習機の椅子に座っている。

画面に、『倉田恵美さん、魔女アプリをインストールして下さってまことにありが

とうございます。魔女アプリは、おもに3つのアプリで構成されています。ひとつめ、`ウィッター`、これは魔女専用のつぶやきソフトです。数年前に自動翻訳機能を追加したので、海外の魔女とも交流できます。ふたつめ、`魔女の掲示板`、世界中の魔女たちと意見を交わすことができます。みつめ、`魔女の質問道場`、これは日々の疑問などを他の魔女に質問することができます。なお、男性の魔法使いもどきが利用できるのは`ウィッター`と`魔女の掲示板`のみです。`魔女の質問道場`は、男性の魔法使いは書き込みも閲覧もできません。悪く思わないでね。さあ使ってみよう』と表示された。

「これはすごいぞ。しかし、『魔女の質問道場』とはどういうセンスだ？ ずいぶんと古風なメヌエットじゃないか」

ボレロで知られるモーリス・ラヴェルが作曲した作品に、『古風なメヌエット』という曲がある。それはともかく、興奮した恵美は早速ウィッターに書き込もうとした。『はじめまして、日本の倉田恵美です。きょう魔女見習いになりました。よろしくお願ひします』と打って、書き込みボタンを押した。だが、エラーだ。『すみません。登録から一週間経たないと書き込みはできません』と表示された。

「ガクシ。一週間か、それは長いなあ。わたしお婆さんになっちゃうよ」

恵美はウィッターを眺めはじめた。『なんでも日本にグースベリーが現れたそうね』とドイツの魔女がつぶやいている。2時間前だ。『ホントウに？』『年齢は？』『師匠はだれですか？』などとリプライが続く。

「わたしだよ、わたし。倉田恵美、17歳、ここにいるよ！」

照れている恵美は、身体がよじれてくねくねしていた。

こうして、倉田恵美は魔女の階段を登り始めた。

魔法の箒の修行は、彼女が思っていたものとだいぶ違っていた。すぐには単独での飛行が許されず、璃々杏の前後に乗るか、璃々杏の箒と自分の箒を補助ロープで繋いだ状態で飛ぶかだった。

補助ロープは、魔女見習いが箒で飛ぶときに、師匠^{ししょう}の箒とつなぐ2本のロープだ。これなら、魔女見習いは安全だし、また箒が勝手にどこかへ行ってしまうこともない。

魔女見習いが、箒での飛行術^{たいとく}を体得するまでのあいだ、箒同士をロープで繋いで安全を保つのが師匠のお仕事だ。魔女見習いはたいてい年若い女性なので、念には念をというわけだ。こればかりは念を入れすぎて困ることはない。

魔法の箒は、ときに主人を裏切って勝手に飛んでいってしまうことがある。そうした箒を、一般に`家出箒^{いえでぼうき}`と呼ぶ。すぐに捕まえば問題ないが、長年、脱走を続けた箒は、もう魔法使いの命令を聞くことはない。そうなれば、焼却処分の悲しい最後が待っている。

魔女にとって、家出箒を出すことはたいへん不名誉なことであり、それを回避するためにも、魔女見習いの箒には補助ロープを付けるのが一般的なのだ。璃々杏は、弟子の訓練中に一度だけ家出箒を出したことがあると、恵美は聞いていた。

恵美は幼くはないものの、うまく飛べないときが大半だったので、補助ロープの話を聞かされて、さもありなんと思ったものだ。

なお、飛行訓練を始めてすぐに、スカートを身体に張り付かせる魔法を教えてもらっ

た。これは難しい魔法ではないので、3日ほどで体得した。

むろん、訓練は魔法の筈だけではない。渡辺邸の裏庭では、杖を使って魔法の訓練をする。裏庭は狭いので強力な魔法は練習できないが、弱い魔法や防御魔法の練習は充分できる。

居間では魔法の講義だ。璃々杏の指導を受けながら、恵美が魔道書を読んでいる。

「魔法には大きく分けて二種類あるんですね。日常魔法と非日常魔法」

恵美は、教わったことをメモ帳に書き込んでいる。彼女が使っているのは、魔法のメモ帳に魔法のペンである。

「そうさ。回復魔法や治癒魔法は、日常魔法に入る。恋愛魔法もここに入る。攻撃魔法や防御魔法は、非日常魔法に入るんだ。日常魔法を生活魔法、非日常魔法を冒険魔法っていう魔女も多いね」

璃々杏は丁寧に教えている。

「それから恵美ちゃん。魔法使いが魔力の強いところで独り^{ひと}でいると、幻を見ることがあるんだ。もし、そうなったら、幻とは絶対に口をきいてはいけないよ。これは大事なことでだから、忘れないでね」

「わかりました。でも、どうして幻と口をきいてはいけないんですか？」

「魔^まに取り込まれてしまうのさ。大抵は、墮落^{だらく}して悪い魔女になってしまうんだ」

「つまり、幻の言うことは嘘なんですね」

「いいや。大抵は本当のことを言う。だから余計に質が悪いんだよ」

「わかりました。気をつけます」

恐ろしいのだろうか、恵美は少し怯えている。

渡辺邸の防音室には、いろいろな楽器が置いてある。グランドピアノ、トランペット、ホルン、フルート、ヴァイオリン、チェロ、ティンパニなどだ。その防音室で、恵美はピアノを習っている。魔法の訓練を受けていることを隠すには、ピアノの練習は欠かせない。ピアノを習うという名目で魔女修行をしているからだ。

こうしてみると、恵美が幻想小説同好会に入ったのは、それほど悪い選択ではなかった。渡辺邸では魔女修行、学校では勉強、自宅では受験勉強だ。目立った活動のない幻想小説同好会は、彼女にとっていい息抜きになっていた。

倉田家の居間には、春の優しい夕日が差し込んでいる。

その居間で、恵美がアップライトピアノを弾いている。曲はショパンだ。母親が真剣に娘の演奏を聴いている。恵美が一曲、弾き終わった。

「恵美、努力は買うわ。お母さんはいいと思う。でも、言っちゃなんだけど、たいして成長してないんじゃない。恵美がまたピアノを習いたいっていうから許可したのに。音楽評論家の渡辺璃々杏さんだっけ？ 教えるのがあまりうまくないんじゃないのかしら」

母親は少々落胆している様子だ。

「基礎からやり直してるからすぐには結果は出ないよ。それに、渡辺璃々杏さんはいい先生だよ」

「やっぱり、ちゃんとしたピアノの先生に教えて貰ったほうがいいんじゃない。まあいいわ、恵美がまたピアノを習いたいって言ったんだもの、しばらく様子を見ることにするわ」

そう言うと、母親は近くのカバンをたぐり寄せ、ごそごそしている。

「ところで恵美、これはなに？」

と言って、A4サイズの雑誌を取り出した。『オータム・レディ・ジャパン』という女性ファッション誌だ。2016年6月号で、「試供品」のシールが貼ってある。

恵美は不愉快な顔つきになった。

「えっ?! あっ、それわたしが頼んだ雑誌! 勝手に開けたの？」

「ええ、まあね。娘がヘンな宗教とか詐欺にハマられると、たいへん困るしね。恵美、あなたはまだ未成年よ。わかってるの？」

「そうだけどさ。でも、勝手に開封するなんてひどいよ」

「びっくりしたわ。初めて見たけど、これ、海外のファッション誌の日本版じゃないの。恵美はこういうのがいいの？」

母親は、オータム・レディ・ジャパンを捲りながら言った。

「わたしも一応、女性なんだよ」

恵美はもっともらしく言った。

「一緒に年間購読の申込用紙もうしこみが入ってたけど、恵美はどうしたいの？」

恵美は恐る恐る口を開いた。

「できれば年間購読したいなあと思っております」

「これ、1冊1200円で年間購読料が12000円って、ファッション誌にしてはちょっと高いわね」

「お願いします。ダメなら自腹で買います」

「あら、ダメとは言ってないわ。私はそんな酷いお母さんじゃありませんよ」

「じゃあ、オーケー？」

「まあこれは、お父さんに許可を取る必要はないわね」

「やったー！」

恵美はうれしさをピアノを弾いて表現した。即興の短いオリジナル曲だ。

恵美は自室のベッドで、オータム・レディ・ジャパン6月号を開いた。

見た目はごくふつうのファッション誌だ。扱っている内容はやや大人向けだが。恵美は魔法の杖を取り出して「ダリーフガハラン」と唱えた。雑誌『オータム・レディ・ジャパン』はたちまちのうちに内容を変え、『魔女ライフ・ジャパン』になった。内容はもちろん、魔女に関することばかりだ。

「へえ、ベルリンで魔女の縄張り争いがあったんだ。おっ、こっちはアジアの記事だ。ここが日本の独自取材の記事か。ふ〜ん、日本のページは3ページ、じゃなくて4ページか。ちょっと少ないなあ」

彼女は食い入るように読んでいる。

そこへ、スマホの着信音だ。聞き慣れない音に、恵美は戸惑いながらスマホの電源を入れる。画面に『倉田恵美さん、おめでとうございます。登録から一週間が経ちました

ので書き込みが可能になりました。Let's witch life!』と表示された。

恵美の顔がほころぶ。彼女はさっそく、ウィッターに書き込んだ。
『はじめまして。日本の倉田恵美です。先週、魔女見習いになりました。よろしくお願
い
します』

するとすぐに、『やあ、はじめまして。グースベリーさん』『噂のグースベリーさんで
すね』などとリプライがつく。

うれしさと驚きが恵美を支配する。

『どうしてグースベリーだと分かったんですか。誰か教えてください』

と書き込むと、『グースベリーさん、規約をよく読んで』『規約に書いてあるよ』『ウィッ
ターは15歳以上じゃないと使えない規約だから。15歳以上で魔女見習いは自動的にグー
スベリーになるよ』とリプライが続く。

こんこんとノックの音。恵美が「どうぞ」と言うと、弟の純司が扉を開けた。

「お姉ちゃん、母さんが夕食の支度を手伝って欲しいってさ」

「いま忙しいって言って。……純司、あんたが手伝いなさい」

「母さん、姉ちゃんがヘンな顔してスマホ見てるよ」

と言いながら、純司が去っていった。

恵美が手鏡を取ると、これはまた見事な破顔^{はがん}が写っている。

雲海高校の文芸部が大部屋を持っているのには、ワケがある。

ここは放課後の雲海高校の文芸部の部室で、文芸部、ライトノベル研究会（通称「ラノ
研」）、幻想小説同好会のほぼ全員が顔を出して、環状に席を並べて座っている。

文芸部、部員11人、女子多め。

ライトノベル研究会、部員14人、男子多め。

幻想小説同好会、部員2人、男子ひとり、女子ひとり。真と恵美だ。

なお、ほぼ全員の制服が夏服にチェンジしている。

文芸部の部長が立って話し始めた。

「5月の最終金曜日ですね。文芸部、ライトノベル研究会、幻想小説同好会の、月一の合
同活動を始めます。今年度は2度目なので、『自由に活動してください』と言いたいところ
ですが、ここでニュースです。なんと転入生がいます。なので、少々面倒かもしれませんが、もう一度自己紹介をしたいと思います。みなさん異存はありませんね」

みなが同意する。

「では、転入生で幻想小説同好会の新入部員の、倉田恵美さんからお願いしていいかしら」

恵美が自己紹介をはじめた。もちろん、ミステリー好きを強調したものだ。ライ
トノベル研究会のほうから、「なんであんなかわいい子が幻想小説同好会に入るんだよ」
「渡辺真、なんかズルしたぞ」「渡辺は、きれいなお姉さんが3人いることからしてす
でにチートだ」などと怨嗟^{えんさ}の聲が聞こえてくる。

文芸部の自己紹介が始まった。3番手にはリン・ユートン。彼女が自己紹介する。

「文芸部のリン・ユートンです。3年3組です。小説が大好きです。いちばん好きなのは
ミステリーです。最近読んだ『アライグマ殺人事件』は、ちょっと残念でした」

ドキン、こうして恵美の心は射貫^{いぬ}かれたのだった。

文芸部の自己紹介が終わると、つぎはライトノベル研究会の番だ。不思議なことに、男子部員のほとんどが「ミステリーも好きです」「ミステリーも読みます」「おばあちゃんがミステリーを読めと、よく言っていました」などと付け加えた。それらが、恵美の耳を素通りしたことは言うまでもない。

ラノ研の男の子よ、負けるな。努力はいつか実る。必ず実るわけじゃないが……。

自己紹介が終わると、自由時間になった。

恵美はユートンに近づくと、何やら話し始めた。ミステリー談義のようだ。二人は滔々^{とうとう}と喋り続け、帰宅時間まで会話の種は尽きなかったという。

面白くない顔をしているのは真だ。

自転車に乗った私服の真が、家に帰って来た。

カゴにはエコバッグとレジ袋に入った買い物がたくさんだ。家に入ると、買ってきた物を冷蔵庫などにしまいはじめた。

璃々杏は働いているので、仕事が立て込んでいる時には、真に買い物を頼むのだ。真がレシートを貰ってきて小箱にいれて、あとで買い物の代金を璃々杏に払ってもらう仕組みになっている。

買い物の整理がだいたい終わると、真はレシートを2枚、小箱に入れた。レシートが2枚？ 買い物は一度のはずだ。どういうことだろう。

真が自室のベッドで本を読んでいるとき、ノックの音がした。真が「どうぞ」というと、璃々杏が入ってきた。

「真、ちょっといいかしら」

璃々杏はとても深刻な顔をしている。真が頷くと、璃々杏は学習機の椅子に座った。

「真、何か話すことはない？」

「えっ、ないよ」

「ほんとうに？」

「母さん、どうしたの？」

璃々杏は短いレシートを取りだした。

「このレシートなんだけど。これを買って何に使うつもりなの」

璃々杏は静かに問いかける。

「何って、ただの買い物だよ」

真の様子がおかしい。なんだかソワソワしているし、目も泳いでいる。

「ただの買い物。『くだものナイフ、1580円』これがただの買い物なの？ くだものナイフを買ってどうするの？」

怒りを抑えながら璃々杏が言った。

一瞬間を置いて、「見せて」と言いながら真が手を伸ばした。璃々杏はレシートを渡さない。

「答えなさい。くだものナイフをどうするつもりなの」

「それは……、スーパーのレシートを捨てるボックスから拾ったもので、ぼくの買い物じゃないよ」

「まこと、目を見て話なさい」

璃々杏は真剣そのものだ。

「その、ちょっとお金が必要だったから、余計にお金を貰おうと思ってレシートを拾ってきたんだ。誓^{ちか}って言うけど、それはぼくの買い物じゃないよ」

「……どうやら嘘はついてないようね。真、いちど嘘をはたらいたものは、簡単には信用してもらえないんだよ」

「ゴメン、母さん」

「お金ってねえ、毎月おこづかいをあげてるでしょう、5000円も」

「そうなんだけど。もうゲームを買っちゃって」

「もう。……それで、お金を何に使う予定だったの？」

「服を買おうかなって」

「服？ 洋服のこと？」

「あっ、うん」

つまりだ、恋に目覚めておしゃれな服を買おうとした真だが、ゲームソフトを買ってしまってもう余裕がない（バカな奴だ）。それで、他人のレシートを拾ってきて、余分にお金を貰おうと考えたのだ。そのレシートだが、『くだもの』まで読んで「よし、くだものだな」と勘違いして、うっかり『くだものナイフ』のレシートを拾ってきてしまったのだ。知ってしまえばどうということのない事件だったが、母親である璃々杏^{けねん}の懸念がもっともであることに間違いはないだろう。

親を騙そうとした罰として、真のお小遣いは当面のあいだ、月1000円減らされることとなった。と同時に、今後は他人のレシートを拾ってこないことを絶対条件として、お小遣い数ヵ月分を前借りする許可をもらった。

璃々杏は、減多に子供に罰を与えたりしないが、今回ばかりは特別だったようだ。彼女も人間だ、とても動揺していたのだ。

「真、今度何かあったら、ちゃんと相談するのよ」

「わかったよ」

だが真は、近々この約束を破ることになる。

「はあ、男の子の子育ては難しいわ」

璃々杏は部屋を出て行った。彼女は優しいので、「まだ、かれんのほうが育てやすかった」と思っている、それを口に出さなかった。

真はこの一件で、大いに反省させられた。あんなにも心配そうな母を見て、とりわけ信頼関係を壊してしまったことに、罪悪感を覚えずにはいられなかったのだ。

渡辺邸の庭で、補助ロープのついていない魔法の箒に恵美は跨がった。きょうは、補助ロープなしでの初飛行の日なのだ。

今までは、璃々杏の箒の後ろか前に乗るか、箒同士を補助ロープで繋げての安全飛行だったが、きのう璃々杏から「あす、補助ロープなしの飛行を試してみるよ」と言われて、恵美はドッキンドキンド。

補助ロープなしといっても、璃々杏との併走が条件なので、これは単独飛行ではない。璃々杏が自分の箒にまたがり、その横で恵美も練習用の箒にまたがっている。ちなみ

に、真とうららは空中で待機している。邪魔に思っていた補助ロープも、なくなってみると恵美は寂しく感じられた。

「恵美ちゃん、行くよ」

璃々杏の箒は上昇した。恵美が遅れて懸命についていく。上昇し、まっすぐ飛び、カーブし、恵美はうららに近づいた。うららは、直径30センチくらいの輪を持って差し込んでいる。

「受け取って」

併走する璃々杏が命ずる。恵美はうららの輪を受けとった。

「いいよ、その調子だよ」

また直進、カーブし、真が見えて来た。真は輪を差し出す。

「受け取って。リラックスしてね」

また璃々杏が命ずる。だが、それは無理な相談だった。なぜなら真が、ひらひらしたアイドルのような服を着ているからだ。

(集中、集中。ひらひらは無視、ひらひらは無視)

恵美は輪を落としそうになったものの、なんとかキャッチした。

恵美の箒はまだ不安定で、思うように飛んでくれない。まっすぐ飛ばないし、きれいに曲がってくれないし、上昇下降も不器用だ。それもこれも、魔女見習いならあたりまえの風景なのだが、ことはグースベリー、そう一筋縄ではいかない。

うららと真の輪を3度ずつキャッチすると、初の補助ロープなしの飛行は無事終わり、恵美は渡辺邸の裏庭に降りた。

彼女は、試練をひとつ乗り越えた。

「わたし、どうですか」

「どうって？」

「ウィッターで知ったんですけど、グースベリーは飛行が得意ではないと聞きました」

「それなら心配いらないわ。恵美ちゃんは、びっくりするくらい上達してるわ。飛行はまだ安定してないけど、それも時間の問題だと思うわよ」

「よかった」

恵美はとても安心した様子だ。

「でも、真さんの服、いつもあんなものなんですか？」

「私も心配してるのよ。真ってファッションセンス、無かったのね」

そう言って、璃々杏はため息をついた。

うららと真も降りてきた。

「倉田さん。初の補助ロープなしでの飛行、おめでとう」

ひらひらした服をまとった真が言った。恵美は笑顔で礼を述べたが、顔が引きつっていた。

夜、恵美が自室のベッドの上でスマホをいじっている。

スマホの画面には、『ウィッター』が表示されている。恵美は文字を打ち始めた。

『グースベリーです。きょう、初の補助ロープなしの飛行をしました』

と書き込むと、『えっ、もう補助ロープなし？ 早くない？』『リリアンはどういう教育をしてるの？』などとリプライが続く。

惠美は、ちょっと面食らっている。

惠美と璃々杏が魔法の箒にまたがって、併走して飛んでいる。

きょうは、惠美の箒と璃々杏の箒は、2本の補助ロープで繋がっている。補助ロープでの飛行なので、うららと真はいない。

「いい腕だ、頑張っているね。惠美ちゃん、そろそろ休もうか？」

璃々杏が気を遣った。

「いえ、まだ大丈夫です。だんだんコツが掴めてきました」

惠美は必死な様子だ。手にほんのり汗をかいている。

渡辺邸の庭に、魔法の箒に乗った璃々杏と惠美が降りてくる。

璃々杏は難なく着地するが、惠美はぎこちなく降りた。惠美は少し息を切らしている。

「惠美ちゃん。きょうはここまでだよ」

「えっ、もう終わりですか。お仕事ですか」

箒から降りながら惠美が言った。彼女はまだ魔法の訓練がしたいようだ。補助ロープを外してから箒を璃々杏に返した。

「今週の土曜は空いているね？」

意味ありげに璃々杏が訊いた。

「はい、空けてあります。何かあるんですか」

「東京でサバトだよ」

璃々杏はそう言うと、笑みを見せた。

「サバトって、魔女の集会のことですよ」

「その通りだよ」

「やったー！」

惠美はその場で2度ジャンプした。

「ところで惠美ちゃんは、魔女っぽい服は持っているかい？」

「魔女っぽい服ですか。う～ん、学生服が一番近いかなあ」

「ここ数年、サバトでは魔女っぽい服を着るのがモードになっていてね」

「そうなんですか」

惠美は少々困った顔をしている。

璃々杏の寝室で、彼女は黒のワンピースを3着、ベッドの上に広げた。それを眺める惠美。

「どれがいい」

璃々杏が聞く。

「これはかわいい。これも捨てがたい。でも、これはほんとうに素晴らしい。服自体がまるで魔法のようです」

惠美は、白襟しろえりに白カフスのついた黒いワンピースを指さした。クラシカルだが不思議といまでもおしゃれに見える服だ。状態もよく、虫食いもないようだ。

「それにするかい」

「はい、これをお借りします」

「それは、三女のかれんがときどき着ていた服だよ」

「娘さんの服ですか。どうして残っているんですか」

「それはね」

璃々杏に見つめられて息を呑む惠美。

「もともと私の服だったからだよ。ちなみに、これが長女のみらいがよく着ていた服、これが次女のアズカがよく着ていた服だよ」

指を差しながら璃々杏が言う。

ワンピースを手にとると、仕上がりの丁寧さと保存状態の良さに、惠美は感動を覚えていた。

渡辺邸のキッチンで、真がコーヒー牛乳を飲んでいる。

そこへ、^{くだん}件のワンピースを着た笑顔の惠美が現れた。真と鉢合わせだ。

「あっ、真さん。お邪魔してます」

「倉田さん、いらっしゃい。あれ、その服はたしか、かれん姉さんのじゃ……」

よほど惠美が美しく見えたのだろう、真はぼかんとしている。

「似合いますか。この服でサバトに行くんです」

惠美は、身体をひねって服を観察した。

「よく似合ってるよ。……えっ、サバト？　もうそんな季節？」

驚いた真は声が大きくなった。

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ。なんでもないですよー」

あきらかに真は焦っているようだ。

空中を、璃々杏、惠美、真が魔法の箒に乗って併走して飛んでいる。

惠美が中央で、左が璃々杏、右が真である。璃々杏と真の箒からは補助ロープが出ていて、惠美の箒に繋がっている。合計4本の補助ロープだ。惠美の飛行はまだ不安定なので、補助ロープなしの長距離飛行の許可は下りていないのだ。

惠美は借りた黒のワンピースを着ており、璃々杏はお気に入りの黒のワンピースを着ており、真はダークブラウンの魔法使いらしい古風なスーツを着ている。

この古風なスーツは、魔法使いもどきの正装で、世界に五着しかないものだ。代々魔法使いもどきにレンタルされており、今はその一着を真が持っているのだ。

真の服を見て、惠美は少々、というかかなり安心してた。東京まで補助ロープで繋がって行くと聞いていたが、あのひらひらした服を着てきたらどうしようと、内心案じていたからだ。

補助ロープで惠美を^{かば}庇ってゆっくり飛んでいるせいだろう、途中なんか魔女に追い抜かれた。若い魔女、青年の魔女、年老いた魔女、みな色とりどりのおしゃれな服を着ていた。

ゆっくり飛んでいるお陰か、惠美は面白いことを発見していた。街ごとに匂いが違うのだ。住宅街の生活感のある雑多な匂い、都市部の無機質な匂い、工場地帯の鼻の曲がる匂い、森林の心安らぐ匂い、そして海の夏を想起させる匂い。

(ステキ、街って生きてるんだわ)

恵美は、日常が織りなすハーモニーに感動していた。

朝早く近畿地方を出発したお陰か、10時前には東京に着いた。

東京のとある大きなホテルの中庭に、璃々杏と恵美と真の3人が、空中から降りてきた。

璃々杏たちが補助ロープを外していると、続いて、近くに母親と幼い娘が降りてきた。この母親と娘の魔法の箒も、補助ロープで繋がっている。娘の箒のほうには、子供が乗る二重の赤リングが入っていたので、10歳以下であることは確実だ。

娘が、恵美を見ながら言った。

「ママ、あのひととおおきいのに、ほじょロープをつけてとんでいたよ」

「ひとそれぞれ事情があるんですよ」と母親は言った。恵美を見ると「すみません。悪く思わないでね」と謝った。

「あっ、はい。気にしてません」

恵美の顔は真っ赤だ。

「ナオミ、久しぶりね」

璃々杏は母親に話しかけた。

「璃々杏も変わらないわね。この子は私の子供で、名前はさやか、今年から魔女見習いよ」

「こんにちは、さやかちゃん。わたしは渡辺璃々杏、魔女よ」

「こんにちは、りりあんさん」

「この方は、東洋の賢き相談者と呼ばれている、とても立派な魔女なのよ」

とナオミが教えた。

「ふ～ん。えらいんだ」

「こんにちは、さやかちゃん。わたしは倉田恵美、17歳よ。あなたと同じ魔女見習いよ」

「こんにちは。みならい？」

さやかはびっくりした。

「こんにちは、さやかちゃん。ぼくは渡辺真だよ」

「ママ、おとこのひとみみたいなまじょがいるよ」

さやかは少し緊張している。

「このひとは魔法使いもどきさんですよ」

「なんだ、もどきか」

さやかは退屈そうに言った。緊張は解けたようだ。

「さやか、言葉には気をつけなさい。言葉は最後には、自分に跳ね返ってくるものですよ。わかりましたか」

「は～い」

「さやか、こういう時は何て言うんだっけ？」

「ごめんなさい」

「よく出来ました」ナオミは璃々杏たちを見た。「では、みなさん、先に行きますから」

「じゃあねえ、とうようのそうだんしゃさん、ほじょロープのまじょみならいさん、それからまほうつかいもどきさん」

さやかが元気に言う。ナオミとさやかは先にホテルに入って行った。

「嫌な予感がしてきたわ」

惠美が言う。

「ぼくもだよ」

と真。

「その悪い予感は、たぶん当たるだろうよ」

璃々杏はいたって冷静だ。

東京のとあるホテルの大ホールで、魔女たちのパーティーが行われている。

参加している魔女は、総勢 40 名ほどだ。子供の魔女見習いもいる。男のガードマンもいるが、たいていは訳知りだ。魔女たちはみな、着飾ったワンピースやスーツなどを着ており、学生服は見当たらない。魔女たちはしきりに情報交換に勤しんでいる。

これが現代の魔女の集会、サバトなのだ。

璃々杏たちは二手に分かれた。璃々杏が単独行動、真と惠美がペアで行動だ。

璃々杏は東京の魔女と話をしている。

「言いづらいんだけど」

璃々杏が切り出した。

「グースベリーでしょ、分かっている。でもさ、東京にいったい何人の人間がいると思ってるのさ。たとえあんたでも見落としは起きたはずさ」

東京の魔女は釈明した。

「べつに責めてるわけじゃないよ」

「分かっている。そうだろうよ」

一方、サバトの会場で、真と惠美がブラついている。真はいろんな魔女から声をかけられている。彼は魔女の界限では有名人なのだ。

「真さん」

惠美が立ち止まって、真の服の袖を引っ張った。真も立ち止まった。

「どうしたの？」

「気のせいが見間違いだと思うんですけど、前方に俳優の池澤カカナさんがいます。どうしてでしょう？」

「どうしてって、そりゃ——」

その池澤カカナのほうから近づいてきた。

「あら、渡辺真くん、1年ぶりね。元気にしてた？」

「池澤さん、お久しぶりです」

カカナは惠美を見た。

「あなたが噂のグースベリーさんかしら？」

「はい、そうです。あの、俳優の池澤カカナさんですか？」

「そうよ。はじめまして、俳優の池澤カカナです。本業は魔女のつもりなんですけど、俳優業が忙しくて昇級試験が受けられなくて、まだ下級魔女のままってわけ」

カカナはいつも元気だ。倉田惠美も自己紹介した。

「はじめましてって言ったけど、本当はもう遭遇してるのよね。ウィッターでね」

「えっ、それじゃあ『@kakana』って、池澤さんですか？」

恵美はたいへん驚いたようだ。そりゃあ、気軽に雑談していた相手が有名な俳優だと知れば、誰だってびっくりするだろう。

「そうよ」

そこへ、池澤カカナのケータイの着信音だ。

「ちょっと失礼」

カカナはメールを確認する。

「あんだと、今から仕事？ どうしても追加撮影が必要？ ふざけんじゃねーよ！
何のためにきのう遅くまで撮影したと思ってんだよ！ クソ監督が」

テレビでは絶対に見られない俳優の悪態という風景に、恵美は出会った。

「災難ですね」

真がなだめた。

「はあ、今年も演劇が見られないわ。楽しみにしてたのに、とても残念だわ。じゃあね、真くん、グースベリーさん。あっ、グースベリーって呼び方が嫌だったら言ってね。もう使わないから」

カカナは慌てて去っていった。

「ダイナミックな俳優さんですね」

「ぼくもそう思うよ」

「わたし、俳優さんやタレントさんを生で見たのは初めてじゃないんです。でもまさか、サバトで知り合いになるとは」

「人間の縁ってわからないもんだね」

そこへ、また別の若い魔女から声がかかった。「ちょっと、そこの見ない顔さん。魔法使いもどきくんと一緒にいる見ない顔さん」

声をかけた彼女の名は、西川^{うさきみ}宇佐美。メガネをかけて、ちょっとオタク的な雰囲気を出している魔女だ。

「はい、なんでしょうか」

恵美が返答した。

「ここに来てるってことは、あなた魔女だよね。あたしは西川宇佐美、トロント魔術派だよ。できれば、署名にサインしてくれないかなあ」

「なんの署名でしょうか」

「なにして、トロント魔術派の署名ったら決まってるじゃん」

「西川さん、この女性はグースベリーですよ。名前は倉田恵美さん」

「なんだそうか。どうりで見ない顔なわけだ。真くん、久しぶりだねえ。……それにしても大きな魔女見習いさんだ。倉田さんはいくつだい」

「17です」

「じゃあ高2？」

「高3です。来年は受験です」

「魔女修行と受験が同時に来たのか。それはえらい大変だなあ。はい、これ」

宇佐美は、トロント魔術派の小冊子を取り出して恵美に渡した。

「よく読んでね。トロント魔術派っていうのは、簡単に言うと、男の魔法使いも認めよう

よってという派閥なんだ。どういうわけか、あんまり人は寄ってこないんだけどね。でもさ、女性が魔法を独占してるのは、どう考えてもズルいだろう？」

「はぁ、なるほど」

「男性の魔法使いについてはどう思う？」

「場合によっては認めてもいいんじゃないかって思います」

恵美ははっきりと答えた。

「よしよし。なかなか物わかりがいいグースベリーじゃないか。これは将来有望ね。じゃあ、それよく読んでね。倉田さん、真くん、じゃあまた今度ね」

宇佐美が去った。

きょんとしている恵美に、真が説明を始める。

「トロント魔術派は、百年以上前にカナダのトロントに住む魔女が、『男の魔法使いがいてもいいじゃない。男の魔法使いも認めようよ』って言い出したのが始まりでね。一説によると、その魔女の息子が魔法使いだったらしいよ。自称進歩的な派閥なんだけど、あんまり味方は多くないね。まァ、倉田さんがトロント魔術派になるかどうかは、ぼくは興味ないし、母さんも干渉しないと思うよ。よく考えて自分で決めてね」

「はい、わかりました」

後方からまた別の女性の声がする。

「おやおや、これは偉大なる魔法使いもどきさまではないですか。お目にかかれて光榮至極に存じます」

と麗しい声の女性が嫌みっらしく言った。

「かれん」

真は振り向いた。そこに、とんでもない美女が立っていた。彼女は、真の姉のかれんだ。

魔女の界限では、璃々杏の知性と誠実さを引き継いだのが長女のみらいで、乙女心と優しさを引き継いだのが次女のあすかで、美貌と無謀さを引き継いだのが三女のかれんだと言われている。

さらに言えば、魔女が三人女の子を生んで、全員魔女だというのはたいへんな珍事なのだ。宝くじの一等に当たるレベルの奇跡と言っている。またさらに付け加えれば、たった一人の息子が魔法使いもどきとわかった時には、ちょっとした騒ぎになったそうだ。魔法使いもどきの評価は、国や地方によって様々だが、日本では「幸運の兆し」と言われているのだ。

その魔法使いもどきの真は、前にも述べたように魔女の界限では有名人だが、されど、とくに強い関心を持たれている訳ではなかった。あと数年でただの人になる男性に惹かれる魔女は、そう多くなかったのだ。もっとも、母親を真に取られたと思っているかれんの弟いびりは、長いこと続いたそうだが。長女みらいと次女あすかは、真とは歳が離れていたのだから、トラブルはとくになかったようだ。

「その子は？」

かれんが質問した。

「母さんの新しい弟子だよ。魔女見習いの倉田恵美さん、同級生。倉田さん、こっちは姉のかれん」

「倉田恵美、17歳です。魔女見習いです。よろしくお願ひします」

惠美は、かれんの妖艶ようえんさに圧倒されているようだ。私の妹は、見た目だけなら100点満点だからね。

「こちらこそよろしくね。わたしは渡辺かれんだよ。20歳だよ。それにしても大きな魔女見習いさんだ」

「あの、璃々杏先生のご息女ですよ」

「そうさ。三女のかれんだよ。……勘違いでなければ、倉田さんが着ている服は、わたしの服だよ」

「すみません、お借りしています」

「今は母さんの所有物で、さらに言えば、倉田さんは借りてるだけだよ」

真まが庇かばった。

「ふ〜ん、そうかい。ところで倉田さん、真は昔、家出箒を出したことがあってね」

「えっ、璃々杏さんが気に病んでいる家出箒、あれの犯人は真さんだったんですか」

惠美は真を見た。

「姉さん、家出箒を出したのはあんただろう」

「ちえっ、そうだっけ？」

「まったくバカ姉貴なんだから」

「あら、バカって言うほうがバカなのよ」

悠然と指摘するのはかれんだ。

かれんが12歳のころ、「私は眠りながら空を飛べる」と言い張って、箒に乗って空を飛びながら一晩寝ていたことがある。もちろん、朝起きたらかれんは森の中において、箒は消えていた。これが、かれんの家出箒の顛末だ。

「それから倉田さん、気をつけてね。そこにいる私の弟は、青と白のストライプの水着とポニーテールが大好きでねえ。そういう格好をしたら、120パーセント、ストーカー被害に遭うわよ。ああ、わが弟ながらなんて恐ろしい！」

「かれん、変なことを吹き込むなよ」

真は落ち着いて対応した。

この姉弟は放って置こう……と惠美は思った。

会場のスピーカーから、『ピンポンパンポン』とコールサインが鳴り、女性の声が聞こえてくる。

『30分後に演劇を始めます。関係者の皆さんは集まってください』

「おっと、かれん。倉田さんをよろしく」

と言って、真が舞台のほうに走って行く。

「真さんは演劇と何か関係があるんでしょうか」

「あいつは主役だからね」

「えっ?!」

またスピーカーから声がする。

『新米の魔女見習いちゃんたちは、壇上に集まってください』

終わりのコールサインが鳴る。

「おっと、あなたも主役だったね」

とかれん。

ホテルの大ホールの壇上に、5人の新米の魔女見習いが立っている。4人は小さい女の子で6～8歳、倉田恵美は17歳。恵美はいささか悪目立ちしている。

司会の魔女がマイクを持って話し始めた。

『それじゃあ、新米の魔女見習いちゃんみんな、自己紹介をしてね』

「ことし、まじょみならいになった、ほんじょうさやかです。7さいです。よろしくおねがいします」

と言って、さやかは頭を下げた。会場から盛大な拍手。

子供たちがつぎつぎと自己紹介していく。盛大な拍手。

5番目に倉田恵美。完全にテンパっている。

「今年、魔女見習いになった倉田恵美です。17歳です。よろしくお願ひします」

恵美は頭を下げた。

会場から微妙な拍手。「グースベリーだわ」「グースベリーね」という声が聞こえる。

司会の魔女がまた話す。

『今年は規格外の新人がいるね。いいよいいよ。じゃあ、新米の魔女見習いちゃんたちは、特等席に移動してね。これから演劇が始まるよ。おトイレはいいかな？』

新米の魔女見習い5人が特等席に移動する。舞台の最前列の席だ。その後ろは保護者の席で、恵美の後ろには璃々杏が座っている。

新米の魔女見習いたちに、おもちゃの杖が配られた。

壇上のカーテンが閉じる。

舞台には司会の魔女がひとり立っている。

『準備はできたかな。じゃあ、お楽しみの演劇を始めるよ。劇のタイトルは、『龍の時代』。スタート！』

司会の魔女は舞台の上手に消えた。

舞台の下手に朗読の魔女が現れて話し始めた。

『これは、魔女たちの物語、スカートの眷属の物語です。……むかしむかしのそのまたむかし。今から3600年も前のことです。その頃は、魔女や男性の魔法使いたちが、世界を平和に治めていました。しかし、一夜にして世界は変わってしまったのです』

舞台のカーテンが開いて、古代ギリシャのセットが現れる。石の神殿のセットや、作り物のヤシの木が見える。

そこへ、付けひげをして大きな杖を持った真が現れる。服は変わっていない。

「俺の名前はゲディパルク・イーケンス。世界で最も偉大な魔法使いだ。こんなゆるい世の中などいらぬ、壊してしまえ。こんな貧しい街などいらぬ、壊してしまえ」

真が攻撃魔法を放つフリをすると、神殿のセットが壊れ、ヤシの木が倒れる。もちろん、演技用の杖なので魔法は使っていない。

『大変です。悪い魔法使い、イーケンスが現れました。……悪い魔法使いは大暴れ。魔女も、男性の魔法使いも、人間たちも、みんな困り果ててしまいました』

舞台に、古代の魔法使いが2人、古代の魔女が2人現れて相談している。もちろん、それらの扮装をしているだけで、出演者は（真以外）みな魔女たちだ。

『魔女たちと男の魔法使いたちは、相談したすえ、一緒にイーケンスを倒すことに決め

ました』

「イーケンスよ、正義の裁きを受けよ。攻撃魔法」と言って、男の魔法使いが攻撃魔法を放つフリをする。「攻撃魔法」と壇上のほかの魔法使いも攻撃魔法のフリだ。

「はっはっはっ、効かぬわ。返り討ちだ、攻撃魔法！」

真は演技用の杖で、攻撃魔法のフリをする。

壇上の魔法使いたちが、「うわぁ〜」と悲鳴を上げて次々に倒れる。特等席の子供たちは啞然茫然だ。17歳の恵美はさすがにしっかりしている。

『イーケンスが強すぎて倒せません。その強さは、まるで伝説のドラゴンのように』

朗読の魔女の悲痛な声が響く。

たまたま、新米魔女見習いのひとりが泣き出した。

「大丈夫だよ、大丈夫。お姉ちゃんがついてるよ」

恵美が慌ててあやした。

『魔女と男性の魔法使いが、また相談しました』

舞台上に、今度は3人の魔法使いが現れる。1人は古代の男の魔法使いで、2人は古代の魔女だ。

「倒せないなら、眠らせよう。長い長いあいだ、眠ってもらおう。睡眠魔法」と古代の男の魔法使いが言うと、「そうしよう、睡眠魔法」「睡眠魔法」とほかの魔女たちも言った。

『さあ、新米の魔女見習いちゃんたちも手伝って』

と朗読の魔女が言うと、特等席にいる子供たちはおもちゃの杖を構えた。もちろん恵美も。

新米の魔女見習いたちが「すいみんまほう」と言う。さやかが「おねえちゃんも」と言って恵美を突っついた。

「す、睡眠魔法」

恵美は真っ赤だ。

「うわぁ、眠くなったぞ。なんだかとっても眠い」

真はゆっくり床に倒れる。倒れたまま移動し、舞台から消える。

『こうして、悪い魔法使いイーケンスは、長い長い眠りについたのです。……これで終わりではありません。というのも、男性の魔法使いは魔法を悪いことに使いがちです。話し合ったすえ、あらたに男性の魔法使いが生まれると、魔力を奪うことに決めました』

古代の男の魔法使い（に扮した魔女）が舞台に現れる。

「ふむふむ。確かに男の魔法使いは悪いことをしがちじゃな。仕方がない。今後生まれる男の魔法使いから、魔力を奪うことを許可しよう」

古代の男の魔法使いがそう言って、舞台からはけた。

『こうして、3000年前から男性の魔法使いはいなくなりました。ですが、まだ安心はできません。悪い魔女もいるのです』

中年の魔女が舞台に現れる。

「わたしは悪い魔女だ。他人のものを盗むのに、魔法は便利だぞ」

中年の魔女が、魔法で野菜を盗んでいる。本物の魔法の杖を使っているの、野菜が空中に浮いている。

『たいへんです。悪い魔女が現れました』

舞台に2人の魔女が現れる。

「悪い魔女め、こうしてくれるぞ。魔法取り消し」とひとりの魔女が言う。「魔法取り消し」とほかの魔女も言う。

『新米の魔女見習いちゃんたちも手伝って!』

新米の魔女見習いたちは杖を、中年の魔女に向けて「まほうとりけし」「まほうとりけし」と言い合い、恵美も真っ赤っ赤になりながら「魔法取り消し」と言う。

野菜が床に落ちる。

「うわぁ～、魔法が使えなくなった。うぇ～ん、魔法で悪いことをしたから、魔法が使えなくなってしまったよ～。悲しいよ～」

中年の魔女が舞台から去る。

『ヨーロッパでは魔女狩りもありましたが、それでも世界は、まぁまぁ平和になりました。だけどみんな、何か忘れてないかな?』

朗読の魔女が、新米の魔女見習いたちに問いかける。

新米の魔女見習いたちが「……イーケンス?」と小声で言う。

『そうです。イーケンスは眠っているだけで、まだ生きているのです。来たるべきイーケンスとの戦いに備えて、今も世界の魔女たちは、攻撃魔法に磨きをかけているのです』

舞台に4人の魔女が現れて、「イーケンスは魔女の敵! イーケンスは人間の敵! 今度こそイーケンスをやっつけるぞ!」と叫んだ。

『新米の魔女見習いちゃんたちも一緒に!』

「イーケンスは魔女の敵! イーケンスは人間の敵!」

「イーケンスはまじょのてき! イーケンスはにんげんのてき!」

「イーケンスは魔女の敵! イーケンスは人間の敵!」

「イーケンスはまじょのてき! イーケンスはにんげんのてき!」

「今度こそイーケンスをやっつけるぞ!」

「こんどこそイーケンスをやっつけるぞ!」

「今度こそイーケンスをやっつけるぞ!」

「こんどこそイーケンスをやっつけるぞ!」

『演劇、『龍の時代』でした。みなさん拍手をお願いします!』

会場から拍手、新米の魔女見習いたちも拍手。

舞台に出演した魔女と真が出てきて一列に並び、頭を下げる。

会場からまた拍手。

新米の魔女見習いのひとりが、本物の魔法の杖を出して、真に攻撃魔法を使う。

「イーケンス、くらえ、エルパーデルダ」

それが真に当たる。エルパーデルダは子供でも^{はな}放てる弱い攻撃魔法だが、受けたほうはたまったもんじゃない。

「いて!」

「ダメダメ。本当の魔法はダメだよ」

慌てて恵美が止める。

魔法を使った魔女見習いの母親が「これはお芝居ですよ。あの人は渡辺真さんで、イーケンスになりきっていただけです。分かりましたか?」と言いながら、娘の杖を取り上

げた。

「わかりました」

「ごめんなさいは」

「おにいちゃん、ごめんなさい」

「いいんだよ」

だが、真は苦々しい笑顔を浮かべている。統計的に、イーケンス役は2年に一度は攻撃魔法の餌食になるのだ。

楽屋裏では、演技をした魔女たちが、みな安堵の表情を浮かべていた。「今年はミスが無かったね」「規格外の新人がいたね」「あのグースベリー、どうなることやらだ」などと話しあっている。

朗読の魔女が真に近づいてきて、缶コーヒーを差し出した。

「はいこれ、お疲れ様。真くん来年も来てね」

「ありがとう。もう、サバトは卒業させてもらえませんかね」

真は缶コーヒーを受け取った。

「やっぱりサバトは嫌い？」

「魔女はおっかないですから」

「それは、まあわかるけどね。真くんのサバト嫌いは今年も治らず、か。残念」

そう言って朗読の魔女は立ち去った。

真は缶コーヒーを飲んだ。

20分後、ホテルの大ホールの中に、テントが出来ている。

新米の魔女見習いと保護者がテントの前に列を作っていて、恵美と璃々杏は最後尾にいる。これは占いの魔女のテントで、新米の魔女見習いはここで将来を占ってもらうのが伝統だ。

恵美の前の新米見習い魔女が、ニコニコ顔でテントの中に入っていった。数分後、「うわ〜ん、タカシくとケッコンできない〜！」と泣きながら出てきた。母親が後から出てきて子供をなだめている。

テントの中から声がする。

「つぎ、どうぞ」

恵美と璃々杏がテントの中に入る。

中は狭いが、恵美は意外と広く感じた。占いの魔女に促されて恵美は椅子に座った。水晶の置いてある小さなテーブルを挟んで、占いの魔女と恵美が対座している。璃々杏は、恵美の後ろに立って見守っている。

占いの魔女は50歳以上に見えたが、ほんとうのところはわからない。璃々杏に訊けば教えてもらえるかもしれないが、それは賢明ではないだろう。

「ほうほう、これは大きな魔女見習いさんだ」

占いの魔女は面白そうな笑顔を浮かべた。

(その言葉、きょうで何度目だろう?)

そう思った恵美だが、それを口にすべきか悩んでいる。

「では、さっそく占ってあげよう」

占いの魔女は水晶を見た。

「おや、何も見えない」

「えっ！」

驚き焦る惠美。

「安心おし。何も見えないというのは、取り立てて悪い前兆という訳じゃないよ」

占いの魔女が落ち着かせた。

「はぁ、びっくりした」

惠美は胸をなで下ろした。

占いの魔女は、惠美の後方の璃々杏を見た。

「璃々杏、この子に占いについて教えてないのかい」

「占いは後回しにしています。占いは30歳からでも^{えとく}会得できるので」

「なるほど」

占いの魔女は納得したようだ。しばらく置いて、惠美の目を見て話し始めた。

「何も見えないということは、あんたの未来がまるで決まっていな、ということなのさ。これから先、そう遠くない未来に、ある事件に出くわすはずだ。その事件に関わるか関わらないかで、あんたの未来は大きく変わってくるだろうよ」

「どんな事件なんですか」

惠美の質問はもっともだ。

「それは判らないよ」

「その事件に関わったほうがいいんでしょうか」

「その質問に対する正しい答えはないよ。事件に関わるかやめておくかは、その時に自分で決めるんだ。そうしないと後悔するだろうからね。……さあ、わたしに言えるのはこれだけだよ」

「ありがとうございました」

惠美は考え込んでいる。

 恥ずかしい思いもしたが、きょうという日は、惠美にとって素敵な日になりつつあった。素敵な日につきものといえば、そう、デザートだ。

 占いのテントを出ると、サプライズがあった。3人の若い魔女が待ち構えていたのだ。彼女たちは、18歳がひとり、17歳がふたりで、つまりは惠美と同学年の魔女たちなのだ。

 3人の若い魔女たちは、それぞれ自己紹介した。3人とももう見習いではなく下級魔女だったことは、惠美をへこませるには充分だったが、出会いの喜びはそれ以上の感情を呼び起こした。

 自己紹介が済むと、惠美は質問をした。

「みなさんのウィッターのアカウントは？」

「いやいや、3人ともマジョッターは使っていないよ。だって、私たち受験生だもん。みんな、高3に進級した時にマジョッターをいったん^ひ止めて、大学に受かったらまた再開するのよ。あっ、マジョッターってのはウィッターのことね」

「あっ、なるほど」

「お婆さんはデジタルに^{うと}疎くてねえ」

珍しく璃々杏が言い訳をした。

「倉田さん、これからどうするの」

3人のうちのひとりが質問した。

「えっと。あとは、買い物と食事だけです」

「何を買う予定なの？」

「ワンピースをオーダーメイド、杖と箒を買って、食後に帰宅の予定です」

「よっしゃ、ついてったる」

こうして、恵美と、同学年の魔女3人と、璃々杏の合計5人が買い物に向かった。買い物といっても、デパートじゃないよ。ホテルの大ホール内に、いくつかの^{でみせ}出店ができてるんだ。これは、日本では毎年のことだ。

はじめは、ワンピースのオーダーメイドだ。服屋まで来ると、恵美はまず採寸された。そして、見本の中から、これだと思ふデザインを選んで色を決めた。シンプルなワンピースで色は^{のうこん}濃紺だ。

「さてさて、魔女見習いさんはみなさん、ワンピースに^{ししゅう}刺繡を入れるのが習わしになっていますが、どうなさいますか」

と服屋は言った。

同学年の魔女たちは、

「刺繡は子供のすることだよ」

「止めときなよ」

「まあ、好きにしたらいいんじゃないね？」

と言った。

「それじゃ、^{のいぼら}野薔薇の刺繡をお願いします」

恵美ははっきりした口調でいった。

同学年の魔女たちは、スマホで画像検索して、

「野薔薇って普通の花じゃん。薔薇じゃないじゃん」

「トゲのある普通の花だよ」

「まあ、好きにしたらいいんじゃないね？」

と言った。

次に恵美は、杖屋でおすすめの魔法の杖を買い、その次は魔法の箒屋だ。

「そうだねえ。大人用の箒で、魔女見習いでも使える箒っていったら、4本もないねえ」

と箒屋は言って、3本の^{ちんれつ}箒を陳列した。

「これがAG1296、これがUK2007、3本目は名前があるよ。『ラビットハート』だよ」

恵美は、AG1296を手に取り、しばらくして戻した。UK2007を手に取り、しばらくして戻した。次に、ラビットハートを手にとると、心地いい風が舞った。

「これにします」

^{こうこつ}恍惚の表情を浮かべた恵美が言った。

同学年の魔女たちが、

「それはダメ。10年間買い手がつかなかった箒だよ。とんでもないじゃじゃ馬だよ」

『ラビットハート』だよ。寂しくて死んじゃうよ」

「止めたいのは山々だけど、好きにしたらいいんじゃない？」

と真剣な語調ごちようで言った。

「いえ、これにします」

恵美の決心は変わらなかった。ちなみに、ウサギが寂しいと死んでしまうというのは迷信らしい。

こうして恵美は、合計100万円近くの買い物をした。だが、安心して欲しい。利息無しのローン払いだし、いらなくなったら高く買い取ってもらえるので、そこも心配いらない。そもそも、魔法の道具は50年は持つように作られているので、100万円といってもそれほど高い買い物ではないのだ。

恵美は、同学年の魔法たち3人と昼食のバイキングを済ませると（それは騒がしいものであったらしい）、午後2時過ぎ、帰路についた。

夕方の空中、璃々杏と恵美と真が並んで飛んでいる。もちろん補助ロープ付きだ。

恵美は自分用の箒、ラビットハートを背負っている。杖はラビットハートに括り付けてある。ワンピースはオーダーメイドなので、完成後に発送される予定だ。

「なんだろう、今日一日で一生分の恥をかいた気がするわ」

恵美が笑顔で漏らした。

「ぼくなんか5年連続でイーケンス役だよ。たまったもんじゃないよ」

「似合っていましたよ」

恵美がお世辞せじを言った。

璃々杏が、真に目覚まし魔法を当てる。

「いて。……倉田さん、きょうは大変だったみたいだね。どうかしたの」

「ほかの新米魔法見習いちゃんたちがみんなキラキラしていて、なんだかわたし、おばさんになったみたいな気がするんです」

「本物のおばさんから忠告するよ。歳を取るの早いよ。気がついたらおばあちゃんだよ」

「ところで、事件ってなんだろう」

恵美は考え込んだ。

「それは誰にもわからないよ」

「事件ってなんのこと？ 何かあったの？」

「真さん、それがですね。占いの魔法さんによると、わたし近い将来に……」

恵美はしゃべり出すとなかなか止まらなかった。この時、彼女の乗った箒はとても飛行が安定していた。

恵美は、自室でラビットハートを相手にダンスをしている。いまは夜だし、満月だし、まるで映画のワンシーンのようだ。モーツァルトが掛かっていたらパーフェクトな状況だったが、実際に流れているのは、ラジオのクラシックロックだった。

恵美が、ラビットハートの説明書を取り出してよく読む。

「なにに、『この魔法の箒は、分解して運ぶことができます。分解の仕方は……』って、この箒、分解できるんかい！」

彼女は思わず笑ってしまった。

説明書を読みながら、ラビットハートを慎重に分解する。

「おお、凄いじゃん」

恵美はキラキラと輝く瞳で、自分の箒をまじまじと見つめた。

夕方の幻想小説同好会の部室で、真が椅子に座って本を読んでいると、ガラガラと音を立てて扉が開いて、恵美が入って来た。

「倉田さん、遅かったね」

「真さん。わたし文芸部に入りました」

「えっ、ええっ……」

真はとても落胆した。たしかに、これは効くだろう。せっかく入ってくれた部員が、もう寝返ってしまったのだ。

「幻想小説同好会と掛け持ちです。なんでも、この学校は兼部けんぶができるという話なので」

「はぁ、よかった。心臓が止まるかと思ったよ」

真の落ち込んだメンタルが、少し持ち直したようだ。

「それで、幻想小説同好会には火曜か水曜に顔を出そうと思うんですが」

「うん、好きなほうでいいよ」

「じゃあ、ここには水曜に顔を出しますね。それじゃ、きょうは文芸部に行きます」

「行ってらっしゃい」

恵美はここでちょっと考えた。

「あの、真さんも行きませんか、文芸部」

「あいつらとは話が合わなくてね。だって、本格ファンタジー小説は、ハリー・ポッターくらいしか読まないって連中だもの」

「そう言わないで、行きましょうよ、文芸部」

「月一の合同活動で充分だよ」

「そうですか。それじゃあ、ここには水曜に来ますね」

「うん」

「あの、『みかんと不思議な魔法』とっても面白かったですよ。ファンタジー小説って、なんだか心がときめきますね」

「でしょ、でしょでしょ！」

恵美がファンタジーの神髓しんずいを理解したことを知って、真は有頂天だ。

「本は後で返します。それでは失礼しました」

恵美は出て行った。

「またひとりか」

風が吹く。強い風だ。

夏が近づいてきているようだ。

「きのう言ったとおり、文芸部に入りました」

昼食中に恵美が、アオイとホノカに報告した。いつも通り教室で、お弁当を食べている。

「幻想小説同好会はどうするの？」

「水曜に顔を出します」

「兼部か、やっぱりねえ」

「それが一番いいと思うよ」

3人のご飯が進む。

「いやあ、実はね、^{きんきこうきょうがくだん}近畿交響楽団の後任指揮者の件、白紙になったよ」

学生食堂で昼食中に真が、フクタロウとタダシに報告した。

「なんでまた。まあ、予想はつくけどさ」

「アレだろ、^{きんきょう}近響の名前だろ」

「あたり。後任に決まりかけてた指揮者が家族に相談したら、『ヘンタイ・シンフォニー・オーケストラの指揮者は絶対ダメ』って猛反対されたそうだよ」

「『^{きんき}近畿』、いい地名なんだけど、英語にすると『ヘンタイ』だからな。これは困ったもんだ」

「『エロマンガ島』みたいなもんだよね」

「近畿交響楽団は、名称を変更しようかって、内部でまた揉めてるらしいよ」

「最初から近畿を使わなければよかったんだけどねえ」

「白紙か」

フクタロウとタダシは、^{とび}鳶に油揚げをさらわれたようにしゅんとしている。

「そうそう、倉田さん、文芸部に取られちゃったよ」

ついでのように真が報告した。

「ほう、転部？」

「いや、兼部。同好会には週一で顔を出してくれるってさ」

「兼部か、やっぱりねえ」

「それが一番自然だと思ふな」

3人の食事が進む。

「きょうは自分の箒で初飛行だね」

璃々杏が恵美に話しかけた。

「はい。とっても楽しみです」

はつらつと答えた恵美は、自分の箒、ラビットハートをしっかり握っている。

ここは渡辺邸の庭で、真もいる。

「じゃあ箒にまたがって」

璃々杏が箒にまたがる。恵美も続いてまたがる。

「準備はいいかい」

「はい」

「ついておいで」

璃々杏がゆっくり上昇する。

「行くよ、ラビットハートちゃん」

恵美が上昇する。ややぎこちない。というか本当のところ、跳ねるように飛び上がった。ラビットハートの名前は伊達ではないようだ。これは、10年売れ残った訳あり箒だからね。だが彼女は、ラビットハートのじゃじゃ馬ぶりを、むしろ楽しんでいるようだ。

「行ってらっしゃい」

ふたりを見送る真。

空中で、璃々杏と恵美が併走している。

「だいぶ飛べるようになったね」

「まだ怖いです」

「補助ロープを付けようか？」

「大丈夫です……たぶん」

「ふふん、言うじゃないか」

恵美はじっと前を見ている。

別の日、きょうはくもりだ。恵美と真が併走して飛んでいる。

真はまたひらひらした服を着ている。

が、恵美の箒はもうほとんど迷いが無い。

「倉田さんは本当に上達が早いね。ビックリだよ」

「どうぞ、名前で呼んでください」

「……それじゃあ、恵美ちゃん」

「わたし、ピアノでもお習字でも上達が早かったんです。でも、唯一の欠点がありまして」

「なに、恵美ちゃん」

「飽きて長続きしなかったんです。でも、魔法は違う、もう日常の一部になってるんですよ。それに、このラビットハート、凄いですよ。真さんより速く飛べるんですよ。まるで彗星すいせいのようです」

ラビットハートが加速する。

真が付いていくが、追いつくのがやっとだ。

「恵美ちゃん、スピードを落とそう。危ないよ」

恵美がスピードを落とす。あからさまに不満げだ。

「箒で飛べるようになったし、日常魔法は覚えつつあるし、防御魔法もだいたい覚えたいし。……あとは攻撃魔法だな」

恵美は生き生きとした表情を見せている。

魔女たちは、攻撃魔法の訓練を山で行う。もし魔法が暴走しても、山なら被害が少なくて済むからだ。

というわけで、昼の山に、璃々杏と恵美とうららが来ている。みな登山客を装っている。恵美は、璃々杏から攻撃魔法と魔女合気道の手ほどきを受けている。

攻撃魔法の練習は枯れ木に対して行い（恵美は「これは弱いものいじめじゃないかしら」と思ったのだが）、魔女合気道は魔法の箒を使って対人で訓練する。魔女合気道は、魔法の箒を使って行う格闘技なのだ。

惠美は、攻撃魔法の訓練は順調だったが、魔女合気道に手こずった。魔女合気道は、ある意味で体育の授業よりもキツかったのだ。

休憩に入った。

「あの、真さん来てませんよね」

惠美がつぶやいた。

「えっ！ 来て欲しかったのですか？」

うらがツッコむ。

「そういう訳じゃないです」

「息子はもどきだから、魔女合気道はいいんだよ。攻撃魔法もあらかた^{しゅとく}取得してるし」

「なんだかズルい」

惠美がつぶやいた。

「えっ！ やっぱり来て欲しかったのですか？」

「来て欲しくないです！」

惠美はきっぱり否定した。

夜、惠美は自室のベッドでスマホをいじっている。

スマホの画面には、『魔女の質問道場』というアプリが表示されている。『質問をする』ボタンをタップした。『質問文を書いてください』と表示される。

惠美は文字を打ち始めた。『思春期の男の子がアイドルみたいなひらひらした服を着る心理を教えてください。よろしくお願いします』と書いて、『書き込む』ボタンを押した。画面に『誹謗中傷や犯罪の類いの質問ではありませんか？ よく確認してください』というメッセージとともに、自分が書いた文章が表示された。スクロールすると、『質問する』と『もどる』の2つのボタンが現れた。

惠美は30秒ほど悩んだすえ、『もどる』ボタンを押した。

今日は晴れの予定だった。

テレビやインターネットの天気予報も晴れで、魔女の占いでも晴れのはずだった。

だが、きょうはあいにく小雨が降っている。6月に雨が降るのは普通なことだが、魔女の占いが外れるのはたいへん珍しい。これも異常気象というヤツだ。

渡辺邸の庭に、璃々杏と惠美がいる。

「雨だね」

傘を差した璃々杏が言った。

「雨ですね」

こちらも傘を差した惠美が言った。彼女は箒を持っている。ラビットハートだ。

「惠美ちゃん、予定を変更するかい」

「いえ、行きます」

きょう惠美は、初の単独飛行の予定なのだ。人生、何事にも初めてがある。初めてのおつかい、初めての自転車旅行、そして、初めての単独飛行。

「電波塔は知っているね。そのてっぺんに輪が置いてある。それを取って戻ってくるだけだよ」

璃々杏はそう言った。恵美は無言で電波塔のほうを見ている。

「やっぱり、別の日にしようか？」

「いえ、行きます。電波塔のてっぺんの輪を取って戻ってあげればいいんですね」

「どこにも寄っちゃダメだよ」

「わかりました」

「よし、恵美ちゃん行っておいで」

恵美は、傘を閉じて璃々杏に渡した。雷よけ雨よけの魔法を自分にかけてから、ラビットハートに乗って離陸した。

(心臓の音がいつもより強く感じる。ええと、まずは駅の方へ飛ぶ。お願いラビットハートちゃん、いつもどおりお利口にしてね。雨よけの魔法、まだ充分じゃないな。少し雨が落ちて来る。もっと訓練しないとイケないな。駅が見えてきたから右の方へ。よし、電波塔が見えてきた。まずい、カラスの群れだ。こっち来んなよ。けっ、カラスのヤツらわたしを監視してやがる。あれ？ 見えてるの？ 見えてないはずなんだけどなあ。よし、無視だ無視。単独飛行、怖い。怖いけど楽しい！ おっと電波塔を見失った。よく見て、どこだどこ？ ……あった、電波塔だ。……近づいてきた。上昇して、輪があった)

恵美は輪を掴むと、そのまま戻ってきて渡辺邸の庭に降りた。

「璃々杏さん、輪を取ってきました」

「恵美ちゃん、よくやったよ」

そう言って、璃々杏は恵美を抱きしめた。璃々杏は涙を流していた。璃々杏はスマホでメールを送った。

雲海市の各所で地上待機していた、真やうららや他の魔女たちは、『倉田恵美の任務、無事完了』のメールを受け取ると、みな安堵して家に帰った。

恵美はその夜、よく眠れなかった。単独飛行のドキドキがなかなか止まってくれなかったのだ。そして、少し大人になった気がした。

「ですから、『十二夜』を読んでもわかる通り、シェイクスピアの戯曲の本質は、愛、だと思います。私の意見は以上です」

文芸部の部員が言い終えると、他の部員たちが拍手をした。

放課後の文芸部、部員10人くらいが、シェイクスピアについて議論しているのだ。外はくもり。

恵美もいる。彼女のケータイが振動する。ケータイをみて少し驚く。

「失礼します。急ぎの電話のようなので」

と言って、恵美は廊下へ移動し電話に出る。

「はい。はい。はい？ えっと、分かりました」

恵美は、文芸部の部室に顔を向けた。

「急用が出来たので、早引きさせて貰っていいでしょうか」

「大事な用なの？」

と文芸部の部長。

「そうです。たぶん」

「しゃーないなあ。行きな」

惠美はカバンを取って帰宅の途についた。

璃々杏が空中で待機している。

惠美がラビットハートに乗って飛んでくる。学生服姿だが、カバンは持っていない。

「遅くなりました」

「ずいぶん上達したね」

「ありがとうございます。急用と聞きましたが、何かあったのでしょうか」

「鬼の子が出たのさ」

「鬼の子って、えっ？ 男の魔法使いですか！」

「まだ確認した訳じゃないけどね。惠美ちゃん、今から私たちは祈祷師だよ。『魔女がお祓いに来ました』とは言えないからね。祈祷師らしく振る舞うんだよ」

「はい、わかりました」

璃々杏が飛んでいき、惠美がついていく。

ここは、あるマンションの一室で、母親はあきらかに取り乱している。

5歳の男の子が、魔法を使って、おもちゃを空中に浮かしているからだ。

ピンポンとチャイム。

母親は玄関へ行きドアを開けた。璃々杏と惠美が立っている。ふたりは招き入れられた。

「お困り事と聞きました」

璃々杏から切り出した。

「あれが見えますか。うちのこどもがおもちゃを投げてるんです。手を使わずにですよ。いったいどうなっているんでしょう」

「もう大丈夫ですよ」

「本当でしょうか？」

璃々杏が水晶を通して子供を見る。

子供が口を開いた。

「おばさんたち、なにしにきたの？」

子供が魔法でおもちゃを飛ばしてくる。璃々杏が杖を使って魔法で跳ね返す。

「魔法力、レッド。間違いない。鬼の子だね」

「鬼の子。男の魔法使い」

惠美は小声で言った。

「あの、その女子学生さんは？」

「私の助手です」

璃々杏がそう言うと、母親は納得したようだ。

「鬼の子ってなんのことでしょう」

「業界用語です。悪い霊に乗り移られているという意味ですよ」

「悪い霊に……。よくなるんでしょうか」

「大丈夫です。今からお祓いをします」

璃々杏は、違う杖を出して構えた。^{むらさき}紫のラインの入った杖だ。

恵美はそれを見て息をのんだ。紫のラインの入っている杖は、^{きんき}禁忌の魔法が撃てる特別な杖なのだ。その杖は、あらゆる魔法を放てるのだ。

「天の精霊よ、大地の妖精よ、わたしに力を貸しておくれ、ザンキャリエン！」

璃々杏の放った魔法が、男の子を貫く。

数秒措いて、空中に浮かんでいたおもちゃがすべて落ちた。

璃々杏は水晶で子供を見る。

「魔法力、コバルトブルー。もう問題無いわ」

「あれ、おもちゃがとばなくなった」

びっくりした子供は、手をバタバタさせている。

母親はさすがのように璃々杏を見た。

「もう大丈夫ですよ」

それを聞いた母親が、恐る恐る子供を抱きしめる。母親は号泣した。

「ママ、どうしたの」

「いいの、いいのよ」

「おもちゃ、どうしてとばないの？」

「もう大丈夫なんですよね」

母親が璃々杏を見た。

「安心してください。もう、おもちゃは飛びませんし、不思議なことも起きませんよ」

母親は子供を強く抱きしめた。

恵美は^{ぼうぜん}茫然と見つめている。

「近畿地方から男の魔法使いが出るのは珍しいわね。20年ぶりかしら」

璃々杏と恵美が併走して飛んでいる。

「男の魔法使いって本当に危険なんですね。子供とはいえ、母親にものをぶつけるなんて」

「男の魔法使いもピンキリらしいけど、きょうのはかなり危ないほうだったわね」

「ザンキャリエン。魔法力を消し去る禁断の魔術」

いつになく真剣な恵美だ。

「そうだよ。ザンキャリエンは、男の魔法使いが生まれたときと、悪い魔女から魔法を取り上げる時に使うんだ。あと、本人が魔女の人生を選ばなかった時もね。決して軽々しく使っていい魔法じゃないわ」

「あのう、イーケンスにザンキャリエンを使ったらどうなんですか」

「ダメダメ。イーケンスは魔法を跳ね返す術を自分にかけているんだ。通用しないって話だよ」

「ダメ元でやってみたらどうですか」

首を大きく横に振る璃々杏。

「イーケンスは寝ていても魔法を跳ね返す。その上、魔法をかけると、その刺激で目覚めてしまうらしいんだよ。なんせ、ヤツは寝ているだけだからね。そんな危ない橋は渡れないわ」

「そうですか。なるほど」

暗くなってきたので、恵美はまっすぐ家に帰った。

「あっ、恵美ちゃん。いいところに来たよ」

雲海高校の廊下で、ユートンは恵美を捕まえた。

「面白い話をするよ。実はゼブラマートでね、不思議な事件が起きたんだよ。ある日、ゼブラマートに匿名の通報があったんだよ。『おたくのスーパーの天井に穴が空いてる』って。いたずらだろうと思ったらしいけど、念のため屋上にあがってみると、驚くことに本当に穴があったね。どう、ミステリーでしょ」

「はぁ」

恵美は力なく笑った。

「あれ、恵美ちゃんの大好きなミステリーだよ。だってほら、ゼブラマートの屋上を見れるのは、ヘリコプターかドローンくらいのもんだよ。あそこは平地だからね。近くに高い建築物ないからね。通報者はいったいどうやって屋上の穴を見つけたのか、謎だらけだよ。恵美ちゃん驚いてないね。ミステリー好きの恵美ちゃんが」

「誰かに聞いたことがあったんだと思うよ」

「あっ、なるほどね」

ユートンは少々がっかりした。

「あっ、姉ちゃん。いい話聞かせてやるよ」

純司は、学校帰りに姉の恵美を捕まえた。純司は自転車を押していて、恵美は歩きた。

「実はゼブラマートで変なことがあったんだってさ。『おたくのスーパーの屋上に穴が空いてる』って匿名の通報があったらしいんだけどさ、これが事実だったんだってさ。でもさ、ゼブラマートの付近は真^まっ平^{たい}らで近くに高い建物もないから、どうやって見つけたんだろうって中学で噂になってるよ。……あれ、ミステリーなのに、姉ちゃん興味ないの？」

「その話、ユートンちゃんに聞いた」

「あっ、そう」

純司はがっかりした。

読者の諸君は、もうお分かりだね。通報者は倉田恵美嬢だ。彼女は、ゼブラマートの屋上の穴をたまたま見つけたのだ。それは、ラビットハートに乗って、空中で散歩中の出来事だった。

こうして、倉田恵美は、魔女としてはじめて街を元気にした。

だが、彼女はまだ気づいていない。次のミッションが、とんでもなく大きいものであることに。

璃々杏や真や恵美たちに、魔女協会からメールが来る。

メールの内容は『緊急！ 龍の時代到来！』だ。これは魔女たちの符牒^{ふちよう}で、イーケンスの目覚めが近いことを表している。

「イーケンスが、まさかね。もっと眠ってればいいのに」

自宅でメールを受信した璃々杏が言った。

「龍の時代到来って、もうすぐイーケンスが甦るってこと?! ええっ!!」

買い物の途中でメールを受信した恵美はそう言った。

「イーケンスか。まあ、ぼくは『もどき』だし、蚊帳の外だろう」

中古ゲーム屋の前でメールを受信した真はそうつぶやいた。

「ただいま」

夜の倉田家に父親が帰宅した。

キッチンでは恵美がご飯を食べていて、母親は後片付けだ。

「お帰りなさい。あなた」

「お父さん、お帰りなさい」

「恵美、お土産だぞ」

そう言って父親は小袋を取り出した。

「ええ、また〜? 誕生日はまだだよ」

「誕生日には別のものをあげるから。ほらこれ」

恵美は小袋を受け取ると、中からDVDを取り出した。

「お父さんありがとうございます。またDVDだ。今度はアニメか」

「かけて」

「それよりお父さん。火曜日、木曜日、土曜日は家事をする日じゃないの?」

「いま仕事を立て込んでね。残業がなくなったら家事をするよ」

父親は、家事をしている母親に顔を向けた。

「母さん、すまないね」

「残業がなくなったら、ほんとうにお願いしますよ」

私も仕事をしているんですよ、と言わんばかりの母親の口ぶりだ。

「それよりDVDをかけて」

催促する父親。

「う〜ん」

「かけてかけて」

「恵美、かけてあげなさい」

洗い物をしている母親が言った。

「わかったよ」

恵美は、ブルーレイレコーダーのところへ行って、貰ったばかりのDVDをかける。アニメが再生され始めた。

恵美が夕食を再開する。父が席についた。

「あなた、いま夕食の支度をしますから」

「うん、ありがとうございます。……平和っていいもんだなあ」

「平和か」

恵美がそうつぶやいたとき、DVDがフリーズして画面が止まった。

「おっ?」

驚く父親。

恵美が、服の上からポケットの中のリーカストーンを強く握る。すると、DVDのフリーズが終わり、続きが再生される。

「ああ、びっくりした。いや、いいんだよ。フリーズも2ヵ月に一回くらいなら、逆にいい刺激だよ。それとも、買ってきたDVDが不良品だったのかな」

父親は首をかしげている。

恵美はリーカストーンから手を離れた。

渡辺家のキッチンで、璃々杏と真が夕食を摂っている。

ふたりは会話をしており、話題はもちろんイーケンスだ。

璃々杏の声は厳かだ。

「真、これからいうことをよくお聞き。もし私に何かあったら、姉のみらいを頼るんだよ。みらいに何かあったら、次女のあすかを頼るんだよ。もしあすかにも何かあったら——」

「母さん、それ以上不吉なことを言わないで」

真の声が震えている。

「でも、はっきりさせておかななくちゃいけないことなんだよ。父さんは家出中だから頼りにならないからね。まったくもう、こんな時にあいつときたら、どこで油を売ってるんだか」

「それより今は、母さんと姉さんたちのことだよ。四人とも魔女だから、イーケンスとの戦いに行かなくちゃいけないでしょ」

「そうなるだろうね」

「母さん、死なないでね。必ず生きて帰ってきてね」

「大丈夫だよ」

「イーケンスとの決戦、ぼくも手伝えたらいいのに」

「頼もしいことを言うじゃないの」

璃々杏がかすかな笑みを見せた。

真の表情は沈んでいる。数日後に家族から死人がでるかもしれないとなれば、当然の心配だろう。たぶん真は、嫌いなかれんが死んでも涙を流すだろう。人間とはそうした生き物なのだ。

だが、残酷なことに試練が用意されていたのは、璃々杏ではなく、三人の姉たちでもなく、真のほうだったのだ。

コートを着た^{そうねん}壮年の女性が、夜遅く、渡辺邸を訪ねた。

璃々杏は、その女性を居間に通した。

やってきたのは小林梅美^{うめみ}という女性だ。50歳を超えた魔女で、璃々杏の姉弟子^{あねでし}にあたる。

璃々杏と梅美は居間のソファに座った。90度の角度で斜めに対座している。

「璃々杏、メールは読んだかい」

梅美から切り出した。

「はい。イーケンスの目覚めが近いとか」

「璃々杏、よくない知らせだよ」

「なんでしょう」

璃々杏は心の準備ができていたからか、さほど動揺はしていなかった。

「ところで、子供たちはどうしている？ 聞かれると少々まずいんだ」

「三人の娘は自立していて、この屋敷には住んでいません。末っ子の真はもう寝ています」

「確かい」

「ええ、さきほど確認しましたから。まあ、ゲームをしに起きてくる可能性はありますが」

梅美は立ち上がると、居間のドアを開けて指先を弾いて、小さな魔法を放った。璃々杏には気づかれなかったようだ。

「寝ているなら都合がいい」

梅美はドアを閉めるフリをして、少しだけ開けておいた。

2階の自室で寝ていた真が、梅美の魔法で起きる。何かに取り憑かれたように、忍び足で居間へ向かう。

居間から、璃々杏と梅美の会話が聞こえてくる。

「梅美、それで、よくない知らせとは何でしょう。おそらく、イーケンスのことだとは思っているのですが」

璃々杏は静かに質問した。

「半分当たりで、半分は違う」

謎かけのように梅美が答える。

「というと」

「あなたには、これから辛いことを言わなければならないんだ。私も苦しいよ。いいかい、ここををしっかり保ってよく聞くんだ」

「戦う準備なら出来ています。三人の娘たちも、一緒に戦いへ赴くでしょう」

それを聞いた梅美は、困惑した表情を見せた。

「少し、違う話なんだ。順番に言えばこうなる。日本時間できょうの昼頃、インドの大魔女、カンチャーナ・ビスワスが予言を出したんだ。予言の内容は、『もうすぐイーケンスが目覚める。イーケンスを倒せるのは男の魔法使いだけ。魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』と」

璃々杏の顔からみるみる血の気が引いていく。

「そんな、男の魔法使いはうちの真だけですよ。息子は、魔法もそんなに使えるほうではありません。何かのお間違いでは？」

「何度も確認作業をしたよ。それこそ、何度もね」

「それなら、私たちが把握していないだけで、男の魔法使いは他にもいるんでしょう。きっとそうです。予言の魔法使いは他にいるんですよ」

璃々杏は、自分に言い聞かせるように言った。

「いいや、男の魔法使いは、確かにあなたの息子さんだけだよ。渡辺真くんが、その予言の魔法使いなのさ」

「そんな、信じられません。どう信じろと言うのですか」

「それは理解できるよ。気持ちはわかる」

このとき璃々杏は、はっきりと思い出していた。真が5歳のころ、占いの魔女は確かにこう言ったのだ。『この子は大きくなったら、世界を股にかけた冒険旅行にでかけることになるよ』と。その占いが、いま予言とリンクする。

世界を股にかけた冒険旅行とは、イーケンスを倒すための旅なのか……璃々杏の頭の中で疑念が渦巻く。

「カンチャーナ・ビスワスさんは、ほかに何か言いましたか」

「いいや」

『もうすぐイーケンスが目覚める。イーケンスを倒せるのは男の魔法使いだけ。魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』と、そう言ったんですね」

「相変わらずの記憶力さね」

「ほかの上級魔女たちは、なんて言っているのでしょうか」

「そりゃあもう、蜂の巣をつついたような大騒ぎさ。なんといっても、これまで3600年も準備してきた大魔法使いイーケンスとの戦いの準備が、一からやり直しになってしまったのだからね」

「そうでしょうね。ほかには」

「とくに、『魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』という予言の一節の解釈をめぐって、言い争いが起きているよ。これは、魔女は軍隊を作らず、戦い以外で勝たなくてはいけないという意味なのか、それとも、ほんとうに渡辺真くんがイーケンスを倒す定めにあるのか」

「うちの子を、真を、戦に巻き込むのですか」

璃々杏はどんどん弱気になってきているようだ。

「まだ何も決まっていないよ。だけど、こんな大事なことを、上級魔女の璃々杏に話さないでいるわけにもいかないから、私がこうやって来たというわけさ」

「これだけは言えます。真にはイーケンスを倒す力などありません。それに、あの子はまだ子供ですよ。ああ梅美、私はどうしたらよいのでしょうか」

璃々杏の頭の中で、占いと予言がこだまになって響き続ける。じわじわと、占いと予言の言葉に絡み取られていく。

「まずは心を落ち着かせてはどうだい。あなたは、だいぶ取り乱しているようだ」

「取り乱している？ ええ、その通りです。自分の息子が、あのイーケンスと戦わなければならないなんて聞いて、どうして落ち着いていられるでしょう」

「ホーマグリップの丸薬だ。2、3時間ぐっすり眠れて疲れが取れる。飲むかい？」

梅美は小瓶を差し出した。

「いいえ、いりません。今は寝ているときではないでしょう」

「あなたには休息が必要なように見えるけどね」

璃々杏は壁掛け時計を見た。午後9時過ぎだ。

「……わかりました、一眠りします。あの子が起きる前に目覚めて、何か対策を考えないと」

平静時の優れた判断力が、璃々杏には、もう残っていない。

「ほら、ホーマグリップの丸薬だ。お飲み」

梅美は小瓶から一錠取りだして、璃々杏に渡した。

「ありがとう。しばらくソファで横になります」

璃々杏は丸薬を飲み、ソファで仮眠に入った。

「入っておいで」

梅美が居間のドアを開けて、盗み聞きをしていた彼に話しかけた。パジャマ姿の真が入って来る。

「やあ真くん。大きくなったね。話は聞いていたかい」

「聞いていました。母は？」

真はソファを見る。璃々杏が静かに横になっている。

「眠っているだけだ。じきに目を覚ますだろうよ。さて、これから先は璃々杏には言わなかったことだ。よくお聞き。上級魔女たちはこう結論を下したんだ。イーケンスを倒せるのは、渡辺真くんただ一人だと。おそらく魔女たちは、イーケンスとの戦いには加わらないだろう」

「じゃあ、ぼくひとりでイーケンスを倒せていうんですか！」

「結論を言えば、そういうことになる」

「ムチャクチャだ。3600年前、魔法使い千人が束になっても勝てなかった相手でしょう」

「そのとおりだ」

「それにぼくは、ただの魔法使いもどきですよ。いったいぜんたい、ぼくのどこにイーケンスを倒す力があるというんですか」

真の言葉は荒かったが、不思議と捨^す鉢^{ぼち}ではなかった。

「だからだよ。なぜこんな予言が出たのか、みな不思議がっているんだよ。何か思い当たる節はあるかい？」

「ありません」

「ふむ、時間が惜しいな。さて、イーケンスと戦うかい。それなら、今すぐ旅立つがいい。璃々杏はきっと止めようとするだろうからね。彼女は、偉大な魔女である前に、ひとりの母親だからね。だけど、もし戦わないというのなら、悪いが、いまずぐザンキャリエンを放ってお主^{ぬし}をただの人間にする。そうすれば、もう魔法使いもどきではなくなる。それでお主は、イーケンスを倒すという重い役目から解放される」

「その場合、イーケンスはどうなるんですか？」

「新しい予言が出るだろうと、皆の意見が一致している。だが、新しい予言が出て、『魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』というくだりは変わらないだろうとも予想されておる。ええい、まったくもって悩ましい予言だ！」

「予言された未来を変えるという手もあります」

真が提案した。

梅美は一瞬無言になり、より厳しい声で話した。

「知っておるだろう。予言された未来を変えるには、犠^{ぎせい}牲が必要になるんだよ。今度の場合は相手が最悪のイーケンスだ。この予言の改変は、いったい何人の魔女の血を必要とするだろうか。いやいや、考えただけで恐ろしい」

真の心に、恵美の笑顔が浮かぶ。

「ぼくに考える時間はどれくらいありますか？」

「ふむ。数分といったところだね」

「まるで詐欺師のセリフじゃないですか。これは何かの冗談で、ぼくを試しているだけではないのですか」

「それなら、なによりよかったんだがね。さあ決めよ。運命を受け入れイーケンスと戦うか、それともただの人間になるか。逃げても倉田恵美は笑わないと思うぞ」

真は、母の寝顔を見た。しばらくして、梅美に向き直った。

「イーケンスと戦います」

「予言の子よ、二言^{にごん}はないか」

「ありません」

梅美は少しでも悲しい顔を見せた。

「よろしい。聞いていいかな、勝算はあるのかい」

「まったくないと言えば嘘になります」

「ほう。詳しく聞きたいところだが、あいにく時間がないな。この杖と箒を持つがいい。この杖は、名前はないが若くて素直で強力な杖です。この箒は古いものです。この箒には名前があります。ティーパーティーです」

「ティーパーティー！ ジャンヌ・ダルクが使っていた箒ですか」

名前のない杖2本とティーパーティーを、真は恭しく受け取った。杖2本は、紫のラインの入った禁忌の魔法が放てるものだ。

「そうだよ。ところで、イーケンスがどこに眠っているか知っているかね」

「エーゲ海の海底に沈む、アトランティス大陸でしょう」

「そうです。ですからこれを。パスポートです。これは本物ですよ。短時間で作るのに苦労しました。これも、ケータイの海外用の充電器。それとクレジットカード」

「クレジットカードですか」

真はそれらを受け取った。

「旅には必要なものです。渡辺璃々杏の家族カード名義になっています。他のものは自分で用意なさい。旅の途中で手に入るものも多いだろうよ」

「分かりました。あの、友達に別れを告げたいのですが」

「電話でいいでしょう。いや、ひとりくらいならべつに構わないが」

「ひとり……」

真の答えは決まっていた。

数分後、渡辺真が、魔法使いもどきの服を着て居間に戻って来た。旅行用バッグを持っている。

「梅美さん。準備ができました」

「よろしい。言うておくが、今夜中に海を超えて大陸に渡ることだ。でなければ、璃々杏がどうあっても引き留めようとするだろうからね」

「はい、わかりました」

「真くん、もうひとつ警告しておくよ。行く先々で、魔女たちが手を貸すかもしれない。だが、

多くを望んではいけないし、真昼^{まひる}に夢を見てはいけない。なぜなら、イーケンスと戦う

運命にあるのは、男の魔法使いのお主だからだ。さあ、ゆくがよい、予言の子よ」

「梅美さん、行ってきます。……かあさん、行ってきます」

真は、最後になるかも知れないと思って、眠っている母に挨拶をした。

渡辺邸の庭に、荷物を持った真が出てきて、箒にまたがる。

「行くぞ、ティーパーティー」

真が空に舞う。ティーパーティーは鮮やかな軌道を描いた。だが、ティーパーティーが向かったのは、日本海の方角ではなかった。

飛んでいく真を梅美が見送る。振り返って、眠っている璃々杏を見た。

「起きたら、ただでは済まないだろう。たぶん、一生涯まれることになるだろう。だがね、こうするしかなかったんだ。こうするしか……」

梅美は空いているソファーに深く座った。

こうして、予言の子、渡辺真の旅が始まった。悪の大魔法使いイーケンスを倒すのが目的だ。行く手に待ち受けるのは希望か、それとも……。

第二章 魔女修行はじまる おわり

第三章 ふたりの世界旅行

第三章 ふたりの世界旅行

倉田恵美が、ふと机上のミニカレンダーを見ると、6月分が表示されている。捲って7月にすると、11日のところに「18歳になるよ☑」と書き込まれている。彼女はニヤリとした。だが、6日から10日にかけて「期末試験、ガンバ！」と書いてあるのをみると、少し憂鬱になった。彼女は、カレンダーを6月に戻した。

テストが好きな高校生は少ないだろうし、恵美もまた同様だった。それに、毎年律儀に誕生日の前後にやってくる期末試験に、彼女が頭を痛めていたのは言うまでもない。

というわけで恵美は、自分の部屋で試験勉強をしている。パジャマ姿でヘッドホンをかけて音楽を聴きながら。時間は夜9時過ぎだ。勉強は捗っているようだ。

こんこん、と音がする。

恵美はヘッドホンを外してドアへ行き開けるが、不思議なことに誰もいない。首をひねった。

こんこん、と窓のほうから音がする。彼女はたいへん驚く。警戒しながら杖を取り出して、魔法でカーテンを開ける。窓の外に、魔法の箒に乗って空中に浮いている真がいるのを認めた。彼女の警戒が解け、壁際に行き窓を開けた。

「どうしたんですか、こんな夜遅くに。それに知っているでしょう。イーケンスの目覚めが近いんです。余計な刺激をしないよう、無用な魔法を使うなど通達があったはずですよ」

真は文庫本を取り出して、恵美に差し出した。

「ぼくは事情があってしばらく家を空けるんだ。だから、借りた本を返しておこうと思ってね」

恵美は本を受け取った。文庫本は『アライグマ殺人事件』だ。

「どこへ行くんですか」

「それが言えたら苦労はしないんだ。察してください。とにかく、ぼくはしばらく家には戻らないんだ」

真は至って真剣だ。彼がこんなに真剣になったのは、久方ぶりのことだった。

「そうですか。ですが、こんな夜更けに若い女性の部屋を訪ねるのは失礼です」

「確かにね。ごめんよ、恵美ちゃん。じゃあね、元気でね」

「おやすみなさい」

恵美の挨拶を聞くと、真は満足したようで飛んで去った。

窓とカーテンを閉めて、椅子に座って、恵美はしばらく物思いにふけた。

ケータイを持って魔法の箒に乗る場合、ミラガジェンの魔法を使うのがルールだ。

20世紀末から21世紀初頭にかけて、魔女たちの間で激論が起きた。箒での飛行中にケータイを落としてしまったら、という問題についてだ。もし、空中でケータイを落としたり……。落とすほうはいい、携帯電話を一つ紛失するだけだ。それが地上の人間に当たったら大事故になる。これは喫緊きつぎんの大問題だったのだ。

議論した末、空中でケータイを使う場合は、ミラガジェンの魔法を使うことと定められた。ミラガジェンの魔法は、本来小物をなくさないようにする魔法だったが、これがケータイやスマホにも効くことが魔法実験で判明したのだ。

自分のケータイにミラガジェンの魔法をかけて、あえて飛行中に落としてみる。すると、ケータイは落ちずに、魔法使いにしばらくついてくる。その時間はほんの9秒ほどだ。器用な魔法使いなら——魔女はたいてい器用だ——9秒あれば失ったケータイを余裕で取り戻せる。こうして、ケータイに関するルールが新たに定められたのだ。

真は空中で、ミラガジェンをかけたスマホを取りだして、電話をかけた。

ここは空中で、しかも夜だから、彼はとても慎重に行動している。ティーパーティーにまたがり、左手で箒を握り、右手にスマホ、背中にバッグを背負っている状態だ。ス

マホの電波の状態を気にしてか、とてもゆっくり飛んでいる。

「あっ、相沢。ぼくだよ」

『よう、真。元気だったか』

スマホから若い男性の声が聞こえる。

「元気も元気、元気が売るほどあるよ。あっ、夜遅くスマンね」

『いや、いいよ。まだ起きてたし。ところで、幻想小説同好会の新しい部員、どうなった？ やっぱり逃げられたか？』

「ああん？ 今でも部員だよ」

『冗談だろう。新入部員って女性なんだろう。どうやってつり上げたんだ？』

スマホから驚きの声が上がった。

「まあ、新入部員っていっても、今は文芸部と掛け持ちなんだけどさ」

『なんだよ。結局、幽霊部員じゃんか』

「失礼だな。週一で顔を出してくれてるよ」

『そりゃまた上出来だな。しかし、不思議なこともあるもんだな』

「お前さえ転校しなけりゃなあ。幻想小説同好会はいまごろ、部員が3人になってたはずなのにな」

電話の相手は、転校した相沢竜人りゅうとくんのような。相沢くんが転校してしまって、幻想小説同好会は廃部の危機の度合いがいや増したわけだ。

『そう言うなって。ところで、きょうは何の用だ』

「声が聞きたかっただけだよ」

『ん……、どうかしたのか？』

「本当に声が聞きたかっただけさ」

真の目は少し潤んでいる。

『……そうか。何か悩みでもあるのか？』

「そりゃあるよ。ぼくは思春期の男子だからね」

『ハハッ、そうだよな。ところで、まだ書いてるのか。小説』

「ぼちぼちとね」

『出来たら真っ先に読ませろよ。あんま興味ないけどな』

「考えておくよ。じゃあな」

『じゃあな、また会おうぜ』

真は電話を切って、スマホをバッグのポケットにしまった。目から一筋の涙が流れた。

「日本ともお別れだ」

小声でそう言うと、真は感慨にふけた。本当にひとりぼっちになってしまったことを思い知らされていた。これが悪い夢ならいいのに……と思っていた。

スマホをもう一度取り出すと、電源を入れた。待ち受け画面は、恵美とのツーショットだ。これは、幻想小説同好会入部記念に学校で撮ったものだ。名残惜しそうに、真はスマホをしまった。

とつぜん、後方から光が飛んできて、前方で巨大な雷ひゃくらいになった。百雷だ。慌てて筆を停止させる。

「うわ、びっくりした！」

振り向くと、ラビットハートに乗った恵美が急速接近してくる。彼女は、パジャマの上にカーディガンを羽織っていて、右手に杖を持っている。杖は懐中電灯代わりに淡く光っている。

「マジかよ。まいったな」

真は杖を取りだして発光させた。

恵美の箒は減速し、真のそばで止めた。光ったままの杖で、狙いを真に定めている。その目は、しっかりと真を睨んでいる。

「恵美ちゃんどうしたの。それにしても凄いね。もう、ベルガランドをマスターしたんだ」

真のおべんちゃらには乗らず、恵美は鋭い目つきのままだ。

「真さん、いけませんよ」

「何がだい」

「おおかた、自分ひとりでイーケンスを倒そうという計画なのでしょう。その目的は、そう、イーケンスを倒せば若い魔女たちにモテモテ、といったところでしょうか。ですが、イーケンスは真さんの手に負える相手ではありません。あのイーケンスですよ。ヨーロッパ最古の文明を滅ぼした災禍さいかですよ。おとなしく一緒に帰るんです。璃々杏さんが待っています。さあ、帰りましょう」

倉田恵美は激しく勘違いをしていたが、完全に的外れというわけでもなかった。真がイーケンスを倒すための旅に出たのは事実だったのだ。旅の動機の予想が、少し外れていたが。

「母さんに会ったの？」

「きょうは会っていませんが、璃々杏さんは未成年の深夜飛行を軽々しく許す人ではありません。さあ、一緒に帰るんです！」

真は小声になった。

「困ったなあ。ティーパーティーならラビットハートに勝てるだろう、よし」

彼は閃光魔法せんこうを使って強い光を起こした。突然のまぶしさに、恵美は手で目を覆った。

真はその間にとんずらだ。ティーパーティーを飛ばして距離が開いた。

恵美は目を瞑っていたが、あたりが暗さを取り戻すと追跡を始めた。

真が振り向くと、はるか後方に恵美のラビットハートが見える。真はいったん追いつかれそうになったが、加速したのでまた差が開いた。真の乗ったティーパーティーは異様な速さを見せる。恵美は懸命けんめいに追うが、徐々に距離が開いていく。

「はやい、ラビットハートより速い。なんて速さだよ。こうなったらもう一度だ。ベルガランド・ツール」

ここで注意点、ツールがつくのは最強魔法だ。恵美の杖から魔法が出て、真を追い越し、前方で巨大な雷の束になる。

真は予想していたのか、器用に軌道を変更し、雷を避けて逃げる。

「ちっ、逃げられた！」

恵美が追うが、差がさらに開いた。

真が雲海湖の上空に入った。

「あっ、しまった！」

彼は何やら慌てている。

なぜだろう、真のティーパーティーが大減速したのではないか。恵美のラビットハートが容易に追いついた。

恵美は、真の横に付けて併走する。

「あらあら、どうしましたあ？ ああ、真くんは魔法使いもどきでしたねえ〜。こりゃ失礼しました。大地と違って、海水や真水まみずは得られる魔力が少ないですからねえ〜。そりゃ飛行速度も遅くなりますよねえ〜。なんせもどきですからねえ〜。自力で魔法が使えませんかねえ〜」

彼女は激しく悪態あくたいをついた。恵美ちゃん、あおり運転はよくないよ。

真は観念したのか、雲海湖の上空で箒を止めた。恵美も止まった。

「帰る気になりましたか。まあね、家出のひとつやふたつしたくなる年頃でしょう。ですが、イーケンス退治はダメです。魔女たちの作戦が動いているんだから、邪魔したらお仕置きですよ」

「ぼくは、その魔女の作戦に従って家出をしたんだ。きみこそ家に帰るんだ」

恵美は豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。

「どういうことですか。説明してください」

「極秘任務なんだ。きみにも言えないよ」

「待って、璃々杏さんに電話します」

「魔女協会日本支部がいいよ」

恵美は、杖を左手に持ち替えて、右手でカーディガンからスマホを取り出そうとして、おっと、スマホを落とした。

「あっ！」

恵美は驚きの声を上げた。スマホが落ちたのは、左手の杖を気にしすぎたことと、ミラガジェンの魔法をかけていなかったことが原因だ。

真が魔法で恵美のスマホを捕まえた。空中で止まっている。

「拾って、長くは持たないよ」

彼がそう言うと、恵美の箒は跳ねるようにぴょんぴょんと高度を下げていって、空中に浮かぶスマホを拾った。ぴょんぴょんと、もとの高度に戻ってくる。

「逃げなかったのは偉いです」

と言って、恵美はまた杖を真に向けた。左手に杖、右手にスマホだ。

「逃げて湖の上じゃすぐに追いつかれるからね。それより、ミラガジェンをかけなかったの？ いちおう規則違反なんだけど」

「急いでいたもので……。電話をかけます」

スマホにミラガジェンの魔法をかけてから、恵美は電話をかけた。

『こちら渡辺家です。伝言があれば、ピーッという音の後にメッセージを残してください』

「夜分遅く済みません。倉田恵美です。またかけ直します」

電話を切る恵美。

「魔女協会日本支部がいいと思うよ」

真は慎重にお勧めした。

恵美はしばらく考えて、またスマホで電話をかける。中年と思われる女性が電話に出た。

『はい、こちら魔女協会日本支部です。お名前とご用件をどうぞ』

「魔女見習いの倉田恵美です。あの、つかぬ事をうかがいますが、その……」

『ご用件はなんでしょうか』

「魔法使いもどきの渡辺真さんについて聞きたいのですが」

『ちょっと待ってください。担当者と代わります』

しばらく待たされる恵美。

別の中年女性が電話に出る。

『代わりました。ええと、倉田恵美さんですね』

「はい、そうです」

『渡辺真さんの何を知りたいのですか』

「本人が言うには——」

『えっ！ 続けてください』

魔女協会の女性はたいへん驚いたようだが、すぐに平静に戻った。

「渡辺真さんが言うには、自分は極秘任務を受けているから家出をしようと言っているのですが、嘘ですよ」

『いま渡辺真さんと一緒にいるんですか！』

魔女協会の女性の声が緊張を帯びる。

「はい、真さんなら目と鼻の先にいます」

『現在地点はどこですか』

「雲海湖の上空です」

担当者はだれかと相談しているらしく、しばらく沈黙が続いた。

『魔女見習いの倉田恵美さん、よく聞いてください。渡辺真さんが極秘任務を受けているというのは本当です。あなたは、いますぐ家に帰って今夜のことは忘れなさい』

スマホからたいへん厳しい声が響いた。

「でも」

『これは警告ではありません。命令です。渡辺真さんには干渉せず、いますぐ家に帰るのです』

「真さんはいったい何の任務を受けているのですか。教えてください」

『魔女見習いのあなたが関知することではありません。命令です、家に帰りなさい』

「……わかりました」

恵美はしぶしぶ電話を切った。

真のスマホに電話だ。バッグからスマホを出して画面を恵美に見せた。恵美はうなずくと、真が電話に出た。

「はい、渡辺真です。……はい、そうです。いま、倉田恵美さんと一緒にいます。……いえ、ぼくの落ち度です、彼女に責任はありません。……大丈夫です、ぼくのほうがキャリアが長いです。倉田さんを説得して家に帰ります。……はい。……はい、わかりました。任務を続行します」

真は電話を切り、スマホをバッグにしまう。

「というわけなのさ。わかったね、君は家に帰るんだ」

「この件を璃々杏さんは知ってるんですか」

「悪いけど君には関係のない話なんだ」

「そもそも任務ってなんですか」

「だから極秘任務なんだよ」

「教えてください」

恵美が食い下がった。しっかりと真の目を見据えている。

「聞いたら家に帰るかい？」

「ええ」

真はしばし黙考^{もっこう}したのち、手短に予言の子の説明をした。

「なるほど、分かりました」

「じゃあ恵美ちゃんは家に帰ってくれるよね」

「真さん、わたしも一緒に行きます」

「えっ、約束が違うよ。なんでそうなの」

「ひとりでイーケンスと戦うなんて、無茶もいいところですよ。でも、ふたりなら、ふたりいれば勝てる可能性もきっと上がりますよ」

「ダメだ、連れて行けない。危険過ぎるよ」

真はかぶりを振った。

「それは真さんも一緒じゃないですか。あなたもじゅうぶん危険ですよ。こんな危ない任務を子供ひとりに託^{たく}すなんて。わたしは魔女たちを少し買いかぶりすぎていたようです」

「いや、それでもダメだ。君も魔女だ。魔女はイーケンスを倒せないんだ」

「安心してください。わたし、まだ魔女じゃありません。魔女見習いです」

恵美は手を胸に当てた。

「そんなの屁理屈じゃないか……。やっぱり連れていけないよ」

真は一筋の涙を流した。言葉とは裏腹^{うらはら}に、心は揺れているようだ。

「逆に考えてみてください。もし、わたしが予言の子だったとして、真さんは話を聞いてしまったとして、それでも、わたしを独^{ひと}りで行かせますか？」

「いいや、でもそれは——」

「わたしも同じです。真さんを独りにはしません。少なくともイーケンスを倒すまでは」

「これは、ぼくひとりの任務だ」

涙を拭いながら真が言った。

「そう、ですか」

恵美はとても落胆しているようだ。

「でも、ぼくひとりではイーケンスを倒せないかもしれない。恵美ちゃん、ぼくを手伝ってくれるかい？」

真は、ひとりで大事^{だいじ}を為^なそうとすることの愚かさをよく知っていた。そして、これ以上はない土壇場で、彼は本当の勇気を発揮した。誰かに助けを請う勇気を。

夜の低空に、恵美の目がキラキラと輝く。真に近づいてきて、ギリギリまで距離を詰める。ラビットハートとティーパーティーが70度の角度でクロスし、ふたりの顔が接近する。恵美の箒の先端が、真の箒の先端に潜り込んだ格好だ。箒の段差は約10センチ、接触はしなかった。なかなかいい腕だ。とても上達が早い。

なんと、これはほう天じゃないか！

ほう天は、『私はあなたと仲良くなりたいです』という魔女の合図だ。相手の箒に潜り込ませて、箒をクロスさせる、それがほう天だ。

箒での飛行は、上昇のほうが下降よりもコントロールが難しい。そこで、箒を下にすることで、「気に入らなかったら、いつでも私の箒を下に叩きつけていいよ」と、無防備であることを示し、好意をアピールするのだ。これがほう天だ。

猫や犬などの動物がリラックスしているときにお腹を見せる行動、いわゆる『へそ天』に少し似ているので、日本では『ほう天』と呼ばれている（「箒」が「天井」の意だが、ちょっと苦しいね）。

魔女たちは、特別なことがなければほう天をしない。仲の良い魔女同士がじゃれ合っている時か、仲直りのときにするくらいのものだ。私も何度かやったことはあるが……、なんだか照れくさいじゃないか。私の話はやめておこう。

ちなみに、男の魔法使いもどきは、魔女から滅多にほう天をしてもらえない。だから、これはとても幸運な出来事だと言えるだろう。ほう天をしてくれた相手は、誰だろう、真の大好きな倉田恵美なのだから尚更のことだ。この幸せ者め。

「ひとつの石をともに超えると友となり、ふたつの石をともに超えたら真の友となり、みっつの石をともに超えたなら、こころが永遠につながる」

恵美の目も、少し潤んでいる。

「有名な魔女の詩だね。でも、ぼくは魔女じゃないよ」

「いいんですよ。さあ、一緒にひとつの石を超えてイーケンスを倒しましょう。ふたりいれば倒せる確率は2倍になりますよ」

「恵美ちゃん、数学苦手でしょ」

「あら、何か言いました？」

恵美が真を睨む。

「ごめん。……いまは、君が女神さまに見えるよ」

睨まれた真は、照れくさそうに笑いながら泣いていた。

のちに倉田恵美は、渡辺真がSOSを出してこなかった場合、そのまま家に帰るつもりだったと述べている。真は、ほんとうにギリギリの瀬戸際だったのだ。

こうして、ひとり旅の予定が、ひょんなことからふたり旅になった。この出来事は、魔女たちにとって僥倖きやうこうと言うほかなかった。なぜなら、事態を把握している魔女の中で、渡辺真が生きて帰ってこられると考えていたものは、たいへん少なかったからだ。だが、倉田恵美が仲間に加わったことで、魔女たちは「これは、ひょっとすると奇跡の前触れかもしれない」と考えを改めるようになったのだ。

「10分ほど待っててくださいね。旅の支度をしてきますから」

と言って、箒に乗った恵美は、窓から自分の部屋に入った。

真と恵美は、いったん倉田家の上空まで戻ってきたのだ。女性の旅はいろいろと荷物が必要だからね。

20分が経ったころ、旅行カバンを持って箒に乗った恵美が部屋の窓から出て来た。魔法で窓の鍵を外からかける。

惠美は上昇して、空中の真と合流した。

「お待たせしました」

「パスポートは持ったかい？」

「はい」

惠美はカバンをポンポンと叩く。

「そのワンピース……」

真は、惠美の着ている服に釘付けになっている。惠美は、サバトで注文した濃紺のワンピースを着ているのだ。ややフォーマルで清楚な服だ。

「東京のサバトで注文した一着です。まさか、初のお出かけがイーケンス退治になるとは思いもしませんでしたよ」

「それは何の花？」

真は、彼女の胸を控えめに指さした。ワンピースのVネック付近に、小さな花の刺繍が施してある。

「野薔薇のいばらですよ。かわいいでしょ」

「そう、よく似合ってるよ。それじゃ行こうか。でも、えらく時間がかかったね」

「置き手紙を書いていたものですから」

「ふへん。家出しますって書いてきたの？」

「いえ。ちゃんと、『渡辺真さんと駆け落ちします。探さないでください』って書いてきましたよ」

「えっ、駆け落ち？」

「それがいちばん怪しまれませんか」

「駆け落ち……」

あまりに突然なことに、真はほかにつむぐ言葉が出なかった。

そこはね、『ぼくがかならず守って、傷一つつけずに無事に日本まで送り返すよ。だから安心してね』とか言うもんだよ。しかも相手は、危険な旅を一緒にしてくれると言っている、あまつさえ、ほう天までしてくれたいじらしい女の子じゃないか。これだから私の弟は……（妹のかれんの気持ちが少しわかったぞ）。

夜の日本海を、二つの箒が渡る。^{みなも}水面には影がない。

真を乗せたティーパーティーと、惠美を乗せたラビットハートだ。真はバッグを背負い、惠美はバッグをたすき掛け。二つの箒は、二本の補助ロープで繋がっている。

ふたりは韓国へ向かっているのだ。まあ、ラビットハートが引っ張っているのは、内緒だ。

はじめ補助ロープなしで海を渡ろうとしたのだが、波風が思ったよりも荒いのと、真が海上でどうしようもなく遅いので、補助ロープで繋いで惠美が引っ張ることにしたのだ。追い風だったはずだが、それにも関わらず遅かったようだ。

韓国の領土に入り、港町の市街地でふたりは地上に降りた。箒を分解して、バッグにしまう。少々年若いのが、これで見た目は、ごく普通の旅行者だ。

「韓国に来ちゃったねえ」

「来ちゃいましたねえ」

「恵美ちゃん。これからは、カラスフランの魔法を使うからね」

「カラスフラン。……ああ、自動翻訳の魔法ですね。でもどうしてですか」

「言葉が通じないのはトラブルの元だからね」

「言葉が通じないのも旅の醍醐味ですが、これは普通の旅ではありませんからね。仕方ないですね」

ふたりは、カラスフランの魔法を自分にかけて。

真がスマホを取りだして時刻を確認する。

「深夜1時半か」

「ここは韓国です。日本とは時差がありますよ」

「ああ、なるほど。じゃあ深夜2時半か」

「えっ……」

恵美は絶句した。真よ、お姉さんは悲しいぞ。

「真さん。ところで、ここ、本当に韓国でしょうか。まさかとは思うけど、北朝鮮の可能性も」

「いや、それは大丈夫でしょ。大丈夫……、だよね」

ふたりは、通行人とすれ違った。

「あの済みません、ここ韓国ですよね」

真が通行人に質問してみた。実に間抜けな質問だ。

「えっ……」

立ち止まった通行人はびっくりしている。

そりゃそうだ。

フロントにいるホテルマンは退屈そうにしていたが、入り口から入ってきた客を見ると、「アジア人の、大学生か高校生のカップルだ。それも深夜に」といった怪訝な表情を見せた。が、カップルが近づいてくるといつもの営業スマイルに変身だ。

「いらっしゃいませ、ご予約でしょうか」

ホテルのフロントに来たのは、韓国に着いたばかりの真と恵美だ。

「予約なしです。一番安い部屋を2つお願いします。一晩の予定です」

「できれば、隣の部屋をお願いします」

真が注文し、恵美が条件を付け加えた。

「すみません。現在、スイート以外の部屋は空いておりません」

「そっかー。それじゃ別のホテルを当たります。ありがとう」

ふたりはフロントを離れようとした。

「今だけですが、一番安いツイン部屋の料金でスイートに泊まれますが、いかがでしょうか」

ホテルマンはそう言った。

「えっ、どうしてそんなことができるんですか」

聞き捨てならないことが耳に入ったふたりは、フロントに食い付く。

フロントマンは声をひそめた。

「実はですね。出たんですよ、スーパートコジラミが」

「えっ、スーパートコジラミ。怖いわ」

惠美はゾットしたようだ。

「惠美ちゃん知ってるの？」

「知らないんですか、スーパートコジラミ。なんでも、同じ殺虫剤を使い続けた結果、どんな殺虫剤も効かない、とんでもなく凶悪なトコジラミが誕生してしまったという話ですよ。それがスーパートコジラミ。でもあれは、欧米あたりの話だと思ってた」

「そうなんです。先週、アメリカの方が宿泊なさったのですが、どうやら、そのかたがスーパートコジラミを持ち込まれたようで。それで現在、業者がスーパートコジラミ退治をしているというわけです。あっ、ご安心ください。スイートの階だけは、まだスーパートコジラミに汚染されていませんので」

「でも、どうして安い部屋の料金でスイートに泊まれるんですか？」

惠美の質問だ。これはごく自然な疑問だ。このような好条件を提示されたら、詐欺か何かを疑うのが常識だ。

「まず、ホテルは保険に入っているから、お客さまがゼロでも損をしないのです。もうひとつ、夜遅く来るお客さまを追い返すのは、ホテルマン失格ですからね」

「じゃあ、スイートを二部屋お願いします」

「申し訳ありません。空いてるスイートは一部屋だけです」

「そっかー」

真はがっかりしている。安い料金でスイートに泊まれるチャンスを無駄にしたと思えば、誰だって悔しがらるだろう。

「スイート、一晩お願いします」

惠美が言った。

「えっ!? ちょっと、惠美ちゃん」

真はたいへん驚いた。

「はい、かしこまりました。ウォークインで、スイート一泊ですね」

ホテルマンは端末をいじっている。

「ウォークインってなんだろう」

「さあ? なんでしょうね」

真と惠美は小声でおしゃべりだ。

「失礼ですが、よろしければ、こんな深夜に来られた理由を教えてくださいませんか」

とホテルマンに聞かれたので、真は「初めての海外旅行なのでゴタゴタしてしまって」と無難に取り繕った。ホテルマンは少し引かかったようだが、深追いはしなかった。真と惠美の服装がフォーマルだったことが、ここでは幸いしたようだ。

「次は、事前にご予約なさることをおすすめします。そのほうが安く泊まれますから。ちなみに、ウォークインは予約なしのお客様のことですよ」

ふたりは、宿泊料金を確認してから宿帳に記入し、鍵を受け取った。

宿帳の記入は、さりげなくペンに魔法をかけてからモニターに書いた。魔法のペンで書かれた文字を見た人は、たとえ相手が未成年でもすぐには不審がらず、警察への通報

も少し遅れるのだ。魔法はとても便利だ。

「エレベーターは2番か4番をお使いください。それ以外は清掃中です」

真と恵美と、別のホテルマンが、2番のエレベーターに乗る。

扉を開けると、そこは間違いなく、韓国の高級ホテルのスイートルームだった。

ホテルマンに続いて、荷物を持った真と恵美がスイートに入ってくる。

異次元の贅沢品が目焼き付く。部屋はかなり広く、70インチの液晶テレビや、高級ソファーや、キングサイズのベッドなどが目に飛び込んでくる。

「明日は何時に起床なさいますか」

ホテルマンが訊いた。

「朝9時までには目を覚まさないでください、起こしてください」

「わかりました。何かありましたらお申しつけください。サービスまでスイート待遇はできませんが、どうぞ当ホテルをご堪能ください」

ホテルマンが部屋を出ていった。

真と恵美は荷物を床に置いて、キングベッドをチラ見しながら、吸い寄せられるようにまず窓際へ。

窓にはレースのカーテンがかかっている。真が手で開けようとする、レースのカーテンが自動で開き始めた。

「えっ、自動だ」

「さすがスイート、知らない世界ですね」

カーテンが開き、眼下に深夜の港町が広がる。

「うわぁ～絶景だぁ。いい景色ですね」

「45階だしね。ぼくは魔法使いもどきだから高い場所からの風景には慣れてるけど、でもこれはちょっと凄いな」

恵美がスマホで写真を撮る。

「言葉、通じましたね」

「よかったよ」

ふたりは部屋を探索し始めた。

広いリビングルームが一つ、キングサイズのベッドが二つある寝室が一つ、寝室の横にトイレとお風呂があり、それとは別に、トイレとシャワー付きの小部屋が一つあった(スイートの内部にもう一つ小部屋があるのだ)。リビングと寝室はつながっている。

真と恵美はにらみ合った。

「「最初はグー、じゃんけんぽん」」

勝ったのは真の方だった。

「ちくしょう、負けたぜ」

恵美が悔しそうに漏らした。

「じゃあぼくは、小さい個室のほうを使うね」

「えっ、勝ったんですよ」

「勝った方が選べる。古来よりの掟だよ」

真は荷物を持った。

「少し話しましょう」

「グッドアイデアだね」

ふたりは、荷物を持ってリビングに移動した。

ソファーに座った真が、テーブルに置いてあるリモコンを手に取り、壁掛けテレビの電源を入れた。韓国のテレビ局のCMが流れ始めた。恵美も少し距離をおいて座った。

「さすが大画面だ。何インチだろう？」

「外国に来てまでテレビですか」

「やっぱり、テレビの音声は自動翻訳されないな」

「あっ、確かにそうですね」

真はテレビを消した。

「ところで、恵美ちゃんは引っ越して来てどうだった？」

「なんですか、唐突に」

「こういう時は、世間話でもして、お互いの距離を詰めるのが常道だよ。リラックスできるしね」

「とってもよかったですよ。デジタル機器が壊れる呪いは解けたし、魔女見習いになったし、あとは言いにくいんですが……」

「なに？」

「怒らないでくださいね。キャンディちゃんが女の子だったなら完璧だったんですが。だって、12年間、キャンディちゃんを女の子だと思い込んでいたものですから」

「母さんは女の子が欲しかったみたいだね」

「えっ、4人目ですよ」

「リアル若草物語がしたかったみたい。はっきりとは言わないけど」

「はぁ、そうですね。なるほど、若草物語かぁ」

恵美はあれこれ考えを巡らせている。

「真さんは、どうでしたか。わたしが引っ越して来て」

恵美が質問をし返した。

「幻想小説同好会の部員がひとり増えて、そりゃあもう大喜びだよ」

「それから？」

「う〜んと。最初は地元の大学に進むつもりだったんだけど、東京の大学もいいかなあって思ってたところだよ」

倉田恵美は真に喋ったことがある。自分の志望大学は、第一志望も第二志望も東京の大学だと。これ以上はやぶ蛇だろうと恵美は考えた。

「それより、どうやってイーケンスを倒すつもりなんですか」

恵美は強引に話題を変えた。

「いろいろ考えてるんだけど、何から話したものかね」

「わたし考えてみたんですけど、拳銃^{けんじゅう}でパンツてのはどうでしょう」

恵美は、手を使って拳銃を打つしぐさをした。

「何年前かにNOSAが計算したんだけど、拳銃でいどじゃイーケンスは死なないらしい。ミサイルを使えば確実に死ぬそうだよ。もし、ぼくたちがイーケンスを倒せなかったら、海底に沈んだアトランティス大陸に、ミサイルが撃ち込まれることになると思うよ」

「そうなんですか。でもNOSAが計算したんですか」

恵美が不思議そうに言った。

「NOSAに勤めてる魔女がね」

真の説明に、恵美は納得したようだ。

「困ったな、ザンキャリエンは効かないそうだし」

「いや、ザンキャリエンを使うんだ。それが切り札さ」

「えっ。璃々杏さんが、イーケンスは自衛の魔法をかけているからザンキャリエンは効かないって言っていましたよ」

恵美はたいへん面食らっている。そりゃあそうだろう。ザンキャリエンで倒せるなら、魔女たちもこんなに苦労はしていない。

「正攻法でやった場合は、もちろんその通り、効かないだろうね。でも、いくつか裏の方法があるんだ」

「例えば？」

「ポーランドと大英帝国さ」

「意味が分かりません」

真が秘密のプランを話した。

「なるほど、それならいけそうな気がする。でも、子供ふたりで大丈夫かな。これから旅の仲間は増えるんでしょうか」

「たぶん増えないよ。魔女は、イーケンスを倒せないから連れて行けない。人間は、海底トンネルの移動に時間がかかりすぎるから、やっぱり連れていけない。消去法でぼくたちふたりで行くしかないんだ」

「そうですか。なるほどそうですね。となると、ふたり旅ですね」

「帰ったら母さんに殺されるな」

「璃々杏さん、怒らせると怖いんですか？」

「怖いよ、普通にね。恵美ちゃんのお母さんは？」

「とても怖いです」

「そう」

ふたりはしばし無言になった。

「恵美ちゃん、なぜあんな予言が出たと思う？」

「イーケンスですね。なぜでしょう。ちょっと意図を図りかねます」

「たぶん、イーケンスが目覚めたら、魔女たちから裏切り者が出るんだと思うよ。だから、男の魔法使いじゃないと倒せないっていう予言が出たんだろうね」

「裏切り？　ありえない話ではないけど。何か根拠があって言ってるんですか」

「小林梅美さんに『勝算はあるのか』と訊かれた。ぼくは『ある』と答えたけど、具体的な作戦は訊かれなかった。たぶん、情報が漏れるのを怖れたんだと思う」

「ふ〜ん、それから。つづけてください」

「恵美ちゃん、『望みとあれば永遠の若さを与えよう。その代わりに、私のしもべになるのだ』ってイーケンスが言ってきたらどうする？」

「永遠の若さ、そんな魔法があるんですか」

「さあね。でも、イーケンスの強さは尋常ではなかったらしいからね。ヤツが永遠の若さ

を得る魔法を発見していたとしても、ぼくはたいして驚かないよ」

「永遠の若さかぁ……。欲しいかと問われれば、そりゃ欲しいですよ」

「やっぱりそうか。恵美ちゃん、正直に答えてくれてあんがと」

「ひょっとして、わたしが裏切るのかも」

恵美は真剣につぶやいた。

しばらく措いて、真が腹を抱えて笑い出した。

「何ですか？ 失礼な！」

「ごめんどめん。自分はダメかもって思う人は大丈夫だよ。だから恵美ちゃんは大丈夫」

「そうでしょうか」

「もう遅いから寝るよ。おやすみなさい」

真が小部屋に移動し、恵美は寝室に移動した。

「あっ、寝るまでの間、小部屋の扉は開けたままでいいですよ。ただし、寝るときには必ず閉じてくださいね」

ふたりの距離が開いたので、恵美の声は自然と大きくなった。

「わかったよ。はぁ、帰ったらクラスメイトたちになんて言われるんだろうな」

真の愚痴も大声だ。

「寝室を覗いたりしたら最大級の攻撃魔法を喰らわしますからね」

「寝るときは個室に鍵をかけるから大丈夫だよ」

「そう言って何人の魔女を泣かしてきたことか」

「そうそう、泣かした魔女は数知れず。『真さん、責任を取ってくれないなら死んでやるんだから』ってなんでそうなるんだよ、もう」

「うわぁ～、凄い凄い。なんてふかふか」

「何やってるの？」

恵美の姿を視認できない真が問うた。

「ベッドでゴロゴロしてるんですよ。このベッド凄いですよ」

「ぼくもゴロゴロしよう」

真は、小部屋のベッドに横になってゴロゴロした。

「いい夢が見られそう。さすがスイートですねえ」

恵美は気分が高揚しているようだ。

「こっちは普通の高級ベッドだな」

真はガッカリだ。

カランコロン、音がする。

「何してるの？」

また真が問うた。

「荷物チェックと整理です。寝る前にやるのが鉄則です。あしたに持ち越すとトラブルの元ですよ」

「なるほど。海外旅行の経験がないから思いつかなかったな。ぼくも荷物チェックしよう」

カランコロン。

「真さん、占いどおりになりましたね。真さんは世界旅行にでかけた。わたしは大きな事

件に遭遇した」

「男としては、占いどおりにことが運ぶのは、あまり面白くないけどね」

「占いは嫌いなの？」

恵美の声には、予想外とでも言いたげな雰囲気があった。普通の人が占いを毛嫌いするのはわかるが、真は魔法使いもどきだからね。

「魔女の占いと人間の占いじゃ格が違う、横綱と序の口くらい違うよ。それくらい、魔女の占いは信用に値する。でも、言葉にするのは難しいけど、なんか納得いかないな。おっと、ゲーム機を忘れた。どこかで買うか、スマホのゲームで我慢するか」

「わたしは、璃々杏さんの教えを消化するのでやっつです。占いがどうこうと考えてるいとまはない。ここ数ヶ月で環境が変わりすぎたんだ。げげっ、アレを忘れた」

「なに？ 恵美ちゃん」

「いえ、なんでもないですよ。てゆーか、スカートの眷属のプライバシーに土足は厳禁ですよ」

ジッパーを閉める音が聞こえる。どうやら恵美の荷物整理が終わったようだ。

「スカートの眷属ね。なんとなく理解したよ。もう遅いから寝るよ。おやすみなさい」

真も荷物整理を終えて、バッグの口を閉じた。

「おやすみなさい。あの——」

「なに？」

「わたしを頼ってくれてありがとう」

「こっちこそだよ。ぼくを助けてくれてありがとう。ああ、外国で眠るのは初めてだ」

「わたしなんか、家族以外の男性と寝るのは初めて……。真さん、プライバシー侵害ですよ！」

「自分から言ったくせに」

「なんですって！」

「ゴメン。おやすみ」

「おやすみなさい」

真は個室の扉を閉めた。

彼は、スマホを取りだしてメールを打つと、そのままベッドに横になった。

どんどんどん、と部屋を強くノックする音と、若い女性の声が聞こえる。

「真さん、起きてください。起きて、起きて」

真は、眠い目をこすりながら、どうにか起きた。ベッドサイドのスマホを確認すると、まだ8時半だ。日本時間、韓国時間、どっちだ？

真は小部屋の扉を開けた。

「あっ、真さん。大変なんです。スマホを見てください。スマホです」

「スマホがどうしたの？ せっかくだろ夢見てたのに」

「真さん、そのまま寝たんですか」

真は頷いた。彼は魔法使いもどきの正装のまま寝たのだ。

「わたしはちゃんとローブに着替えて……。じゃなかった。真さん、スマホが大変なんですよ」

「だからどうしたの？ 壊れたの？」

「ひょっとするとそうかも知れません。今朝、起きてスマホを確認したら、魔女アプリが変なんです。起動しても何も表示されないんです。マジョッターも、魔女の掲示板も、魔女の質問道場も真っ白です」

真はベッドサイドへ行き、スマホから充電ケーブルを抜いた。

「充電したまま寝たんですか」

部屋をのぞき込みながら恵美が言った。

「ぼくのスマホはバッテリー保護機能がついてるから問題ないんだよ」

真が扉のところまでくると、スマホの魔女アプリを起動させた。

画面は真っ白で、『ただいまご利用になれません』とだけ表示されている。

「ぼくのもそうだ。ほかには？」

真は淡々と言った。

「メールが全滅です。表示させても、広告メールは表示されるのですが、それ以外はまったく表示されません」

真はメールを立ち上げた。なるほど、宣伝メールは表示されるが、あとは真っ白だ。

「同じですね。わたしだけじゃないんだ。良かった」

「ほかには」

「あと、電話がかかりません。どこへかけても繋がらないんです」

真はスマホで電話をかけた。呼び出し音すら鳴らない。

「繋がらないね」

「やっぱり同じか」

恵美は思い出したように電話をかける。真のスマホが鳴る。

いろいろ試して、お互いに電話とメールとSMSができることを、ふたりは確認した。

「恵美ちゃんとは電話もメールもできるのか。……あと1時間寝させて」

と言って真は扉を閉めようとした。恵美は閉まりかけた扉に足を突っ込んだ。真は扉を閉めるのをやめた。

「危ないよ」

「心当たりがあるんですね。説明してから寝てください」

「起きたら説明するよ。いい夢だったのに」

「どんな夢なんですか」

「かれんが土下座して謝ってきた夢だよ。お休み」

真はまた扉を閉めようとしたが、恵美が強引に小部屋に侵入してきた。

「恵美ちゃん、不用心だよ」

眠たそうな真は、そう言ってベッドに座った。

「説明してください」

恵美は真剣そのものだが、真はポリポリと頭をかいた。

「うんとね、ぼくが寝る前、日本の魔女協会にメールを送ったんだよ。『イーケンス退治に倉田恵美さんを同行させます。一緒じゃないならこの任務を放棄します』って」

「魔女協会……それで魔女アプリが使えなくなったんだ。でも、メールや電話が使えないのはどうして？」

「魔女アプリはそれくらいできるんだよ。それだけの権限があるんだ。実はアレ、とんでもないアプリなんだよ。裏でいったい何をしているのやらだ。もう一眠りさせて。かれんを一族から追放する寸前だったのに」

恵美は小部屋から追い出された。

「お休みなさい。いい夢見てね～」

そう言うと、恵美は小部屋の扉に向かってあっかんべーをした。

「お決まりになりましたか」

これぞ普段どおり、といった口調でボーイが言った。

ここは、ふたりが泊まったホテルの、スイート専用レストランだ。36階にある。

レストランの窓際に座っている真と恵美は、今、メニューと睨めっこだ。ボーイは直立不動の状態で待機している。

「一番安いブレックファーストをお願いします。お酒はなしで」

恵美はメニューを閉じた。

「ぼくも同じ物をお願いします」

真の言葉を聞いた恵美がちょっと驚いた。

「真さん待って、違うものを頼んだほうが、ねっ、嫌いな物が出てきたら交換できるしね、ねっ」

「なるほど。じゃあぼくは、二番目に安いブレックファーストをお願いします。お酒はなしで」

「かしこまりました。一番安いブレックファーストと、二番目に安いブレックファーストですね」

ボーイが下がった。

「ふう、スイートの朝食は命がけだよ」

ふたりは窓の下の景色を見た。文字は判読できないがハンゲルの看板が見える。そう、ここは日本ではないのだ。

「来ちゃいましたね、韓国に」

「来ちゃったね。正直、ふたり旅になるとは思わなかったよ」

「何か不満でもありますか」

「恵美ちゃん、生きて帰れる保証はどこにもないよ」

「旅は道連れ世は情け、ですよ」

ボーイが料理を持ってきた。

「お待たせしました」

ボーイが料理を所定の位置に展開する。

真のお腹がクゥ〜と鳴った。

恵美は微笑みながら目を細めた。

その後ふたりは、またスイートの部屋に戻ってきた。

「やっぱり、マジョッターが表示されないなあ」

恵美がリビングでスマホをいじっている。

「マジョッター？ ああ、ウィッターのことか」

隣にいる真は荷物整理中だ。

「さっきも言いましたが、マジョッターも、魔女の掲示板も、魔女の質問道場もまるで表示されないんです。なんだか心にぽっかり穴が空いた感じ」

「魔女の質問道場ね。さすがにあれは引くなあ。女性ってときどきどぎついよね」

「えっ、見たことあるんですか、魔女の質問道場」

恵美はびっくりだ。魔女の質問道場は男性は使えないはずだから、これは当然の反応だ。

「ぼくは男だから魔女の質問道場は使えないけど、以前、バグかなんかで表示されたことがあったんだよ」

「見たんですか？」

恵美はどぎまぎしている。恵美ちゃん、魔女の質問道場は気をつけようね。気軽に何でも質問していいわけじゃないよ。

「チラッとね」

「魔女の質問道場は男子禁制ですよ」

「だから、バグかなんかで偶然表示されたんだってば」

「そうですか。ならいいです。あの、わたしの質問、見てないですよね」

「見てないよ。見ることができたの、半年くらい前だし」

恵美は安心してうんうんうなずいた。

真が、バッグから分解されたティーパーティーを取り出して、組み立ててみる。

「うん、いい筈だ」

「ところで真さんの使っている筈、名前があるんですか。えらく速かったけど」

「あるよ。ティーパーティーだよ」

「ティーパーティー、何ですか。ティーパーティー・オレンジ、ティーパーティー・シナモン、ティーパーティー・ブラウニー、それから——」

「ただのティーパーティーだよ」

「からかわないでくださいよう。ただのティーパーティーっていったら、ジャンヌ・ダルクが使っていた筈じゃありませんか」

「そう、ただのティーパーティー。改造してあるけど」

「えっ、マジで?!」

驚いた恵美が、真からティーパーティーを取り上げた。

「これが、ジャンヌ様が使っていた筈。なんで真さんが持ってるんですか」

目がうるうるの彼女が訊いた。

「修理のために京都に来てたらしいんだけど、その折に、イーケンスの予言とかち合ったんだそう。それで、フランス魔女協会から特別に貸し出しの許可が降りたんだそうだよ」

「なるほど。これがティーパーティー」

恵美はずっとティーパーティーに見とれている。

真は、韓国で飛行機に乗ろうとしたが、恵美が反対した。

惠美曰く「真さんが飛行機に乗ろうとしたってことは、璃々杏さんが空港で待ち伏せしている可能性が大なんですよ」とのこと。これは実際、当たっていた。璃々杏は韓国の空港で、真たちを探していたのだ。

真と惠美は、韓国の長距離バスに乗った。

途中、バスに大きな蜂が入ってきて乗客はパニックになったが、真が窓を開けると、不思議なことに蜂はおとなしく出て行った。

バスに揺られること5時間強、ふたりは韓国の^{こうかい}黄海側の港についた。

眼前に広がる、魚、サカナ、さかなたち!!

惠美はスマホを取り出すと、ガラス越しに魚の写真を撮り始めた。

ここは韓国の水族館。

昨日は、バスで黄海側の港町にくと、一流ホテルの一番安い部屋に泊まった。もちろん部屋は別々で。午前9時にチェックアウトしたが、中国行きフェリーの出航は午後だ。時間を持って余したふたりは、水族館にやってきたのだ。

「キレイですねえ」

「だねえ」

真も写真を撮り始めた。

ふたりが次の区画に来たとき、若い女性がいるのが見えた。手には缶ビール、カバンを持っているが、それにも缶ビールが入っているようだ。女性は魚を見ながら泣いていた。こう言っでは何だが、不思議と絵になる光景だった。

「惠美ちゃん、ここは素通りしよう」

「はい」

真が小声で言うと、惠美も小声で答えた。

「待ちなさい、少女少女」

缶ビールを飲んでいる女性がふたりを呼び止めた。

「お構いなく。ぼくらは急ぎなもので」

あくまでも真はスルーしようとした。

「ふたりとも魔法使いね」

缶ビールを飲んでいる女性は事もなげに言い当てた。

びっくりした真と惠美が立ち止まった。その女性をよく見ると、美しいワンピースを着ているのに気がついた。

「あなたは魔女ですか？」

「ええそうよ。私の名前はホン・ユナ、先月20歳になったの」

「それはおめでとうございます」

「よくないわ」

缶ビールの魔女は、カバンから新しい缶ビールを取り出した。

「どうしてですか」

「あなたたちも知ってるでしょう。あのイーケンスが目覚めるのよ。おまけに私は20歳なの」

「年齢がどうかしましたか？」

「知らないの？ 20歳以上の魔女は、イーケンスとの戦いに強制参加よ。誰が決めたのか知らないけど、とにかく、昔からそう決まってるわ。ああ、なんてことかしら、私の人生短かったなあ」

「まだ負けると決まったわけでは……」

「あんたたちいくつ？」

「18歳です。ぼくは渡辺まことです」

「わたしは倉田恵美です。17歳ですが、もうすぐ18になります」

「18と17、せいぜい第三陣ね。さすがにそれまでにはかたがついてるわね。ああ、私は自由な魚に生まれたかった。魚なら、イーケンスなど気にするまでもないわ」

缶ビールの魔女は、ビールを飲み始めた。

真と恵美は、缶ビールの魔女ホン・ユナとしばらく雑談をした。

韓国発中国行きのフェリーに、真と恵美が走り込んできた。

船員にチケットを見せて乗船。ふたりは最後に乗り込んできたのだ。荷物を持ったまま、甲板で立ち話をはじめた。

「危なかったね」

「ええ」

ふたりは、水族館での時間が楽しくて、どうやら時間を忘れてしまっていたらしい。こういうのを世間ではデートと言ったりするのだが、ゲフンゲフン……。まあいいや、お姉さんは興味ないよ。

フェリーが汽笛を鳴らし、出港した。

ふたりが周りを見ると大勢の客がいる。人種や国籍はさまざまなようだ。

「恵美ちゃん、ついに世界旅行が始まったよ」

真は感慨^{かんがい}深げにしている。

「何を言ってるんですか。日本を出発したのはおとといの晩ですよ」

「いや、韓国までは母さんに連れ戻される可能性があったからさ。母さんの箒は早く遠くまで飛ぶからね。でも、ここまで来ればさすがに諦めたと思うよ」

「ああ、なるほど」

「韓国の次は中国へ、だな。いつか世界旅行するのは分かってたけど、正直ドキドキが止まらないよ」

「わたしも久々の海外旅行でドキドキしてますよ」

「恵美ちゃんは以前どこへ行ったの？」

「4年前の夏休みに、イタリアとスペインです」

「で、どうだった」

「イタリアはまあまあ。スペインはとても気に入りましたよ。まさに情熱の国って感じでしたね。フラメンコ！」

恵美は数秒、フラメンコを踊った。ぎこちない動きだったが、真が見とれていたのは言うまでもない。フラメンコは、スペイン南部のアンダルシア地方の踊りだ。

「そっかー、いいなあ。恵美ちゃん、妙な特技があるんだね」

「妙などは失礼な」

別に恵美は怒っている訳ではなかった。いや、少し怒っていた。

「そのヘアピンは？」

恵美のヘアピンが昨日までと違っていることに、真は気がついた。

「あっ、これ。さっき買い物をしたときに一緒に買ったんです」

「なんか、珍妙なヘアピンだけど」

そのヘアピンは、赤い飾りがついていた。

「なんだかわかりますか？ 当ててみて」

「赤いから、リンゴかな」

「外れです」

「トマトかな」

「違います」

「イチゴ？」

「もう、キムチに決まってるじゃないですか。韓国で買ったんですよ」

「えっ、キムチ？ キムチのヘアピン？」

真は目を白黒させている。

「似合いますか？」

「似合うけど、そのセンスはどうだろう？」

「真さん。それ、韓国に対するヘイトですよ」

「う、うん。ごめん」

なんだか、恵美のことばが理不尽に感じられる真であった。

ふたりは、フェリーの2等の部屋を二つ予約していた。3等以下は相部屋なので避けたのだ。

その理由がコレだ。

「じゃあ、やってみて」

真が促した。ここは恵美の部屋だ。

「グトジャーニュ」

恵美が杖を振って、防御魔法グトジャーニュを使った。彼女が、直径2メートルの光る結界に包まれる。

これは、ある程度の攻撃魔法を防ぐことができるものだ。長距離からの攻撃魔法は大概防げる。ただし、箒での飛行中は、この魔法は使えない。飛行中は、もっと効果の低い防御魔法を使うことになる。

「いいよ、いいよ。上達が早いね」

恵美は得意顔だ。

「でもね。穴が、ひとつ、ふたつ」

真はグトジャーニュの穴を指摘した。

「習ってまだ2ヵ月ですよ」

「そうなんだけど、防御魔法くらい物にして貰わないと君が危険なんだ。正直、こっちも困るし」

「攻撃魔法は？」

「今からじゃ攻撃魔法は間に合わない。それに、こんなところで攻撃魔法を練習したら、フェリーがタイタニックしちゃうよ。消して」

恵美がグトジャーニュを消す。

そう、恵美の防御魔法の練習をするために、個室の部屋をとったのだ。

「さあ、もう一度」

「グトジャーニュ」

「いいよ。でも、いち、に、さん。穴が増えてるよ」

「誰かさんの教えかたが上手くないんですよ。別の誰かさんと違って」

「そりゃ、ぼくは母さんのような優秀な魔法使いじゃないよ。いまは無い物ねだりしてる時じゃないんだ。さっ、集中してもう一度」

恵美がグトジャーニュを消す。

「グトジャーニュ！」

「……穴がひとつ。よし、上達してるな。恵美ちゃんよく頑張ったね」

イラつきながらも照れる恵美であった。

「3日くらいで魔法をマスターできる裏技はないかなあ」

「恵美ちゃん、『魔女の大望^{たいぼう}は大過^{たいか}を招く』だよ」

「魔女見習いになってよく聞くようになったけど、そのことわざ、どういう意味なんですか？」

「さてね。休憩しよう」

真が椅子に座ってスマホでゲームを開始し、恵美がベッドに座りスマホで勉強を始めた。

「恵美ちゃんはなにやってるの？」

「勉強ですよ。これでも受験生ですから。真さんは？」

「ロールプレイングゲーム」

「ふ〜ん。余裕ですねえ」

「それが余裕じゃないんだなあ」

苦笑いを浮かべる真。そのとき、真のスマホが鳴った。メールの着信音だ。

「真さん、メールの着信のようですよ」

真はゲームを中断してメールを見た。

「おやおや、日本魔女協会からだ」

「えっ、なんて書いてありますか？」

「恵美ちゃんのスマホ、機内モードになってる？」

「ええ、海外のモバイル通信は料金が高い場合が多いので」

「機内モード強制のとき以外は、スマホを機内モードにするなって言ってきたよ」

と言って、真はスマホの画面を見せた。

「なるほどそうですか。料金は日本魔女協会に払ってもらどうぞ！ このギガ泥棒め！」

恵美はメールの内容を読むと、自分のスマホの機内モードを解除した。するとすぐに、メールの着信音だ。

「真さんに来たのと同じメールが来ました。特別なときがいい、機内モードにするなって。でも、これってアレですよ。わたしに『家に帰れ』と言ってこなかったってこと

は、真さんの旅の相棒として認められたってことですよね」

「そうだね。そういうことになるね」

真は、嬉しいような怖いような複雑な表情を見せた。仲間を得た高揚感と、恵美を巻き込んでしまった罪悪感が、心の内で戦っていたのだ。

ふたりは、フェリーの食堂で夕食を済ませた。

その後、それぞれ自分の部屋で眠りについた。

「真さん知ってますか。最近、中国人がたこ焼きを食べるようになったそうですよ」

「そうなんだ。最近、たこ焼きが値上がりしたと思ってたけど、中国人のせいだったんだな」

恵美と真の眼は、前方に中国大陸を捉えていた。

ここはフェリーの甲板、まもなく目的地の中国につく予定だ。

真たちの乗ったフェリーが、中国の港に接岸した。ふたりが荷物を持って、フェリーから降りる。

中国の街並みはとても近代的だ。ふたりは、中国の急発展ぶりに圧倒された。もちろん、古い建築物もあるが。

「凄い栄えてるな、中国。恵美ちゃん、凄いね」

「人口 13 億人は伊達ではないですね」

「日本は失われた 20 年だもんなあ」

「真さん、30 年という説もありますよ」

「マジで？」

「マジです」

真はどっと落ちこんだ。

真と恵美は、タクシーで中国の空港まで移動すると、近辺のホテルで一泊した。

そして昼、予約した飛行機まで時間がある。そこで、空港近くのリサイクルショップで物色を始めた。

真は、中古携帯ゲーム機とソフトを手にした。ゲーム機もソフトも日本向けのものだ。恵美は中古品にはあまり興味がないようで、始終、真にくっついていて、むろん、「悪の魔法使いを倒しに行く予言の子がゲーム？」と雑言を言うのを忘れない殊勝な恵美であった。

レジにいくと、真と恵美は、中年男性の店員に何度も見られた。というより、店員はなめるように見回してきた。ふたりは良い感じはしなかったが、「きっと万引きが多い店なのだろう」くらいにしか考えなかった。

「はい、ゲーム機とソフトで、1200 人民元ね。支払いはクレジットカード？」

真はクレジットカードを出した。

商品を袋にいれて、店を出ようとしたそのとき、

「ちょっと待って。あんたたち、ひょっとして魔法使いじゃないのかい？」

と店員は言った。

真は一瞬、ことばを失った。魔法使いではないかと思われたことは何度かあったが、

その相手は全員魔女だったのだ。今回はいろいろと状況が違う。相手は中年男性だ。魔法使いのはずがない。

「あの、どこかでお目にかかりましたか」

真は慎重にことばを選んだ。

「私はね、子供の頃、魔法使いだったのさ。だけど、男が魔法を使うのは、どうやら具合が悪いようでね。それで、ある日、魔法が使えなくなったんだ。私の言ってる意味が分かるかい？」

恵美は店内を見回した。ほかに客は数人。みな、レジに興味はないようだ。

「これを見てごらん」

中年の店員は、自分のバッグから厚紙に包まれた小さなものを取り出した。ビー玉サイズの石だ。

「ナーダストーン、いえ、パリラストーンかな」

恵美が思わず口に出して喋ってしまった。まだ、我慢ができていないな。

「パリラストーンだな」

真がかぼった。同じ罪を負ったのだ。

「やはり魔法の石か。何の石かはさっぱり見当もつかないが。でも、かつて魔法使いだった私にはわかる。これはたいへん貴重なモノだとね」

「どうやってその石を手に入れたんですか」

「簡単な話さ。ある魔女が死んだ。寿命だよ。本当に魔女かどうか知らないが、私は魔女だと思っていたよ。遺品がこのリサイクルショップに持ち込まれた。それで、この石は私の所有物になったのさ。おそらくこれは、魔法の仲間が回収し忘れたんだと思うな」

「なるほど」

「で、この石を買っていかんかね。どうせこの石は、魔法の使えない私には無用の長物だからね」

「あの失礼ですが、あなたはお幾つですか？」

「私は57歳だよ。それがどうかしたかい？」

真と恵美は顔を見合わせた。その男性は、どう見ても40代にしか見えなかったからだ。たぶん、30後半だと言っても通っただろう。

「あの、その石は、美容と健康によく効く魔法石ですよ」

恵美が、またつい喋ってしまった。

「はっはっはっ、なるほど。どうりでどうりで。私はよく40歳くらいに間違えられるんだよ。そうか、この石のお陰だったのか。はっはっ」

男性は豪快に笑った。

真は、パリラストーンを安く譲ってもらった。日本円で20万円ほどだったが、これは魔法石としては破格だった。パリラストーン級の石は400万円からが相場なのだ。

「えっ、ひとりしか乗れない？ こっちはちゃんと予約しましたよ」

恵美が、中国の空港のカウンターで声を上げた。

「はい。オーバースタッフでして。ポーランド行きの飛行機は、現在、空席が1つの状

態です」

カウンターの女性がそう告げた。

「オーバースタッフって何？」

真が質問をした。

航空会社は、キャンセルが出ることをあらかじめ想定して、多めに席を販売する。キャンセルが少なかった場合、とうぜん乗れなくなる人が出てくる。これをオーバースタッフと言うのだ。

「というワケでして、お一人様なら乗れますが、お二人は無理です」

「次のポーランド行きはいつですか？」

「3日後です」

真と恵美は視線を交わした。

「あの、アナウンスしてもらえませんか。ポーランド行きの便に乗る人で、チケットを譲ってもいい人はいないかって」

それは規約で出来ないと言われた。もちろん、非常時なら話は別なそうだが。ふたりは、ポーランド行きの飛行機のゲート付近で、チケットを譲ってもらえないかと多くの人に声をかけたが、結果は芳しくなかった。

ふたりはカウンターに戻ってきた。

「どうなさいますか」

カウンターの女性が声をかけた。

「ヨーロッパのハブ空港への便はありますか」

真が質問した。彼には（恵美にも）疲労が見える。

「2時間後の、ドイツへ行く便に余裕があります。ドイツのハブ空港経由でポーランドへ向かいますか？」

「はい、お願いします」

「こちらの落ち度ですので、ドイツへ向かう便、そこからポーランドへ向かう便を我々が手配します。むろん、追加料金は一切いただきません」

カウンターの女性は、ドイツ行きの切符を2つ差し出した。

ドイツ行きの飛行機に乗った真と恵美は、それぞれ違った表情を見ている。

通路側の真は大満足、窓側の恵美はあからさまに不満げだ。

「ほう～、これが飛行機か」

真はなんだかそわそわしている。新しいおもちゃを手に入れた子供のものである。

「スマホで予約したのに——」

「そうだけども、言ってみても事実は変わらないよ。それより、飛行機だよ、飛行機。ぼく、飛行機に乗るのは初めてなんだ」

「良かったですね」と恵美は素っ気なく言い、「ケッ、子供かよ」と小声で付け足した。

恵美のヘアピンが、きのうと違ったものになっているのに真は気づいた。

「恵美ちゃん、そのヘアピン」

「ああ、これですね。空港の売店で買った物ですよ。さて、何のヘアピンでしょう」

「パンダ？」

「あたりです。さすがにこれは簡単だったか。でも、ほかに好みのヘアピンが売ってなくて」

惠美は、ヘアピンを軽く触った。

「ひょっとして、行く先々で買い集めるつもり？」

「そうですよ。ヘアピンならたいして荷物にならないし、そんなにお金がかかる趣味じゃないし、それに、そろそろ卒業しないといけないし」

「学校？」

「違いますよ。ヘアピンですよ。いい大人で、かわいいヘアピンをしている人をそうそう見ないでしょう。わたしはそろそろ、ヘアピンから卒業です」

「ああ、確かに。姉さんたちも、高校、大学あたりでヘアピンを使わなくなったな。かれんはまだときどきしてるみたいけど」

「ところで、さっきリサイクルショップで買ったアレ、見せてください」

「これだね」

真は、買ったばかりの魔法石をポケットから取り出した。厚紙でくるんであるが、これは魔力を保つための一般的なやり方だ。厚紙を剥いて、魔法石を確認した。

「美容にいい魔法石ですよ。なにに使うんですか。ひょっとしてプレゼント？」

あれほど不機嫌だった惠美が、今はもう期待しまくりのご機嫌な表情だ。

「ああ、ゴメン。これは自分用なんだ」

「自分用？ パリラストーンは美容によく効く石ですよ。……ああ、なるほどね。いいんですよ、男子が美容に興味を持つのはとてもいいことですから」

「惠美ちゃんはまだ習ってないんだろうけど、魔法石には特別な使い道があるんだ」

「美容と健康以外になにかあるんですか」

「実はね、ぼくは、パリラストーンを魔力に変換することができるんだ」

「パリラストーンにはそんな秘密技があったんですか。ちょっと貸してください」

惠美は思わず手を出した。が、真は魔法石を守った。

「だめだめ、魔法石を魔力に変えることができるのは、魔法使いもときだけだよ」

「そうですか、それはがっかりです。いろいろと初耳でした。でも何に使うんですか？」

「これは魔力が満タンのパリラストーンだ。いろいろ役に立ちそうだ。使わないで済むに越したことはないけど。正直、手札は多いほうがいい」

「その石ひとつで、どれくらいの魔力が得られるんですか？」

「上級魔女2日分くらい、かな」

「えー、コスパ悪ッ！ あの、後で返しますから、その、パリラストーンを……」

と、惠美はおねだりの顔を見せた。真は無言でパリラストーンを貸した。惠美は、魔法石を食い入るように見ている。まあ無理もない。その魔法石は、高校生がおいそれと手にできる代物ではないからね。

『まもなく当機は離陸します。シートベルトの着用をお願いします』

とアナウンスがあった。

「時間だ、回収するよ。無くしたらいけないからね」

真は惠美から魔法石を取り上げた。彼女は名残惜しそうにしている。

ジャンボは空に舞い上がった。

ハブ空港とは、簡単に言うと乗換駅のりかえきの空港版である。

空港の規模が大きく、飛行機の本数も多く、また航空会社が拠点としていることもあり、ハブ空港を上手に使えば目的地まで無駄なくスムーズに行ける。

ハブと言っても、蛇のハブじゃ無いよ。自転車のタイヤのハブから来ていることばだ。ひとつの空港に、飛行機が放射状に待機しているのを、テレビや雑誌などで見たことがあると思う。あの様子が、自転車のハブに似ていることから、ハブ空港と呼ばれるようになったのだ。自転車のタイヤは、車軸しゃじくのハブから放射状にスポークが伸びているでしょう。アレですよ、アレ。

真と恵美を乗せ中国を出た飛行機は、約14時間かけてドイツのハブ空港についた。今は夕方だ。出発した中国時間では深夜なのだが、ドイツとは7時間時差があるのだ。

ここが目的地の人が大多数のようだ。真と恵美は、この空港でポーランド行きの飛行機に乗り換える予定だ。これは強行軍だな。ポーランド行きの飛行機まで2時間ある。

2時間のインターバルは偉大なヒマを創造した。時間を潰そうと、空港内の売店でうろろしていたら、恵美の様子が急変した。

「真さん、真さん」

真に話しかけた恵美は、何やら深刻そうだ。

「どうしたの」

「お花摘みです」

「いってらっしゃい」

「一緒に来てください」

「えっ、でも、ぼくは女子トイレには入れないよ」

「外で待っていてください」

「うん、わかったよ」

ふたりは空港のトイレに直行し、恵美は中に入り、真は外で待つことにした。

恵美はトイレを済ませると、個室を出た。ウォシュレットが無いのを残念に思ったが、贅沢をするための旅ではない。

洗面所までくると、ハンカチをくわえて手を洗い始める。ほかにトイレの利用者は数人。さすがドイツのハブ空港、人種は様々だ。たいていは大人で、子供がいても親と一緒にだ。恵美は、なんだか場違いな感覚に浸されている。

だが、自分もあと8ヵ月もすれば、高校の卒業旅行で友達と海外旅行をしてもおかしくない。総合的に見れば、自分はここにいてもさほどおかしくはないのだ。

それに、アジア人は見た目が若く見られることもあり、外国人からすれば自分は20代くらいに思われているかも知れないではないか。彼女はそう思うと、なんだか心の奥から元気が湧いてきた。

トイレから出ると、恵美の元気はほんの数秒で雲散霧消うんさんむしょうしてしまった。

真がないのだ。荷物もないし置き手紙もない。彼もトイレに入ったのかもしれない。だが、それなら電話かメールで連絡があるはずだ。恵美はスマホをチェックするが、なにも着信はない。もう一度周囲を見回して真がないことを確認すると、恵美は電話を

かけた。

その時、

「あっ、恵美ちゃん。こっちこっち」

と若い男の声がした。

空港のロビー中心の、椅子が固まって置いてある場所で手をふる人がいた。真だ。恵美は電話をすぐに切ると、椅子に座っている真に駆け寄った。

「外で待っていてくださいって言ったはずですよ」

「ごめん」

真はそう言って、となりの女性を見た。となりの女性は立ち上がり、恵美を見た。

その女性は、落ち着いたワンピースを着た 30 代と思われる白人女性で、手には箒を、ティーパーティーを握っていた。

「こんにちは、ミズ・クラタ。私はフランスの魔女で、クロエ・メルシエといいます。あなたたちがドイツへ寄ると聞いて飛んで来ました」

「はじめまして、倉田恵美です」

恵美はクロエが握っているティーパーティーをチラ見した。

「ああ、これですね。私はただ、ティーパーティーの修復具合を確認していただけています。ミズ・サトウの腕は確かですね。ティーパーティーはここ数年で最良の状態です」

クロエは、箒を真に返した。真は、箒を慎重に分解してバッグにしまった。

「私がここへ来た理由は2つ。ひとつ目は、ティーパーティーの状態を確認すること。これはもう果たしました。ふたつ目は……、それにしても、ミズ・クラタは無茶をしますね。世界魔女協会はここ連日、大騒ぎでしたよ。まさか、予言の子にグースベリーがついて行ってしまふだなんて。たしかに、魔女見習いは魔女ではないけれど、これは無謀です。とにかく、いろいろと協議を重ねたのですが……」

クロエは、まず真を見て、つぎに恵美を見据えた。

「世界魔女協会は、ミズ・クラタの、予言の子の帯同に許可を出しました。これを伝えるのが2つ目の理由です」

それを聞いた恵美は、ため息をついた。そのため息は安堵から出たものか、それとも引き留めて欲しかったのか、どちらだろう。

クロエは、旅の注意点をいくつか話した。もちろん、ケータイをなるべく機内モードにするなど念を押された。言うべきことを終えると、彼女は去った。

「わたし、正式に旅の仲間になっちゃいましたね」

「ああ、とてもありがたいことに」

「クロエさんはほかに何か言ってましたか」

「特に……。予想通り、作戦については何も訊かれなかったよ」

「そうですか」

近くのテレビに人だかりができた。興味をそそられた真と恵美は、テレビのそばまで移動した。

真と恵美が空港のテレビを見ると、何やらニュースが流れている。どうやら、洪水のニュースのようだ。だが、テレビやラジオの音声は魔法では翻訳されないの、詳細が分からない。

「洪水？ どこだろう」

「インドですよ。インドへは一度行ったことがあります」

ヨーロッパの若い女性が話しかけてきた。

「これでもまだ、『異常気象なんてない、陰謀だ！』って言う人がいるんですよ。信じられますか」

「オカルト論者は質が悪いですね」

真が応答した。

オカルト論者？ ははっ、自分は魔女見習いではないか。オカルトと魔法、どう違うのだろう、まだよく習ってなかったな……とぼんやりと思う恵美だった。

「CO2削減のためには、原発を増やすべきではないかしら。私はドイツ人だけど、原発には反対じゃないわ。まあ、私は少数派なんだけどね」

ヨーロッパの若い女性が挑発してきた。

「反対はしません。ですが、地震の多い日本では、今は火力発電に頼るほかありません」

真が反論した。

「まあ、あなたは日本人なのね。でも、地震が多いからCO2を出してもかまわない。これじゃ子供の議論だわ。話にならないわね。オカルト論者よりいくらかましだけど」

ヨーロッパの若い女性の攻撃が始まった。

「飛行機は多くのCO2を排出します。ここにいるあなたも、火力発電に頼っている日本人と大差ないではありませんか」

真はやりかえした。が、苦しい。

「私は毎日、飛行機に乗っているわけではありません。でも、日本人は毎日、火力発電のお世話になっているんでしょう。比較する対象が違います」

ほらね、やられた。真は苦虫をかみつぶしたようになっている。

「あの、失礼します。それでもあなたは飛行機に乗るんでしょう。飛行機で生計をたてている人がいるように、火力発電で生きる民がいてもいいはずですよ。飛行機も火力発電も、同じ必要悪です」

恵美が援護をした。これには真も驚いた。もっと驚いたのは、ヨーロッパの若い女性だった。

「まあ驚いたわ。日本人は議論が不得意だって聞いてたけど、例外もいるのね。日本の将来は、少しは明るいようね。さっきのは反論としては不十分だと思うけど。そろそろ時間だわ。失礼するわね」

ヨーロッパの若い女性が、テレビのそばを離れた。

「恵美ちゃん、援護ありがとう。ディベートが得意なんだね」

「いえいえ。でも、これでひとつ貸しです」

真が恵美の頭を見た。

「そういえば、恵美ちゃん、さっき買ったヘアピンに変えてないね」

「えっ、あたりまえですよ。こんなところでつけて、万引きを疑われたらどうするんですか」

「……そうだね」

「それより、こんど置いてけぼりにしたら、ただじゃ済ませませんからね」

「気をつけるよ。そろそろ時間だね」

ふたりは、ポーランド行き飛行機の搭乗ゲートへ向かった。

そして今は、ポーランドのトラムに真と恵美が乗っている。天気はくもりだ。

トラムは路面電車ろめんのことだ。日本でも走っているところがある。

とつぜん、トラムが止まった。

アナウンスがあって、乗客がざわつき始める。

「失礼、どうかしましたか」

真は近くのポーランド人に質問した。

「あら、アナウンスを聞いてなかったの。事故でこのトラムが数分止まるそうよ」

「ありがとうございます」

マイクを通したアナウンスは、魔法では翻訳されないのだ。

「困りましたね」

と恵美が言う。

「そうだね」

真はゲーム機を取り出して、ソフトを起動させる。『ドコロボ』だ。ドコロボは、ロボットにバトルをさせるゲームで、世界的に知られている。正式なタイトルは『ドッコイロボット』だ。恵美は頭をかいた。

小さな女の子が真に近寄ってきた。12歳くらいだろうか。

「あなたひょっとして日本人？」

女の子が真に質問する。

「そうだよ」

「オッケー、ドコロボでわたしと勝負よ」

「いいよ」

女の子はバッグからゲーム機を取り出した。真は設定したパスワードを見せた。女の子がパスワードを打ち込み、ゲームが開始された。恵美は白い目で見ている。

ゲームは、真が勝った。

「うぁ～ん、日本人に負けた～」

女の子が泣き出す。

恵美は冷たい視線を真に送る。

「ゴメンゴメン。もう一回やろう。ねっ、ねっ。`勝負は時の運、だよ」

泣いている女の子を真があやした。

「……いいわ」

女の子が泣き止む。もう一度対戦する。今度は女の子が勝った。

「いやぁ、きみ強いね。これ日本のゲームなのに、お兄ちゃん負けちゃったよ」

しらじらしく真が言った。

だが、女の子はまたしても泣きそうだ。

「うわぁ～ん、日本人がわざと負けた～」

女の子は去っていった。

恵美が真を睨んでいる。

「で、ぼくにどうしろって？」

「最初から負けてれば良かったんですよ。小さい女の子相手に本気になって。バカみたい」

「ああ、そうだよ。ぼくはバカだよ。大バカさ」

でも、恵美はちょっと嬉しそうだ。

トラムが動き出した。

フレデリック・ショパン、彼はクラシック界の超有名人だ。

彼の作曲した『別れの曲』や『ポロネーズ英雄』にメロメロになる女性は少なくない。もちろん、男性だって虜にする。彼の故国ポーランドには、ショパン博○館があり、ショパンゆかりの品々が展示されていて来館客も多い。

真と恵美はショパン博○館にやってきた。ポーランド時間で午前12時だ。

ふたりは、ショパン博○館に入った。職員と思われる比較的わかい女性が、ふたりに近づいてきた。

「予約の方ですか」

「いいえ」

「すみません、今日は来客でいっぱいなので、予約して、また明日お越してください」

『『ジョルジュ・サンドは踊る、光と闇のあいだのしじまで』』

真は静かにそう言った。

女性の職員はたいへん驚く。真が言ったことばは、魔女たちのあいだだけで通じる合言葉なのだ。

女性の職員に案内されて、ふたりは、ショパン博○館の資料室にきた。女性の職員は椅子に座り、真と恵美はゲスト用のソファに座って、3人はガラステーブルを囲んでいる。

「ご存じだとは思いますが、ショパンの恋人だった作家のジュールジュ・サンドは、魔女でした。歴史上では、ジュールジュ・サンドの奔放^{ほんぼう}さをショパンが受け止めきれずにふたりは別れたということになっていますが、事実は違います。ジュールジュ・サンドが魔女であることを知って、ショパンの恋心がだんだんと冷めてしまったのです」

「ほう、そうですか」

女性職員の話を、恵美は興味深く聞いている。

「ショパンに持病がなければ、結果は変わっていたかも知れませんね。ところで、ふたりが付き合っていたころ、ショパンが不眠症に悩まされたことがありました。そこで、ジュールジュ・サンドは、彼から作曲の手ほどきを受け、ピアノ曲を完成させました。それが、『ジュールジュ・サンドの子守歌』と呼ばれる曲です」

女性の職員が、古い五線譜を取り出してテーブルに置く。

「これがジュールジュ・サンドの子守歌のオリジナル楽譜です」

「ほうほう」

「なんか凄い曲だ」

真と恵美が、楽譜を食い入るように見ている。

「スマホのカメラで見てください」

ふたりはスマホを取り出して、ジュールジュ・サンドの子守歌の楽譜を液晶画面に表示

させた。

「あれ、白紙だ」

「ホントだ、何も映ってない」

「私にはそう見えています。魔法のインクで書かれていますから」

女性職員は静かに言った。

「あなたは魔女ではないのですか」

恵美は驚いた。目の前の若い女性は魔女ではないのに、魔法の合い言葉が通じる。だから混乱したのだ。

「訓練は受けました。でも、才能が足りなかったんです。それで私は、成人になるまえに魔法を手放しました。後悔はしていませんよ。えっと、話を戻しますね。この曲を聴くと、男性は夢一つ見ない、深い睡眠状態に入ります」

「すべての魔法を無効化できると聞きましたが」

「ええ、そうですよ。睡眠中はそうなります」

恵美は目をつむる。

「女性は大丈夫ですよ」

「よかった」

目を開ける恵美。

「効果の持続時間は」

真が質問する。

「最低でも5分です」

「5分あれば充分だ」

「ショパンは、この曲を聴いて不眠症が治って大喜びでした。そこでお返しに、今度はショパンが、聴くとどんな女性でも眠ってしまう、特別な子守歌を書きました」

恵美はドキッとす。いや、動揺したというほうが正確だろう。もし男の魔法使いが、その『特別な子守歌』を悪用した場合、手をつけられなくなる。もちろん、男性を眠りに誘うジョルジュ・サンドの子守歌も良くないが——だから嚴重に管理されている——女性を眠らせる特別な子守歌は、より一層の害悪だ。こんな曲は存在してはいけない、あってはならない……恵美は強くそう思った。彼女は、横にいる真をチラ見した。

真はこの時こう考えていた。「『特別な子守歌』を使ったら、姉のかれんに復讐ができるな。かれんを眠らせてから、油性マジックで恥ずかしい言葉を顔に書いてやるのだ。なかなかいいアイデアだぞ」と。彼はにんまりした。

それに驚いた恵美だったが、あまり間を置かずに女性職員が話を再開した。

「ですが、その曲は効果がありすぎて危険だと判明したため、ショパンは特別な子守歌の楽譜を暖炉にくべて燃やしてしまったのです。その曲は、写しもスケッチも一切残っていません」

「えらい、ショパンさんえらいです。あなたは全女性の味方です」

心底安堵した恵美が、満身の力を込めて拍手した。

「念のために伺いますが、ジョルジュ・サンドの子守歌をなにに使うつもりですか」

「世界平和のためです」

真はきっぱりと言った。

女性職員は面食らったようだ。

「……まあいいでしょう。この楽譜はお貸しできませんので、写譜^{しゃふ}してってください」

恵美がボールペンを取り出す。

「あっ、普通のインクでは写譜できませんよ。魔法のインクでないとダメです」

恵美はボールペンを仕舞って、万年筆を取り出す。こっちには魔法のインクが詰まっている。

「真さん、ちょっと待っててくださいね。チャッチャと写しちゃいますから」

恵美は真を見る。彼は爆睡^{ぼくすい}中だ。

「って、寝てるし！」

「そのヘアピン、かわいいですね」

女性職員が、恵美の頭を見た。銀色の花の飾りがついたヘアピンが、恵美の髪に刺さっている。

「あっ、これ。ドイツの空港で買った物です。ポーランドに入ってから着けたのに、真さん、ぜんぜん気づかなくて」

「似合ってますよ」

女性職員は、珍しい出来事に遭遇したからか、なかなか上機嫌だ。

「真さん、最初のミッションは楽ちんでしたね」

「^{さいさき}幸先がいいね。このまま幸運が続くことを祈ろう」

恵美と真はポーランドの空港内にいる。空港はどこもかしこも、人混みであふれている。

真は、空港内にピアノを見つけると弾き始めた。

「恵美ちゃん、歌える？」

「いいえ。歌詞は知りません」

真が弾いている曲は、プッチーニの『私のお父さん』だった。

彼の演奏は悪くないが、恵美よりはヘタだった。だが、恵美は『私のお父さん』を心の底から堪能^{たんのう}したようだ。

曲が終わると、周囲に人が集まって来ていて拍手をもらった。

中には、「ショパンの故郷でイタリアオペラの曲を弾くとは、この憎たらしいやつめ」と苦々しい顔をした男性もいた。

イギリスの大英博○館、エジプトコーナー。

そこには、パピルスやミイラなど、エジプトの秘宝^{ひほう}がいっぱい詰まっている。なぜ、大英博○館が、エジプトの財宝を大量に所有しているかという、かつての職員が、エジプトの盗掘屋から買ったり、果ては自身が盗掘までして強引にイギリスに持ち帰ったからだ。もちろんこれは違法だ。

というわけで、大英博○館のエジプトコーナーは、世界有数のコレクションを誇るのだ。

エジプトコーナーの前で、真と恵美は、かれこれもう10分以上立ちとどまっている。

ふたりの視線の前にあるのは、王家の谷から出土した銅製の`鏡、だ。世間ではただの鏡と言われているが、魔女たちはこれを`聖なる鏡、と呼び、強い魔力を有していることはその界限では有名な話だ。

「ああ、これだ。これだよ。エジプトの王家の墓から出土した、聖なる鏡だよ。夜、作戦を決行する」

「今夜ですね」

真も恵美もどきどきしている。というのも、ショパン博○館では、『ジョルジュ・サンドの子守歌』の楽譜を簡単に写させてもらえたが、今回はそうはいかない。真と恵美が欲しいのは聖なる鏡のコピー品ではなく、本物だからだ。だが、大英博○館に、『聖なる鏡を貸してください』と言ったところで、もらえる道理はない。そこでだ、真は盗むことにしたのだ、聖なる鏡を。

「ついでに、トールキンの住んでた家に行きたいなあ」

真が本音を漏らした。

「ダメです。トールキンの家ってオックスフォードでしょ。ちょっと遠いですよ。トラブルの元は避けましょう」

「魔法の箒で行けばすぐだよ」

「ダメです。わたしだって、シャーロック・ホームズ博○館に行きたいのを、そりゃあとっても我慢してるのに。それに、知らないんですか。イギリスの魔女は意地悪なひとが多いですよ。飛んでいて絡^{から}まれたりしたらどうするんですか」

「そうだけどさ……」

トールキンの家と言えば、ファンタジー好きにとっては聖地だから気持ちはわかる。私は2年前に見学したことがあり、弟の真に自慢したのだが、真はそれで対抗心がむき出しになってしまったようなのだ。

「大英博○館、閉館まで5時間はあるな。どうやって時間を潰そうか。恵美ちゃん、映画でも観る？」

真と恵美が、ロンドンの街頭を歩いている。恵美はスマホを見ている。

「真さん、見てください」

と言ってスマホの画面を見せる。

「ええと、ロ○ドン・シンフォニーのコンサート、今日か。演目は、キャンディード序曲と、ブルッフのヴァイオリン協奏曲の1番、プッチーニの、ええと、ジャンナ……」

「ジャンニ・スキッキです。オペラですが、コンサート形式の上演のようです。今から予約します」

と言って恵美がボタンを押す。

「あっ！」

オペラのコンサート形式上演というのは、通常のように舞台上で演技をせず、唄って演奏するだけの上演形式だ。コンサート形式はお金がかからないので、比較的頻繁に行われている。

「映画は魔法翻訳されませんよ。オペラは生だから大丈夫なはずです」

「ああ〜」

「それにキャンディード序曲ですよ。真さんのテーマ曲じゃないですか。聴きたいでしょう？」

「あ〜あ」

「さあ、行きましょう。開演は1時間後です」

「ああ、行こうか。ふう」

真はどうやら、映画を観る算段だったようだ。

「ジャンニ・スキッキって、あんな素敵なアリアがあるんですから、きっとときめくようなオペラなんでしょうねえ」

それを聞いた真は、苦虫を噛みつぶしたような表情になった。

ふたりはバー○カンホールへやってきて、席に座っている。

「だといいいね」

「どんなオペラなんだろう。あっ、長いと困りますね」

「それは大丈夫。ジャンニ・スキッキは1時間あるかないかだから」

「えっ、そんなに短いんだ」

ジャンニ・スキッキは、真がポーランドの空港で弾いた「私のお父さん」が出てくるオペラだ。人気はあまりないが、アリア「私のお父さん」だけは屈指の人気を誇る。

「それより知ってる？ このバー○カンホールは、史上もっとも音の悪いホールの一つとして知られてるんだ」

「そうなんですか。どうして音が悪いんですか」

「コンサートホールの音響を決める方程式のようなものがまだ見つかっていないらしいんだ。だからコンサートホールは、建ててみるまでどんな音になるのか分からないんだそうだよ」

「なるほど」

「ロ○ドン交響樂團がかわいそうだ。あと、ここを本拠地にしてるもうひとつのオケ、B○C交響樂團もね」

それを聞いた、近くのおばさんが話しかけてきた。

「あら、ちょっといいかしら。ロ○ドン交響樂團には新しいホールが作られる予定なのよ」

「初耳だ。本当ですか」

「近々、サー・サイモン・ラ○ルがベ○リン・フィルを勇退して、その後ロ○ドン交響樂團のシェフになる予定なのよ。彼はイギリス人だから、お里帰りね」

「それは知ってます」

「わたしも知っています」

「それでね、ラ○ルがロ○ドン交響樂團からオファーを受けたとき、『ホールを新しく作るなら』という条件を出したのよ」

「ラ○ルがロ○ドン交響樂團のオファーを受けたということは……」

「そうよ。新しいホールを作るとい条件を呑んだのよ、ロ○ドン・シンフォニーは。まったく、サイクス・ピコ条約とバー○カンホールはイギリスの汚点ね」

「このバー○カンホールはどうなるんですか」

「詳しくは知らないわ。まだ決まっていんじゃないかしら。でも、音の悪いコンサートホールって、あまり再利用の価値はないわね」

「もったいないですね。改修とかでなんとかならないのかしら」

「覚えておくといいわ。音の悪いコンサートホールと悪い人間の性根は、少し直した程度じゃどうにもならないのよ」

恵美は、N○Kホールを思い出していた。東京にあるN○Kホールも音が良くない。残響が少ないのだ。度重なる改修工事で多少は良くなったらしいが、サ○トリーホールなどと比べると酷いものだ。

（音の悪いコンサートホールは建て直したほうがいい。だが、悪い人間はどうしたらいい？ 悪い人間はいなくなったほうがいいのか。イーケンスもそうなのだろうか）

恵美がつらつらと考えていると、アナウンスが聞こえてきた。

『間もなくコンサートが始まります。スマートフォンや携帯電話をマナーモードに切り替えたか、再度ご確認ください』

アナウンスが簡単な英語だったため、ふたりはなんとか聞き取れた。

『『ジャンニ・スキッキ』って、遺産相続の話だったんですね』

恵美ががっかりしながら言った。

ロンドンの街頭を真と恵美が歩く。もう日は暮れている。

「うん、そうだね。プッチーニ三部作の最後の作品だよ」

「お金は大事ですね」

「そうだね」

「本当に音も良くなかったし」

「噂に違わずバー○カンホールは酷かったね」

恵美は、素敵なラブロマンスを期待していたようだ。

夜のロンドンを舞う、ふたつの箒、ティーパーティーとラビットハート。

真と恵美は魔法の箒で、大英博○館の屋根の上に降り立った。ふたりは尖塔^{せんとう}に入り、鍵がかかったドアを魔法で開ける。

『魔法取り消し』ですね」

なんだか恵美は楽しそうだ。

「普通ならね」

「今なら、美術館で不可解な殺人事件が起こっても信じられそうですよ」

「なにそれ？」

大英博○館はもう閉館しているので、内部は暗くひとけがない。

ふたりはエジプトコーナーの聖なる鏡の前までやってきた。

真は手袋をして、聖なる鏡の入ったケースに手を伸ばす。

「待ちなさい！」

とつぜん、謎の女性の声が響いた。

「恵美ちゃん隠れて」

真と恵美が物陰に隠れる。ミイラの隣だ。真はなんてことない顔をしているが、恵美

はミイラを気にしてか、いささか気弱に見える。

謎の女性がやってきて、懐中電灯で隙間を照らす。真と恵美が隠れているのを発見した。

「噂の魔法使いもどきとグースベリーのコンビね。わたしは、シャーロット・ウッド、大英博○館に勤める魔女よ」

シャーロットは杖を出し、小さなハートマークを二つ描き、杖を振って真と恵美に送った。淡い光を放つハートマークを、真と恵美は受け取った。真と恵美も杖を出してハートを描き、シャーロットに送り返した。これは、ヨーロッパの魔女同士でよく使われる挨拶だ。

真と恵美が隙間から出てくる。

「なら見逃してください。イーケンスを倒すにはその鏡が必要なんです」

恵美が懇願した。

「お願いします」

真も。

「ふたりとも、この鏡をよく見なさい」

シャーロットにそう言われて、ふたりは鏡をまじまじと見る。

「あっ！」

「真さん、どうしたんですか」

「これはレプリカだ」

「その通りよ」

「本物はどこにあるんですか。貸して欲しいんです」

「残念ながら貸せないわ」

「お姉さんもスカートの眷属けんぞくでしょ。イーケンスを倒すにはそれが必要なんです。どうかお願いします、貸してください」

「貸したくても貸せないの。本物は、第二次世界大戦のロンドン大空襲で壊れてしまったのよ」

「それでは、しかたありませんね」

恵美の受け答えはしっかりしたものだったが、真の落胆ぶりは酷かった。まるでこの世の終わり、といったように落ち込んでいた。

「あなたたちに手を貸したいところだけど、手を出すと言われてるわ。それからこれは覚えておいて。ふたりのことを知っているのは、いまのところ上級魔女だけよ。力の弱い魔女たちや、若い魔女たちはあなたたちのことを何も知らないわ」

「そうなんですか」

「上級魔女たちのあいだでも、イーケンスに関してはまだ方針が固まっていないようなのよ。わたしも、子供たちを死地しちに送るのは反対なんだけど、予言があるからねえ」

「予言か」

真は落ち込んだままだ。

「それから、トールキンの家に行くのはまた今度にしたほうがいいと、お姉さんもそう思うわ。さる信頼できる筋からの情報によると、イギリスの魔女はいじわるが多いそうだからね」

シャーロットがウインクする。
「あの……ごめんなさい」
恵美はぼつが悪そうだ。

コンコン、恵美はホテルの部屋をノックした。今は夜だ。
「開いてるよ」
と中から男性の声がする。真の声だが、いままでに聞いたことがない沈んだトーンだ。
恵美が中に入ると、ホテルの部屋のテーブルで、おっと、真がお酒を飲んでいて。缶ビールだ。すでに2本目に突入しているようで、あと2本ある。
「ちょっと、お酒を飲んでるんですか。わたしたち未成年ですよ」
「いいんだよ。ああ、お仕舞いだ。ジョルジュ・サンドの子守歌だけじゃ、どう考えたって勝てやしない」
「真さん、あなたは18歳です。お酒を飲んではいけません」
「いいんだよ。ここイギリスでは、16歳からお酒を飲めるんだ」
恵美は、真を睨みつつスマホで検索した。
「あっ、ほんとうだ。イギリスでは16歳からお酒を飲んでいいんだ。でも、これは没収します」
そう言って恵美は、残りの缶ビール2本を奪った。真には、缶ビールを奪い返す気が残っていなかった。それどころか、しくしく泣き始めたではないか。
それを不憫に思ったのだろうか、恵美は空いている椅子に腰掛けた。そして、缶ビールを眺めた。ビールの缶を開けると、やおら飲み始めた。
「大丈夫ですよ。ふたりで知恵を絞り出しましょうよ」
彼女の視界がぼんやりしてくる。

ドンドンッ、恵美はホテルの部屋を強くノックした。朝日が差している。
「……今行きます」
しばらくして、真が出てきた。
「真さん大変です。どろぼ、う……」
真の頭を見て恵美が言葉を失った。真の頭には、合計7つのヘアピンが刺さっているのだ。すべて恵美のヘアピンだ。
「ははあん。ヘアピン泥棒はあなたでしたか。わたしが酔っているときにバッグを漁ったんですね。そうですね、正直に言いなさい。正直に言っても許しませんが、正直に言えば少しだけ見直します」
真はしばらく静かにしていた。
「恵美ちゃん、自分のスマホの画像フォルダを見て」
真を睨みながら、恵美はスマホの画像フォルダを開いた。するとどうであろう、1本、2本、3本と、真の頭にヘアピンを刺していく人の姿が映っているではないか。ヘアピンを刺している人は、誰だろう、自分だ。とても愉快そうな表情を見せている。これは一体どうしたことだろう？
「恵美ちゃんが酔って、ぼくの頭にヘアピンを刺したんだ。『キャンディちゃんにはヘア

ピンが似合うわよ』って言ってね。きみ、笑い上戸なんだね」

「そうですか……。疑ってごめんなさい」

振り上げた拳^{こぶし}を下ろすのは簡単ではないことを、恵美は学んだ。

「真さん、これだけは言っておきます。ヘアピンをつけて寝てはいけません。たいへん危険です。頭皮に刺さって血を流すこともあるんですよ」

そう言いながら、恵美はヘアピンを回収しはじめた。

ヘアピンを取りやすいように、真は頭を下げて協力した。

「あきらめましょうよ」

ロンドンの空港のロビーでしょんぼりしている真に、恵美が優しい声をかけた。ふたりとも、椅子に座って飛行機を待っているのだ。

「切り札は多いほうがいいんだよ」

「そうですね。忘れ物はありませんか」

「ないよ、『聖なる鏡』以外はね」

ほんとうにがっかりの真だ。まるで、お年玉をもらえなかった子供のようにしょんぼりしている。

「大丈夫、ジュルジュ・サンドの子守歌で倒せますよ」

「カミカゼが吹けばね。あっ」

急に真は立ち上がった。その視線は、何かを追いかけているようだ。

「どうしたんですか」

「すぐ戻ってくるよ」と恵美に言い「父さん！」と言って、真は荷物を背負って走り出した。

「えっ？　ちょっと待って」

恵美は荷物を持って真を追いかける。

人混みの中、真は東洋人の中年男性を追いかけている。

「父さん待って、父さん！」

真は人混みをかき分けて進む。中年の男性に追いつき、肩に手をかけた。

「父さん！」

「はい、どうかしましたか」

中年男性が振り向いて答えた。

「……済みません、間違えました」

とても残念なことに、父ではなかった。

「間違い、誰でもあるね。気にしないね。おや少年、どうした、落ち込んでるね」

「いえ大丈夫です。あなたが父に似ていたもので、つい」

恵美が追いついた。

「真さん、置いていかないでください」

「似ているか。なら、キミの父親はハンサムだね」

「ええ、まあ」

「父親とはぐれたか？」

「いえ、ぐうぜん再会したかと」

中年男性は、そうか、と言って納得した様子だ。

「人違いだったよ」

真は恵美に報告した。

「恋人かね。大事にするんだよ」

「はい、そうします」

真は事務的に言っただけだが、恵美は嫌ではなさそうだった。

「こんど置いていったら、ほんとうにお仕置きしますからね」

恵美の声には真^{しんじょう}情がこもっていた。

「ゴメンよ。もうしないよ」

落ち込んでいる真を見かねたのか、中年男性が助言をした。

「少年よ、余計なお節介かもしれないが、もし困ったことがあるなら友を頼るね。それが一番ね」

「友達か」

真は何か思い出したようだ。

アルゼンチンの7月は冬だ。南半球だからね。

日本などがある北半球と、アルゼンチンなどがある南半球とでは、季節が正反対なのだ。

イギリスから飛行機で14時間かけてやってきた真と恵美は、冬装備の服になっている。魔法使いもどきの服や魔女の服は防寒機能が半端ないので、上から一枚羽織るだけで済んでいるのだが。あと、マフラーを首に巻いて手袋をしている。

目的地に向かう途中、恵美が警察官に呼び止められた。恵美は頭に、L S O（ロンドン・シンフォニー・オーケストラの略）の飾りのあるヘアピンをしていたのだが、警察官はそれを麻薬の「L S D」と見間違えたのだ。

警察官は、くどくどと注意をすると去っていった。

当の恵美は、警察に呼び止められたことよりも、ヘアピンを変えたことに真が気づかなかったことに腹を立てていた。

ふたりは、いささか心がすれ違いながらも、目的地であるアルゼンチンのキリスト系の教会にやってきた。ふたりは椅子に腰を下ろした。

しばらくして、ひとりの中年男性が近づいてきた。

「旅のひと、少しいいですか」

うなずく真と恵美。

中年男性は真の隣に座った。恵美、真、中年男性の並びで座っている。

「わたしはね、以前、アメリカの陸軍にいました。あれは10年以上前、アメリカはイラクを相手に戦争を始めました」

「イラク戦争ですね」

「^{たいぎ}大義のない戦争でした。多くの若者が、イラクに派兵されました。その大半は帰還しましたが、少なくはない若者が天に召されました。若者が死ぬ、とても悲しいことです。ところで、なぜでしょう。おふたりは、イラクに派兵された兵士たちと同じ目をしている。あのキラキラとした目を」

虚を突かれたのか、真はとても驚いた様子だ。

「そうなんですか？」

「何か込み入った事情がおありのようだ。わたしでよければ話してみませんか」

「それはできません。でも、信じてください。ぼくは悪いことに力を使ったりはしません」

「わたしもそうです」

中年男性が困った表情を見せた。

「そうですか、事情を話せないのですか。それは困りましたね。東洋人の年齢はよく分からないが、わたしはたぶん、おふたりより年嵩だと思えます。人生をいささか長く生きている者として、忠告をさせてもらっていいですか」

真と恵美はうなずいた。

「神様のために大きな力を使ってはいけない、国家のために大きな力を使ってはいけない、また、正義のためにも大きな力を使ってはいけないのです」

中年男性の声は力を帯びていた。静かな怒りがこもった声だった。

「では、なんのために力を使えばよいのですか。まごころですか」

真が問うた。

「違います。でも、まごころは良いものですよ」

「愛ですか」

恵美が問うた。

「愛は素晴らしいものです。愛のない人生は考えられません。ですが、愛は誰しものが持っているものです。どんな独裁者も、きっと誰かを愛しているでしょう」

真と恵美は答えに詰まった。

「答えを教えてくださいませんか」

「誰かを助けるためです。そのために大きな力を使うのです。困っている人を助ける、孤独な人を助ける、悪の道に落ちてしまった人を助ける、それこそが現代に生きるわれわれにもっとも必要とされている力なのです。神様のための力や、国家のための力や、正義のための力は、その傲慢さと驕りから容易に悪に転じるのです。しかし、誰かを助けようとする力は、臆病さと誠実さを持っているから、滅多なことでは悪の誘惑に負けたりしないのですよ」

真は雷に打たれたような様子で、軽くうなずいた。

そんな真をチラ見しながら、恵美はこう言った。

「助ける価値のない相手の場合はどうしたらよいのでしょうか」

「本当に助ける価値がありませんか？」

恵美は家族を思い出した。とくに、小憎らしい弟の純司を。

「ありません」

「それは間違いありませんか？」

恵美がふと遠くを見ると、天使の描かれたフレスコ画が目にとまった。そして、涙を流した。

「……わかりません」

完全に打ちのめされた恵美は、嗚咽を漏らした。

「お嬢さん、泣かしてしまってまことに申し訳なく思います。おふたりに出会えてよかつ

た。私の名はリチャード・ギブソンです」

ギブソンが手を差し出してきたので、真は握手をし、泣いてる恵美も握手をした。ふたりも本名を名乗った。

「老婆心^{ろうぼしん}からひとつだけ。『私は人を助ける人間です』と看板を下げて歩くのは感心しません。それを利用しようとする悪い輩が寄ってきますからね。人を助けることはとてもよいことです。ですが、同時に危険でもあるのですよ。それをお忘れなく。ではさようなら。またどこかで」

リチャード・ギブソンは去った。

「大丈夫だよ、大丈夫」

真は、泣いている恵美を抱き寄せた。恵美は真に抱きついた。

教会にバッハのオルガン曲が流れ始める。

「ケッ、こんな教会まで呼び出しておいて、自分は恋人とイチャイチャかよ」

いつの間にか、ガブリエル・ガルチェリが真たちのそばに立っていた。どうでもいいが、彼はイケメンである。

「ガブリエル、よく来てくれた」

「3年ぶりだな、真。元気にしてたか」

ガブリエルは3年前、日本に遊びに来ている。もうひとりの魔法使いもどきに、どうしても会いたかったようだ。そのとき、長女のみらいや、次女のわたしや、妹のかれんとも顔を合わせている。その頃はまだ好青年だった。

「ああ。母さんも、姉さんたちも息災^{そくさい}だよ。ガブリエル、彼女は倉田恵美さん。同級生で、グースベリーだ。恵美ちゃん、彼はガブリエル・ガルチェリ。もと魔法使いもどきだよ」

ガブリエルと恵美はお互いにあいさつをした。

「なんだ、真。女性を泣かせたのか」

泣き止みつつある恵美を見て、ガブリエルは少し腹を立てている様子だ。

「いえ、いいんです。泣いたのは真さんのせいではありません。さきほど、心を揺さぶられたものですから」

「クリスチャンなのかい？」

恵美は首を横に振った。

「ふ～ん。ほんとうに真が泣かしたんじゃないんだね」

恵美は頷^{うなず}いた。

「ならいい。恵美さん、なにか悩み事があったら言ってください。オレでよければ、いつでも相談に乗りますよ」

ガブリエルは真を見た。

「ところで、真、知ってるか。いよいよイーケンスが目覚めるらしいぞ。大変なことになったなあ」

きょとんとする真と恵美。

「おっと、オレの情報はそれだけじゃないぜ。これは極秘情報なんだが、実はな、『魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』っていう予言が出たらしい。どうだ、凄いだろう」

何となくうなずく真と恵美。

「ひょっとして知ってた？　なんだ、知ってたのか。でもなあ、予言の全文が分かれば

なあ。オレも加勢できるかもしれないのになあ」

「お前、数ヵ月前に魔法が使えなくなったんだろう」

「いや、それがな、まあそうなんだが。実はこういうことだったんだ」

ガブリエルの話はこうだ。彼に恋人ができた。人間の女性だ。恋する青年は、どうしても彼女を空中の散歩につれて行きたくなって、つい魔法の箒に乗せて飛んだのだ。

「えっ？ 緊急時以外、人間を魔法の箒に乗せるのは厳禁げんきんですよ」

恵美はお目目をぱちくりさせている。もう泣いていないようだ。

「もちろんそうだよ。結局、それがバレちゃってね。魔女たちの裁判にかけられて、あ～あ、最後はザンキャリエンだよ」

「じゃあ、魔法が使えなくなったんじゃなくて、魔法取り消し？」

真は心底呆れかえっている。

「うん、まあそうなるね。だがよ、考えてみてくれよ。オレはもう魔法が使えなくなる前兆症状が出てたんだよ。長くてもあと半年かそこらで魔法が使えなくなる、そこへ理想の女性が現れたんだぜ。そりゃあ箒でデートもしたくなるさ」

「その彼女とはどうなったんですか」

恵美が質問した。

「別れた」

「そうですか。はあ～」

真と恵美は脱力したようで、ナマケモノのような状態になった。

「ガブリエル、予言の全文を教えてやるよ。『もうすぐイーケンスが目覚める。イーケンスを倒せるのは男の魔法使いだけ。魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』これが全文だ」

真の言葉を聞いて、ガブリエルは神妙しんみょうな面持ちになった。

「じゃあ、オレと真が、イーケンスを倒すはずだったのか」

「ああ、お前が魔法取り消しじゃなければな。あ～あ、貴重な戦力が……」

「う～ん、ひょっとして真たちは、イーケンスを倒すための旅をしているのかい？」

「そうだよ」

ふたりのナマケモノは、ひどい落胆ぶりを見せている。まあ、ナマケモノなら仕方ないだろう。

「なるほど、ジョルジュ・サンドの子守歌と、エジプトの聖なる鏡か。作戦としては悪くないな」

ガブリエルが、ココアをすすりながら言った。

アルゼンチンの喫茶店で、屋外の椅子に座った真と恵美とガブリエルが、お茶してる。「聖なる鏡はダメだったんだ。大英博○館に行ったんだが、あったのはレプリカだったんだ」

「聖なる鏡なら、エジプトに行けばまだあるだろう」

「エジプトにあるのは、もう魔力を失っているって噂だよ」

「いや、まだ発掘されていない鏡だ」

「いまから発掘？ 時間的に間に合わないよ」

ガブリエルがスマホをいじって、真たちに写真を見せた。

「どうだ、凄いだろう」

スマホの写真は、エジプトの墓の内部写真だ。真と恵美はじっくり見ている。

「これは何の写真だ？ 聖なる鏡が写ってるな」

「ツタンカーメンの母親、ネフェルティティ正妃の墓だ。まだ発掘も盗掘もされていないよ」

「ガルチェリさん、じゃあ、この写真はなんなんですか」

恵美が質問した。さすがに好奇心をくすぐられたようだ。

「ガブリエルでいいよ。去年行って写真を撮ってきたんだ。あっ、見てただけだよ。盗掘はしてないぜ」

「ガブリエル、どうやって入ったんだ。教えてくれ！」

真の目が爛爛らんらんとしている。俄然、勇気と希望が戻ってきて、ナマケモノが人間に進化したようだ。

エジプトの王家の谷は墓であふれている。

ただでさえ迫力があるのに、今は夜だ。観光地の王家の谷も、夜だから人数が少ない。真と恵美は歴史の重みに威圧いあつされている。

真と恵美は、北半球のエジプトに移動したので、今は夏だ。さすがのエジプト、夜でも暑い。だが、案ずることはない。魔法使いの服を着ていれば、たいていの暑さ寒さはしのげるのだ。

ふたりは、箒を握りしめて王家の谷を見下ろしている。真は空からの布袋を腰に巻いている。

ふたりはガブリエルの言葉を思い出した。

『いいか真、ネフェルティティ正妃の墓は、ツタンカーメンの墓の内部にある。ツタンカーメンの墓はもう発掘されているが、ネフェルティティの墓はまだ発掘されていない』

真と恵美が、魔法の箒でツタンカーメンの墓の入り口付近に来る。

『正妃ネフェルティティが没したあと、王位を継いだのが息子ツタンカーメン。ツタンカーメンには立派な墓が用意されていたが、次の王がその墓を奪ってしまったんだ。だから、ツタンカーメンは死後、母親と同じ墓に入れられてしまったという訳さ』

「恵美ちゃん、抗生物質こうせいぶつしつは飲んだよね」

親指を立てる恵美。

「じゃあ行こう」

『おっと、墓に入るまえに抗生物質を飲むのを忘れるなよ。ツタンカーメンの墓を発掘した連中は、古代のウイルスにやられて多くが変死したんだ。さて、ツタンカーメンの墓のそばに洞窟がある。よくあるものだが、これは魔法使いだけが通れる細い抜け道なんだ』

抜け道に入る真と恵美。魔法の箒でなければ絶対に入れないであろう、細く危険な道である。真と恵美は、杖で周囲を照らし、箒にしがみついてゆっくり進む。

『抜け道を下がって、その後、右へ行って、少し進んで、今度は左。すると、ネフェル

ティティの墓の横に出る。狭い隙間だ、気を付けろよ。黄色いチョークの印が付いてる石があるはずだ。それを魔法でどかしたら、そこがネフェルティティの墓の内部だ』

ガブリエルの忠告どおりに進む真と恵美。チョークの印のついた石を発見し、真が魔法でどかす。恵美が杖を使って光を起こす。ネフェルティティの墓の内部が照らし出される。

墓の中には金銀財宝が盛りだくさんだ。

「凄いわ」

恵美は目つきが変わっている。

「^{そうかん}壮観だな。さあ、聖なる鏡を借りてさっさと帰ろう」

真は聖なる鏡を探している。

「真さん。金貨一枚くらいなら貰ってもいいですよ」

恵美は金貨の山の前で立ちすくんでいる。財宝に取り憑かれてしまったようだ。

「ダメ」

「ええっ、これだけあるんですよ。一枚くらいいいでしょう」

「恵美ちゃん、ダメなものはダメだよ」

「ケチ！」

真は聖なる鏡を見つけ、手に取った。

「あったあった。さあ、墓を出よう。なんだか気分が悪いな」

真が恵美を見ると、彼女は金貨を一枚手にしている。

「恵美ちゃん、それは元に戻すんだ」

真の言葉を聞いて、恵美はしぶしぶ金貨を元に戻した。

真と恵美が、抜け道から出て、ツタンカーメンの墓の入り口付近に戻ってきた。

「うまく行きましたね」

「ああ」

だが、待ち伏せしている者たちがいた。エジプトの若い魔女、アイとマイとミーである。全員 20 代の中級魔女だ。三人が姿を現し、真と恵美の行く手を魔法の箒で阻んだ。

「おやおや、魔女が盗掘かい。これは許されざる大罪だねえ」

ハスキーでかっこいい声のアイだ。

「わたしたち、エジプトの魔女が黙って見ているとでも思ったかい」

マイルドな声のマイ。

「さあ、盗品を元に戻してくるんだ。そのあとで魔女の裁判だね」

かわいい声のミーだ。

「聞いてくれ、これには訳があって——」

「おや、男の声だ。お前、魔法使いもどきか？」

驚いたアイが、杖で周囲を明るくする。

「そうだけど、とにかく訳を聞いてくれ」

「そうです、事情を聞いてください」

「事情なら聞かさ、魔女の裁判でね」

とマイ。

「さあ、盗品を元に戻してくるんだ。って、あれ、さっきも同じことを言わなかったっけ？」

ミーが首をかしげる。

真が恵美に耳打ちする。

「逃げるよ」

「はい」

真と恵美が箒に乗って急発進。

「あっ、あいつら。追うぞ！」

アイとマイとミーも箒に乗って離陸。真たちを追う。

エジプトの夜空を、魔法使いたちがドッグファイトだ。

真と恵美が箒で逃げる。アイとマイとミーが追う。

「ネフティス神に代わって成敗してやる。ミー、ノーラを使え」

アイが命じた。ネフティスは、エジプト神話の^{そうそう}葬送の女神だ。

「でもさ」

「いいから」

「わかったよ。どうなっても知らねーぞ。エアレガルド・ノーラ」

ミーの杖から攻撃魔法、エアレガルド・ノーラが放たれた。

エアレガルド・ノーラは電撃系の攻撃魔法だ。ノーラ系なので追跡型の魔法で、逃げる相手が進路を変えても追ってくる。ただし、エアレガルド・ノーラなどの曲がる魔法はゆっくりしか飛ばない。魔法の箒よりは早いけど、基本ゆっくりだ。なぜ、電撃系の魔法がゆっくり進むのか、それは無数にある別世界、つまり多世界を行き来しているというのが通説だ。

「エアレガルド・ノーラみたいですよ、どうします？」

迫ってくるエアレガルド・ノーラを見て、恵美は少し焦っているようだ。

「ぼくにノーラ魔法を使ったことを後悔させてやる。恵美ちゃんはジグザグに逃げて」

「はい」

真は左旋回すると、進路を変え、大きく回る。

アイたちは、真の^{きょどう}挙動に気を奪われている。

「えらく速いな。何をやる気だ？」

エジプトの魔女は、真を観察している。

真は回って回って、アイとマイとミーの後方に来る。もちろん、エアレガルド・ノーラが迫ってきている。

「族のひとりが後ろに来やがった」

ミーの声には焦りがある。

真は急加速すると、ねじるようにしてミーを追い越した。そのとき、真を追っていたエアレガルド・ノーラが、ミーに^{ごぼく}誤爆する。落下するミー。

「「ミー！」」とアイとマイは叫んだ。

夜のエジプトの市街地に、エアレガルド・ノーラをまともに受けたミーが落ちてきた。

ミーの、^{からだ}身体も服も箒もボロボロだ。彼女は、ゆっくりと道路に落下した。魔法の箒が最後の力を使って、ミーを安全に道路に下ろしたのだ。その後、ミーの魔法の箒は完

全に壊れた。

「なんだよ、この箒いくらしたと思ってんだよ！ あの墓泥棒め！ あーあ、お気に入りの服もボロボロだよ。まさか自分が放った魔法にやられるとはね。ちょっとかっこ悪いね」

ミーが、ポケットからスマホを出して起動させた。画面は一度ついたが、すぐに消え、その後、まったく反応しなくなった。

「スマートフォンもダメか。トホホ……」

ミーは、夜の市街地をしょぼしょぼと歩き始めた。

空中で真が、恵美と合流した。

「ひとり倒したよ」

だいぶ汗をかいた真が言った。

「あきらめてくれますかね」

「だといいんだけど」

だが、アイとマイは追って来ている。

マイが、真と恵美に杖を向けた。

「ファクダンブーフア」

彼女がファクダンブーフアを放つ。

ファクダンブーフアは竜巻系たつまきの攻撃魔法だ。曲がらないから早い。真と恵美はファクダンブーフアに吸い込まれて、旋回せんかいしながら上昇する。

「やったわ、今度は仕留めたわ！」

マイが歓喜かんきの声を上げた。

上がりきった真と恵美が、今度は落ちてくる。

だが、ここで気を緩めたマイの負けだ。落下しながら、恵美はブヒャンの魔法を、マイに近距離から浴びせる。ブヒャンは麻痺系の弱い魔法で、長距離から撃つと効果は薄い、近距離からなら効果は大だ。防御魔法をあまり使っていなかったマイはイチコロだ。マイは体が麻痺して、ゆっくり落下する。

真も、ブヒャンを近距離からアイに浴びせる。だが、アイは強めの防御魔法を使っていたので、真のブヒャンを跳ね返した。

夜のエジプトの農園に、ブヒャンを受けたマイがゆっくり落ちてくる。

魔法の箒のお陰で地面に激突こそしないが、崩れるように落ちた。

「わざと攻撃魔法を受けたのか。それで、油断したわたしたちに子供でも撃てる麻痺魔法ブヒャンか。頭いいな」

ブヒャンは、効果がすぐに切れるが、暴れる魔法使いをおとなしくさせるには十分な魔法だ。

1分ほどでブヒャンの効果が切れたので、マイは立ち上がった。

真と恵美が逃げる。

アイが追う。

「アッタマきた、待ちやがれ！」

アイはそうとう怒っているようだ。

真と恵美が高層ビルをぐるっと回る。そこで止まって、迎撃の態勢に入った。

アイが高層ビルを回って、空中で停止している真たちを見て、慌てて自分も急停止して対峙する。アイは怪訝な表情を見せた。真たちの真意を計りかねたのだ。

真は、聖なる鏡の入った袋を恵美に渡し、自分に防御魔法をかけ（空中で使える一番強いヤツだ）、臨戦態勢に入る。杖を上に向けてくるくる3回まわしてから、アイに向けた。魔法決闘の合図だ。

「魔法決闘を申し込む、受けるか」

真が言った。高層ビルの明かりで、彼の表情ははっきり視認できる。

「面白い、受けて立つよ。まけないぞ、ナイルの藻屑にしてやる！」

アイが乗ってきた。彼女の表情もよく見える。とても凛々しい顔をしている。

魔法決闘は、大きく3つのルールがある。

- 1つ、必ず一対一で行う。
 - 2つ、攻撃魔法を使っていいのは一度だけ。
 - 3つ、危険なのでレボザーラ以外の攻撃魔法は使ってはいけない。
- 追記、魔法決闘は西暦2000年に全面禁止になった。

レボザーラを互いに打つと、お互いに魔力が打ち消し合って、残りの魔力が相手に直撃する。たとえば、アイが5のレボザーラを撃ち、真が4のレボザーラを撃った場合、打ち消しあって、残ったアイの1のレボザーラが真に当たることになる。

つまり、魔力の強いほうが勝つのが魔法決闘なのだが、ここにちょっとしたカラクリがある。ほかの攻撃魔法と違い、レボザーラは気分や体調によって、威力が違ってくるのだ。きのうは7を撃てたとしても、きょうは3になるかもしれない。それがレボザーラの特徴だ。強ければ必ず勝てるわけではないのが、魔法決闘の妙味と言えるだろう。

なお、レボザーラは強い攻撃魔法ではないので、これで大怪我をすることはまずない。が、10年に一度くらい無茶をして大怪我をするものが出てくるので、結局、魔法決闘は禁止になったのだ。

真が杖を構え、アイに向かって前進。アイも杖を構えて、真に向かって前進。

真とアイがすれ違ふ。すれ違いざま、アイはレボザーラを真に繰り出す。だが真は、レボザーラを撃たず、アイの魔法の直撃を受けて、近くのビルの屋上に落下する。

空中に止まって振り返るアイ。さすがに顔が青い。

「なんでだ、なんでレボザーラを使わなかった。……ハッ、もうひとり」

後ろを向くアイ。真後ろに恵美が来ていた。

「リボーヴァン。ブヒャン」

恵美は二つ続けて魔法を撃つ。

リボーヴァンは防御魔法を弱める魔法。リボーヴァンは威力は弱いですが、距離が近いと効果は抜群だ。ブヒャンは弱い麻痺魔法。

アイが麻痺してゆっくり落下していく。

「テメー！」

「ゴメンなさい」

謝ってから、恵美は真の落ちたほうに飛んでいく。

本来、魔法決闘を終えたばかりの相手に魔法を使ってはいけないという暗黙の掟があったのだが、例外的に弱い魔法は黙認されていた。だから、恵美の行動はモラルに反していない。

夜のエジプトの町中に、アイが落下してくる。

道にゆっくり落ちる。麻痺魔法が効いていて体が重い。

「ちくしょう!! エジプトの魔女をコケにしやがって!!」

アイの怒りはしばらく収まらなかった。

通行人は、激怒したアイを避けている。

エジプトのビルの屋上で、真がうずくまっている。

恵美が箒に乗ってやってくる。

「真さん、大丈夫ですか」

「ううっ、たぶんね。治癒魔法と回復魔法をかけてくれないか」

「もう、ムリするんだから」

恵美が、治癒魔法と回復魔法を真にかける。

治癒魔法と回復魔法は、自分にかけることもできるが、他人にかけて貰うほうが3割以上効果が高いことが報告されている。だから、真は、恵美に治癒魔法と回復魔法をかけて貰ったのだ。

「ありがとう、だいぶいい感じだ。聖なる鏡は無事だね。さあ、ホテルに帰ろう」

「少し休んだ方がいいんじゃないですか」

「休んでるあいだにさっきの魔女たちが追ってくるよ」

「そうですね。じゃあ急いで帰りましょう」

ふたりは箒に乗った。

今回使った戦法は、イーケンス用に立てていた作戦のひとつなのだが、打ち合わせをしていて本当に良かったと、ふたりはしみじみ思ったものだ。

エジプトのホテルの一室で、ガブリエルがのんびり新聞を読んでいる。

ドアが開いて、大汗をかいた真と恵美が入って来た。

ガブリエルがふたりに話しかけた。

「よう、お帰り。どうした、大汗かいて」

「どうもこうも」

真は息を切らしている。

「危なかった～」

惠美は、最近は魔女合気道の訓練を受けているのでまだ体力に余裕があったが、それでも疲れを見せている。

「そういえばエジプトには、アイ・マイ・ミーという怖い魔女がいて墓を見張ってるから気をつけろよ」

暢気のんきにガブリエルが言った。

真と惠美が顔を見合わせる。そしてガブリエルを見る。

「先に言え！」

「先に言ってよ！」

ガブリエルは、しばらくして笑みを見せた。

エジプトの空港のロビーに、真と惠美とガブリエルが荷物を持って立っている。

ガブリエルが真を見た。

「本当にオレは行かなくていいんだな」

そう言ったガブリエルは、とても真剣だ。

「ああ、今回のエジプトの一件で十分な借りができた。それに、言っちゃ悪いが、魔法の使えないガブリエルを連れて行くのはリスクが大きすぎる」

真もいたって真剣だ。

「オレはふたり旅のほうがリスクが大きい気がするけどな。まあいい、決心が固いようだ。魔女たちの未来をふたりに託たくすよ」

惠美が口を開く。

「あの、ガブリエルさん、ありがとう。あなたは魔女の友です」

それを聞いたガブリエルは、ひざまずいて惠美の手にキスをした。

惠美は顔を赤く染めた。

「さようなら、グースベリーのお嬢さん。お元気で」

立ち上がるガブリエル。

「真、肝心な時に力になれなくてすまない。死ぬなよ」

ガブリエルが真にハグをする。

「じゃあな」

ガブリエルが荷物を持って去った。

沈黙。

「ぼくたちも行こうか」

真がぼつり言った。

「はい」

惠美は答えた。

ギリシャの鉄道の先頭車両で、真と惠美が席に座っている。

「いよいよ、サントリーニ島へ行くんですね」

惠美の声は、少し大人びていた。

「港からまたフェリーだけどね」

そう真が答えたとき、警笛とともに電車が急ブレーキした。

惠美は電車の揺れで態勢を崩し、真にしがみつこうとして驚いた。
真は、魔法でティーパーティーを引っ張り出して組み立て、窓ガラスを突き破って電車を飛び出して行ったのだ。
その間、わずか2～3秒だった。

ギリシャの列車の上空を、ティーパーティーが舞う。
電車は急ブレーキ中で、警笛を鳴らし続けている。
真は急旋回し、電車の前方に3～4歳の子供を視界に捕らえた。子供は踏み切りの中において、電車のすぐ前だ。
ジャンヌが見たならば、きっと驚くであろう速さで、真は踏切に横から突入した。

ギリシャの電車は止まった。踏み切りを少し超えて。
踏み切りには、乳母車うぼぐるまのそばで倒れかかった若い女性がいる。若い女性は、必死に何かを言おうとしているが、それは言葉にはならない。
やせた中年男性が、若い女性に近づいてきた。
「あんた母親か。どうしてちゃんと子供を見てなかったんだ！」
彼は怒っている。
小太りの中年男性が近づいてきた。
「ちょっと待って。これが落ちていました。あなたのですか」
と言って、ぜんそくの呼吸器を若い女性に差し出した。
若い女性は呼吸器を奪い取ると、勢いよく吸い出した。
「彼女には持病があるようです」
「そうか。怒鳴って済まなかったな」
若い女性がようやく声を出した。
「あの子は？ 私の子供は？」
「あの速度だ。たぶん助からないだろう。見ないほうがいいのかも知れないな」
やせた中年男性が言った。
「そんな、そんな」
若い女性はたいへんうろた狼狽えている。
突然、電車が後退を始めた。
踏み切りの近くにいたものは、みな驚いた。
電車は、踏み切り前で、また停止した。
踏み切りの反対側には、子供を抱えた真がいる。真は切り傷だらけだ。ティーパーティーは持っていない。だが、子供は元気なようだ。
真が子供を抱えて、踏み切りを超えてやって来る。
「どうなってるんだ。あの東洋人は見た覚えがないぞ」
「私も何が何だかさっぱり分かりません」
やせた中年男性も、小太りの中年男性も驚きを隠せない。若い女性は、これが夢ではないことを祈るばかりだった。

真が、子供を抱えて若い女性の前まで来た。
「あなたのお子さんですね」
「ええ、そうです。ありがとうございます」
若い女性が子供を受け取る。
「ああ、怪我はない？　ないの、大丈夫なの？」
「ママ、だいじょぶ」
子供に怪我がないのを見て取ると、若い女性は涙を流して我が子を抱きしめた。
「良かった」
「良かったな、坊主。それとも嬢ちゃんか」
やせた中年男性は笑顔になった。こんな状況に出くわしたら、誰だって笑顔になるものだ。
「ほんとうに良かった。奇跡が起きたとしか」
小太りの中年男性もスマイルだ。
「この子は男の子です」
「そうか。おい、東洋人。どうやって助けたんだ？」
やせた中年男性は真のほうを見るが、もういない。
「いまの東洋人はどこへ行った？」
「さあ、私も見ていませんでした」
やせた中年男性はあたりを見回すが、やはり東洋人はいない。
「稲妻いなずまのように現れて風のように去った、か」

ギリシャの電車の中で、恵美は前方の踏み切りを見ていて、子供が無事なのを見て安堵している。

進行方向の右側を見ると、ティーパーティーがくるくる回りながら飛んでいくのが見えた。誰も乗せていない。

車掌がやって来た。
「怪我をされたかたはいますか？」
何人かが手を挙げる。
「済みません。大怪我をされたかたはいますか？」
車掌が言い直した。
手を挙げる者はいない。
車掌は「良かった」と言って、割れた窓の応急手当をする。
「この列車は、つぎの駅まで徐行じょこうします」
窓の修理を終えた車掌がそう言った。
恵美のスマホに通知だ。
見ると真からで、
『恵美ちゃん無事？　線路に迷い込んだ子供は救い出したよ。ティーパーティーを失った。ぼくは港まで歩いて行くから、恵美ちゃんは待っていて。荷物を二人分、よろしく』とある。
「魔法使いめ」

嬉しそうなトーンという言葉が、恵美の口からこぼれた。

ギリシャの道を、真が歩いている。

あちこち痛むが気にならず、むしろ足取りは軽かった。

スマホに通知、彼は立ち止まった。

恵美からで、

『わたしは無事です。真くんは大丈夫ですか?』

とスマホに表示された。

真は「たいした怪我じゃない。怪我は男の勲章^{くんしょう}だよ。それよりティーパーティーを失ったのが痛いな」と打って返信した。

また歩き出す。

しばらくしてスマホに通知。立ち止まる。

恵美からで、

『怪我は男の勲章なんて時代遅れもいいところですよ。ほんとうに大丈夫??』

とある。

真は「治癒魔法と回復魔法はかけたよ。今はたいした痛みもないよ」と返信。

また歩き出す。

スマホに通知、立ち止まる。

恵美からで、

『こんど無茶したら、ただじゃ済ませませんからね。でも、人を助けたのは偉いです。わたしはあなたを誇りに思います。港の待合室で待っています』

とある。

真は「ありがとう。ぼくは大福餅^{だいふくもち}が食べたいよ」と返信した。

また歩き出す。

陽はまだ高いし、スマホのバッテリーもしばらく持つ。彼には、何もかもが順調に思えた。

ギリシャの港の待合室に、手ぶらの真が入って来る。

船が出た後だからか、人は少ない。見知らぬ中年女性と話をしている恵美を見つけた。恵美は、真に気づいて近づいて来た。

恵美は真のすぐそばまで寄る。おっと、これは、ちょっと寄りすぎだ。お姉さんは少し心配だよ。弟の真は、これでも思春期だからね。

「真くん、大丈夫ですか」

恵美は、真の身体をあちこち触る。

「大丈夫だって、いて!」

真は、脇腹を触られて痛がった。

「ほら、怪我してる」

「あれ、気づかなかったなあ」

「治癒魔法をかけます」

「それは私がしましょう」

恵美と話をしていた中年女性が近づいて来る。

「私はアネモネ・ペトラキス。ギリシャの魔女です」

と言って、アネモネが治癒魔法を真にかける。

「ありがとうございます。助かります」

「もう痛くない？」

アネモネが聞いた。

真は脇腹を軽く叩いた。

「大丈夫みたいです」

「そう、よかった。これを」

と言って袋を真に渡す。袋から大福餅を取り出す。

「大福餅だ。食べていいんですか？」

「どうぞ」

真は大福餅にかぶりついた。大福餅以外にも何かあるようだ。真は、袋から分解された箸を取り出した。

「ティーパーティーじゃないですか。ごうやってこれうお？」

「ギリシャの魔女が総出で^{そうで}搜索しました。相手は伝説のティーパーティー。見つけるのに苦労しました。どうやら、その箸は母国へ帰ろうとしていたようです」

「あひがありがとうございます」

「真くん、お行儀が悪いですよ」

恵美は指摘した。

真は大福餅を飲み込んだ。

「いいえ、お礼を言うのはこちらのほうです。ギリシャの未来を救ってくれて、ほんとうにありがとう。こういう時、日本では頭を下げるのでしたね」

と言って、アネモネは深く頭を下げた。

「ぼくは自分にできることをしたまでです」

真が言うと、アネモネは頭を上げた。

「謙虚^{けんきょ}なところは璃々杏にそっくりね」

「母をご存じなんですか？」

「ええ。彼女は有名人ですからね」

「あの、魔女たちの作戦がどうなっているのか教えてもらえないでしょうか」

真は、ずっと気に掛けていたことを質問した。

「困ったわ。同郷^{どうきょう}の子供を救ってくれた恩人が、秘密の情報を欲しいと言っている。私は、魔女たちを裏切って情報を漏らすべきなのかしら？」

「わかりました。作戦については聞きません」

「ありがとう、助かるわ。さあ、フェリーに急ぎなさい」

恵美は港のほうを見た。

「予約した高速フェリーは、20分前に出港しましたよ」

「ええ、普通の人間なら、20分前に出港した船には間に合わないでしょう。でも、あなたたちは普通の人間ではありませんよね。フェリーまで私が水先案内人になります」

アネモネはそう言って、自分の箒を取り出した。

エーゲ海の低空で、魔法の箒に乗ったアネモネを先頭に、真、恵美と続いて飛んでいる。

アネモネの箒と真のティーパーティーは、曳航^{えいこう}ロープで繋がっている。真は魔法使いもどきだから、海上は遅いからね。

曳航ロープと補助ロープは、ほぼ同じものだが、長さ和本数が違う。曳航ロープは長く、補助ロープは短い。曳航ロープは一本での使用が普通で、補助ロープは二本一組だ。

「なんだかかっこ悪いなあ」

真が愚痴^{ぐち}を漏らした。

「こんな時までカッコイイとか悪いとか、男ってほんとダメ」

だが、恵美の声には優しさがこもっていた。

「見えてきましたよ」

アネモネがそう言うと、前方に高速フェリー、マリリン号が見えてきた。

真と恵美が、高速フェリーのマリリン号のデッキに降り立った。

アネモネは空中のままだ。

「私はここまでです。おふたりの幸運を心から祈ります」

そう言って、彼女は箒に乗ったまま引き返した。

真と恵美は船内に入った。

エーゲ海を進む高速フェリー、マリリン号。

高速船のためそれほど大きくないが、外観は美しく、内装は豪華だ。もちろん、世界の旅行者がエーゲ海に何を求めるのか、それをよくわかってのきらびやかさだ。

その船の一室で、恵美が椅子に座って携帯ゲーム機で遊んでいる。

こんこん。

携帯ゲーム機をテーブルに置き、恵美がドアへ行き、少し開ける。見ると、真が立っている。

「真くん、どうしたんですか」

「魔法の訓練をしたいんだけど、いいかな」

「いいですよ。どうぞ入ってください」

恵美がドアを開けると、真が入って来る。彼はゲーム機に気づいた。

「ゲーム機がないと思ったら、君が持っていたのか。遊んでたの？」

「そうです。真くんが間違えて、わたしのバッグにゲーム機を入れたんですよ」

恵美は携帯ゲーム機を手を取った。

「このRPG、面白いですね」

「世界で90万本売れた、隠れた名作なんだ」

「おっと、セーブセーブ」

恵美がゲーム機を動かした。

「ちょっと待って、それセーブがひとつしか出来ないゲームなんだよ！」

真が声を荒げた。

「残念、もうセーブしちゃいました」

恵美はしたり顔で、真はあんぐり口を開けている。

「わたしはワルですから」

「あっ、そう。はあ、10時間やり直しか」

真の落胆ぶりに納得した恵美は、不敵な^{ふてき}笑みを浮かべた。

「冗談ですよ。セーブしてません。チュートリアルに、『このゲームはセーブがひとつしか出来ないから気をつけてね』ってありましたから」

真は胸をなで下ろした。

「よかった。しかし、受験生なのにゲーム、余裕だね」

彼がやり返した。恵美は笑いながらゲーム機を返した。恵美は杖を取り出す。

「じゃあ、やってみて」

「グトジャーニュ」

恵美が防御魔法を使う。

真が観察する。

「うん、いいよ。穴がないよ。消して」

恵美が防御魔法を消す。

「もう一度」

「グトジャーニュ」

真が少々の驚きを持ったまま観察する。

「よし、今度も穴がない。パーフェクトだ」

恵美はもう一度したり顔になった。

エーゲ海に浮かぶ、サントリーニ島は、崩れた崖と、崖の上の白い街並みが印象的だ。遺跡もあるので、この美しい島は観光地としてたいへん有名である。

サントリーニ島の船着き場に、小型船が接岸している。

荷物を持った真と恵美が、小型船から降りてきた。

サントリーニ島の崖の上に行くには、ロープウェイとロバに乗って行くのと、2つのコースがあるが、ふたりはロバに乗って行くことにした。

恵美が気を使ったのだ。「自分はデジタル機器を壊す体質だった。この旅行で何か物を壊したことはなかったが、もしロープウェイが途中で止まったら？」そう心配すると、料金の高いロバを選んだほうが安心だと彼女は考えたのだ。イーケンスとの決戦の前に、いらぬトラブルは避けたかったのだ。

こうして、ふたりはサントリーニ島の崖をロバに乗って上がり、ホテルにやってきた。

「いらっしゃい。ご予約ですか」

ホテルマンは訊ねた。

「予約した、渡辺真と倉田恵美です」

「はいはい、少々お待ちを。……確かにご予約なさってますね。はい、102号室の鍵と

103号室の鍵です。いまご案内します」

ホテルマンは、鍵を2つ取り出した。

「真くんは、旅が終わったらどうするつもりですか？」

恵美が103号室の窓から顔を出している。

「恵美ちゃん。なんかそれ、まるで負けフラグみたいだよ」

真は102号室の窓から顔を出している。

「どうしてですか？」

恵美は失笑した。

102号室と103号室の窓は、話し合うにはちょうどいい、心地いい距離だった。ふたりの心の距離も、今は近いようだ。

「いいじゃないですか。教えてくださいよう」

「う〜ん、受験勉強もあるけど、できれば、いま書いてるファンタジー小説を完成させたいね」

「あらあら、読ませてくれないくせに」

弟の真はファンタジー小説を書いているが、あまり人に見せたがらない。恵美ちゃんにも見せてないのか。

恵美のスマホが震えた。見ると真からのメールで、添付ファイル付きだ。恵美は添付ファイルを開いた。

「ほう、『ノラ猫ミミの冒険（仮）』ですか」

「タイトルは仮のものだよ」

「ふんふん、あとでじっくり読まさせてもらいましょう」

「恵美ちゃんはどうするの？」

「もちろん受験勉強ですよ。実のところ推薦枠を狙っていたのですが、駆け落ちをしておいて推薦もへったくれもないでしょうから」

「一芸入試が狙えるんじゃない？」

「一芸入試？」

恵美は訝しんだ。

「倉田恵美さん。あなたの特技を教えてください」

「？……駆け落ちです？」

「合格です！」

「やった〜」

ふたりはとても盛り上がった。ヤケクソとも言うが。

「えっと、真くん。小説を見せてくれたお礼に、いいことを教えてあげましょう。ヤグーのトップページを開いてみて」

真はヤグーのトップページを開いた。ニュースがいくつか表示されているが、3番目に、『俳優の池澤カカナ、初水着を披露！』とある。

「えっ、カカナさんが？」

真は記事をクリックした。記事は以下の通り。

『かねてより、俳優業以外では脱がないと公言していた池澤カカナさんが、なんと水着姿を見せた。なんでも、知り合いの子がいま辛い立場にあり、応援する意味合いから水着写真を撮ったのだという……』

水着の写真は素晴らしかった。

池澤カカナが、青と白のストライプの水着を着て、髪はポニーテールだ。真は息をのんだ。彼は、部屋に少し引っ込んでから、写真を保存しようとスマホに人差し指を伸ばした。

「へえ～、保存するんだ～」

隣の部屋から恵美の声が聞こえてきて、慌てて真は指を引っ込めた。あれ、おかしい、隣の部屋からは見えてない角度のはずだ。

「へえ～、カカナさんがせっかく水着を披露してくれたのに、保存しないんだ～」

真は、指を伸ばした。

「へえ～、保存するんだ～」

真は、指を引っ込めた。

「へえ～、保存しないんだ～」

「恵美ちゃん、こっち見えてるの？」

「さあ、どうでしょう」

「恵美ちゃん。保存していい？」

「……いいですよ」

「怒らない？」

「さあ、それは保証しかねます」

悩んだ末、真は、カカナの水着写真を保存した。

「それにしても、いい景色ですねえ」

「いい景色だねえ」

ふたりとも、サントリーニ島の景色に見とれているようだ。

夕方、サントリーニ島のレストランで、真と恵美は夕食を摂った。

海に見える席で、またもや絶景だった。

「おいしいですね」

「うん」

そこへ、ふたをしたお盆を持った店員がやって来た。

「どうぞ」

と言って店員は、お盆をふたりのテーブルに置いた。

「こちらの男性からですよ」

真を差してからお盆のふたを取った。中には丸いケーキがあり、ロウソクが18本立っている。店員はマッチでロウソクに火を付けた。

真は歌い始めた。

「ハッピー・バースデイ・トゥ・ユー、ハッピー・バースデイ・トゥ・ユー、ハッピー・

バースデイ・ディア・恵美ちゃん、ハッピー・バースデイ・トゥ・ユー」

恵美の目が潤む。真や周りの客や店員が拍手をする。恵美は周囲に頭を下げた。拍手が止んだ。

「覚えていてくれたんですね」

「キミの誕生日は一生忘れないよ」

「どこでそんなセリフを覚えたんですか」

「さあ、灯を吹き消して」

恵美がロウソクの灯を吹き消す。真は拍手をする。

「誕生日おめでとう」

真は、ジュエルケースを恵美に渡した。

「プレゼントだよ」

恵美がジュエルケースを開けると、ヘアピンが入っていた。サントリーニ島のシルエットの飾りのついたものだ。

「この島ですね。貰ってもいいんですか」

「もちろんだよ、キミへのプレゼントだからね」

「人前でヘアピンを付け替えるのはマナー違反かも知れないけれど」

と言いながら恵美は、いま付けているピラミッドとスフィンクスの飾りのヘアピンを外して、新しいヘアピンを刺した。

「似合いますか」

「似合ってるよ」

「ふふん、ふふん。ところでこれ幾らしたんですか」

「それは、まあいいじゃない」

「そうですね、いい雰囲気が台無しですもんね」

ああ、恵美ちゃんの誕生日に、弟はカカナさんの画像を保存していたのか。真よ、お姉さんは悲しいぞ。

サントリーニ島のホテルのフロントに、真と恵美が荷物を持って来ている。

「滞在が一日だけというのは残念ですね。では、お会計を」

ホテルマンがそう言うと、真はクレジットカードを渡した。ホテルマンが真のクレジットカードを使う。ピーという音が出る。エラーだ。

「あれ、もう一度」

ホテルマンがクレジットカードを使う。またエラーだ。

「失礼ですが、別のカードか現金をお持ちではないでしょうか」

彼はクレジットカードを真に返した。

「いえ、カードはこれだけです。現金もありません。ちょっと待っててください」

真はクレジットカードを見ながら、カード会社に電話をかけた。

「あの済みません。渡辺真といいます。渡辺璃々杏の家族カードを使用しているのですが。……はい、はい。……なんとかならないでしょうか。……はい、分かりました」

電話を切る。

「どうしたんですか」

恵美が訊ねた。

「それがね、ちょっとね」

「正直に言ってください、怒りませんから」

「使いすぎだって」

「いくらオーバーしたんですか」

「それが、その」

「幾らオーバーしたの！」

「5800円。きのうのバースデーケーキがまずかったみたい」

恵美は、残念なものを見る目つきで真を見ている。

いたたまれなくなった真は、ホテルマンに話しかけた。

「あの、料金は日本に帰ってから利子をつけてちゃんと支払いますから」

「ダメですね」

ホテルマンは首を大きく横に振った。

真と恵美が、サントリーニ島のホテルの空き部屋の掃除をしている。

「ああもう、信じらんない」

恵美は、愚痴ぐちだ。

「ゴメンよ」

真は面目丸つぶれだ。

ふたりは、じゅうぶん美しいサントリーニ島を、さらに美しくしていた。

夜になった。

サントリーニ島のホテルの従業員部屋で、恵美は横になっている。

恵美がいるのは女性用の従業員部屋で、真は近くの男性用の従業員部屋にいるはずだ。

すると、どこからともなく歌が聞こえてきた。不思議な歌だった。

『たんぽぽ飛ぶぞ 葉っぱも飛ぶぞ
ガーガーヒューヒュー はじまりだ
ご飯は食べたか 水は飲んだか
ガーガーヒューヒュー お祭りだ
二本足は家の中 バウバウは小屋の中
世界はいま われわれだけのもの
小さい爪たちがいるだけさ

野良猫どもよ 集まれ
家猫どもよ 外へ出ろ
世界を知りたいければやって来い

肉球で大地を踏みしめろ

爪で木の根をつかめ
そして あの丘を越えるんだ

ゴルフ場を超えて行こう
ゴルフ場を超えて行こう
嵐が過ぎるまでに

ゴルフ場を超えて行こう
ゴルフ場を超えて行こう
朝陽が目を覚ます前に

二本足は世界を知ることはない
バウバウたちは知る勇気さえない

ガーガーヒューヒュー はじまりだ
ガーガーヒューヒュー お祭りだ

ゴルフ場を超えて行こう
ゴルフ場を超えて行こう
ネコだけが知っているあの場所に』

歌が終わる前に、恵美は眠りについていた。

サントリーニ島のホテルのフロントに、真と恵美が荷物を持って来ている。
ホテルマンが口を開いた。

「まあ、いいでしょう。ほんとはこれでも赤字なんですけどね。子供を働かせるのは紳士
じゃありませんからね」

「働かせたくせに」

真と恵美は、毅然と反論した。

「何か言いましたか？」

「ええ、もちろん」

恵美は精悍な顔を見せている。

「おっと、今のは聞かなかったことにしましょう。大人になったらまた来てくださいね。
今度は予備のクレジットカードを忘れずにね。……ところで、帰りは本当に大丈夫なん
ですよね」

「ええ、お金は借りる当てがあるので心配しないでください」

「真くんの言うとおりの、大丈夫です」

「当てが外れたら、このホテルに戻ってきてください」

「また働かせるんでしょう」

恵美はキツイ目をしている。

「いえ、無利子でお金をお貸しします。困っている旅人を見捨てるわけにはいきませんから」

ふたりはちょっと驚いたようだ。

「ありがとう。その時はお言葉に甘えさせていただきます」

真はそう言い、恵美は優しい目つきになった。

ふたりがホテルを出て行く。

去り際、恵美が「変な歌を聞かせるホテルだったねえ」と言ったが、なぜか、真がビクッとしていた。

第三章 ふたりの世界旅行 おわり

第四章 決戦、アトランティス！

第四章 決戦、アトランティス！

渡辺^{まこと}真と倉田^{えみ}恵美は、旅の最後の行程^{こうてい}に入った。

サントリーニ島の市街地フィラを荷物を持って歩いて抜けて、そこから魔法の箒でティラ遺跡へ移動、そこからまた歩いて移動だ。

真夏だ、朝とはいえ太陽がまぶしくて暑い。湿度が低いのが救いだ。

道中ふたりは、世界各地で食べた料理のことを話題に上げた。やれ、あの国の料理はおいしかったの、やれ、その国の料理はイマイチだったの、とまあこんな感じだ。どの国の料理の感想が良かったか悪かったかは書かないでおこう。国際問題になりかねないからだ。

イーケンスは話題に上がらなかった。「じゅうぶんに作戦は練った、あとは倒すだけ」というのが、ふたりの偽^{いつわ}ざる本音だった。

こうしてふたりは、ティラ遺跡のある洞窟にやって来た。杖を出して灯りをともし、慎重に奥へ進む。突然、女性の顔が現れた。これは心臓に良くない。

「お待ちしていました。マコト・ワタナベさんとエミ・クラタさんですね。私はサントリーニ島のこの洞窟を守る魔女、アレクシア・ヴァシレイオです」

現れたアレクシアが、静かにそう言った。まだ若い魔女だった。

「ついてきてください」

ふたりは、アレクシアについていった。そして、洞窟の最奥^{さいおう}にやってきた。

「行き止まりですね」

恵美が気にした。

「中央を開けてください」

アレクシアがそう言うと、真と恵美は壁にへばりついた。アレクシアが古代の呪文を唱えると、中央の床がぼっかり開いて縦穴が現れた。地下道に通じる縦穴だ。風が吹き上げてくる。あまり気持ちのいい風ではない。

真と恵美は、縦穴をのぞき込んだ。底が見えない。

アレクシアは杖の光を強くした。

「この縦穴は、アトランティス大陸に通じる地下通路への入り口です。あなたたちが降りたあとは、この穴を閉じます。ご承知だとは思いますが、生きて帰れる保証はどこにもありませんよ」

真と恵美は、バッグから箒と杖と小袋を取り出すと、まず箒を組み立てて、バッグをアレクシアに渡した。

「もし、生きて還^{かえ}って来なかったら、この荷物を書いてある住所に送ってください」

「アレクシアさん、お願いします」

アレクシアはふたりのバッグを受け取った。彼女は表情を変えなかったが、楽しい気分でないことだけは確かなようだった。

真は、漆黒の穴を見て息を呑む。なんという深さだろう。

「命がけの冒険は、生きている間にしかできないのさ」

それを聞いて、ぽかんとする真。恵美が言ったのだ。

「えっ、今のなに？」

「決めゼリフですよ、カッコいいでしょ。旅の間ずっと考えていたんです。今度は真くんの番ですよ、はい」

「えっ、ええっ！」

「考えてなかったんですか？」

「……『いつかは死ぬのさ』」

「ダメです。それ、ギャング映画のセリフでしょ。自分の言葉でどうぞ」

真は熟考した。真が言ったのは、映画『アンタタッチャブル』のジム・マローンのセリフだ。ちなみに、字幕版と吹き替え版でセリフが違うから要注意だ。

アレクシアが腕時計をチラッと見た。

「こんな心強い相棒がいるんだ、負けるはずがないな」

真はなんとか言葉をひねり出した。

「合格です。ではお先に。行くよ、ラビットハート」

と言って、恵美は箒に乗って縦穴を降りていく。

「行こうか、ティーパーティー」

真も続く。

恵美は地下通路に降りてきた。地面すれすれで箒が自動停止し、安全に止まる。あたりは真っ暗だ。杖を明るくして通路の方向を確認し、少し移動する。これは、あとから降りてくる真の場所を確保するためだ。

真が降りてくる。ゆっくり降下してきて、地上すれすれで停止、と思いきや真は箒から落ちた。

「真くん、大丈夫ですか」

恵美が慌てた。箒の運転は、真のほうのはるかにキャリアが長い。その真がミスるとは思わなかったのだ。

その真は、考え込みながら、ゆっくり箒に乗り直した。

「大丈夫だよ。でも、ちょっとまずいな」

「どうしました？ どこか怪我でもしましたか？ あっ、まさか！」

「そのまさかだと思うよ」

箒から落ちる、これは、魔法使いもどきが魔法を使えなくなる前兆症状のひとつなのだ。

「……真くん」

「大丈夫。歴史上、魔法使いもどきが、魔法を使えなくなる前兆症状が出てから実際に魔力がなくなるまでに、最短でも12時間はあるからね。最長なら1年だ。なにも問題ないよ」

「^{かえ}還りはわたしが送りますよ」

「ありがとう、助かるよ」

真が杖に灯りを起こすと、ふたりは一本道を進み始めた。サントリーニ島から海底のアトランティス大陸に通じる地下通路だ。

アレクシアが穴を閉じたようで、空気の流れが淀んだ。

真と恵美は、道の途中で急停止した。前方の通路が水没しているのだ。

「行き止まり？」

「恵美ちゃん、ガドンの魔法は使える？」

ガドンはバブル魔法で、水中を移動できる。

「いいえ。概念を習っただけでまだ使えません」

「ちょっと待ってて、先に行って見てくる」

「すぐ戻って来てくださいね」

真は頷いて、ガドンの魔法を使って自分の周りに大きな泡を作り、そのまま水没した通路に入って行った。

恵美はしばらく、ひとりで暗闇に包まれていた。

すると、右手のほうから声が聞こえてきた。

『いやだいやだ。もう子育てはたくさんだよ。アイツはあんまり手伝ってくれないし』

そう言って現れたのは、2人の子供をつれた女性だった。もちろん^{まぼろし}幻だ。その女性は、恵美の母親によく似ていた。自分にも似ているように思えた。どう見ても、未来の自分にしか思えなかった。子供ふたりは、渡辺真に似ている気がした。

『あいつがどんな仕事をしてるか知りたいかい？』

幻は移動しながら、恵美に語りかけた。恵美は微動だにしない。璃々杏から口を酸っぱくして言われ続けたのだ。「魔力の強いところで独りでいると、幻を見るかもしれない。でも、絶対に喋ってはいけない。悪い魔女になってしまうから」と。

『そうかい、知りたくないのかい。でも、ついでだ。教えてあげるよ。あいつは、エアコンの取り付け工事をしているのさ』

エアコンの取り付け工事か、悪くない。まず、食いつばぐれない、と恵美は安堵した。『それは立派な仕事だけど、やっているのは稼ぎのいい夏と冬だけ。あとは、売れない小説を書いているんだよ』

売れないってことは、プロの小説家になれたのか？ いや、真くんの小説が売れるわけがない。きのう『ノラ猫ミミの冒険（仮）』を読んで確信した。なのに、働くのは夏と冬だけ？ 穀潰しやん、と恵美は思いつつも、なんとか口を閉じ続けた。

『結婚相手はよく考えるんだっただよ』

そう言って、幻は左手に去っていった。

数分後、真が戻ってきた。少し遅かった。

「大丈夫だよ。水没してるのは10メートルくらいだよ。恵美ちゃん、ティーパーティーに乗る？ それともくっついて進む？」

恵美は、ぼーっとしている。

「恵美ちゃん、どうかしたの？」

「……じゃあ、せっかくだからティーパーティーに乗せて貰います」

恵美は、ラビットハートから降りると箒を背負い、ティーパーティーに乗って後ろから真に抱きついた。

真くんに抱きつくのはこれで二度目か……と思った恵美だが、口にはしなかった。

「それとね……」

真は奥歯に物が挟まった物言いだ。

「なんですか？」

「水中でびっくりしないでね」

「何かあったんですか」

「まあその、ちょっとした豪華な白骨死体がね」

「ああ、そうですか」

「行くよ」

「はい」

真はまたガドンの魔法を使う。ふたりを乗せたティーパーティーが、大きな泡に包まれて水中を進む。

途中で、財宝を手にした白骨死体が見える。恵美は白骨死体に手を振った。なんだか、白骨死体が手を振っているように見えたのだ。

真と恵美は水没区間を通過して、また空気のあるところに出た。

「ミイラ取りがミイラ……」

ティーパーティーを降りながら、恵美は呟いた。

「どうかしたの？」

「いいえ、なんでも」

惠美はラビットハートに乗った。

「さぁ行こう」

ふたりはまた進んだ。

しばらくして、真が異変に気づき、箒を空中に止める。惠美もそれに習って止めた。

「どうしたんですか。行き止まりですか」

「鬼火だ」

見ると、ひとつの鬼火が、ふたりのそばをぐるぐる回っている。

「えっ、ほんとうだ」

「惠美ちゃん何もしないで。鬼火はたいてい無害だから」

「鬼火ってなんでしょうね」

「さあね。古い魔女の伝承^{でんしょう}によると、鬼火の正体は妖精らしいよ。昔は、妖精と魔女たちは交流があったんだ。でも、いつのころからか、妖精と魔女は会話をしなくなった。それで、妖精が姿を隠すようになったんだ。それでも魔法使いは妖精をかすかに感じられる。それが鬼火らしいよ」

「へえ～」

「あたりだよ。ぼくは妖精のクルル」

鬼火が姿を変え、小さな妖精になった。10センチくらいだ。服は着ているよ。

クルルが話し出した。

「その昔、ぼくたちは魔女たちの願いを叶えてあげていた。でも、産業革命ってやつが起きると、どういうわけか魔女たちはぼくたちに興味がなくなったんだ。彼女たちは、夜でも光るガラスの球^{たま}や、馬なしで走る荷車に夢中になっていったんだ。それで、妖精と魔女たちの心の距離が離れて、ぼくたちは滅多なことでは姿を見せなくなったんだよ。ところで、君たちはここがどこだか知ってるのかい？」

「海底のアトランティス大陸に通じる隠し通路です」

真が答えた。

「ふ～ん。魔女たちはまるでバカになってしまったわけじゃないんだね。そうだ、ここで会ったのも何かの縁だ。君たちの願いをひとつ叶えてあげるよ」

「なんでもいいんですか」

惠美が喰い付いた。

「もちろんさ。なんでもいいよ」

「じゃあ、イーケンス退治に——」

あわてた真は手で惠美の口を塞いだ。

「ぼくと惠美ちゃんがいつキスできるか教えてください」

彼がそう言った。

「それでいいのかい？」

「いいわけあるかッ、このクソ野郎！」

真の手を払って、惠美が真を蹴った。

「願いを変えるかい」

「ええ、もちろん」

これは恵美だ。

「いいえ、このままで」

これは真。

恵美がまた真を蹴る。今度は二度蹴った。

「真くん、なに考えてんのよ。妖精さんにイーケンス退治を手伝ってもらえばいいじゃん。あんたバカなの？」

妖精のクルルが、恵美の顔のそばに来た。

「キミの彼氏はなかなか頭が切れるね」

「どういうことですか」

「ぼくたちは、はるか昔から魔女たちの願いを叶えてあげていた。そのまた昔では、男の魔法使いの願いもね。でも、妖精に願いを叶えて貰うのは危険でもあるんだよ」

「なぜ危険なんですか」

「あれは、千年くらい前だったかな。ぼくはある若い魔女からお願いされたんだ。『私を世界一美しい魔女にしてください』ってね。ぼくは願いを叶えてあげることにした。3年後、彼女は世界一美しくなった。だけど、妖精の願いには代価が必要なんだ。もちろん、『腰痛を治して』とか『屋根の穴を塞いで』といった簡単な頼みなら、たいした代価は取らないよ。せいぜい小銭を少々、あるいは食料を少し貰っていただけさ。だけど、世界一美しくして、という大きな望みを叶えた以上、大きな代価を貰うのは当然の成り行きだったのさ」

「どういう代価だったんですか」

「その若い魔女は、世界一美しくなってから一週間後に、目が見えなくなったんだ。それが代価さ」

「そんな酷い」

恵美は静かに震えた。

「そうかな。世界一美しくなれたんだ。それくらいの代価は払うべきだよ。それに、その若い魔女には願いが叶ったらどうなるか、事前にちゃんと教えていたよ。それでも彼女は、究極の美のほうを選んだんだ」

「代価を取らずに願いを叶えてあげられないんですか」

「いまそうしてるよ」

「えっ?!」

「無知な魔女の質問にただで答えてあげているよ。さて、若い魔女さん、願いを変えるかい？」

真は恵美を見た。真の目は、試している目か、信頼している目かどちらだろう。

「『イーケンス退治を手伝って欲しい』って頼んだら、どういう代価が必要になりますか」

「イーケンスか。まあ、ぼくたち妖精族は彼のことなんかこれっぽっちも恐れてはいないが、さすがにこの代価はでかいな。魔女の命を……100人くらい、いただくことになるだろうね」

「100人……そんな」

恵美は顔が青くなる。

「恵美ちゃん、『魔女の大望は^{たいぼう}大過^{たいか}を招く』だよ」

「あのことわざはそういう意味だったんですね」

「ところで、願いはさっきのでいいんだね」

クルルが確認した。

「お願いします」

「う～ん。君たちは、今日中にキスすると思うよ。さて、代価を貰わないと。小銭でいいな」

クルルが、真の服のポケットやカバンを漁る。

「なんだよ、おまえ、10円玉しか持ってないじゃん。何てヤツだ。ふん、まあいい。この10円玉はいただいていくよ」

クルルが、10円玉を持ったまま鬼火の姿になり、サントリーニ島のほうへ向かった。

「途中で水没してるよ」

クルルは一度、空中で停止して、鬼火のまま振り向いた。

「知ってる。ぼくがやったんだもの」

そう言って、今度こそクルルは去った。

「あの、真くん。蹴ってごめんなさい」

「いや、いいんだ。ぼくが恵美ちゃんでもそうしていたよ」

「それから、10円玉が落ちていても二度と拾わないと約束してください」

「なんで？」

「王子さまは10円玉を拾っちゃいけないんです。そうじゃないと、わたしが死んでしまいます」

「よくわからないけど、わかったよ。もう10円玉は拾わないよ。出発するよ」

「はい」

真と恵美が、箒に乗ってアトランティスへ向かう。

「う～ん、行き止まりだな」

女性がつぶやいた。彼女は探検用の重装備だ。暗い洞窟の中、彼女の前には大きな岩盤が立ちはだかっている。彼女が、懐中電灯であたりを照らすと、進むべき道が見えない。完全に行き止まりだ。

「アクア教授、諦めましょうよ。これじゃ、^{さくがんき}削岩機かダイナマイトでもなければ無理だ」

男が言った。彼も重装備だ。眼前の岩を叩いた。岩は鈍い音を反響させた。

「何かあると思ったんだが、あったのは行き止まりとは」

「しかしアクア教授、やけにキレイな洞窟ですね。こんなに進みやすい洞窟は初めてだ」

「まるで手入れがされているようだな。ビリーくん」

「まさか」

彼は、肩をすくめてみせた。暗いので、彼女が気づいたかどうかは分からないが。

「分かれ道はなかったし、諦めて引き返すしかないか。……ちょっと、静かに」

「アクア教授、どうしたんですか？」

「いいから、私がいいと言うまで音を立てるな。わかったね」

彼が頷いた。

「荷物を持って、岩陰に移動だ」

彼女が小声で言った。

「分かりましたが、どうしてですか」

彼も小声で答えた。

「女の勘だ。とにかく無言になるんだ。電気も消して」

彼女と彼は、荷物を持って、ゆっくり岩陰に移動した。

ふたりが岩陰から観察していると、突然、真と恵美が現れた。

「ここだ。アトランティスの門だ。恵美ちゃん、準備はいいね」

真が言った。

「はい、真くん」

恵美が答えた。

だが、真はしばらくじっとして視線をあちこちに動かしている。気に掛かることがあるようだ。

「どうしたんですか？」

「誰かに見られているような気がするんだ」

「気のせいですよ。こんなところに人がいるわけないでしょ」

「それもそうだ」

真は、気を取り直して古代の呪文を唱えた。

「イサカ・ダウラーラ・ヘテ・ドト」

その呪文は、隠れている彼女と彼にはよく聞こえなかった。

岩盤が消えて門が開き、先にある空間の空気が流れてくる。それが、隠れている彼女と彼にも感じられた。

真と恵美は門をくぐった。

「恵美ちゃん、ここはもうアトランティス大陸だよ。魔法を使うのいったんやめて。イーケンスを刺激したくない」

「はい」

真は、魔法に反応してイーケンスが起きてしまうことを案じたのだ。ふたりは、杖を使うのをやめて、袋から懐中電灯を取り出した。

恵美は、懐中電灯を前に向けた。ピラミッドが見える。

「ほほう、これは見事なピラミッドですねえ」

真も、懐中電灯でピラミッドを照らした。

「古文書の通りだな」

そう言ったとき、真と恵美の後ろから強い光が差して、ふたりに当たった。

「なんの通りだって？」

大人の女性の声が聞こえた。

慌てた真と恵美が振り向くと、懐中電灯を持った女性がひとりと男性がひとり見えた。

「アクア教授、こいつらたぶん宇宙人だと思いますよ」

男性が言った。背は180センチ以上ある。

「信じがたいが、いまはそのオカルト説を^{しりぞ}退けるべきではないようだな」

女性が言った。背は165センチ、といったところ。真より低い、恵美より高い。

真が、懐中電灯で門の方を照らすと、いま閉じたばかりだ。

「ああ、閉じちゃった」

男性と女性が振り向くと、確かに門が閉じたのが見えた。

男性は、真と恵美を鋭く注視している。女性は閉じた門を軽く叩いた。

「おや、今さっき通った穴が閉じてるな。どういう仕掛けだ？」

「その門は、一度閉じると6時間は開かないのに。……どうやってここへ入ったんですか？」

真が訊いた。

「それはこちらのセリフだ。私は、アクア・ライアン教授だ。専門は考古学で、オーストラリアの大学で教鞭を執っている。私は長年、アトランティス大陸を探し続けているのだ。今現在、その調査中というわけだ。こちらは、助手のビリー・モーガンくん」

真と恵美は、話しているアクアではなく、ビリーの方を凝視している。アクアは、ふと横のビリーを見てギョッとした。

「ビリー、やめるんだ！」

アクアは緊張のある声を発した。ビリーは腰の拳銃に手を伸ばしていたが、教授に言われてやめた。

「オレは、ビリー・モーガン。ライアン教授の助手で、えっと、ちなみに教授はオーストラリア人で、オレはアメリカ人だ。で、君たちはどこの星から来たんだ？」

「まあ、ビリーくん。ここは不幸な間違いがないように、慎重に行動しようではないか。まず、私たちの旅の道程を詳しく話そう」

アクアは、伝説のアトランティス大陸探しに、4日前にサントリーニ島の地下に潜ったこと、数時間前、門のところまで来たが、行き止まりで往生したこと、ビリーに「帰りましょう」と言われたが、諦めきれずにしばらく粘っていたところ、何やら人の気配を感じたので、「何があっても絶対に喋らないこと」とビリーに言って岩陰に隠れていると、若い男女が突然あらわれ、会話が少し聞き取れたと思ったら、突然、行き止まりの岩がなくなっていたこと、そして、この空洞に侵入してみると、若い男女がよく見えたので、懐中電灯を向けたことなどを話した。

「これが私たちの顛末だ」

「なるほどよく分かりました。彼女と相談したいのですが」

真は、恵美を指さした。

「いいだろう。あまり時間をかけるなよ」

そう答えたのは、ビリーだ。

真と恵美は、アクアとビリーに背を向けて相談を始めた。これには、アクアもビリーも驚いた。まさかこんな状況で背を向けてくるとは思いもしなかったのだ。

「ますます、宇宙人だな」

「ビリーくん、私にはただの子供に見えるがね」

真と恵美が、アクアとビリーに向き直った。

「これから、すべて真実をお話しします。もし、その話をきいて、どうしても信じられないという場合は、悪いけどふたりには眠ってもらいます」

「何やら物騒だな。よし、話してくれたまえ」

真と恵美は、まず名乗り、できるだけ短時間でこのあらましを話した。

「なるほど、キミは魔法使いで、キミは魔女。それで、アトランティス大陸に眠る、悪い魔法使いとやらの退治に来たと。これだけでは信じられんな。魔法使いというのが本当なら、何か説得する術を持っているのだろう」

アクアは慎重に会話を進めた。

真はティーパーティーに跨がり、恵美はラビットハートに跨がった。ふたりとも、自分の後ろを指さしている。

「アクア教授、乗れってことみたいですよ」

「あまり気が進まんなあ」

アクアは恵美の後ろに、ビリーは真の後ろに乗った。

「悪いけど、魔法を打つよ」

真が言った。

「魔法？ 眠らせようって腹か？」

「違うよ。魔法が見えるようになる魔法だよ」

「……分かった。打ってくれ」

真はビリーに魔法を放ち、恵美はアクアに魔法を放った。真と恵美は、お客さんを乗せて離陸した。

「懐中電灯を消して」

ビリーは懐中電灯の灯りを消した。アクアもだ。真と恵美が、右手に持った杖に灯りを起こす。

ティーパーティーとラビットハートの、アトランティス大陸一周の旅が始まった。

「見えてる？」

「ああ、バッチリだよ。オレは暗いところが得意なんだ」

真の問いに、痛く感動しているビリーが答えた。

途中、青白い光が見えてきたが、真も恵美も近寄らなかった。それが、イーケンスだからだ。

帰りがけ、アクア教授の懇願こんがんがあり、恵美はピラミッドの頂点近くで1～2分ほど箒をホバリングさせた。ピラミッドは頂上部が欠けていない完全なものだ。

アクアは、ピラミッドの頂上の石をスマホで写そうとしたが、ダメだった。

「写らない。そうか、魔法の動作中はカメラには写らないのか。こうなったらメモだ。恵美さん、もっと寄せてください」

アクアの頼みで、恵美は箒をピラミッドに寄せた。アクアはメモを取りはじめた。が、恵美が限界だ。ラビットハートが姿勢を崩した。

「どうした、恵美さん」

「すみません。わたしビギナーなもので、ホバリングは得意じゃないんです」

「そうか、なら仕方ない。下ろしてくれ」

真と恵美の箒は、アトランティス大陸を一周して、もとの位置に戻ってきた。

「ビリーくん。信じられないことに、どうやらこのふたりが言っていることは本当のようだ」

「まさか、アトランティス大陸探しの途中で、魔法使いに会うなんてな」
「ああ、この2人は魔法使いだ。そして、私はついに、アトランティス大陸に到達したんだ！ ヤッホー！」
アクア教授と助手のビリーは抱き合って喜んだ。
「あの、いちおう、ぼくは魔法使いもどきです」
「いちおう、わたしは魔女見習いです」
「そうだったね。ところで、魔法使いたちは6月に何か催しがあったりするのかな？」
それとなくアクアが問いかけた。
「どうしてそれを」
油断した恵美がつい反応してしまった。
「恵美ちゃん」
「あっ、しまった」
恵美は口を手で覆い、真は頭をかいた。
「……6月には、サバトがあります。これは全世界共通の行事です。なぜそれを？」
「いや、私の古い友人に、6月だけ消息不明になる人がいてね。なるほどそうか、彼女は魔女だったのか。さて、君たちの話を信じるなら、魔女たちは、子供ふたりを悪党退治に向かわせたことになる。とても信じられないことに」
「魔女の予言は、外れることはまずないんです」
『魔女の軍団では倒せない』か。それで子供を。……わかった。協力してもいい。だけど、その前に質問をさせてくれ。私は今年で37歳になるが、仮に私が10歳児だと考えてくれ」
「幼女趣味テストですか？」
ビリーが茶々を入れたが、アクアは無視した。
「私は10歳だ。そして、魔女の予言とやらで、『将来この子は、世界を滅ぼす独裁者になる』と言われたとしよう。さて、君たちはどうする？」
アクアは真を見た。
「たいへん心苦しいのですが、ぼくなら、その子を鳥に変えます。残りの人生を、高いところから人間を見下ろして暮らすのは、それほど悪いことではないでしょう」
アクアは恵美を見た。
「わたしは何もしません。まだ、修行の途中なので、自分の気持ちがよく分からないんです。ただ、『善きことをしなさい』と忠告するでしょう」
「知恵者に正直者か。よろしい！ 予期以上の答えだ。アクア・ライアンは、君たちを信用し協力する。出来ることはすべてするつもりだ」
「アクア教授……」
信じられないというように、ビリーはつぶやいた。その彼をアクアが見た。真と恵美も。
「オレも男だ、協力するよ。すればいいんだろう？ どのみち、このふたりしか出口を知らないんだ」
「決まりだ。よし、真くん。作戦を詳しく聞かせてくれ。あと、私のことは、アクアと呼んでくれ」

「オレはビリーでいいよ」

「マコトって呼んでください」

「エミでいいです」

真は、作戦の仔細しさいを話した。

こんな短時間で、複雑な作戦を理解してくれるか真は心配だったが、そこは若い大学教授にその助手だ、作戦の意図をしっかりと把握してくれたようだ。

真と恵美は、門の近くにベースキャンプを作った。

魔法の棒を立てて、盾とする。これで、ふたりが気絶してしまっても、しばらくは棒が守ってくれる。もっとも、守ってくれるのは、半径10メートルといったところだが。

その間、モニカとビリーは、ピラミッドの観察をしていた。化粧板の剥がれていない完璧なピラミッドだ。これは確かに珍しい。真に「あまりそばを離れないでください」と言われたので、ふたりは近くのピラミッド見物をしていたのだ。ふたりとも食い入るようにピラミッドを見ている。

真は、聖なる鏡が入った袋をベースキャンプに置いた。

「よし、準備はいいな」

真は手を払った。

モニカがしゃべり出す。

「作戦を開始する前に聞いておくが、私、アクア・ライアンの名前は聞いたことがないかな。たしか日本でも、私の本が発売されているはずなんだが、『アトランティス大陸と3つの謎』という題の本だ」

真と恵美は首を横に振った。

「そうか、残念だ」

「アクア教授の本はオカルト扱いですからねえ」

ビリーは苦笑いした。

アクアはビリーを見て眉間に皺を寄せた。

「それじゃあ、はじめましょう。イーケンス討伐作戦を。いろいろと予定が外れたけれど、今日中になんとかしないとヤバイ。異論が無ければ出発します」

真は、懐中電灯の明かりを一度消して、また点けた。電池の残量を気にしているのだろうか。

「空中から見えた、あの青白い光のところへ行くんだな」

「そうです。今度は歩きです。『箒で近づくとイーケンスが起きる』という言い伝えがあるので。あと、喋ってもいいですけど、小声でお願いします」

「魔法使いたちは言い伝えを気にするんだな」

興味深げにアクアがつぶやいた。

4人は歩き出した。ピラミッドを迂回して、イーケンスのところへ向かう。足音があちこちに反射する。反射音の遅いことが、この空間の広さを物語っていた。

真と恵美は黙ったままだったが、アクアとビリーは道中、小声で「ミノア様式だ」「クレタ島で似たものを見たぞ!」「これは見たことがないな」などと興味深げに言い合っていた。

4人の視界に青白い光が入ってきた。イーケンスだ。

アクアとビリーも口を閉ざした。

4人は、イーケンスの入った石棺^{せっかん}の前までやってきた。石棺は地面に直置きだ。イーケンスは、青白い光に包まれて青ざめた顔をしているが、まだ生きていたようだ。

「意外に背が高いな。古代人にしては珍しい」

アクアが沈黙を破った。小声だが。

真が水晶を取り出して、イーケンスを観た。

「信じられない。なんて魔力だ！」

「見せてください」 惠美が真の水晶を覗いた。「よく分からないけど、こんな色と模様は初めてです」 彼女も驚いている。

「アクアさん、ビリーさん、いいですか」

真が問いかけると、ふたりは「ああ」と答えた。

「じゃあ、惠美ちゃん、お願いするよ」

真が惠美を見た。

「はい」

惠美は、`お目覚め魔法、をイーケンスに放った。

青白く光っていたイーケンスが、虹色に光り始め、永い眠りからついに目覚めた。石棺から半身を起こす。

「何事か！ 何が起きた！」

目覚めたばかりのイーケンスの声は、緊張を帯びている。

真と惠美、アクアとビリーは、ゆっくり膝をついた。

「はじめまして、イーケンスさま。ぼくは渡辺真と申します。魔法使いです」

「はじめまして、イーケンスさま。わたしは倉田惠美と申します。魔女です」

「はじめまして、イーケンスさま。私はアクア・ライアン、人間の初学者にございます」

「はじめまして、イーケンスさま。オレはアクアさんの付き添いです」

4人が自己紹介を終えた。

「何があったのだ、言え！」

イーケンスはまだ緊張したままだ。

「はい。イーケンスさまは、悪い魔法使いの奸計^{かんけい}にあって、永い永いあいだ眠らされていたのです」

真が答えた。

「そうなのか？」

イーケンスは惠美を見た。

「間違いございません」

「ここはどこだ」

イーケンスは天を仰いだ。

「海底に沈んだアトランティス大陸にございます」

モニカが答えた。

「杖をよこせ」

真は、杖を一本イーケンスに渡した。子供用の杖だ。イーケンスは魔法で周囲を明るくする。子供用の杖なのに、ものすごい明るさだ。

真も恵美も、アクアもビリーもまぶしさに目を細めた。

天上を見上げるイーケンス。彼は杖で天井を照らした。ドーム状になっているのが視認できる。

「嘘ではないようだな。ふたりは魔法使い、ふたりは人間か」

イーケンスは4人を注意深く観察した。

「はい。イーケンスさまの志^{こころざし}を継ぐものにございます」

これは真。

「われらふたりは、魔法使いの補佐をするものにございます」

これはアクアだ。

「魔法使い千人と戦って、それから……。なにか食べるものはあるか」

恵美が、袋からパンと牛乳を出した。

「食べ物にございます」

「一口食べよ」

恵美が、パンを一口かじり牛乳を一口飲む。

「よい、それをよこせ」

イーケンスは、パンと牛乳を恵美から奪い、食した。

「うまいな。あれから何年経った」

「おそらく、お信じになられないと思うのですが」

「言え、われが眠ってから何年経ったのだ」

「3621年経ちました」

ももごしていたイーケンスの口が止まり、絶句する。

「3621年？ 3621年だと！ 間違いないのか？」

「間違いございません」

恵美が答えた。

「ふ～む」

「イーケンスさまを眠らせた^{ふとど}不届きな魔法使いは、もう一人も生きておりません」

「そうか。全員立つがよい」

真と恵美、アクアとビリーがゆっくり立つ。

このとき真たちは、はじめてイーケンスの背丈を知った。175センチくらいだ。真より少し高い。真は意外に思った。紀元前の人類は、身長はそう高くないはずだからだ。イーケンスは、当時としては規格外の高身長だったろう。

「なるほど、3621年経ったか。どうりでヘンテコな格好をしておる。それは薔薇^{ばら}か？」

イーケンスは、恵美のワンピースの刺繍を指さした。

「はいそうです」

「見事な細工だ」

ついで、イーケンスは、アクアとビリーを見た。

「お主^{ぬし}たち人間は、とても奇妙な格好をしておるな」

「我らは劣った民ゆえ空を飛べません。ならば、探検の服装が特別なものになるのも無理からぬことなのでございます」

「なるほどなるほど。ところで、3621年経った今、外はどうなっておる」

真は、袋からスマートフォンを一台取り出した。旅の途中で入手した中古のスマホだ。

「それは何だ」

「今の時代の石版でございます」

「見たところ、何も彫られておらんようだが」

真は、スマホの電源を入れて動画を再生させる。世界の日常風景が撮影されたものだ。驚嘆したイーケンスは、スマホに手を伸ばした。

「よこせ！」

真は、スマホをイーケンスに渡した。

イーケンスは、スマホの動画を食い入るように見ている。

「これは魔法で動いているのか？」

「いいえ、魔法ではありません。魔法の使えない民であるわれら人間たちが、嫉妬心から発明したものでございます」

これはビリーだ。

「なるほど、そうか。それにしても凄いな。どこも人ばかりではないか。馬車は走っておらんし、町はピラミッドだらけだ。ピラミッドには誰が住んでおる？ 王族か？」

「お金持ちと見栄っ張りが住んでおります。王族は、高いところには住みたがりません」

アクアが答えた。

「そうか。見栄っ張りか。なるほどなるほど。見栄っ張りはいつの世も変わらんなあ」

イーケンスから、ふと笑みがこぼれた。

この時、アクアの好奇心は最高潮に達していて、このイーケンスなるものから3621年前の世界について根掘り葉掘り聞き出したい、と強く思っていたが、もちろん我慢せざるをえなかった。

イーケンスは、スマホを横から見たり裏返したりして観察している。手が画面に触れて、動画がストップした。

「どうした。終わりか？」

イーケンスは、真たちを見た。

「もう一度、石版に触ってください」

イーケンスがそうすると、動画の再生が再開した。

「ほう」

だが、動画はほどなくして終了した。

イーケンスは黙考している。

しばらくして、恵美を見た。

「おや、それは何だ」

彼は、恵美の持っている電子ピアノを指さした。イーケンスが動画を見ている間に、恵美は背中に回っていた電子ピアノを前に動かしておいたのだ。

「これは楽器です」

「見たことのない楽器だ。どう使うのだ、音を鳴らしてみよ」

「はい、ですが」

「構わんから音を出せ」

恵美は電子ピアノの電源スイッチを入れると、ドレミファソラシドと弾いた。

「ほう。どうなっているのか仕組みがさっぱり分らんが、なかなか良い音だ。何か曲は弾けるか」

「はい。ですが」

「構わんから一曲弾いてみよ」

「よろしいのですか」

「このゲディパルク・イーケンスが弾けと命じておる。弾くのじゃ！」

引っかかった。イーケンスが、真の仕掛けの罠に引っかかった。

恵美は、ジョルジュ・サンドの子守歌の楽譜を取り出すと、弾き始めた。

不可思議な音色を聴いたピリーが、すぐに寝て倒れる。が、ティーパーティーが受け止めた。真も寝て、ピリーの上に倒れ込む。ティーパーティー、ナイスキャッチだ。

「どうした。おや、われも……」

恵美が曲を弾き終わるが、イーケンスは立っている。

「どうしよう、イーケンス寝てないよ、まだ立ってるよ。真くん……は寝てるし、どうしよう」

作戦が失敗したのかと、恵美は気をもんでいるのだ。

「恵美さん。どうやら、イーケンスは立ったまま寝ているようだ」

アクアが目^{めざと}聡く指摘した。

「えっ……、ほんとだ。寝てる、立ったまま寝てる。やった！」

恵美は三步下がる。下がったときに暗いから転けそうになった。

「おととと」恵美は、事前に真から渡されていた、紫のラインが入った杖を構えた。紫のラインの入った杖は、禁断の魔法が放てる杖だ。「天の精霊よ、大地の妖精よ、わたしに力を貸しておくれ、ザンキャリエン！」

恵美の放ったザンキャリエンが、イーケンスを貫く。

「通った！ ザンキャリエンがイーケンスを貫いた！」

彼女が歓喜する。

恵美はザンキャリエンをあと二度撃つ。四度目のザンキャリエンを撃とうとしたとき、イーケンスが目覚め始めた。

「ううっ、うう」

「えっ、もう起きちゃうの？ ちょっと早いよ」

恵美はラビットハートにまたがり、後ろにアクアを乗せ、ピリーと真のベッド替わりになっているティーパーティーを引っ張りながらそそくさと逃げた。ラビットハートとティーパーティーは、曳航^{えいこう}ロープで繋がっている。彼女は、ピラミッドの反対側のベースキャンプに逃げてきて、防御魔法を張った。

人間は、誰かに押しつけられたことには容易に反発するが、自分で決めたことはなかなか^{ひるがえ}翻さないものだ。それを利用し、恵美に曲を弾くように、イーケンス自身が命令するよう誘導したのだ。真の立てた作戦はみごと成功。イーケンスは、ジョルジュ・サンドの子守歌で眠った。その際に、防御魔法はすべて剥がれて、ザンキャリエンが効くようになったのだ。

これがもし、「イーケンスさま、一曲お聴かせしましょう」だったなら、イーケンスは途中で罠だと気づいて、演奏を強引に止めていたに違いない。

誰かが彼を起こしている。だが、彼はまどろみの海のなかで揺蕩^{たゆた}っていた。花は咲き誇り、陽はどこまでも暖かく、ここにはひとかけらの心配もいらない。まさに極楽であり、地上の楽園だ。この心地いい天国を、誰が手放すものか。

「起きて起きて起きて。起きろってば、起きろってば、起きろこのクソガキ！」

恵美が、眠っている真の胸ぐらをゆすっている。

「う～ん、もう少し寝かせてよ」

真の寝言だ。

「あっ、真くんおねしょしてる」

真はバッチリと目覚める。

「えっ、おねしょ？」

と言って股間の付近を触る。

「してないじゃない」

「それどころじゃありません。イーケンスの連続攻撃です」

アトランティスの門付近のベースキャンプで、結界を張っている恵美。ピラミッドの向こうから、イーケンスの攻撃魔法が曲がりながら連続でやって来ている。結界は、なんとか耐えているようだ。

真が事態を把握する。真が杖を出して結界に協力する。結界が大きく強力になる。

アクアが、眠っているピリーに気付け薬を飲ませている。ピリーは今日覚めた。

「ザンキャリエンは!？」

真が質問する。

「撃ちました」

「何回撃った？」

「3回です」

「3回か、想定よりちょっと少ないな」

「イーケンスがすぐ起きちゃって、3回が限界だったんです」

「いや、恵美ちゃんをよくやってくれたよ。ありがとう。それにしても、イーケンスの奴、さうとう怒っているようだな。攻撃魔法の乱れ打ちだ」

「そうなんですよ。でもね、見習い魔女の防御魔法で防げるくらいです。きっと魔力が弱まったんですよ」

「そのようだ。伝説の大魔法使いイーケンスの魔力は、こんなもんじゃないはずだからな。でも、ヤツはなぜ乗り込んで来ないんだ？ 近距離から撃ったほうが攻撃魔法も効果はあるだろうに」

「さあ？ わたしに一目惚れで照れてる、とか」

恵美は恵比須顔を見せて、お目々をパチパチさせた。

「冗談はあとにして、次の段階に移ろう」

恵美は不満顔になった。

「イーケンス、話がある」

真は大声でさげんだ。

イーケンスの攻撃魔法が止む。

「まただまし討ちか！ 3621年経ったというのも嘘か！」

イーケンスの怒声だ。

「それは本当だ。……提案がある」

「言ってみよ」

「魔法を放棄するのなら、命は取らない。確約する」

「魔法を放棄じゃと。何の寝言だ」

「ぼくたちは、魔法使いの先遣部隊^{せんけん}に過ぎない。たとえぼくたちに勝っても、お前はいつか負ける。だが、魔法を放棄するなら3621年後の世界が見られるぞ。さっき不思議な石版を見たろう。他にもまだまだ珍しいものがたくさんある。あんただってきっと驚くだろう。そして、未来の世界で天寿まで生きられる。今の時代、百年以上生きる人も稀ではないんだ」

「……くだらん」

「あんたが寝ているあいだに殺すこともできた。だが、そうしなかった」

これははったりだ。

「なぜだ」

ピラミッド越しなので姿は見えないが、イーケンスの声には動揺を感じ取れた。

「さてね。ひょっとすると、何かの気まぐれで、悪人であるあんたを助けたくなったのかもな」

「くだらん」

またイーケンスの攻撃魔法が飛んでくる。

「説得は失敗のようだな」

アクアが呟いた。

「二つ目の切り札を使おう」

真は、袋から聖なる鏡を取り出した。

「聖なる鏡で何が起きるんでしょうね」

「さあね。いにしえの伝説では、聖なる鏡には魔法を完全に無力化する力があるそうだけど」

これにはアクアが驚いた。

「おい、真くん。それはエジプトの古代の鏡かね」

「そうですけど」

「どうやって手に入れたんだ？」

「エジプトでちょっと盗掘を」

「それを丁寧に調べたいところだが、イーケンス退治が先だ。行ってくれ」

アクアは実に口惜しそうだ。

「じゃあ、恵美ちゃん。行ってくるよ」

「作戦どおりにすればいいんですね」

恵美が確認した。

「うん、お願いするよ。じゃあ行くよ。アクア教授とビリーさんはここを動かさないで。結界から出ると危険ですよ」

真と恵美が二手に分かれる。真は結界を張りながらピラミッドの左へ。恵美は結界を張りながら右へ。

それを見送る、アクアとビリー。

真がイーケンスの視界に入る。

「ミスガロン」

イーケンスは、聖なる鏡を持った真に攻撃魔法ミスガロンを繰り出す。

聖なる鏡は、ミスガロンを吸収して立体映像を映し出す。立体映像は、等身大の女性の姿をしている。

「リディ……」

魔法を放ったイーケンスは、呆然としている。

ピラミッドの右側から、箒に乗った恵美が出てくる。

「ザンキャリエン」

恵美の放った魔法はイーケンスに命中。

「なに！」

イーケンスは恵美のほうを向く。

「ザンキャリエン」

真も、聖なる鏡の横から杖を出して、背を向けたイーケンスに魔法を放つ。

「何だと！」

イーケンスは真のほうを見る。

「ザンキャリエン」

Uターンしてきた恵美が、また魔法をイーケンスに放つ。彼女はそのままピラミッドの影に隠れる。

怒ったイーケンスが、杖を真に向ける。

「クソっ!! ミスガロン! ミスガロン! ミスガロン！」

と真に攻撃魔法を三度放つ。

真の持っている聖なる鏡が壊れた。真は慎重に撤退して、ピラミッドの影に入った。

ベースキャンプで、真と恵美が合流。

イーケンスは攻撃魔法の乱れ打ちだ。

「イーケンスの攻撃魔法、さっきよりも弱くなってますよ。イヒヒ」

恵美は少し調子づいているようだ。

「でも、ザンキャリエンも、こんどは詠唱を省略したから効果は弱いはずだ」

「もう一度、聖なる鏡を使いましょう」

ウッキウキの恵美が言った。

「それがね」

と言って、真は壊れた鏡を見せた。

「あらら、壊れたか。ところで、鏡には女性が映っていましたよね。イーケンスの野郎、女性に攻撃魔法を使ったんですよね。ちょっと酷いな」

「ただの女性じゃないよ」

「どういうことですか？」

「『リディ』は、たしかアトランティス語で、『お母さん』の意味だよ」

「あいつ、母親に攻撃魔法を使ったんですか！ 信じられないし許せない。クソ野郎じゃないですか！」

「みたいだね」

「魔法使いたちはアトランティス語にも通じているのか……」

アクアは物欲しげな表情を見せた。

「俺ら考古学者は仕事が無くなるな」

今のはビリーだ。

恵美が真を見た。

「……で、次の手は？」

「次の手はね……実はもうないんだ。この段階までで、イーケンスを充分弱く出来ているはずだったんだ。もしイーケンスが話し合いに応じないなら、その時は、攻撃魔法で打ち倒す予定だったんだ」

「イーケンス、まだまだ強いですよ。上級魔女3人分の魔力はありそうですよ」

「計画が狂ったな。あっ、恵美ちゃん。ジョルジュ・サンドの子守歌をもう一度弾いてくれないか」

「わかりました。また眠らせるんですね。真くんとビリーさんは耳栓をお願いします」

真とビリーは耳栓をした。ビリーは耳栓を持っていなかったので、真の予備を借りた。

恵美が、電子ピアノでジョルジュ・サンドの子守歌を弾き始める。

すぐにイーケンスが、魔法で多数の小石を浮かしては落としを繰り返して、子守歌の音波を打ち消す。

「ダメみたいです。学習能力の高いラスボスは嫌いです」

恵美はしょんぼりした。真とビリーは耳栓を外した。

「イーケンス、もう一度話し合いだ」

真が大声で言うと、イーケンスの攻撃魔法が止んだ。

「お前たちを殺して、粉々にしてやるぞ！」

「イーケンスさんよ。あんた、なんでほかの魔法使いと戦ってたんだ？」

「われは最強の魔法使いだ。世界を欲して何が悪い。逆に問おう。最強のわれが世界を支配しなくて、だれが治めるといふのだ」

「話し合いとか」

恵美が言った。

「話し合いで終わる争いなどない」

「それはそうかもな……」

ビリーが言った。

「でも、話し合いを放棄したら人類はそこまでだ」

アクアがきっぱり言った。

「そうです。話し合いこそが知識の正しい使い道であり、人類の唯一の道しるべなのです」

恵美の言葉がアトランティス中に響いた。

「それは真理だね」

真は、恵美の言葉に感動していた。このグースベリーのどこにそんな叡智があったのだろうと、そう考えていたのだ。

「くだらん、話し合いなど、実にくだらん」
「頑固だねえ。それにしてもゾンビがいなくて助かったよ」
真が軽口を叩いた。
「ゾンビとはなんだ。少年の魔法使いよ」
「ゾンビってのはあれだよ。歩く死体のことだよ」
「ほう。なるほど、そうか。それはよいことを聞いた」
イーケンスが、ゾンビの製造に取りかかった。近場にある白骨たちが3600年の眠りから目を覚ます。
「なに敵に知恵をつけてるんですか！ 敵に塩を送ってどうするんですか！」
恵美は、真を睨んで責め立てた。
「ご、ごめん」
真はしょんぼり謝った。
アクアとビリーも苦い顔をしている。
「ごめんで済むなら魔女の裁判はいらないんですよ！」
「魔女裁判？」
アクアが不思議そうな声を漏らした。
「いえ、魔女の裁判です。『魔女裁判』と『魔女の裁判』は別物です。人間が魔女を裁判にかけるのが魔女裁判で、魔女が悪い魔女を裁くのが魔女の裁判なんです」
そう説明すると、恵美はまた真を睨んだ。

どこまでも碧い海に、大きな白い雲が浮かんでいる。
サントリーニ島の南南西10キロの海上、ここに積乱雲が発生している。この積乱雲はたいへん大きなもので、カメラで拡大すると稲妻が飛び交っているのが見えるはずだ。
この積乱雲の直下の海底に、アトランティス大陸はある。

サントリーニ島で、ニュースのレポーターが喋っている。
「サントリーニ島の南南西に、巨大な積乱雲が見えます。UFOでもいるんでしょうか」
レポーターの後ろに、巨大な積乱雲が見える。
日本の観光客が、「あれラ○ユタだよ、ラ○ユタ」「ほんとだ。ラ○ユタだ～」と言いながら、スマホで撮影している。

積乱雲の中は空洞だ。魔法の積乱雲なのだ。
その積乱雲の中では、大勢の魔女たちが箒に乗って、空中で隊列を組んでいる。その数600。20代から50代の魔女たちである。魔女たちは、中心を空けて、雲にへばりつくように立体的に整列している。
魔女たちは、結界魔法を使って積乱雲を作り、イーケンスがアトランティス大陸から出てこられないようにしているのだ。
ちなみに、この積乱雲は魔法で出来ているが、カメラには写るように細工がしてある。こんな巨大なものがカメラに写らなかったら、大事件になるからね。

魔女たちの指揮を執るのは、アメリカン・インディアンの魔女、ラコタ・タバハだ。彼女は少しふくよかな 51 歳で、インディアン風の柄のワンピースを着ている。ラコタは、積乱雲のやや上方に、部下を連れて陣取っている。

とある若い魔女が、人間を箒の後ろに乗せて、ラコタのところに来た。

「ラコタ隊長、レディ・サーシャをお連れしました」

「よく来られた。わたしは魔女の軍団の隊長、ラコタ・タバハです」

ラコタが挨拶をした。

「サーシャ・デリーです」

「あなたには、オブザーバーを務めて貰います」

「私は魔女ではありませんが、よろしいのですか」

「同じ属性の集まりの組織では、しばしば間違っ意見が平然と通ってしまうものなのです。ですから、多様性がとても重要なのです。そこで、人間のあなたにオブザーバーをお願いしました」

オブザーバーは、『観察者』や『傍聴者』などの意味だ。

「わかりました。現状を教えてくださいませんか」

「10 日前、予言が出ました。『もうすぐイーケンスが目覚める。イーケンスを倒せるのは魔法使いもどきだけ。魔女の軍団ではイーケンスには勝てない』という予言が」

「それは内々に聞いています。身内に魔女がいるもので。ですが、この人たちはなんですか。魔女の軍団ではありませんか。魔女の軍団ではイーケンスには勝てないのではないのですか」

「いま、海底のアトランティスで戦っている真と恵美がイーケンスに負ければ、第二陣、つまりわたしたち魔女の軍団が、イーケンスと戦うことになります」ラコタは、堂々と言葉を紡いだ。「そうです、予言された未来を変えるために、わたしたちはここに集結しているのです。予言された未来を変えるには、生け贄が必要になります。それが魔女の^{ことわり}理^{ことわり}なのです。そうなれば、きょう多くの魔女の血が流れることになるでしょう。……安心してください。レディ・サーシャ、あなたは必ず守りますよ」

「真は魔法使いもどき、恵美は魔女見習いと聞きました」

「そうですよ」

「ふたりとも子供と聞きましたが、いくら予言とはいえ、子供をイーケンスと戦わせるなんて信じられない。いっそのこと、アトランティス大陸にミサイルを撃ち込めばいいのに」

「ミサイルを撃ち込めばイーケンスは確実に死ぬでしょう。ですが、そのミサイルが第三次世界大戦の引き金になってしまった場合、誰が責任を取るといいますか。だれも、そのような大き過ぎる責任、取れやしませんよ。だから、魔女協会は、志願した魔女たちでイーケンスと戦うことに決めたのです」

「志願した魔女ですって?!」

サーシャは大変驚いたようだ。

「ここにいる魔女は全員、遺書を残して旅立ちました。死を覚悟の上で集まった魔女たちなのです。わたしたちは、スカートの^{けんぞく}眷属^{けんぞく}ですから」

「スカートの眷属……」

サーシャが改めて見回す。ほとんどの魔女はスカートを履いている。ワンピースが多いが、ツーピースも少なくない。ワンピースもツーピースも濃色が多いが、民族衣装と思われる服や、明るい色の服や、派手な服も見かける。よく見ると、おや、オールインワンもいる。トイレはどうするのよ……とサーシャは思ったが、口には出さなかった。

さらによく見ると、割と近い距離に男性がひとりいるではないか。若い魔女の箒に乗せてもらっているようだ。

「あの、彼は？」

「えっ」ラコタは男性を見た。「ああ、彼はオーボエを吹けないガブリエルです。フルネームはガブリエル・ガルチェリ。いまは無視して宜しい」

「はぁ」

もう一度見ると、ガブリエル・ガルチェリがウィンクしてきた。

ラコタとサーシャがいる場所の右斜め下に、エジプトの魔女、アイとマイとミーがいる。ミーは体中に包帯を巻いている。

周囲から、「見なよ、噂のエジプトの魔女だよ」「どのツラ下げて、ねー」「うわっ、ミイラ連れてきてるよ」などと噂が立っている。

「なんだか肩身が狭いねえ」

マイが愚痴った。

「だってさ、二日前から、ウィッターがあたしたちの話で持ちきりだかんね」

包帯でグルグル巻きのミーが話に乗った。

『『エジプトの魔女が、予言の子をいじめたらしいよ』とか『エジプトの魔女が禁止されてる魔法決闘をして、予言の子に大怪我を負わせたらしいよ』とかね』

マイとミーは、アイを見た。

「だってよう、知らなかったんだもん。知らなかったんだもんよう」

ふたりの視線にいたたまれなくなったアイは、大粒の涙を零した。

そこへ、リンダ・ティファニーとナターシャ・スワロフスキーがゆっくり通りかかった。リンダとナターシャは、つんとした顔で、エジプトの3人の魔女をチラ見している。

「だれ？」

ミーがマイに聞いた。

「NOSAのリンダ・ティファニーにCORNのナターシャ・スワロフスキーだよ」

「やっ、やあ、こんにちは」

アイが挨拶する。

「こんにちは」とリンダ。

「こんにちは」とナターシャ。

「こんにちは」「こんにちは」とマイとミーが答えた。

「今日はアレだね——」

とアイが言いかけたところで、

「グッドバイ（さようなら）」とリンダ。

「ダスヴィダーニャ（さようなら）」ナターシャ。

リンダとナターシャが去った。

「あっ、やなヤツ」

マイが珍しく怒ったようだ。

「ねー、まったく」

ミーも同意しているようだ。

「ふん、なんだよ偉そうに。NOSAがそんなに偉いのかよ。CORNがそんなに偉いのかよ。こっちは墓守だぞ、墓守だって偉いんだぞ。うわ〜ん、どうして誰も予言の子のことを教えてくれなかったんだよう〜!!」

アイがまた泣いた。箒にしがみつきながら泣いた。

ふたたびラコタとサーシャ。

参謀の魔法の説明を、サーシャが受けている。

「というわけで、真と恵美の第一の攻撃、ジョルジュ・サンドの子守歌は成功したもようです。魔力を消し去るザンキャリエンは三度撃たれ、イーケンスの魔力は本来の33%まで低下しました。続いて、聖なる鏡の攻撃も成功したもようです。ザンキャリエンはふたたび三度撃たれました。ですが、詠唱を省略したのでしょうか、効果はかんばしくないようです。それでも、イーケンスの魔力は、本来の12%まで下がりました」

「本来の12%というのは、どれくらいの魔力ですか」

「上級魔法3〜4人分というところです」

ラコタが答えた。

「いまなら封印魔法が効きます。イーケンスをまた眠らせることが出来るでしょう」

参謀の魔法が精気のある声を出した。

「なぜそうしないのですか」

「いま封印魔法を使うと、真と恵美が巻き添いになります」

ラコタは厳しい表情を見せた。

「それは……困りましたね」

「我らが戦いに参戦するかどうするか、悩んでいるところです。むろん、予言がなければ、すぐにでも増援を送っているところですが」

「現在の状況は？」

「膠着状態です。真と恵美は、手札が尽きたのではないかと思われます」

参謀の魔法が答えた。

「そうですか」

積乱雲の中の魔法たちは、「本来の12パーセントだって。私でも倒せそう」「あんたには無理だよ」「今のところ真の作戦勝ちか」などと言い合っている。

渡辺家の長女、渡辺みらいが、ラコタのところに来てきた。彼女は黒のワンピースだ。

「ダレサ隊長、渡辺みらいです。提案があります」

「言ってごらん」

「たしか、アトランティス大陸の天上は開くはずですよ。古文書で読みました。わたしと、

ほか2、3名が、中に入って真と恵美に加勢したいと思います」

「アトランティス大陸の天上は開きますが、一度に通れるのは3人が限界です」

参謀の魔女が説明した。

「だが、魔女の軍団ではイーケンスを倒せないという予言がある。ふむふむ、レディ・サーシャはどう思いますか？」

ラコタがサーシャに質問する。さっそく、オブザーバーの出番だ。

「ええと、3人が加勢したとして、魔法使いが合わせて5人。5人では軍団とは言えないでしょう」

「そうか、なるほど。よろしい。渡辺みらい、あなたの作戦を許可します。あと二人、だれを連れて行きますか」

「一人は妹のかれんを」

「かれん？ ですがこういう任務は、あすかのほうが向いているのではありませんか？」

「あすかは身重なので、ここには来ていません」

「それはしかたありませんね」

それを近くで聞いていた、ディークシャ・カトリが口を開いた。

「何だよ、渡辺あすかは欠席かよ。あたしも身重だけど何とか来たのにさ」

彼女はゆっくりお腹をさすった。

たちまちの内に魔女数人が寄ってきて、「ディークシャ大丈夫？ 今何ヶ月なの？」

「大変だね。無茶しないでね」「何かあったら言ってね」と話しかけた。

姉のみらいが大声を出した。

「渡辺かれん、かれん、出てきなさい！」

かれんは、池澤カカナの影に隠れている。

「いないよ、いないよ」

とかれん。

カカナはかれんを睨んだ。

「かれんちゃん。真くんはあなたの弟でしょうに」

「あんな弟いらないもん！」

「ああ、もう」

カカナはあきれ顔だ。

「かれん～！」

みらいの声がよりいっそう大きくなった。

かれんが渋々、ラコタとみらいのところに行く。

「かれん、弟たちを助けに行くよ」

「はい」かれんは小声で次のように付け足した。「あんな奴、ほっときゃいいのに」

「わたしと妹のかれんは、これからアトランティス大陸に突入する。あと一人、一緒に行く勇気のある魔女はいないか」

みらいは、積乱雲の内部を見回した。

マイとミーが、アイの手を掴んで挙げさせようとする。

「やめてやめてやめてやめて！」

アイは必至の抵抗をした。

「私が行こう」

ある魔女がみらいのところにやってくる。

その魔女の名前は、ワウダ・ジュマだ。29歳の魔女で、ネイティブアフリカン。

「ワウダ、久しぶりね」

「久しぶりね、みらい、かれん」

ワウダとみらいとかれんの長話が始まる前に、ラコタが口を挟んだ。これも隊長のお仕事だ。

「みらい、かれん、ワウダ。いいですか、なんとしてでもイーケンスを仕留めてきなさい。なお、制限時間は一時間です。一時間経っても戻ってこなければ、アトランティス大陸にいるもの全員を封印します」

と彼女が告げる。

「わかりました」

みらいが真剣な顔でそう言うと、かれんとワウダも真面目な顔になった。

呪文担当の魔女たち数名が、

「ディバング・カナスーム・バング！」

と唱えると、海に穴が空く。アトランティスへの縦穴だ。

古代の呪文担当魔女たちが、

「オートフ・ギィ・アトランティス！」

と唱えると、アトランティスの天上が開く。

「行くわよ」

みらい・かれん・ワウダの3人の魔女が、下降して海底のアトランティス大陸に侵入する。

古代の呪文で、アトランティス大陸の天上を閉めようとするが、内部から槍が飛んできて挟まり、完全には閉まらなくなる。

動揺する600名の魔女たち。

「何か挟まって閉まらないようです」

参謀の声に緊張が走る。

「もう一度天上を開きなさい」

とラコタ。

「しかし」

参謀の魔女は焦っている。

「開けて、すぐに閉めるのです」

参謀は納得し、命令を送る。

アトランティスから来た槍が飛んできて、魔女たちに襲いかかる。何人かが怪我をした。アトランティスの天上が閉じる。

「行くぞ」とアイ。

「あいよ」とマイ。

「わかった」とミー。

アイとマイとミーが急発進。アトランティスから来た槍と戦い始める。3名のチームワークはさすがで、華麗な空中戦が繰り広げられる。攻撃魔法を7回くらい撃って、槍を完全に破壊する。もちろん、周囲の魔女たちが何もしていなかった訳ではない。結界魔法などを繰り出して、エジプトの魔女たちの支援をしていたのだ。

「やったぞ、エジプトの魔女が、イーケンスの槍を破壊したぞ！」

高らかにアイが宣言する。

まばらな拍手が起きる。

マイが寄ってきて、アイに耳打ちする。

「みんなの力でイーケンスの槍を倒したぞ」

とアイは言い直す。

大きな拍手が起きる。

安堵するアイ。

定位置に戻るアイとマイとミー。

そこへ、リンダとナターシャがふたたびやってくる。

「さっきはつんけんしてゴメンね」

とリンダ。

「ゴメン、悪かったよ」

とナターシャ。

「いいんだよ。分かってくればいいんだよ」

どこか上から目線のアイであった。

ふたたびアトランティス大陸。とても暗い。

門のそば。真と恵美、それにアクアとビリーが立っている。ゾンビの軍勢が、ピラミッドを回ってゆっくりやってくる。じりじりと距離が詰まる。ゾンビは50体以上いる。

「攻撃魔法でなぎ払います」

と恵美が言った。

「恵美ちゃんダメ。イーケンスは、ぼくたちがゾンビ相手に魔力を使い果たすのを待つ算段だと思うよ」

攻撃魔法は結構魔力を喰うのだ。恵美が杖をしまって、ラビットハートを持って構える。

「じゃあ、魔女合気道だ！」

「ぼくは結界を張って魔法攻撃を防ぐから、恵美ちゃんたちはゾンビをお願い」

「えっ、なにそれ」

恵美は心の底からびっくりしたようだ。

「ゴメンよ。知ってるだろう。ぼくは魔女じゃないから、魔女合気道は免除されてたんだ」

イーケンスの攻撃魔法が飛んでくる。真の結界がそれを防ぐ。

ゾンビが近寄ってくる。

「アトランティス大陸の発見には、もれなくゾンビとの格闘の権利付きか」

アクアが言った。

「権利っていうより、闘わないと死にますよね」

ビリーが言った。

恵美とアクアとビリーの3人が、ゾンビと闘い始める。

「この役立たず！ この役立たず！ この役立たず！」

と言いながらゾンビを倒していく恵美。

ビリーとアクアも、スコップなどを使ってゾンビと闘っている。

そのとき、アトランティスの天上が開き、みらい、かれん、ワウダの3人の魔女が入って来る。

ピラミッドの反対側のイーケンスが驚く。

「天上が開くのか！」

みらい、かれん、ワウダは三方に別れてジグザグに飛びながら、陽動の魔法を使ってイーケンスの気を逸らす。

天上が閉じ始める。

イーケンスは周囲を見回し、槍を見つけ取りに行く。

「おっと、それは困るねえ」

ワウダが、イーケンスに攻撃魔法を繰り出す。みらいもだ。イーケンスはダメージを受けるが、無視して槍を拾い、天上に投げる。天上の穴に槍が刺さって、完全には閉まらなくなる。

かれんは、真と恵美とあとふたりが、ゾンビと闘っているのを発見する。

「なんでゾンビがいるんだよ！ まあいいわ、トツゲキーッ！」

彼女は、攻撃魔法を放ちながら、ゾンビの大軍に突撃する。ゾンビの数をどんどん減らしていく。

渡辺かれんは、かねてより『無謀なかれん』と呼ばれてきた。かれんが話題に出たとき、「どのかれん？」と誰かが質問すると、「無謀なかれんだよ」と答えれば、魔女の界限では通じた話だ。ところがこの日から、かれんは『突撃かれん』と呼ばれるようになった。かれんには、少なからずファンがいたのだが、この一件でファンは増えたようだ。

天上がもう一度開き、槍が上空に飛んでいき、また閉じる。今度は完全に閉じた。

かれんの攻撃で、ゾンビは残り10体を切った。

イーケンスが指笛を吹いてゾンビを呼び戻す。

みらいとワウダとかれんが、真と恵美とアクアとビリーのところにやってきて、地面に降りて合流する。

5人の魔法使いが結界を張る。強力なものだ。イーケンスの攻撃魔法がときどきくるが、今度は余裕で跳ね返すことができるようになった。

「よく来てくれた。助かったよ。非常に困っていたんだ」

とても安堵した真の声だった。

「見れば分かるよ」

かれんは素っ気なく言った。

「正直、捨て駒にされたかと思っていたよ」

「スカートの眷属を見くびってもらっては困るよ」

ワウダが堂々とした声で言った。

「ところで、どんな状況？」

「あと 50 分でイーケンスを仕留めないと、全員まとめて封印されるわ」

「マジ？ それはひどいなあ」

「ところで……、そのお二人は？」

みらいは、アクアとビリーをまじまじと見た。

「私はアクア・ライアン教授です。オーストラリアの大学に勤務、今ちょうど、アトランティス大陸を発見したところだ」

「オレはビリー・モーガン。アクア教授の助手です」

「ちょっと待って。アクア・ライアン、アクア・ライアン……」みらいは何かひっかかったようだ。「えっ、『アトランティス大陸と3つの謎』の著者のアクア・ライアン教授ですか。私、大ファンなんですよ〜」

みらいが喜びの表情を見せた。いや、姉さん、この間にも攻撃魔法が矢継ぎ早に来ていて、それどころじゃないんだけどね。

「ビリーくん。ここに私のファンがいたぞ」

「こりゃあ珍事ですなあ」

「失礼な」

アクアとみらいが声を合わせて言った。

それぞれ自己紹介する。真はワウダと初対面。惠美は、みらいとワウダと初対面。もちろん、みらいたちはアクアたちとも挨拶をする。

一通り挨拶を終えると、みらいが口を開いた。

「それから真、母さん、いままで見たことがないほど怒ってたよ。しばらく家に帰らないほうが身のためかもね。真、母さんがなんで怒ったか分かる？」

「家出をしたから？」

真が頭を巡らせた。

「ブブー」とかれん。

「惠美ちゃんを連れてきたから？」

「ブブー」とまたかれん。

「母さんは、相談もなしに家出をしたことを怒ってるのよ。家族でしょう、なぜ話し合おうとしなかったの。そりゃ、温厚な母さんだって怒るわよ。私も母親だから気持ちはわかるわ」

みらいの言葉を聞いて、真はしゅんとなった。

「ぼくが悪かったよ」

「わかればいいのよ。帰ったら母さんにちゃんと謝るのよ。それから、倉田惠美さん、弟をよく支えてくれたわ。お礼をいいます、ありがとう」

「いえ、そんな」

惠美は頬を染めた。そんなことは構わず、真が愚痴った。

「それにしても、一番先に裏切りそうなかれんを連れてくるなんて」

「姉さん、今からでも遅くないから帰ろうよ。真はほっといて帰ろう」
「しばらく見ないうちに、真はずいぶんと口が悪くなったわね」
みらいは呆れている。
「生まれつきです」
「ふ～ん、そうだったかしら」
「時間がないよ。これからどうするの」
ワウダがせかした。
「いよいよ総攻撃だね」
かれんは魔法の杖を強く握りしめた。
「イーケンスに投降の機会を与える」
と真。
「なんでさ」
「異存はないわ」
とみらい。
「なんでよ！」
「イーケンス！ 話がある！」
真が大声で話しかけた。
イーケンスの攻撃が止む。
「何だ！」
「最後通告だ。魔法を捨てて普通の人間になれ、命は保証するぞ」
「笑止。魔法使いのお前がそれを言うか」
恵美が割って入った。
「イーケンスさん、魔法さえ手放せば命は保証するって言ってるのに。この分からず屋！」
「どこまでわれを愚弄する気だ」
「どうあっても魔法を手放す気はないんだな」
「無論だ、愚か者よ」
「愚かなのは若者の特権だよな」
仲間が増えたからか、真は気楽そうだ。
「ゾンビの件は忘れませんか」
恵美が語気を強めて指摘する。
「ごめん」
「ゾンビがどうしたって？」
かれんが質問した。
「これから十数える。その間に降伏しなければ、お前を倒す」
真が最後通牒を出した。
「あっ、無視しやがった」
とかれん。
「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10……ダメか」
真の声が響いた。
イーケンスは沈黙したままだ。しばらくして、ピラミッドの向こうから、攻撃魔法が

曲がりながら来る。

「行くわよ。攻撃魔法の乱れ打ちよ」

とみらいは言い、攻撃魔法を打ち始めた。

真、恵美、かれん、ワウダも攻撃魔法を繰り返す。みらいとエルマは、攻撃しながら結界魔法も使っている。まあ、みらいとエルマは上級魔女だからね。攻撃魔法は曲がってピラミッドを迂回し、イーケンスに向かっていく。

イーケンスをかばって、ゾンビたちが一体、また一体と倒れていく。どんどん弱るイーケンス。

だが、単独でもまだまだ強いイーケンス。

「罅が開かぬえ。ちょっと行ってかき回してくる」

と言って、かれんは自分の箒に跨がった。

「かれん、これを使え！」

真は、ティーパーティーをかれんに差し出す。

「何よ」

「ティーパーティーだ」

「えっ、ティーパーティーって。なんでそんな凄い物をあんたが持ってんのよ。ええい、話は後だ」

かれんは自分の箒を真に渡し、ティーパーティーを受け取って乗った。

「かれん、無茶しないでね」

みらいは本当に心配そうだ。

「努力するよ」

「大丈夫なの」

ワウダが訊いた。

「ここにいる魔女の中では、かれんが一番速いわ」

みらいがそう答えると、ワウダは少し安心したようだ。

「乗り手や箒によってスピードが違うのか」

アクアがぼつり言った。

かれんが飛び立つ。

「いくわよ、1、2、3、さあ撃って！」

みらい、エルマ、真、恵美が攻撃魔法を繰り返す。

イーケンスは、飛んできたかれんに、攻撃魔法を連続で繰り返す。

だが、かれんは器用によけるばかりか、ありえない高速で飛んでいる。

イーケンスがムキになって攻撃魔法を繰り返すが、それでもかれんはよけ続ける。

その時、イーケンスの背中に、みらいたちの攻撃魔法が集中してくる。命中、イーケンスはよろけた。

「手ごたえがあったわ。打ち続けて！」

みらい、エルマ、真、恵美が攻撃魔法を撃つ。

かれんは、イーケンスに攻撃魔法を放って、ピラミッドの影に入る。
イーケンスは、かれんの消えたほうを睨む。

かれんが戻って来て、みらいたちと合流。かれんを追って、おびただしい量の攻撃魔法が来ているが、みらいたちの結界が跳ね返す。

「いやぁ、凄いなのって。この筈、びっくりするくらい速いわ。イーケンスの攻撃魔法、一発も当たらなかったし」

ワウダが治癒魔法を、かれんの背中にかける。かれんの背中が少し焦げている。

「一発は、当たったみたいね」

「ちくしょう。もう一回行ってくる」

ワウダがかれんを制止する。

「同じ手が通用する相手じゃないよ。一発で済んだのは幸運の女神様が微笑んでくれたと考えるべきだよ」

「そうです、危険です」

惠美が同調した。

「ボレロを使ってみたいんだけど」

突然、みらいが言い出した。

「ボレロ？ たいした攻撃力ないじゃん」

かれんはティーパーティーを真に返し、自分の筈を返してもらった。

「ボレロは17世紀に発明された魔法よ。イーケンスは知らないはずだよ」

「なるほど。威力はないが攪乱かくらんには使えるか。やってみよう」

ワウダは納得したようだ。

「ボレロ！」とみらい。

「ボレロ！」とワウダ。

「ボレロ！」とかれん。

「ボレロ！」と惠美。

みらい、ワウダ、かれん、惠美の放ったボレロがゆっくり発進する。最初は小さな竜巻だ。その小さな竜巻が、イーケンスめがけてゆっくり進んでいく。

みらい、かれん、ワウダ、惠美が真を見る。

「ぼくは遠慮しとくよ」

「むかしからこういうヤツなんだよ。家族旅行で長崎に行った時も、こいつだけちゃんぼんを食べなかったんだ」

かれんは毒づいた。

「真くんひどいです。ちゃんぼんは長崎県民のソウルフードですよ。たいへん失礼ですよ」

このとき、惠美ちゃんは本気で怒っていたらしい。

「ちゃんぼんを食べなかったのは、かれん、あなたでしょう」

みらいが指摘した。

「ちえっ、そうだっけ？」

まったく悪びれないかれんであった。

「ごめんなさい」

恵美が真に謝った。

「いいんだ。かれんは平常運転だよ」

「ちゃんぼんってなに？」

ワウダが素朴な質問をした。

「私は食べたことあるぞ、ちゃんぼん」

アクアが話に乗ってきた。

みらいがワウダにちゃんぼんを説明する。

「とにかく攻撃魔法よ」

みらい、かれん、ワウダ、恵美、真の5人が、攻撃魔法を連続で放つ。

イーケンスは、ピラミッドの左右から来る攻撃魔法に気をつけながら、攻撃魔法を出している。

ピラミッドを回って、ボレロが4つゆっくり来ている。ボレロは、やや大きくなったが、まだまだ小さい。

イーケンスは一瞬、ボレロに気を取られるが、弱い魔法だと勘違いして放置してしまう。攻撃魔法を跳ね返ししながら、攻撃魔法を放つ。

イーケンスはもう一度、ボレロのほうを見る。だが、ボレロは影も形もない。不審がるが、攻撃魔法が次々と来ているので、考えている余裕はない。

やがて攻撃魔法が止む。怪しむイーケンス。

「イーケンスさん、後ろを見てみて」

とみらいが言った。

イーケンスが、ゆっくり振り返る。巨大な竜巻が4つ迫って来ている。

「なんだと！」

ボレロがイーケンスにアタック！ つぎのボレロも、そのつぎのボレロも、そのまたつぎのボレロもイーケンスにアタック、ダメージを与える。そこへ、みらいたちの強い攻撃魔法が集中して飛んでくる。避ける暇なく、ダメージを受ける。ボロボロになって倒れる。

「ダメだわ。だいたい弱ってるけど死んでないわ」

水晶でイーケンスを見たみらいが言った。

「ダメか」と真。

「あたしゃ、もう魔力がないよ。まっ魔力がなくても飛べるけどさ」とかれん。

「麻痺しない限り飛べるんですよね。あと、わたしももう魔力がないです」これは恵美。

「さっきので使い果たしたよ」とワウダ。

「私もダメ。魔力がないわ。真は？」これはみらい。

「あったらボレロを撃ってたよ」

「そうよね」

先に魔力が尽きたのは、真たちのほうだった。

しばらくして、イーケンスが高笑いしながらやってくる。

「ザンキャリエン」

と恵美が魔法を放つ。だが、魔法が弱い。イーケンスの防御魔法は、ザンキャリエンを軽く跳ね返した。

「じっとしてて。大丈夫だから」

みらいは、高ぶる恵美を落ち着かせた。

イーケンスは、真たちから5メートルほど離れたところで立ち止まった。彼は左手を出し、恵美に向け、空を握る。恵美の杖が勝手に壊れる。恵美の顔が恐怖に歪む。

「見事な戦いぶりだった。われは甦ったばかりで体がうまく動かなかったとはいえ、よくここまで困らせてくれたものだ。だが、お前たちの負けだ。もう攻撃魔法を繰り出せるだけの魔力は残ってしまい。それとも、箒に乗って逃げるか。逃げ切れる自信があればの話だが。……さて、選ばせてやろう。われの下僕になるか、それとも死か」

イーケンスはみらいを見る。みらいは首を横に振る。

イーケンスはワウダを見る。ワウダも首を横に振る。

イーケンスはかれんを見る。

みらい、ワウダ、真、恵美がかれんを凝視する。アクアとビリーも見ている。

「あいにく、あんたに^{なび}靡く心は持ち合わせていないよ」

そうかれんが言うと、みらいたちが安堵する。

イーケンスはアクアを見る。アクアも首を横に振る。

イーケンスはビリーを見る。ビリーは肩を竦めた。

「それはイエスかノーか、どちらだ？」

イーケンスが訊いた。

「ノーだ」

ビリーが答えた。

イーケンスは恵美を見る。

「死んでも嫌です」

イーケンスは真を見る。

「降伏して魔法を放棄するなら、命までは取らないぜ」

「ほう、まだ強がりを言うか」

「イーケンス、いまのあんたの魔力はたいしたことない。たとえぼくたちに勝っても、海上の魔法使いの軍団に勝てる見込みはないぞ」

「逃げるさ、一度逃げて魔力の回復を待つ。魔力が満ちれば、魔法使いの千人や二千人、たやすく倒してみせるさ」

「その弱い魔力でですか？」

恵美が訊いた。

「はっはっはっ。われの本当の恐ろしさを知らないな。われは発見したのだよ、90日で魔力を倍増させる技法を。1年もあれば、もとの魔力を取り戻せるのだ。魔法使いの軍団なぞ恐るるに足りんわ」

恵美は青ざめる。

「訊いていいかな。なぜ、自分の母親を攻撃したんだ？」

真が静かに問いかけた。

「答える義理はないが、勝利の前祝いだ、教えてやろう。リディは、幼いわれを置き去りにして、家を出ていったのだ」

「そうか、なるほど」

「親が子供を置き去りにする、この時代にもあることなのか？」

「ある。悲しいことだが」

「いささか残念だ」

沈黙。

真が一步前に進み、左手を後ろに伸ばして、恵美の手を握る。みらい、ワウダ、かれんが真の左手を掴む。

「滅びよ！ グラゴズンガ!!」

「響け！ トリュキュラドーン!!」

イーケンスは、真たちにグラゴズンガを放つ。と同時に、真は、イーケンスにトリュキュラドーンを放つ。

真は恵美たちから魔力を借りている。

「イーケンスのグラゴズンガを確認」

積乱雲の中で水晶を睨んでいる、参謀の魔女が言った。

「真の……トリュキュラドーンを確認」

やはり水晶を睨んでいる、別の参謀の魔女が言った。

「どっちだ、どっちが勝ったのだ」

ラコタはたいへん気を揉んでいるようだ。

真の放ったトリュキュラドーンは、グラゴズンガを押し返し、イーケンスを貫いた。

「きさま、魔法使いではなかったのか……」

と言って、イーケンスは倒れて息絶える。

かれんが真から手を離す。ワウダ、みらいも手を離す。真はゆっくり、恵美から手を離した。

「終わった、『龍の時代』が終わったわ」

みらいが呟いた。

「あの、トリュキュラドーンってなんですか。習った覚えがないんですが」

「トリュキュラドーンは、魔法使いもどきだけが使える特殊な魔法なの」とみらいが説明を始めた。「普通の魔法使いには使えないのよ。……ただし、真はもう、魔法使いもどきではなくなってしまったんだけど。この魔法は、そういう魔法なのよ」

「イーケンスが、油断して威力の弱いグラゴズンガを放ったのが運の尽きだった。もっと強い攻撃魔法を撃たれていたら、トリュキュラドーンでも勝てなかった。おそらく、海上の魔女たちとの戦いのために、魔力を温存したんだろう」

真は、ポケットから魔法石を取り出して、その場に捨てた。

「なるほど、真はパリラストーンを使って魔法を使ってたんだね。それでイーケンスに、魔法使いもどきだとバレなかったんだ」

ワウダはとても感心したようだ。

「でもまあ、これで晴れて弟くんは魔法が一切使えなくなったわけだ」

「かれん、言葉を慎みなさい」

みらいが妹をたしなめた。

「へいへい」

「ほんとうに、もう魔法が使えないんですか。ほかの攻撃魔法を使えばよかったんじゃないですか」

惠美は気を使っているようだ。

「トリュキュラドーンは、攻撃魔法であると同時に防御魔法でもあるんだ。ほかに選択肢がなかったんだよ」

みらいはイーケンスの死を確認している。

「ほんとに死んでくれてるわね。まあ、よかったわ」

「じゃあねえ。真は姉さんが連れて行ってねえ」

と言って箒に乗って飛び上がるかれん。

「帰って子供たちに報告しないと。アクア先生、乗ってください」

アクアを乗せ、みらいの箒が上昇する。

「ほら、色男、乗りな」

ワウダは箒にビリーを乗せた。その後、真たちを見た。

「こういう時に言う言葉は、そうそう、『お幸せに』ですよ」

そう言って飛び立つワウダ。

取り残された真と惠美。

惠美が箒に乗る。

「真くん、後ろに乗ってください」

彼はしばらく沈黙している。

「キャンディちゃん、旅は終わりましたよ。乗ってくださいな」

真はティーパーティーを背負って、惠美の後ろに乗った。

惠美は、

「ウルデルコーン」

と言って、魔法が見えるようになる魔法を、真に放った。

「惠美ちゃん、ありがとう」

真は、イーケンスの遺体のほうを見る。とても悲しそうな顔になる。

その時、惠美がクスッと笑った。

「どうしたの？」

「真くんをラビットハートに乗せるのは初めてですね」

「そうだっけ？」

「そうですよ」

上昇する惠美と真。

アトランティス上空、積乱雲の中。

アトランティスの天上が開き、箒に乗ったかれん、みらいとアクア、ワウダとビリーが海から出てくる。

魔女たちの拍手が起きる。

静まりかえる。しばらく何も起きない。

息を呑み、海を見守る600人の魔女たち。

ラビットハートに乗った恵美と真が、海から出てくる。恵美が前、真が後ろだ。

魔女たちの大歓声だ。指笛やラッパなどが一斉に鳴り響く。

そのとき、「ドンッ」と、海底から大きな衝撃音がする。歓声が止み、驚く魔女たち。

また、「ドンッ」と衝撃音。

「みらい、渡辺みらいはいますか？」

ラコタがそう言うと、アクアを乗せたみらいが来る。

「はい。渡辺みらいです」

「イーケンスの死を確認しましたか？」

「はい。しました」

「何回、確認しましたか？」

「2回です」

「それなら、間違いなくイーケンスは死んでいますね。では、いったいアレは何でしょう」

「わかりません」

遅れて、ワウダとビリーも近くに来た。

三度目の衝撃音。海から、なんとドラゴンが出てくる。

ざわつく魔女たち。「イーケンスだ」「イーケンスがドラゴンに変身したんだ」「これじゃ勝てないわけだよ」と、魔女たちの悲鳴にも似た声。

ドラゴンは、低空で翼をパタパタさせながら、様子をうかがっている。

「アクア教授、今度はドラゴンですぜ」

ビリーが言った。

「もう大抵のことでは驚かなくなってしまったよ」

アクアが答えた。

「静かに。Dの3の陣形を取りなさい」とラコタ。

魔女たちは命令に従い、抜け道のない包囲陣を作る。

一呼吸置いて、ラコタが演説を始める。

「皆さん、イーケンスは死にました。あのドラゴンは、イーケンスではありません。おそらく、イーケンスのペットでしょう。古文書にある『ドラゴン・イーケンス眠る』という記述は、あやつがドラゴンのような意味ではなく、ドラゴンのペットを持っていたという意味だったのです」

納得する魔女たち。

「なるほど、イーケンスはペットのドラゴンの目覚めを待っていたんだ。それで、わざと攻撃の手を緩めてたんだな。今回は運と女神様が味方してくれた」

真は元気が戻ってきているようだ。

「イーケンスと一緒に、ドラゴンが目覚めていたら、たいへんなことになっていました

ね。正直、助かりましたよ。でも、アトランティスを何周かしたけど、ドラゴンなんて見た記憶がないんだけどなあ」

とても元気な恵美だ。

「おおかた、あのピラミッドだろうよ」

飲むゼリーを吸いながら、かれんが言った。

「ああ！」

恵美と真も、飲むゼリーを渡された。

「ラコタ隊長、どうしますか」

参謀のひとりが、ラコタに質問した。

「ドラゴンの名前は？」

「記録にありません」

「真、恵美。ふたりに、ドラゴンの命名権を与えます。名前をつけなさい」

「ぼち」と真。

「たま」と恵美。

「ぼちたま、ですね。誰か、動物を手懐けられるものはいませんか」

中年の魔女が近寄ってきた。

「私です。ピアンカ・トラバントです。私は、十五年、動物園で働いています」

「ピアンカ。あのドラゴン、ぼちたまを手懐けられますか？」

「わかりませんが、やってみます。ですが……」

「なんですか。はっきり言いなさい」

「推測ですが、あのドラゴンは、人間を何人も殺して食べているでしょう。人の血の味を覚えた動物を飼い慣らすのは、極めて難しいと言わざるをえません。それも、見たところ、くじら並みの大きさです」

「なるほど。ですが試してみてください」

「わかりました」

「護衛を3名ほど連れて行きなさい」

ピアンカと護衛3名が、ドラゴン捕獲作戦を開始する。

ゆっくり降りていって、ドラゴンに近づいて行く。

「皆さん。これより、ドラゴン捕獲作戦が開始されます。ドラゴンの名前は「ぼちたま」です。イーケンスを倒した英雄たちが名付けました。もし、ぼちたまの捕獲が失敗した場合、今度は、討伐作戦に移行します。なお、ドラゴンとの戦闘では、イーケンス討伐作戦をそのまま使用します」

ラコタは、右手の人差し指と中指を額にあてた。

「それから、エジプトの魔女たちに、二度とスタンドプレーをしないように言ってください」

伝言が伝わる。

「スタンドプレーって、そんな言い方……まあそうなんだけどさ」とアイ。

「そうだと思った」とマイ。

「そうだよねえ」ミー。

固唾をのんで、ビアンカを見守る魔女たち。

ビアンカは、ドラゴンとコンタクトしようといろいろ努力するが、結局、ドラゴンに炎を吐かれて終わりだ。3人の護衛が魔法で、ドラゴンの炎から、ビアンカを守る。ビアンカたちが逃げてくる。

あちこちから、「竜退治だよ」「何人死ぬんだろう」「死にたくないよ」などと、怯えた声が聞こえる。

ラコタがふたたび演説する。

「皆さん、わたしたち魔女は、予言によってイーケンスを倒すことが出来ませんでした。ですが、イーケンスはすでに死にました。あのドラゴンはイーケンスではありません。ただのペットです。臆する必要はどこにもありません。きょうここに、イーケンスのペット、ドラゴンのぼちたまを倒して、忌まわしい歴史に終止符を打ちましょう！ わたしたちは、勇気ある魔女、スカートの眷属なのです！」

これを聞いた魔女たちに勇気が戻ってくる。

「ドラゴン討伐作戦を開始します。作戦、Aの4、始め！」

上級魔女たち中級魔女たちが、ドラゴンに攻撃魔法を繰り出す。攻撃を受けて怒ったドラゴン、ぼちたまが上昇してくる。

「作戦、Aの5、開始！」

上級魔女は攻撃を続け、中級魔女と下級魔女が結界を張る。なお、何割かの上級魔女は、結界魔法に手を貸している。

ドラゴンが、魔女たちの結界に跳ね返される。

「ぼくも手伝ったほうがいいかな」

真がぼつり言った。

「英雄は引っ込んでろ！」

「真くん、引っ込んでみましょう」

参謀の魔女にたしなめられたので、恵美が箒の位置を後ろに下げる。

恵美と真だけではなく、アトランティスで戦った、みらいとかれんとワウダも休んで見守っている。

「だれか撮影してないかなあ」

みらいの後ろにいるアクアが口惜しそうに言った。

「写らないんですよええ」

ワウダの後ろのピリーがスマホを弄りながら答えた。

ラコタは奮闘中だ。

「作戦、Aの5をもう一度」

上級魔女たちが、ドラゴンに魔法攻撃の集中砲火。さすがにダメージが大きい。

だがドラゴンは、ラコタが指揮官だと気づき、急上昇して彼女に接近してくる。

「作戦、Dの1を開始」

魔女全員が結界魔法を張る。

ドラゴンは結界の前で急停止し、回転し、尻尾をラコタに叩き付ける。尻尾は結界を破り、ラコタに襲いかかる。

ラコタのそばにいた、何名かの魔女は逃げるが、ラコタと参謀の魔女3人は逃げない。

なぜなら、近くに若い魔女とレディ・サーシャがいるからだ。後ろにレディ・サーシャを乗せた若い魔女は、重い分、逃げられなかったのだ。

ラコタと参謀の魔女3人は、強力な魔法を使って、ドラゴンの尻尾をなんとか押し戻す。ドラゴンが下降していく。

「ふう。レディ・サーシャは無事ですか」

「無事です」

「よかった。私は魔力を使い果たしました。指揮権を、副隊長のフー・リンシンに委譲します」

少し遠くからそれを聞いた真が素朴な質問をした。

「副隊長は、母の渡辺璃々杏ではないのですか？」

「違います」

ラコタの参謀が答えた。

横からみらいが口を出した。

「バカねえ。息子がクラスメイトと駆け落ち状態なのに、日本を離れられる訳ないじゃない」

「ああ、そうか」

なんだか、責められてる気がする真であった。

フー・リンシンの参謀が口を開いた。

「リンシン、いまからあなたが魔女の軍団の隊長です」

「ふん。ドラゴン退治はさすがに初めてだが、腕を振るってみせるぞ」リンシンの目は野生のハンターのような。「ニキータ・レタソンナはいるか」

「います」

ニキータが答えた。

「ニキータ、踊れ！ 作戦Aの7を発動」

ニキータが積乱雲の中央に移動した。

「なるほど、ドラゴン対ドラゴンか」

ワウダがぼつり言った。

ニキータが、積乱雲の中央、ドラゴンの頭上で踊りはじめる。ニキータは、元体操の選手でオリンピックのメダリストだ。彼女の手がクロスしたタイミングで、上級魔女と中級魔女が、ドラゴンに攻撃魔法を繰り出す。いくつもの攻撃魔法が合わさって、ひとつの強力な攻撃魔法になり、これがドラゴンの腹を切り裂く。傷は浅いがダメージを与えた。ドラゴンは悲鳴を上げ、炎を吐く。

「もう一度だ。ニキータ、踊れ！ 作戦Aの7」

ニキータがまた踊り、手がクロスした時に、上級魔女と中級魔女の攻撃魔法が繰り出され、それがひとつになり、またドラゴンの腹を切り裂いた。今度は大ダメージだ。ドラゴンは悲鳴を上げた。

魔女の多数から歓声が上がった。だが、小数の魔女たちには動揺が走っているようだ。

魔女たちは、「ドラゴン、このまま殺していいのかな」「あれ、ただのペットでしょ。可愛そうだよ」「何言ってんの。街に出没した熊や人を噛んだ犬と同じだよ」「同じじゃないよ。絶滅危惧種だよ」などと議論を始めた。

「リンシン隊長、どうします？」

参謀のひとりが、リンシンに問いかけた。

「ドラゴンが現代社会にいたら迷惑になる。だが、哀れでもあるな。よし、作戦Pの42を発動。準備に取りかかれ！」

リンシンがそう言うと、魔女の軍団に別の動揺が走った。

「えっ、Pの42って、『インガルダル・ドト』を使うの？」

みらいは大変驚いているようだ。

「あの、インガルなんとかって、何ですか」

レディ・サーシャが訊いた。

「それは俺が答えるよ」ガブリエルが得意げに口を開いた。「『インガルダル』は魔時空の意味で、『ドト』はゲートの意味さ。つまり、魔時空のゲートを作って、ぼちたまをそこへ捨てようって作戦だよ」

「ゲートの先は安全なのですか」

「ゲートの先は過去だよ。たいてい、数千年前の過去に繋がるんだ」

「過去？ 過去ッ？」

「魔時空ゲートは、過去にしか繋がらない。これは魔法使いの常識なんだ」

「はぁ、そうなんですね」

上級魔女3人が、積乱雲の上の方に来て、

「インガルダル・ドト」

と唱えた。

すると、空中に三角形のゲートが出現する。

「インガルダル・ドト、発現。ゲートの向こうは、推定4700年前です」

と参謀のひとりが言った。

「よし、陽動班、ぼちたまをゲートに追い込め！」

リンシンがそう言うと、陽動班の10名の魔女がぼちたまに近づいて行き、弱い攻撃魔法を打ちドラゴンを刺激した。ちなみに、陽動班は2人一組で行動している。

怒ったドラゴンは、陽動班を追い始める。ほかの魔女たちは、結界魔法を使って自分を守っている。陽動班は上に逃げ、インガルダル・ドトの前で離散した。ドラゴンはインガルダル・ドトに突っ込むが、ゲートを掠めただけで、中には入らなかった。ゲートはそのまま閉じて消えた。ゲートの寿命は3～5分といったところなのだ。

積乱雲の天井を守る上級魔女たちが、そのまま上空へ逃げようとした、ぼちたまを押し戻す。

「惜しい。あとちょっとだったのに」

アイが言った。

「もう一度だ。作戦、Pの42を発動！」

上級魔女3人が、ふたたび、インガルダル・ドトを作る。今度は、推定3900年前に通じるゲートだ。

陽動班10人がぼちたまを攻撃、怒ったドラゴンは上昇してくる。陽動班はゲートの前で四方に分かれる。だが、今度もぼちたまはゲートに入らなかった。

積乱雲の天井の上級魔女が、ドラゴンを押し戻す。

だが、押し戻されたぼちたまは、今度は海中に潜ってしまった。

「逃がすな！ 陽動班、追え！」

リンシンがそう命ずると、陽動班5組のうち3組が海中に潜る。

ひとりが海中に空気のトンネルを作りながら進み、もうひとりがトンネルをくぐりながらドラゴンに弱い攻撃魔法を放つ。海中の陽動班は、攻撃しながらぼちたまを追い立てて、積乱雲の外に出ないようにしている。

息を切らしたドラゴンが海上に顔を出す。陽動班の残り2班が弱い攻撃魔法を加える。怒ったドラゴンが上昇してくる。

上級魔女3人が、みたびインガルダル・ドトを作る。3度目のゲートは、2500年前に通じている。4人の陽動班の魔女が、ゲートの前で四方に散る。追って来たぼちたまが、ついにゲートに飛び込んだ。

「やった、成功だ」

真の声だ。周りからも歓声が上がる。

「やりましたね」

恵美が嬉しそうに振り返った。

ほとんどの魔女が、インガルダル・ドトに向けて回復魔法を放った。

「いったい何をしているんだ？」

アクアが訊いた。

「傷ついたドラゴンに、癒やしの魔法をかけているんです」

みらいが答えた。

「餞別^{せんべつ}ってヤツか」

ビリーが感慨深げに言った。

その時、積乱雲の魔女たちが、箒ごと大きく揺れ出した。

「今度はいったい何ですか？」

レディ・サーシャが箒にしがみつきながら訊いた。

「魔時空干渉です。魔時空のゲートを大きなものが通ると、干渉が起きて引っ張られることがあるのです。これが魔時空干渉。でも安心してください。ここにいるのは、みな練達した魔女ばかりです。たかが魔時空干渉ごときで——」

とラコタが言いかけたところで、悲鳴が聞こえた。

「あ〜れ〜」

真を乗せた恵美の箒が、インガルダル・ドトに吸い込まれて行く。

「しまった！」

ラコタは顔面蒼白だ。

恵美と真が、インガルダル・ドトに入ってしまった！

「ゲートの延命を！」

リンシンがそう言うと、上級魔女がゲートに寄ってきて魔力を放ち、ゲートの維持作業を始めた。

「助けに行かないのか？」

アクアがそう訊くと、

「いえ、二次災害の危険から、『だれかを助けるためにインガルダル・ドトのゲートをく

ぐってはない』という魔法の掟があるんです。真と恵美ちゃんは、自力で帰って来ないとダメなんです」

と涙ながらにみらいが答えた。

「そうか。それは大変だな」

アクアも沈痛な面持ちになった。

「行って真を助けてくる」

そう言って、エジプトのアイは発進準備に入った。

マイとミーが寂しそうに見ている。

だが、ほかの魔法たちがやってきた。ほかの魔法たちは、杖をアイに向けた。

「ダメだ。行かせるわけにはいかない。掟があるのは知っているだろう」

アイは苦虫を噛みつぶしたようになった。

「頼む、行かせてくれ！」

「ダメなものはダメだ」

ほかの魔法たちは、アイの進路を完全に塞いだ。

2500年前の、ギリシャのエーゲ海。

海の色は現代よりもより碧い。空気は綺麗すぎるほどだ。だが、ここには積乱雲はない。

空中に、三角形のゲートが見える。まず、勢いよくドラゴンが出てきた。ドラゴンは北へ飛び去った。次いで、虹色の光がドラゴンを追う。治癒魔法だ。

そして、恵美と真を乗せたラビットハートが回転しながら出てきた。

恵美は、回転を制御し、なんとか水平を保とうとした。回転は止まったが、まだ天地がひっくり返っている。彼女はあちこちを見回して、ゲートを見つけた。さすが、両目とも2.0は伊達ではない。

「あった。ゲートだ」

「恵美ちゃん急いで。ゲートはすぐに閉まるよ」

恵美は、ラビットハートを回転させ、天地を正しながらゲートへ進む。なかなか難易度の高いことをしている。

ゲートが近づいてくるが、ゲートへ進むスピードも落ちる。

「行きはよいよい、帰りは怖い」

恵美が呟いた。そうだ、インガルダル・ドトのゲートは、入るのは簡単だが戻ってくるのが極めて難しいのだ。だが、ゲートをふたたびくぐらなければ、恵美と真は紀元前のギリシャに置いてけぼりになってしまう。

インガルダル・ドトは、任意の年にゲートを開くのは困難で、また過去を変えるのは良くないという観点から、みだりにゲートを開くことは禁じられている。ふたりが現代へ戻るのは、目の前のゲートをくぐるのが、最初で最後のチャンスと言っていい。

「真くんも手を貸して！」

「ぼくはもう魔法は使えないよ。あっ、そうだ」

真は手荷物を捨て始めた。スマホを捨て、聖なる鏡の残骸を捨て、食料を捨て、パス

ポートを捨て、果てはバッグを捨てと手当たり次第に捨てている。

「恵美ちゃん、ゴメン」

と言って、彼は恵美の荷物も捨て始めた。彼女のスマホも捨てた。

ふたりはだいぶ軽くなり、ゲートまであとちょっととなった。だが、そのゲートはだんだん小さくなっている。

「お願い、もっと速く。もっと速く」

恵美は滝のような汗をかいている。

真は、背中に括りつけてあったティーパーティーを手に持った。

「さよなら、ティーパーティー」

そう言ってティーパーティーを手放した。

恵美はチラッとだけ後ろを見て、また前を見た。

ゲートが閉じかけている！

「もう捨てるものがない」

真は直下の海を見た。かなりの高さで、落ちればたぶん助からないだろう。だが、彼女は帰れるかも知れない。

「真くんが落ちたら助けに行きますよ」

見透かしたように恵美が言った。

「あっ、うん」

恥ずかしさとうれしさが彼を満たした。

「あと2メートル。あと2メートル」

ゲートは確かに近いように見えた。

そこへ、とつぜん矢が恵美を掠めた。

「ひゃっ！」

恵美の操舵するラビットハートが、少し下がってしまう。

下を見ると、エーゲ海に船が浮かんでいた。

船は大騒ぎになっていた。

ある青年が、船に乗っている軍人の隊長に問いかけた。

「隊長どの。何かあったんですか？」

「あったあった。魔女が出たのだ」

「魔女？ ほう～」

青年はあごに手をあてた。空を見ると、確かに魔女が浮かんでいる。箒に魔女が2人乗っているようで、魔女たちは前方の奇妙な三角形の記号に向かって、ゆっくり進んでいた。

魔法使いが魔法を使っている間は、普通の人からは見えなくなる。だが、この紀元前500年ごろのギリシャでは、恵美と真が見えていたのだ。これは、魔時空干渉となにか関係があるだろうと考察されている。あるいは、恵美が現代に戻ろうと必死になり、通常では考えられない魔力を出していたのが原因ではないかとも言われている。この理由は今でも判明していない。

軍人が続けた。

「これから魔女退治だ」

「ほう、魔女退治ですか。それは難儀ですな」

「いや、魔女退治など朝飯前だ。だが、相手は魔女、どんな汚い手を使ってくるか分からんから、不意打ちを食らわぬように気をつけなければ」

「ところで」と青年は言った。「なぜ、魔女を退治する必要があるのですか？」

「何を言う。魔女は邪悪に決まっておるではないか。だから退治するのだ」

「なぜ邪悪なのですか？」

「魔女は、人をそそのかして悪事に走らせるからだ」

「魔女が人を悪事に走らせるところを見たのですか？」

「いや、見ていない。だが、魔女は邪悪だと昔から決まっているのだ」

「だから、なぜ邪悪なのですか」

隊長は憤慨した。

「お前はだれだ？ 名を名乗れ！」

「ギリシャのソクラテスです」

「ソクラテス、よく聞け。魔女が邪悪ではないと抜かす人間は、無知かただのアホウだ」

「しかし、隊長どの。あなたはなぜ魔女が邪悪なのか、ちゃんと答えられていない。これでは、自分が無知であることを認識している私のほうが賢いということになってしまいますぞ」

「ソクラテス。何度言わせるのだ。魔女は邪悪な存在なのだ」

「空を飛んでいる魔女は、我々に一切危害を加えていないではないですか」

「今は大丈夫なだけだ。後で危害を加えるに決まっている」

別の軍人が隊長に話しかけた。

「隊長。魔女はどうしますか」

「うるさい。今、この憎たらしいソクラテスとかいう小僧に説教しているところなのだ」

「隊長どの。魔女が邪悪かどうか一緒に考えようではありませんか」

ソクラテスは天の魔女を見た。

「お〜い、魔女さ〜ん。降りてきませんかあ〜？」

ソクラテスは大声を出した。

「魔女を刺激するな！」

隊長は激怒した。

ソクラテスは隊長に向き直って返事をした。

「わたしは魔女と一緒に食事でもと思っただけです。魔女について詳しく知りたいものから」

「ソクラテス、お前はアホウだ！ お前はアホウだ！ お前はアホウだ！」

隊長は、激しい怒りのあまり我を失っているようだ。

「下の船では、何かゴタゴタがあったようだ」

「助かりました。でも、もうゲートが閉まりかけてる」

恵美と真のふたりは前ばかり見ていて、横になかなか気づかなかった。ふたりが、真横に異変があることに気づいたのは、10秒以上経ってのことだった。

「惠美ちゃん、右を見て」

惠美が右を見ると、なんと、ティーパーティーが併走して飛んでいるではないか。

まず真が、恐る恐るティーパーティーを握った。次に、惠美が握った。

すると、ティーパーティーはものすごい速さで加速して、惠美と真を連れてゲートをくぐった。

積乱雲の中。

多くの魔女が見守る中、ゲートが閉じようとしていた。見ていて泣き出す魔女も大勢いた。

ゲートが完全に閉じる直前、ティーパーティーに引っ張られた惠美と真が勢いよく出てきた。

多くの魔女が心底安堵した。

もちろん、惠美と真も。

「ありがとうティーパーティー」真は振り向いて小さくなったゲートを見た。「ありがとうソクラテス。大学で再会しよう」

ゲートは完全に閉じた。

前を見ると、惠美は見るからにくたくたで、箒に突っ伏している。

「ありがとう、惠美ちゃん」

真は悪いなと思いつつも、惠美の背中を優しくポンポン叩いた。手を引っ込めようとしたとき、惠美は振り向かず手を伸ばしてきて、真の手をつかんだ。彼はたいへん驚いた。

「惠美ちゃん見えてるの？」

「ふふっ。さあどうでしょう？」

惠美は振り向かずゆっくり手を離した。

「君は女神さまだよ」

「ふふっ。さあどうでしょうね」

真は微笑んだ。

春の日差しよりも暖かくて、初夏の風よりも心地いい惠美の魔力を、もう感じ取ることとは出来なかったが、真は不思議と満足していた。

「リンシン隊長、真と惠美が戻って来ました」

「良かった。無事か？」

「大丈夫だそうです」

「衛生班、全体の損害は？」

「死者はいないようです。6名がドラゴンの炎にやられましたが、傷は浅いようです」

「よろしい。皆のもの、よく戦った。撤収の準備だ。今夜は潰れるまで酒を飲むがいい！

われらはいにしえの呪いを解いたのだ！」

歓声上がる。

「禁忌のインガルダル・ドトを使うとは、リンシンは相変わらずのギャンブラーですね。ハラハラしましたよ」

とラコタが漏らした。

「私は正直、リンシンの参謀でなくて良かったです」

ラコタの参謀が言った。

「わたしも！」ほかの参謀も賛同した。

「面白いものが見られたわ。誰も信じないでしょうけれど。ふふっ」

レディ・サーシャは満面の笑みを見せた。

「オレは主人公になり損ねたわけか。まあいいさ」

ガブリエルは笑みを漏らした。

「しかし、3600年前にドラゴンがいたとはね。歴史が変わっちゃうわね。ドラゴンを倒していた場合、骨は大英博○館がいただくことになったはずなんだけど——」

とシャーロットが言いかけたところで、

「あら、ドラゴンはここギリシャで倒される予定だったんだから、その場合はギリシャが引き取るのが筋よ」

とアネモネが割って入った。

「その前に、おたくの国は莫大な財政赤字をなんとかしたらどうかしら」

「むー！」

アネモネがむくれた。

「上級魔女、かっこいいなあ。あたしも、上級魔女試験、受けようかなあ」

とアイ。

「3回連続で落ちたのに？」これはマイ。

「それ言っちゃダメだよ」ミーがマイを嗜めた。

「ねえ。あのドラゴン、ミサイルで死んだと思う？」

ナターシャがリンダを見た。

「普通のミサイルだと微妙だね。戦術核だとまず確実に死んだと思うよ」

リンダが答えた。

「戦術核か……」

ナターシャは頬杖をついた。

ビアンカは困っていた。そばにいる魔女たちが、やたらと髪を触ってくるのだ。なぜなら、ドラゴンの炎を浴びて、ビアンカの髪がソバージュになってしまったからだ。

「いいソバージュね。あのドラゴン、優秀な美容師になれたでしょうに。もったいないわ」

「ほんとほんと。それにしても変わったソバージュね。これにドラゴンソバージュと名付けましょう」

そばにいる魔女たちがからかってきた。

「どうせ私は、頭髪だけ防御魔法をかけ忘れたお馬鹿さんですよ！」

ビアンカが愚痴った。

「「なんでそうなるのよ」」そばにいる魔女は笑った。

「私が動物園の新人の飼育員だったころ、いつも防御魔法をかけてから動物の世話をしていたんだけど、同僚によく疑われたのよ。『同じ仕事をしてるのに、ビアンカだけ肌や髪がきれいすぎる。変だ』って。薬物検査だってされたんだから。もちろん結果はシロよ」

「それで？」

「肌がきれいなのは体質、遺伝で誤魔化したけど、髪はそうはいかなかったのよ。髪は肌と違って自然治癒しないからね。それからは、防御魔法を自分にかけるとき、『頭髪は除く』って呪文を唱えるのが常になってしまったのよ。その癖のお陰で、きょう私の髪の毛が、ドラゴンの餌食になってしまったってわけ」

「「なるほどねえ」」

「またオリンピックに出ようかしら」

ニキータが言った。

「今のテレビって8Kなんでしょ。大丈夫かしら？」

横にいる魔女が言った。

「何のこと？ わたしはまだ26歳よ。何でもかんでも大丈夫に決まってるわ」

ニキータは口を尖らせた。

「今度こそ、『龍の時代』が終わったわ。それにしても、妹のあすかがここにいないのはとても残念だわ。話を聞いたら泣いて悔しがるでしょうに」

みらいが言った。

「なんでだい」

ワウダが問うた。

「あすかは、真と並んでファンタジー大好き、不思議大好きだからね」

「そうだ、なぜ私はエーゲ海に飛ばなかった？ 行けば伝説のドラゴンを見られたのに……。四人きょうだいの中で、行かなかったのは私、あすかだけだ。くそう、身重でも行くべきだった。これが後悔先に立たずってやつかー。」

「ところで、だれか撮影してなかった？」

とアクアが訊いた。

「アクア教授、写りませんよ。あとでサインください」

「メモリーが一杯になった。とりあえず録画したけど、何か写ってるといいなあ」

ビリーは、スマホをポケットにしまった。

「だからビリーさん、写りませんよ」

みらいが念を押した。

「まさか、インガルダル・ドトのゲートに入ってしまうなんて。帰ってこれて本当に良かった」

と真。

「あやうく紀元前に置き去りでしたね」

惠美は割とカラッとしている。

「あのドラゴン、元気にしてるかな」

かれんが近づいて来た。

「惠美ちゃん、覚悟しなよ。トリュキュラドーンを使った魔法使いもどきは、背が2～3センチ縮むんだから。真はドワーフになっちゃうんだから」

「えっ、そうなんですか？」

惠美が真を見る。

「まあね。定説だとそうなってるよ」

魔女たちのあいだで自然と、

「まこと！ えみ！ まこと！ えみ！」

の大合唱が起きる。

みらいが寄ってくる。

「ほら、きょうの主役はあなたたちよ」

と言って、惠美と真を積乱雲の中央のほうへ押し出す。

惠美と真が照れながら、積乱雲の中央に来る。

赤毛の若い魔女が、惠美と真のところにやってくる。

「ありがとう」

そう言って、赤毛の若い魔女は、惠美にハグをした。次に、真にハグをした。

それから、次々と魔女が惠美と真のところにやってきた。ある魔女はハグを、ある魔女は握手を、ある魔女は拍手をした。だが、みな一様に「ありがとう」と言った。惠美と真はただ驚くばかりで、されるがままだった。

ひとりの魔女が、『ダニー・ボーイ』を歌い出し、それはやがて600人の魔女の大合唱となった。歌詞の『ダニー・ボーイ』を『マコト・ボーイ』に替えて歌った。二度目は、『エミ・ガール』に替えた。

その後は、魔女たちが自国の様々な民謡を歌い出し、歌合戦になった。日本の魔女たちは相談した末、『上を向いて歩こう』を歌った。

ヨーロッパ上空、黄昏の時間。

ラビットハートに乗った惠美と真が飛んでいる。

両脇には護衛の魔女がひとりずつ飛んでいる。

「惠美ちゃん、下」

惠美は下を見る。

「下がどうかしましたか？」

「……スカート」

見ると、惠美のスカートが風に靡いている。

「ナラール」

呪文を唱えて、惠美はスカートを身体に張り付かせた。

「そういえば、世界魔女協会が、男の魔法使いを認めるかどうか検討を始めたそうですね」

「まあ、いいんじゃない。どのみちぼくは、もどきだからあんまり協力できないけどね。
あっ、元もどきね。ふっふっ」
恵美が後ろの真をチラ見する。
「さっきからずっとにやついてる」
「そりゃ、あれだけの数の女性からハグされれば、悪い心地じゃないよ」
「そうですか、それはよかったですね。わたしなんか、一日で100人以上にハグされた
んですけれどね。全員魔女ですけど。どさくさにまぎれてキスしてきた魔女もいたし。も
う、ファーストキスだったのに。そういえば、真くんもされたでしょう、キス」
恵美はツンツンしている。
「うん、まあ」
「よかったですね」
もちろん皮肉だ。
「でも、ぼくは肝心な人とキスしてないよ」
「はて、誰でしょう？」
「その……近くにいる人」
恵美が左右の魔女を見る。
「いま、1メートル以内にいる女性だよ」
左右の護衛の魔女は3メートルは離れている。
「……冗談、ですよ？」
「冗談っていうのはこういうことだよ。実は、ぼくの身体には、イーケンスの魂が宿っ
ていてね——」
それを聞いた両脇の魔女が、高度を上げて、杖を真に向けてロックオンする。高度を
上げたのは、相討ちにならないためだ。いつでも攻撃魔法を繰り出せる状態で、杖から
は火花が散っている。
「冗談じょうだん。じょうだんだってば」
真が弁明した。
両脇の魔女は杖を仕舞って、高度を下げる。
「真くん、口は災いの元ですよ」
「ぼくは恵美ちゃんとキスしたいんだ」
「本気なんですか」
「たぶんね」
「妖精さんの予言どおりになっちゃいますよ。予言は面白くないんじゃないの？」
「宗旨替しゅうしえしたんだ」
「じゃあ、日本に帰ってから」
「いまじゃダメ？」
「ダメなわけじゃないけど……。丸一日、お風呂に入っていないし」
「奇遇だね、ぼくもだよ」
クスクス笑う恵美。真も笑う。
見つめ合う真と恵美。
ふたりが空中でキスをした。

エピローグ

7月下旬、渡辺邸の裏庭には、渡辺璃々杏と久しぶりに帰宅した夫、倉田恵美の両親と弟が待ち構えていた。それぞれ、帽子をかぶってアウトドア用の椅子に座っている。恵美の両親は比較的おうよう鷹揚に構えていたが、弟の純司は半信半疑だった。

姉が魔女？ 悪い魔法使い退治に出かけた？ それが駆け落ちの真相だって？ ハハッ、バカにすんなよ、ビデオゲームじゃあるまいし……と中学2年生の彼には信じがたいことばかりだったのだ。

もちろん、渡辺璃々杏という女性から、いくつかの魔法を見せてもらっていたが、それは種も仕掛けもあるマジックに違いないと決めてかかっていたのだ。

しばらくして、璃々杏が帽子を脱いで、すっと立ち上がった。

遠くの空に、3つの影が見える。

ほかのものたちも立ち上がり、上空に釘付けになった。

だんだんと影が近づいてきて、頭上で止まった。

そのひとつ、恵美と真を乗せたラビットハートが、ゆっくり降りてきた。護衛の魔女2人は上空を旋回している。恵美と真は、日本までは飛行機だったのだが、空港からはラビットハートに乗って飛んで帰ってきたのだ。

純司は困ってしまった。姉がほんとうに箒に乗って空を飛んで帰ってきた。目の錯覚か集団催眠でなければ、これはもう認めざるを得ない。姉は魔女なのだ。

恵美と真は、地上に降り立った。

たちまちのうちに、恵美は母親の胸に飛び込んだ。

「ただいま。家出してゴメン」

母親は彼女を優しく抱きしめ、父親は頭をポンポンした。

「姉ちゃん、お帰り」

純司が照れくさそうに言った。

真は、璃々杏と父に近づくと、

「黙って行ってゴメン」

と謝った。

こうして、ふたりは日本に帰ってきたのだ。

静謐な帰還だった。

ところで、真と恵美は、てっきり雲海高校を退学になるものと決めてかかっていた。なにせ、高校3年生、受験生の身分でありながら、駆け落ちという大胆な行為をしたのだから。実際の処分は、再テストと補習だけだった。驚いたふたりだったが、もっと驚いていたのは雲海高校の教諭陣だった。

信頼できる筋の情報によると、ふたりの帰還と相前後して、雲海高校に多額の寄付があったのだそうだ。それも、校舎と体育館の耐震工事をして、まだお釣りがくる金額だった。寄付の見返りはたった一つ、「渡辺真と倉田恵美のふたりを退学にしないこと。

退学にするのならば、今回の寄付の話はなかったことになります」というものだった。

このうまい話には裏があるのでは、と教頭は訝った。だが、これで悲願だった耐震工事にゴーサインが出せると、嬉々として校長は寄付を受け取り、それで真と恵美は退学にならずに済んだのだ。

真相を知らない教師たちは、真か恵美の遠縁に大富豪がいるのではないか、あるいは政治家と繋がりがあるのではないか、はたまた徳川幕府の埋蔵金を掘り当てたのではないかなどと噂し合っていたが、答えは出ずじまいだった。

耐震工事の日程調整の忙しさと、3年生の進路のゴタゴタで、その噂も次第に下火になっていき、2人が卒業する頃には完全に忘れ去られた。

真と恵美は、知り合いや（そうでない者たちからも）遠回しに「駆け落ち」の説明を求められたが、受験のストレスが重荷になっていたことと、アルゼンチンのガブリエルに「遊びに来いよ」と以前から誘われていたこともあって、ついふたりで海外旅行に出ってしまった、これが真相だと弁明した。

もちろん、たいていの友人たちはそんな与太話を信じたりはしなかったが、古今東西、「若いふたり」が尋常ではない行動をとることはよくあることなので、「まっ、そういうことにしといてあげるよ」と口々に言った。真と恵美は、駆け落ち前よりもより親密に見えたので、これ以上追求する気になれなかったようだ。

一部の知りたがり屋は、何か探りだそうと必死になっていたが、それは徒労に終わった。

真と恵美が持ち帰った世界旅行の証拠写真は、級友からは羨望の眼差しで見られた。何かを焼き付けてしまったこともあったようで、「うおー、オレも受験が終わったら、告白して卒業旅行すんぞ〜」と言い出す者も現れた。頑張れ！

しばらくして、ある女子が気づいた。写真の恵美のワンピースがどこにも売っていないものだというのに。問い詰められた恵美は、オーダーメイドだと正直に話した。オーダーメイド……この言葉を聞いて失神した女子もいたとかいないとか。

これは雲海高校に、決して小さくはない波乱をもたらした。多くの女子が、「お母さんお父さん、私もオーダーメイドのワンピースが欲しい！」とおねだりを始めたのだ。おねだりに成功した女子もいれば、失敗した子もいたし、興味の無い子もいた。あるいは、自分のお小遣いから捻出して、オーダーメイドのワンピースを作った子もいた。だが、この通称『オーダーメイドのワンピースが欲しい運動』は、年末まで衰えることを知らなかった。当然、恵美は妬みの対象になってしまった。

ワンピースといえば、こんな話もある。皆さんはもうご承知だと思うが、恵美の着ている魔女のワンピースのレプリカの販売が決まったのだ。複製品とはいえ、かなりオリジナルに近いものを作るとかで、一着10万円前後と少々お高めだが、すでに予約が入っているそうだ。このワンピースに名前が付けられることになった。『ライトニング・エミ』と『ワンダー・エミ』の二つの案が出され、悩んだ恵美は真に相談した。真は「ライトニング・エミがいい」と即答したので、恵美はワンダー・エミのほうを選んだ。ワンダー・エミは来年発売予定だ。

トリュキュラドーンを使った真は、確かに身長が下がったが、シークレットシューズで卒業までなんとか乗り切った。

このように、小さな波風はあったが、そのような出来事さえ真と恵美にとっては愛おしいものであり、平和のありがたさを実感する毎日であった。

だが、帰って来ていいことばかり、という訳でもなかった。真と恵美が入部していた幻想小説同好会は、32年の歴史に幕を閉じた。教師たちの、駆け落ちしたふたりを退学に出来ないことへの鬱憤が、同好会の廃部という形で結実したのだ。真は文学部に転部になり、恵美はそのまま文学部に残るといった形になった。

このことを渡辺璃々杏はたいへん残念がったが（彼女が初代の部長だ）、同好会のこと寄付の条件になっていなかった以上、諦めるしかなかった。

恵美の希望大学はかなりハイレベルなところだったが、無謀にも真は同じ大学に通うことを望んだ。

夏休みとともに、真には3人の家庭教師がつき、徹底的にしごかれたそう（家庭教師曰く「イーケンスとの闘いより大変でした」とのこと）。

恵美にも家庭教師がつき、苦手だった数学をあっさり得意科目に変えてもらったのは、まさに僥倖きやうこうと言うほかなかった。駆け落ちをして、推薦枠での受験が絶望的だった恵美にとっては、これは柵からぼた餅な話だったのだ。

翌年、恵美は希望した東京の大学に受かり、真もなんとか同じ大学に滑り込んだ。

恵美は、高校を卒業すると正式に魔女に昇格し、それと同時に『東洋の勇氣ある旅人』という二つ名が与えられた。

恵美の魔女修行は充分だったわけではないが、イーケンスを倒した英雄のパートナーを、いつまでも魔女見習いにしておくわけにもいかなかったという、大人の事情が働いていた。

また、下級魔女が二つ名を持つのは異例中の異例だが、恵美が上級魔女になるまで待てないし、また上級魔女になる可能性も定かではないので、こうした事情から、下級魔女に二つ名が送られることになったのだ。

最後に、これだけは伝えておこうと思う。イーケンスを倒してから4ヶ月後の11月、真は恵美にプロポーズし、彼女はそれを受け入れた。

高校3年生での求婚はかなり早いですが、これには少々込み入った事情がある。

8月にエジプトの魔女アイラ・ハミースが、メールや電話で、真に言い寄ってきたのだ。そう、真と魔法決闘したあのアイだ。アイラは真より9つ年上だが、現実的に結婚がありえない年齢差ではない。何より、アイラは自他共に認める美人である。その彼女が、真に猛アタックを開始したのだ。協力者であるマイとミーは、まず、かれんの買収に成功し、アイラは来日の予定も組んでいた。

アイラは、自分に魔法決闘を挑んできた真のことを、なぜか気に入ってしまったのだ。彼女に言わせると、真がイーケンスを倒したのは「自分のため」であり、アトランティス大陸へ真を助けに行かなかったのは、恥じらいのある乙女らしい選択であり、インガルドル・ドトをくぐって真を助けに行こうとしたのは真実の愛の証明であり、アトランティス上空で（理由はよく分からないが）真が求愛してこなかったのも、自分から行動を起こすことにしたのだそう。

アイラに迫られて身の危険を感じた真は、あわてて恵美に求婚することにしたのだ。「いつ捨ててくれても構わないから、頼むからプロポーズを受け入れて欲しい」そう懇願

されて、恵美はいささか奇妙な気分襲われたが、それを受けることにしたのだ。

実のところ、「ゾンビと闘わなかった真くんと、助けに来なかったアイラはお似合いだわ」と内心強く思っていた恵美だったが、これまでの人生が波瀾万丈すぎて、この時どこかおかしな精神状態になっていたようで、つい「あー、はい」と答えてしまったのだ。

真と恵美の婚約は、いい意味で、雲海高校を湧かせた。ふたりの駆け落ちの終着点として、万人を満足させるニュースだったので、好意的に受け取られたのだ。

真と恵美が婚約したと聞いて、アイラは来日を取りやめた。

さて、真と恵美が東京の大学に進学すると、新しい生活が始まった。恵美は懐かしい東京で伸び伸びとし、真は慣れない都会でよく迷子になって、彼女にSOSの電話をするそう。お幸せに。

これにて、魔法使いもどきの旅の記録は終わりとなる。

ここまで読んでくれてありがとう。

みなさん、善い魔法使い生活を！

第四章 決戦、アトランティス！ おわり

受験勉強で忙しい渡辺真の代理で、渡辺あすかが記す

月間魔女ライフ・ジャパン 2016年3月号・4月号・5月号・6月号より転載

あとがき

この物語は、若いころ考えていたものなので、端々に未熟さが感じ取れます。

それでも書いたのは、先に書いていたナナという女性の物語が、終盤でうまく畳めないことに気づいたからです。

ぼくは、ナナの物語を後回しにして、先に分かりやすい物語を書くことに決めました。それで経験値を積もうと思ったのです。アイデア帳をしばらく眺めて、勧善懲悪の単純な物語である、この『魔法使いもどきの冒険』を書くことに決めました。勧善懲悪ならば書きやすいだろう、という安直な考えでした。

ですが、そこは若いころ考えていたアイデアです。物語を現代になじませるのにだいぶ苦労しました。

若いころ考えていたアイデアなので、書くのにも苦労しました。『魔女修行はじまる』は作者から見ても明らかに蛇足で、大幅にカットすれば、渡辺真の物語として少しは纏まりがでるのですが、この駄文に愛着もあるので、改作はまた今度にしようと思います。

それにしても、難易度の高い三人称ダブル主人公で書いていることに気づいたのが、第3章に突入してからです。もうね、頭を抱えましたよ。直すより最後まで書く方が簡単だろうと考えて、なんとか書き切りましたが。

この作品は、執筆に3年以上をかけてようやく完成しました。ぼくが完成させた、初の長編小説になります。文才のないぼくが、長編小説を完成させることが出来たのは、素直に嬉しいですね。嬉しいというより、放心状態というのが本当のところですが。

主人公たちの名前について触れて起きます。勘のいい人は、「ああ、主人公とヒロインの名前はアレにちなんで付けたな」とお思いでしょうが、違います。ただの偶然です。ぼくも書いている途中で気づきました。渡辺真→ワタナベマコト→ワタナベ→ワーナベ→ワーナーですね。倉田恵美→クラタエミ→エミ→EMIですね。EMIクラシックスは2013年9月にワーナーミュージックに移籍しました。名前の秘密は、「EMIがワーナーに移籍したように、恵美も渡辺真のパートナーになる」ではなく、「ただの偶然」が正解です。ちょっと面白かったので変更しませんでした。

なお、この作品は1990年代の後半に考えていたもので、当時『ハリー・ポッター』はまだ翻訳されていなかったもので、ハリーの影響はほとんど受けていません。トールキンの『指輪物語』と、宮崎駿監督の『魔女の宅急便』と、RPGの影響は多大に受けていますが。

この作品は、当初は、『魔法使いもどきの旅』というタイトルにするつもりでしたが、アイデアを練り始めた時期に『魔女の旅々』というアニメが放送され、タイトルが少し被るので変更しました。

おっと、これは書いておかないと。この小説を書くのに、生成AIは使用していません。アイデアもプロットも執筆も、すべて雨澤がやっております。まあ、生成AIと雑談をしていてアイデアが湧くことがたまにありますが、使用はその程度です。著作権がどう変化するか分からない現状なので、ここは慎重に。

まだ書きたいことはあるのですが、長々と書いても疎まれるだけでしょうからやめておきます。

この小説を読んで、ひとりでも面白がってくれるひとが現れたなら、望外の喜びです。

2024年2月

雨澤はる

※シナリオ形式版 2021年2月投稿

※小説版第一章 2022年5月3日投稿

※小説版第二章 2022年5月23日投稿

※小説版第三章 2023年5月上旬投稿

※小説版第四章 2024年2月上旬投稿 完成

魔法使いもどきの冒険

著 雨澤 はる

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
